
バカとファンタジーと召喚獣

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとファンタジーと召喚獣

【Nコード】

N0481W

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

僕こと、吉井明久は毎度の如く学園長のババアに呼び出された。しかも呼び出されたのは僕だけじゃなく、Fクラスの悪友も一緒（女子三人とAクラスの女子も着いてきた）。そしたらババアの奴が召喚獣の実験に付き合え、だなんて言ったんだ……仕方なく付き合っただけ……そしたら急に変な空間の歪みに巻き込まれて……気付いたら異世界に来ていた。しかもテイルズの技まで使える世界！？一体これからどうなるのさあ！??

学園ラブコメから一転！異世界ファンタジーになつたバカテス！

！そこでも明^{バカ}久は変わらない！！仲間と共にファンタジー世界をバカたちが行く！！異世界ファンタジー版『バカとテストと召喚獣』が始まります！！

第一話 バカと始まりと嵐の海（前書き）

どうも、銀臥という駄作者です。今回はバカテスの二次創作に挑戦してみました。楽しんで頂けると嬉しいです。では、明久達の異世界物語が始まります。

第一話 バカと始まりと嵐の海

夏：今年の夏は本当に色々なことがあったと、僕、吉井明久は常々思った。

え？何があっただって？

そりやもう色々だよ。

みんなと一緒に海に行つて悪友と一緒にナンパしていたら二人の美少女（一人は女装した悪友）にはめられ、そのまま彼女達の手によつて悪友と一緒に何度目かの（もう数えるのを諦めました）臨死体験。

無事に悪友と共に生還でき、美少女達の浴衣に目を奪われつつ、祭りで幸せな一時を楽しんでいたら……甘かった。彼女達は僕達男衆を全員ミスコンに参加させたのだった…結果？とりあえず僕達の社会的抹殺だけは避けれたから……男として、何か失った感じはあるけどね……

え？他にも聞かせろって？

いや、あとは臨死体験したり、補修したり、臨死体験したり……うん、本当にそんなのばかりだったよ……。

で、今日も補修だったりする。

ここは文月学園。

試験召還獣システムという、テストの点数が召還獣の強さに変わるといふシステムを導入した試験校だ。

夏が終わりに差し掛かったとある日、学年最下級のFクラスの補修授業中、突然ここ文月学園の学園長を名乗る藤堂カヲルというババアが校内放送で僕らを体育館に呼び出しやがったのである。

…ちなみに、呼び出した当人はここにはいない。おのれクソババア…！

「まったく、一体何考えてんだ？あのババアは…」

「……………今日は予定がある」

「ワシも今日は部活があるのじゃが…」

僕の右隣で愚痴を零すのは、たてがみのように逆立った赤い髪に野性的な雰囲気をかもしだす僕の悪友の一人、坂本雄二。一応僕達Fクラスの代表で、最優秀成績者。その後ろにいるのは性へのおくなき探究心によって学園内にその名をとどろかす寒色系の髪に三白眼の男。土屋康太ことムツツリーニ。学級どころか学園内にその名を知らぬものはいないとさえいわれる美少女、木下秀吉。

「ねえ、瑞希。ウチは何だか嫌な予感しかしないんだけど…」

「はい…私もなんだかそんな予感が…」

と、僕の左隣からポニーテールと強気な目にスレンダーな体の少女、島田美波。後ろには成績、ルックス、スタイル、料理の腕。どれをとつても常人の遙か上の殺傷力を誇る存在なのに、振り分け試験の時に高熱のせいでFクラスに振り分けられてしまった姫路瑞希さんがそんな言葉を交わしている。

さらに

「なんててめえがいるんだ、翔子」

「……………夫のそばに妻がいるのは、常識」

そう言って雄二の隣をキープしているのは、黒くてサラサラの長髪に端正な顔立ち、白い肌、姫路さん程ではないけど、存在をきちんと出張するふくらみ、まさに絶世の美少女といえる存在、Aクラス代表の霧島翔子さん。可哀想なことに男をみる目が無くて幼馴染の雄二に惚れてしまつて、日夜雄二にアピールする一途な女の子。

「それでどこまでも追いかけられる俺の身にもなれ！昨日なんか朝目が覚めた瞬間意識を失つて、目が覚めたら見知らぬ地下牢に両手両足と五指を頑丈な鎖と皮ベルトで拘束されていたんだぞ！！」

前言撤回、かなり激しい襲撃アピールをする一途な女の子です。

「いやあ、代表も相変わらずだね」

そう言つて雄二を見て笑顔を浮かべる緑色のベリーショートの髪に活発そうな雰囲気の女の子、霧島さんと同じAクラスの工藤愛子さんが霧島さんの後ろから笑いながらそんなことを言っていた。どうやら面白そうだという理由でついてきたらしい。

まあ、そんな僕らが放課後に突然呼び出された（姫路さんと霧島さんと工藤さんは見学）理由なんだけど、肝心のババアはどこだ？ババアは？

『・・・あー、集まつてるかい、ジャリ供』

突然スピーカーから流れるババアの声に僕らは一斉にスピーカーに注目する。

「一体なんの用で呼んだんですかババア長」

「くだらないようだったら帰るぞ、ババア」

『・・・あんたには敬意ってものがないのかい』

敬意だって、フツ愚問な。

「そんなもの、ない!!」「」

こんなクソババアなんか敬意なんて払っても無駄なだけだと、僕も雄二も理解している。

『堂々というものでもないさね・・・まったく』

スピーカーの奥でババアがため息をついたのが分かった。

咳払いをした後、ババアが僕達をここに呼び出した理由を説明し始める。

『今回は試験召還システムの試運転を行うためにあんた達を呼んだんだよ』

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

僕らは一斉にあの時の事を思い出す。

忘れもしない、僕たちはこのババアのせいで今まで散々な目に会っている。

夏休み明け、僕らはババアに付き合わされて試運転の名の地獄を味わったのだから……あの時は本当に酷かった。なにせ召還した召還獣が自分の心の中の本音をしゃべっちゃうなんていうトンでもない設定を付け足されたのだから。

まあ、その後ババアはちゃんとしっぺ返しをうけたんだけどね。

ザマミロ。

「ちょっと待て、ババア。また召還獣に変な設定を付けた奴じゃないだろうな！？そうだったらこの話は・・・」

雄二がそこまで言ったときだった。

『ちなみに拒否した瞬間あんたらの進級は無しにするさね』

「ババア

!!!!!!」

なんて奴だ！僕らがこれを無視した瞬間、三年生に進級できなくなるだど！？ふざけるな！！

「雄二みたいな極悪非道でブサイクな奴ならともかく、なんで僕らまで巻き込まれなきゃいけないんですか！ババア長！！」

「そつだ！明久みてえなバカで同性愛が似合いそうな面している奴ならともかく、俺が巻き込まれるのは腑に落ちんぞババア！！」

『…あんたらは一回誰がこの学園の長か判らせてやる必要があるみたいだねえ…とにかく付き合ってもらおうジャリ共』

くそお…覚えてろよババア！！

怒りは収まらないけど、付き合わないと僕達の進級があやうくなるので、仕方なく僕らは付き合うことにした。前回みたいに召還獣に変な設定を付けたような奴なのかな？また変なのじゃないといい

なんて奴だ！自分勝手なのに程があるぞ！！って美波！やめて！そつちに関節は曲がないから！！人の骨格はそんな風に曲がるものじゃないから！！ってうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

くしばらくお待ちください

『あー、そろそろ終わったかい？』

「ババア長！なんで止めないんだよ！！普通可愛い生徒が暴行にあつてたら止めるべきでしょ！！」

わざわざボコボコにされるのが終わるのを待たなくてもいいですよ！？

『何を勘違いしてるさね、クソガキ』

？ どういう意味だろう。

『あんたのどこが可愛いって言うんだい？』

「あんた最悪だ！！」

くそぉ！以前鉄人にも似たようなことを言われた気がするぞ！！どうしてこう僕の周りの先生は常識が無いんだ！！

「お主が言えることか？」

独特の言葉遣いで話す秀吉からかなり冷たい一言が・・・うう、

これが人と人との温もりを忘れた現代社会の姿だというのか？

『それじゃ、本題を話すよ。今回は召還獣じゃなくて、フィールドの方に工夫を加えてみたのさ』

「フィールド？」

『そうさ、召還フィールドに『ステージ』ってのをつけてみたのさ』

？ どういう意味だろう。

『今までは廊下や教室といった場所でしたけど、今度の新システムは戦える場所に色々な条件を付けようと思ってね、例えば『草原』なんていうステージだと膝丈まである草が生い茂っていたり、『原始林』なんていうのだと、背の高い木々やバカでかい恐竜とかが障害物や敵としてできたり、なんていうシステムを作ってみたのさ』

へえ…それは面白そうだ。

今までは教室や廊下なんていう場所で戦ってたけど、確かになんか面白みに欠けていたような気がする。密林の中で召還獣を使って戦うなんて結構面白いかも。雄二も何やら思案顔になってるけど、その顔は心の中では面白そうだな、なんて思っているに違いない。周りの反応もみんな結構面白そうだと感じた感じだった。

「なあ、ババア」

『なんだい、クソジャリ』

僕の隣で今まで何か考えていた雄二がババアに質問した。

「ステージには特性があるんだよな？ならフィールド上にある草が燃えるとか、そういうこともありえるのか？」

『ああ、そういった細かいところは今調整中だけど、いずれはそこまで実用しようと思ってるわ』

「？　　どういうことだろう。意味が良くわからなかったなので、雄二に聞いてみると……」

「つまりな、ステージ上にある木とかをぶっ壊して障害物にしたりとか、草を燃やして召還獣にダメージを与えられるとか、そういうこともできるんじゃないかかって聞いたんだ」

なるほど。もしこの試運転が上手くいけば試召戦争での戦い方が大きく変わる。今まではただ相手がいる場所に向かって走っていったり、点数がやばくなれば逃げたりとかそんなのばかりだったけど、今度は召還獣が通れない場所をフィールドにあるものを使って作ったり、フィールド自体がダメージを与えるものになったりと、今度はフィールドのことも配慮に入れてかからなければいけない。

ん？待てよ……

「ちょっと待ってよババア！それって、『火山』みたいなステージがあったら僕確実にやばくないですか！？それと、さっきでた恐竜もやばいでしょ！食べられたら確実に痛いですよ！！」

溶岩とかが飛び交っている中、僕の召還獣がそれに当たったら確実に僕は溶岩にぶつかっただと同じような痛みを受けてしまう！

『で、今からあんたらにそのフィールドを使って模擬試召戦争をやってもらうよ』

無視！？

このババア…生徒をなんだと思ってやがるんだ！！

『だったら敬意ぐらい払いな』

ぐう…相変わらず腹の立つババアだ……。

僕を無視してババアはフィールドを展開し始めた…結局僕はしぶしぶ受けるしかなかった…おのれババア、今すぐ貴様を殴り殺してやる！！！鈍器は…体育館だし、体育倉庫にでも行けば手頃なものが……

『ちなみに、体育館から一步でも出たら命令拒否つてことで進級は無しだ』

僕は素直にババア長の言うことを聞く事にしました。

選択科目は前の召還獣騒ぎの時と同じ古典。メンバーは僕と雄二と美波とムツツリー二と秀吉。例にも漏れず、姫路さんと霧島さんと工藤さんは点数が高すぎるので除外。なんだか嫌な予感がするけど、仕方がない。なにせ進級がかかっているのだからババアの要求を呑まない訳にはいかないのだから。

「「「「「試験召喚っ！！！！」「」「」「」

僕たちはいつものように召還獣を呼び出す。

魔法陣のような幾何学模様が現れてそこから自分達の姿をデフォルメしたような姿の召還獣が現れ　　ない！？
それどころか……

バチ、バチバチ……

「な、なんじゃこれは!？」

「……………異常事態」

「ちょ、ちよつとなんなのよコレ!！」

秀吉とムツツリー二と美波が突然周りのフィールドから火花が出ていることに驚く。僕も当然のように驚いている。

「ババア長!これはいったいどういうこと!？」

「……………」

「オイコラババア!返事しろ!！」

「……………」

僕と雄二がさつきからスピーカーに向かって怒鳴り続けるけど、一向にババアから返事が無い。おかしい、あのババアが僕らの悪口を聞き逃すはずが無い。それに……

「学園長先生、返事をしてください!！」

「……………学園長」

姫路さんや霧島さんの言葉をババアが無視するはずが無い…本当にどうなっている…っ…！

「ゆ、雄二、いつのまに半透明になったの!？」

「あ?何言ってる…って、うお!本当に体が透けてやがる!」

「さ、坂本君!?!一体どうしま…っ!」

「雄二…っ!」

見れば、半透明になっているのは雄二だけじゃなかった。

姫路さんも、霧島さんも、美波も、ムツツリー二も、秀吉も、そして…僕も…って、本当にどうなってるの!?!なんかどんどん透明になっていってるし…!

「ど、どうなってるのよコレ!?!」

「……………異常すぎる…!」

「ワシらどうなるんじゃ!?!」

美波やムツツリー二、そして普段ポーカーフェイスを崩さない秀吉まで慌てている。段々僕達の体が見えなくなっている……ヤバイ!なんかよくわかんないけどこのままじゃヤバイ…!

でも慌てたところで状況は一切変わらなかった。
むしろどんどん状況は悪化していった。

さつきまで火花が散るだけだったのに、いつの間にか空間が歪んで体が妙な浮遊感を感じ始め、僕らの体は宙を舞っていた。それもまるで竜巻に巻き込まれたようにぐるぐると………僕らの体もうほとんど見えなくなる頃にはいつの間にか互いの名前を叫んでいた。

「翔子おおおおおおおおおおお！！」

「雄二！」

雄二と霧島さんが互いの名前を呼んで手を伸ばしている。

「明久！！！」

「明久あ！！！」

秀吉とムツツリー二が僕の名前を叫ぶ。

「アキ

！！！」

「明久君

！！！」

姫路さんと美波が僕の名前を叫びながら手を伸ばす。

「みんなあああああああああああああああああああ！！！！！」

僕もみんなに向かって手を伸ばそうとした瞬間だった。

ぐるぐると僕らの動かしていた妙な力が突然止まり、そのまま僕

らは落ちていった………床ではなく、真っ暗な空間に………

一瞬の浮遊感の後、僕らはそのまま落下し始める。

「うわあああああああああああああああああああああ
！」

みんなの事を叫んだ僕の視界は一瞬黒く塗りつぶされ、僕は暗闇の中、抵抗する事もできずに落ち続ける……。そして、一つの光を見つけた瞬間……

ザッパァン！！！！！！

「ぶほおー！！」

………なぜか僕は水の中に落ちていた。
慌てて水中から顔を出してみると、そこは一面の大海原。
しかも

ピシャーーン！！ゴロゴロ！！ザッパァァァーン！！！！

「嵐い！???ごぼっ！ごぼべが！！！」

大波が僕を飲み込み、僕は必死に手足をバタつかせて泳ごうとするけど、水の流れが急すぎてとてもじゃないけど泳げない！それにこのままじゃ息が・・・

段々と目の前が暗くなっていく・・・

僕は、そのまま意識を失った。

第一話 バカと始まりと嵐の海（後書き）

いきなり災難な目に会う明久。一体これからどうなっていくか、楽しみに！

第二話 美少女とテイルズ技と召喚獣（前書き）

明久の異世界に来てからの初戦闘です。タイトルから分かる通り、明久達のあれが出てきます！！

第二話 美少女とテイルズ技と召喚獣

?????サイド

「ふう。なんとか倒せたね、手配魔獣」

そうやって私は目の前で倒れている巨大なイノシシを見る。

紫色の皮に黒い毛皮、三メートルはあるんじゃないかと思える大きさ、明らかに普通のイノシシじゃない。

これは魔獣。

この世界…アミシエスティアにいる化け物で、その種類は多岐にわたっていて、こういった動物型から触手獣、肉食植物まで数多く存在する。中には私達が食べられる魔獣もいるんだけど、さすがにこれは食べれないみたい。残念。

まあ、それは置いといて…私はイノシシの額を見る。

そこには赤黒い奇妙な形の刻印が付けられていた。

…きつとこれは。

「影人かげびとがこの近くにいてってことかな……」

「そうね…このイノシシかなり手強かったから、その主はかなりの強敵とっていいかもしれないわね」

「そうじゃのう、ワッチも同意見じゃ」

後ろで私の大切な二人の友達が頷いてくれる。

影人………きつと私達よりもずっと強い奴なんだろうけど、絶対に負けられない！私達の後ろにはたくさんさんの命がかかってるんだから！

でも…ちょっと不安もある。

もし私達が負けたらきつと私達が守る人たちが殺されちゃう…それも理不尽に、無抵抗にもてあそばれながら。

「……八耀士様達はちようしが助けに来てくれると嬉しいんだけどなあ……」

「何バカ言ってるのよ、八耀士なんて御伽噺でしょ」

友人にそう言われて私は苦笑いを浮かべる。

そうだよね、御伽噺だよね……

あはは、御伽噺に頼っちゃうなんてどうかしてるなあ、私。

でも、本当にそういう人達が出てきて私達の味方になってくれたら嬉しいな……

なんて考えながら海岸線のレンガで舗装された歩道を歩いていたとき、私は浜辺に打ち上げられている何かを見つけた。

遠くてよくわかんないけど、あれって……もしかして……

人!?

そうだとわかった瞬間、私は二人の制止を聞かずに走り出していた。

明久サイド

「……うっ……」

僕はゆっくりとまぶたを開いた。うつぶせのまま気を失っていた

みたいだ。口の周りが砂のせいでかなりざらついていて気持ち悪い……服が水を吸っててかなり重たいけど、体の方は大丈夫みたいだ……起き上がれないって訳じゃないみたいだ。普段から色んな目にあつて鍛えられているおかげだね……なんか悲しいけど。

ここはどこだろう？たしかクソババアの実験に付き合わされて、それでおかしな状況になつて……突然嵐の海に放り出されて……

「……生きてるって、素晴らしいね。ホント」

なんて横になりながら呟く。

いやこの台詞を言うのも何度目だろう……なんたつて何度も理不尽な事で僕と雄二は臨死体験を頻繁にやっているもんなあ……7月のカレンダーに書いた臨死体験生還記念の水色ペンで書いた丸の数なんてほとんどの日にちを埋めるぐらいだったもんなあ……

さてと、いつまでも横になつてないでそろそろ起き上がろうかな。腰から下なんてまだ海水に浸かつちやつてて気持ち悪いし。

そう思つて起き上がった瞬間。

ゴン！

「「いったあ！！」」

突然脳天に響き渡る激痛。

何！？突然なんなの！？体を起こした瞬間、僕の頭蓋骨に響いてくるような痛みが……つて、アレ！？さつき可愛らしい女の子の声が聞こえたような……幻聴かな？

「いたた……あつう、お鼻打っちゃった」

「えっ！？」

幻聴じゃない!?

僕はゆっくりと顔を上げる。そこにいたのは……

綺麗な金色の長い髪に、パッチリとした青い瞳……あつ、若干涙目だ。赤くなっている（僕とぶつかったせいかな？）けど、小ぶりだけど筋の通った鼻筋に、桜色の唇。

身長は座っているからわかんないけど、僕と同じくらいかな？

服装は……白と青を基調としていて、ノースリーブの上着に、肘よりちょっと上まである長い手袋をはめていた。下は白いスカートに黒のニーソックスをはいているせいか、スカートで本来隠されていなきやの前に彼女が座っているせいか、スカートで本来隠されていなきやいけない場所が目の前に……ああ、眼福!!じゃなくて!!彼女の格好は、RPGで出てくるような……そんな格好だった。

えつと、いつまでも彼女のパンチラを眺めているわけにはいかないので、とりあえず起き上がる。

「えつと、大丈夫?」

とりあえず彼女に手を差し伸べてみる。すると彼女は涙目ながらも「うん、大丈夫」って言いながら僕の手を取って立ち上がる。

……今気づいたんだけど、この娘……姫路さんクラスのスタイルだ……こんなに可愛い顔でこのスタイルって反則級じゃ……って、イカンイカン!

僕の手を取ってにつこりと癒されるような笑顔を浮かべる彼女……可愛すぎるぜ畜生!……って違う違う!初対面の女の子だぞ、いくらなんでも失礼すぎる!

「あの、私の顔に何か付いてますか?」

「えつ?」

「うおっと！いかんいかん、どうやら自分でも気付かないうちに…」

「マジマジとフィーナの顔を眺めて追ったようじゃのう、主は」

「うわぁ！？」

誰！？なんか今秀吉みたいな言葉遣いの可愛らしい声で突然話しかけられたぞ！！ってか、心読まれた！？本当に誰！？僕が辺りを警戒していると……

「ほれほれ、こつちじゃよ」

「えっ？」

ブスリ（僕のお尻に指のようなものが刺さった音）

「あつひよあぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

何！？いきなりなんでカンチョー！？

「はっは、油断大敵じゃぞ、主様」

「うう……いきなりなんなんだよお……」

僕が尻の痛みで涙目を浮かべているときに、僕にカンチョーした犯人がひよつこりとイタズラっぽい笑みを浮かべながらニヤリと犬歯を見せて姿を現した。

……………あれ？

「コスプレ？」

「主よ、何を言っておる？」

そう言っただけの目の前の女の子は目を細める。

いや、だって君のその格好……亜麻色の髪に小作りな鼻、大きな金色の瞳……って、結構珍しいな。服装は……なんていうか、露出が凄
い……………。

上はノースリーブの丈が短いパーカーに、さっきの……フィーナッ
て娘程じゃないけど、それでもかなりある胸の部分を薄い桃色の布
で隠しただけのへそ出しスタイル。下はやたら短いスパッツにブー
ツ。手足に籠手を付けているけど、正直、やたら肌色の面積が多い
……………。

さらに、目を引くのはそっちじゃない（ちらちら見てるけど……）。
彼女の頭と、お尻の辺りから見える『それ』に僕の視線は釘付けだ
った。

ぴこぴこ、ふりふり

「……………犬耳と……尻尾？」

「？ なんじゃ、主。ワッチを見て鳩が豆鉄砲食らったような顔つ
きになつとるぞ」

いや、そりゃそんな顔になるよ……………

だって犬耳とふさふさな尻尾が生えてるんだよ？

最初コスプレ？って思っちゃったけど、さっきからぴこぴここと耳が動いていたり、ふりふりと尻尾が揺れているところを見ると、どうも本物っぽい……。

「どうした？まさかワツチに一目惚れかえ？」

ブツ！！

僕は何も食べてもいないのに思わず吹き出してしまった。

「い、いきなり何言ってるの！？」

「なんじゃ、違うのか？こんな美人が目の前におるんじゃぞ？それも、若い体を隠さずもせずに曝け出して、じゃ」

その格好はわざとだったのか！！イタズラっぽい顔になって僕にゆっくりと近づいてきて……ってか、近い近い！うおおおお、胸の谷間がこんな近くにいいい！！

と、僕が煩惱に必死になって耐えていると、急に後ろから違う女の子が現れて目の前の犬耳（？）少女の首根っこをつかんで僕から引き剥がした。

「やめなさい、シャオ」

「おう、なんじゃイレーヌ」

「なんじゃ、じゃないでしょ……まったく、初対面の相手になんてこちゃってんのよ……」

そう言ったため息をつくイレーヌって名前の彼女……髪の毛は青みがかった銀髪、腰まで伸びている……よく考えたら目の前の三人、み

んな髪の毛長いなあ……ってどうでもいいか。両耳の部分からぴよこんとアホ毛が左右両方から出ていた。

しばみ色の綺麗な瞳に、整った顔立ち。さっきの娘と同じくらいのスタイル……そこまで見るとかなりの美人。って感じなんだけど、彼女の格好もやっぱりRPGに出てくるみたいな格好だった。

ノースリーブの水色の薄い絹みたいな膝まであるワンピースを着て、白い手袋をはめて、腰にベルトを巻いてそこから下にスリットが入っている格好だった。ついでに右手に結構ゴツイ感じの杖を一つ持っていた。なんかRPGに出てくる『賢者』って感じの女の子だった。ちよつと強気っぽそうだけど。

………なんか、トンでもない感じの女の子達に囲まれた僕、とりあえず自己紹介しようと思ち上がった時、足元に見覚えのあるものがあるのに気付く。これって……

「あれ？僕のカバンだ……」

僕の足元にあったのは、Fクラスの教室に置きっぱなしにしていた僕の学生カバンだった。

なんでこんなところにあるんだろう？体育館には持ってきていないのに……。

とりあえず本当に僕のかどうか、カバンの蓋を空けて中身を見て確かめる。幸い、防水加工しているカバンだったから、中身は濡れていなかった。

中に入ってたのは僕の愛用している携帯に、PSPとソフト数個、漫画数冊にラノベ数冊。教科書？そんなの入ってるわけ無いよ。僕らFクラスは置き勉がデフォなんだから。

え？いばるところじゃないって？あ、そう。

他に入ってるものといえば、あまり書いていないノートに、シャープペンやボールペンが入っている筆箱に、エロ本、もとい保健体育

の教科書が一冊。

うーん、やっぱりこれって僕のカバンだ。

でもどうしてFクラスの教室にあった僕の荷物がこんなところにあるんだろう？

……………まあ、いいか。

難しいこと考えててもわかんないし、それより携帯があるんだ。

早速これで雄二たちと連絡を……………あ、圏外だ……………アンテナが一本も立ってない。これじゃあ連絡が取れないよ。

「どっしりよっ……………」

ぼつり、と僕が咳くと、目の前の金髪の女の子…………えっと、フィーナさんだったけかな？その子が優しい笑みを浮かべて僕に話しかけてくれた。

「えっと…………君、迷子なの？」

「うん…………どうもそうみたい」

「そうなんだ…………名前は？私はフィーナ・エルセレット」

そういつてニッコリとまぶしい笑顔を浮かべるフィーナ。

「ワッチはシャオ・ムウラン」

犬歯をむき出しにして笑う犬耳がついたシャオ。

「私はイレーヌ・セレスティよ、よろしく」

優しいな微笑を浮かべるイレーヌ。

よし。三人が自己紹介をしてくれたのなら、僕も自己紹介をしないとな。

「僕は吉井明久っていうんだ。明久でいいよ」

みんな可愛いなあ……フィーナは天然系って感じのおつとりとした女の子、シャオはイタズラ（工藤さんみたいな事）好きな獣少女って感じで、イレーヌはクールな大人っぽい感じだ…みんな僕と同じ年って感じた。

するとフィーナが首を傾げて聞いてくる。

「ヨシイ？なんか変な名前だね…」

「あつ、ごめん。えっと、吉井ってのは苗字なんだ。明久が僕の名前」

「あつ、そうなんだ。ゴメンね」

おお、素直ないい子だ。

まったく、美波にも見習ってもらいたいよ。もうちょっと素直になればきつと色々いいことあると思うのに。

「見たところ、結構変わった服を着てるわね」

そう言っただけなのに、僕の着ている学生服を見て呟く。

そして最後に犬耳を持ったシャオって子が…って何やってんの!?

「くんくん……少々海水を吸っておるが…嗅いだ事も無い布地を使っておるのよ」

「犬かよ……」

「違う、ワッチは誇り高き狼じゃ。そこらの犬ころと一緒にするでない」

「ふうん……それよりここってどこのの？」

シャオさんの言葉を聞き流して僕は自分が今どこにいるか聞いてみる。幸い、日本語で普通に会話できているってことはここは多分日本のどこか……

「ここ？ここはクロスオパールって街だけど……」

どうしよう。日本どころかいかにも外国っぽい名前が出てきた……ってことはここって外国！？そんな！僕は英語もしゃべれないし、前に美波に間違っってフランス語で話しかけた覚えもあるし……うう、あの時は恥ずかしかつたなあ……フランス語とドイツ語を間違えていたなんて……美波に後で指摘されて凄く恥ずかしかつたっけ。まあ、あの後美波とは普通に友達になれたんだし、言葉の壁だつてすぐに乗り切れたんだから問題ない……

……って、あれ？それじゃあ何で日本語で普通に会話できてるんだろう……僕は別に翻訳してくれる弱じゆやく弱なんて食べた覚えもないし……そもそも僕は文月学園っていう学校の中に居た訳だし、僕の住んでいる街から海まで結構な距離があるから、そもそも僕が浜辺に打ち上げられている事もおかしい……。

もしかして、ババアの実験のせいで異世界に来ちゃった？

いやいや、そんな漫画みたいな事が……

ザッパアン！！

「きしゃあああああああ!!」

へっ?何、今の?……ッ!殺気!!

僕はとっさに横へ飛んだ。えっ、どうしてかって?それはね…今まで美波や姫路さん、さらに姉さんのお仕置きや、FFF団からの追跡から逃れるために死に物狂いで鍛え上げられた僕の勘が『ヤバイ!危険だ!!』って叫んだからだ!!

案の定、僕がさっきまでいた場所に一本の三叉の鉋が突き刺さって……って、鉋!?何で!??

僕が後ろを振り向くと、そこにいたのは……。

全身がぬるぬるした鱗で覆われた体。

魚のひれがついた手足。

ギョロツとした二つの目。

そして、さっき僕を貫こうとした黒光りした鉋。

「も、モンスター!?!」

そこにいたのはRPGに出てくる水辺とか海とかで登場してきそうなモンスターだった……って、なんでこんな奴がいるの!?!ここってマジで異世界!?!

なんて考えているうちにもう一体、海から現れて僕に向かって鉋を……って、ヤバイ!とっさに僕は顔と心臓をガードする構えを取った瞬間……

「危ない!?!」

そう言ってフィーナが僕に飛びついてきて、鉋から僕を遠ざけてくれた。

僕を助けてくれたフィーナからいい香りと女の子特有の柔らかかな

感触に顔がにやけそうになったてのは内緒ね。

「くっ、こんな街の近くにまで魔獣が……」

そう言いながらイレーヌは杖を手にして何やらぶつぶつと呟き始めた…あれ？なんかイレーヌの周りから赤色のキラキラしたのが出始めたけど……

「揺らめく焔、猛追…ファイアボール!!」

ボン!!

イレーヌの杖の先から僕の顔ぐらいの大きさの火の玉が数個、宙に浮かび上がる…って何だと！？テイルズシリーズの魔法を使った！？何コレ!?!?

僕が突然の事に驚いていると、イレーヌは火の玉を僕に襲いかかるうとしていたモンスター…じゃなくて魔獣か、魔獣に向かって飛ばす。

「きしゃあああああ!!」

魔獣の胸に数個の火の玉が見事に命中して、魔獣の体勢が崩れる。そこに犬耳…じゃなくて狼耳のシャオが握りこぶしを固めて飛びかかる。

「飛燕連脚!!」

シャオが空中で身を翻して四連続の蹴りを魚人魔獣にくらわせ…

ってまたテイルズ

!?

何!?!この世界、テイルズの技が当たり前のように使われてるの!?!

ってか、シャオ!?!さっき握りこぶしを固めてなかった!?!

何で足技!?!

「なんとなくじゃ」

また心読まれた!?!

なんだろう、姫路さんといい、美波といい、どうして僕の周りは心を読む事ができる女の人が多いんだろう……。

僕の目の前、金色の綺麗な髪を翻してフィーナは腰についているポーチから金色のわっかを取り出す……多分、これってチャクラムっていう武器だと思う。そのチャクラムを指でくるくると回して魚人魔獣に向かってヒュン!と投げつける。

「しゅごおおおおお!!」

おお!凄い!!

投げた二つのチャクラムは見事に敵に命中した。空中に二つの金色の軌跡を描いて、魚人の手足に傷を付けた!さらにシャオが相手に息をさせる暇も無いってぐらいの攻撃を仕掛ける!

すると突然、さっきまで魔獣をボコボコにしていたシャオが突然下がった。

あれ?このまま倒すんじゃないの?

「怒りを矛先に変え…前途を阻む障害を貫け…」

ん?たしかイレーヌのこの詠唱って……もしかして!

「ロックブレイク!!」

ドドガガアアン!!!

魚人の足元から突然巨大なトゲトゲの岩が盛り上がって、魚人を宙に吹っ飛ばした! やっぱ『ロックブレイク』か! 僕もゲームをやってて序盤は結構威力があって頻繁に使ってたのが記憶にある。でもコンボをつなげるのには向かない術なんだよなあ…むしろ『スブラッシュ』の方をよく使ってたっけ。

なんて暢気な事を考えていた僕は気付かなかった。
すぐ近くに、もう一体の魚人魔獣が近づいていたってことに……

「ッ!?!」

僕はとっさに後ろにバックステップして銛の攻撃をかわそうとした……けどちよつとだけ遅かったみたいだ。僕の頬に銛の一撃がかった。
すった。

頬から一筋の血が流れる……くそ、どうしよう……僕にも何かできなにか!?

「あ、明久!大丈夫!?!」

フィーナが心配して僕に向かって走ってくる。

でも魚人のほうが速い! また僕に向かって攻撃を仕掛けようとしてくる……くそっ! せめてフィーナが来るまで攻撃をかわさないと! とりあえず僕はフィーナに心配をかけないように声を返しておく。

「大丈夫、こういったことには結構慣れてるから僕一人でも大丈夫

だよー!!」

いいながら僕は銛の一撃を身をひねってかわす!…ふっ、FFF団の奴らと比べたらこっちの方が少し早いけど、それでもかわせないって訳じゃない!!それに…鉄人の方がずっと速いし、威力も上だ!あの人外生物、目の前の魔獣よりも強いつて一体何者なんだ…まあ、男の見栄として僕はフィーナに心配をかけないようにした。その結果……

「そうなの?それじゃあ、私は二人の応援に行くね!」

そう言っただったと「とシャオ達の方に戻っていくフィーナ。うん、本当に素直で……いや、待ってえ!!」

「ごめんなさい!僕の方に来て!!あつ、フィーナ!戻ってきて、カムバツ　ク!!!!!!」

見え張ってすみません!フィーナ…君ってやっぱり天然なんだね。僕の見え張った台詞を鵜呑みにしちゃったよ!ああ、いつの間にか二人の方に戻っちゃってるし!!ヤバイ!自分で自分の首を絞めちやっただ!!

ど、どうしよう…!こういう時雄二と一緒にFクラスとCクラスの奴らから逃げたときは、雄二の腕輪の能力を使って召還獣のフィールドに干渉してCクラスの追撃から逃げてたっけ……

………召還獣?そうだ!それがあつた!!

僕は大きく腕を構えて…そして、叫ぶ!!

「試験召還^{サモン}!!」

ってバカ ！！

何やってんの僕！？ここは文月学園じゃないし、なにより雄二も近くにいないんだから！！召還獣を呼んでも来るはずが……

ボン！ 僕をデフォルメにした姿の召還獣が登場した音

えっ…マジで!?

目の前に現れた黒の改造学ランに木刀、さらに布の裏に龍の刺繍が入った三頭身ほどの僕の姿に似た召還獣が現れた……

「よっしゃあ！来たア！！」

僕は召還獣を操作して僕に向かって銚を放とうとしている魚人に向かって木刀を振るう。

「しやぎやあ！！」

僕の召還獣の木刀の一撃を受けて、魚人は思いつき吹っ飛んだ！やっぱり凄い！見た目は三頭身しかない小さな姿だけど、人間の何十倍の力を持っている召還獣の一撃は、魚人を一撃でぶっ飛ばせ

る力を持っていた！

「じゃぎゃあああああああ……！」

おっ、まだやる気みたいだな……いいぜ！

「かかってこい！この魚野郎……！」

今までの鬱憤、ここで全部ぶつけてやらあ……！！

第二話 美少女とテイルズ技と召喚獣（後書き）

次回は召喚獣だけでなく、明久も一緒に戦います。

第三話 初戦闘とフィードバックと伝説の剣（前書き）

いよいよ明久に新たな力が宿ります。どんな物かは…まあ、タイトルでなんとなくわかつちゃうかもしれないが、お楽しみください。

第三話 初戦闘とフィードバックと伝説の剣

イレーヌサイド

私とシャオはさつきからこの魔獣、マーマンに対して苦戦していた……おかしい、さつきからかなりの攻撃を叩き込んでいるのに、一向にマーマンが倒れない……これはまさか！

「シャオ、烙印は！？」

「うむ、後頭部にあつた！」

やっぱり……影人の烙印が押されている魔獣……それならこの猛攻に耐えられているのも納得できる……それにしても影人^{かげびと}め……こんな街の近くに魔獣を出させるなんて……これはうかうかしてなんかいられない……帰ったら対策を……その前にこいつをなんとかしないと……！

「火焰の帝王……地の底より舞い戻れ……イラプション……！」

ドゴオン！ドドドオン……！

「しゃぎゃああああああああああ……！」

砂浜から突然噴き出した溶岩に悲鳴を上げるマーマン。

ふっ、ざまあみなさい！

このまま一気に攻めるわよ……シャオ！

「OKじゃ、ワッチの実力をみせてやるうぞ……！」

そう言っ て私達は臨戦態勢をとる。

フィーナはさっきの…明久だっけ？その子の援護に回したからいいけど、二人だけでもなんとかなるかもしれない…回復役がないのは結構厳しいけどね。

なんて考えてたときだった…

「ナース！」

突然響いた聞きなれた声、さらに優しげな青い光がキラキラと空中に舞い、私達を包み込む…この術、もしかして…

「「フィーナ！??」」

私とシャオは二人して後ろにいた金色の髪の友人、フィーナに振り向く。今の魔法はフィーナの得意魔法の一つ。味方全員の傷を癒す術。正直、マーマンとの戦闘で結構傷ついていたから助かったけど…けど、なんでここにいるの!?

「あ、うん。明久が一人でも大丈夫だよ!って言ったから、私の応援に…」

「このおバカ！」

なにやってんのこの子!？明らかに素人…っていうか、武器も何も持っていない明久にマーマンを押し付けてきたってこと!？何やってんのよ!

それに…なんだか、あなたらしくない。

普段なら誰彼構わず助けに行っちゃうあなたが、素人の一般人に

魔獣を任せちゃうなんて……

私の疑問に、フィーナは戸惑いながらも答えてくれた。

「えっ、だって……明久なら本当に大丈夫かな？って思ったから……」

……………？

どういふこと？私が訝しげに眉をひそめると……

『だあああああああああらっしゃあああああああああああああああああああああ
あああああ……！』

「「「！！？？？」」」

突然響いた大声に私達は一斉に明久のいる方へと視線を向ける。
すると、そこには……

空中に大きく吹っ飛ばされたマーマンと……

黒い衣服の裏地に龍の刺繍が入った小さな明久が木刀を振るって
る姿と……

豪華な装飾が施された空色の剣を振るっている明久の姿があった。

あの小さい明久は一体……それよりも……あの剣って……たしか、
伝承に載っていた……

「大空の剣……エデン・ヘヴンズ……」

八耀士はちようしの……『空』の女神の力を授かった戦士が持つ武器……

まさか……明久が……

「八耀士様……？」

隣にいたフィーナの言葉は、私の耳にはあまり届かなかった……。

「ちょっと時間が戻って」 明久サイド

召還獣を出した僕だけど、思った以上に苦戦を強いられていた。その理由は、魚人の奴が思った以上にタフだからだ。

正直、鉄人はまだ男としての急所、股間があったからまだそこを狙って叩くという戦法が使えたからやりやすかったけど、こいつめ、さつきから股間に集中的に攻撃してもケロッツとしてやがる。

「きしゃあああああああ！！」

むっ、また僕に向かって攻撃しようとしたな……ふっ、バカめ。銃の一撃が僕の頭に向かってくるけど、その手前……数センチのところで槍がガキン！という硬い何かに弾かれる。

僕の前には召還フィールドが発生していて、これは召還者のいるエリアに生身の人間が通れないようにするバリアみたいなものだ。召還した召還獣を倒してから次の相手に行け、っていう学園側、もといババアが決めたルールなんだけど……ふっ、今だけは感謝してやるよ、ババア……でももうちょっと前にして欲しいな……ぶっちゃけ、顔ギリギリに止まるって結構怖いんだからな！ちなみに最初にあいつが攻撃を仕掛けてきたときはマジで焦った。冷や汗をかいてちびりそうになるぐらい。

……いや、ちびってはいないからね。ホントだよ。

「行けッ！」

僕は召還獣に命令して魚人の後頭部に木刀を叩き込ませる。

そのまま魚人は頭から血を噴き出して倒れるけど、すぐにまた起き上がってくる…くそ、なんてタフなんだ！

僕は苦々しげに顔をゆがめる。

いくら僕に攻撃は届かないっていつてもこのままじゃ埒が明かない！どうすればいいんだ？僕に何度も攻撃を仕掛けているこいつだつて、そろそろ標的を僕の召還獣に移そうとしているし、仮に召還獣がやられたらそれこそ絶体絶命だ……本当にどうしよう。映画とか漫画とかだと異世界に行った主人公は新たな力を授かるって話がベターだけど、最近では特殊な力なしでなんとかしちゃう話だってあるもんなあ…ナル〇アとか。

ああ、僕にも何か特殊な力があればなあ……。

なんて思ったとき、僕の目の前が突然光りだした……

「えっ…これって、剣？」

突然僕の目の前に、豪華な装飾が施された空色の片刃の剣が目の前に現れた。

思わず手を伸ばしてその剣を地面から抜いてみる。するとそれは僕の手にぴったりと吸い付き、するりと僕の手に入ってくるように抜けた。

「軽い……」

剣なんて持った事が無いけど、その剣はまるで羽のように軽かった。

透き通った刀身はまるで大空のように綺麗で、刃の下の方と持つところの間（鏢という場所）に付いている飾りには、綺麗な若草色の宝石が付いていて、まるでどこかの宝剣のような雰囲気だ。そして持った瞬間、僕の頭の中にこの剣の名前が響いてきた。

「……エデン・ヘヴンズ」

かっこいい名前だ。まさに美少年な僕にピッタリな剣だな……
……以前、微少年と言われたことを思い出し、若干ブルーになっちゃった。

気を取り戻して、ようし……いくぞ！

僕は剣をバットを振る要領で構え、召還獣に僕と同じタイミングで攻撃するように指示を出す。

そして……

「だああああああああらっしゃあああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！」

思いつきり剣を横に振って、目の前にいる魚人の胸に剣を叩き込んだ！

召還獣も同じように木刀を振って目の前にいる魚人にダメージを与えた！

瞬間、魚人は今まで僕が最初に吹っ飛ばした時なんかとは比べ物にならないくらい思いつきり空に飛んだ。

胸から血を噴き出しながらグルグルと空中で回りながら海へと落下した。

ドッパーーーーーン!!!!

「いよっしゃあ　　!!!!」

やった！異世界での初めての戦闘で勝てた！しかも、なんかエクスリバーとかキー○レードや口の剣みたいな伝説の武器っぽいものを手に入れちゃった！いやっほお！

僕はモンスターを倒した爽快感に酔いしれ、しばらくガッツポーズをとっていたけど、ふとあることに気付いた。

「フィーナ達、大丈夫かな……」

そう思っただけは三人の下へと走り出した。

浜辺の水をばしゃばしゃと水しぶきを上げながらって、あれ？こんなところに水なんて無かったような……

「あ、明久！危ない！！」

「えっ？」

その瞬間、僕は『ある呪文』を思い出していた。

そう、たしかに…ゲームでは敵と自分の間にたくさん水溜りが一直線に出来上がっていった…思いっきり敵を打ち上げる……確か名前前は……

「アクアレイザー！！」

そうそう、この名前だったっけ……って、暢気に言ってる場合じゃ

ドッパアアアン!!

「きしゃああああああああああああああ!!」

「うわああああああああああああああ!!」

僕と魚人は地面から噴き出した水に思いっきり空中へ舞い上げられた。

痛い!もの凄く痛い!!水って勢いよく叩きつけられると凶器になるんだなあ……

空中へ舞い上げられた僕は、そのまま重力に引かれて落ちていく。あつ、ヤバイ。このままじゃ死ぬ…最悪だ。まだ冒険も何もやってないよ!パンチら見れたり、姫路さんクラスの胸の谷間を見れたり、霧島さんクラスの胸が鼻先にくっついたりって……結構幸せを味わったから別にいいかも……って違う違う!えつと、こういう時は自分の鬨気をぶっ放して空を……って無理だ!僕にそんなドラゴボールみたいな真似はできない!鉄人ならできるかもだけど……ああ、空を飛べたらなあ……

なんて思った瞬間。

ふわり

「くくくえつ」「」「」

突然僕の周囲から若草色の光が溢れ出して僕を包み込んだ。

そのまま僕の落下スピードは目に見えて落ちていって、すぐ目の前にいた魚人はそのまま地面に頭から落下した。あれは確実に死ん

だ。対して僕はゆっくりと地面に降り立った。いやあ、凄いなこの剣。僕が思った瞬間、僕に空を飛ぶ風のオーラを作ってくれるなんて……いやあ、おかげでたすか……

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ……！」

「ど、どうしたの明久!？」

突然僕の脳天に響く激痛。何で!？僕はふわりと着地したはずなのに……

答えはすぐ目の前にありました。

「あつ……僕の……召還……獣が………」

「あつ!小さな明久が………」

「ありやりや、頭が潰れとるのお」

……僕の目の前には、頭がグロテスクに潰れている召還獣がいた。

どうやらアクアレイザーに巻き込まれたのは僕だけじゃなかったみたいだ。僕の召還獣も一緒に巻き込まれていて、重さがほとんどない召還獣は僕と魚人よりもずっと高く舞い上げられていたみたいで、そのまま脳天から地面に落下したという事か……うう、ものすごく痛い……うう、これだからフィードバックは……。

なんて涙目になっていた時だった。

「ヒール!」

澄んだ声が響き渡り、僕の体が優しげな青い光に包まれる。
その光が収まった頃、顔についていた傷や痛みが消えていた。こ
れって、もしかして。

「大丈夫、明久？」

「フィーナ？これって……」

「あつ、うん。明久が痛そうだったから回復術をかけたんだ。他に
痛いところはない？」

心配そうに聞いてくるフィーナに僕は笑顔で『大丈夫』と答えた。
そっか、やっぱり今のつて回復魔法だったのか……今までフィク
シオンだけのものだったけど、実際に自分にかけると、こんな
凄いものなんだなあ。

ボン！

「あつ」

消えちゃった。

僕の召還獣は点数がなくなって戦死してしまった……ってヤバイ！

「どりゃああああああ！」

僕はすぐさま近くの岩に自分の体を隠す。

なぜかって？召還獣が戦死したらあの補習の鬼、鉄人がすぐさま
飛んでくるからだよ！僕は気配を全て殺し、可能な限り息をする量
を減らすとその場の風景と同化するべく

「何やつておるんじゃ、主^{めし}」

「おわあおおお!!!」

僕の目の前に犬……じゃない、狼の耳と尻尾をつけたシャオが三白眼の表情で顔を出した。

バカな！？僕たちFクラスが鉄人の補習や異端審問会から逃走するために編み出した擬態法がこんなにあっさりと看過されただど！？

「いや、お主の匂いで丸分かりじゃったぞ」

「……………」

ああ、そうか……………そういえばさつき、僕の制服の匂いを嗅いでいたっけ。

僕は絶望モードになって岩から出てくる。ああ、これから鬼の補習かあ……………異世界に来てまで補修だなんて……………ん？異世界？

「なに辺りをキョロキョロ見回してんのよ」

イレーヌが訝しげに僕を見ているが、僕はそんなのに気にしている余裕は無かった。ある程度辺りを見渡し、人の気配を僕が感じられる範囲でサーチする。これも鉄人や異端審問会からの追跡から逃れるために身に付けた特技だ。

……………そして僕はようやく気付く事ができた。

「……………この世界に鉄人は、いない……………」

「はい？」

「やったあ！補習が無いんだ！！いやっほおおおおおおお
！！！」

「ハハハハハハ！！ざまあみる鉄人！ここは異世界だ！！僕に補習
させるものならしてみせろお！！」

「なんて僕が鉄人がいないことに喜びをかみ締めていると、イレー
ヌが……」

「あんだ、バカ？」

「……異世界に来てまで、僕はバカ扱いされてしまった。」

第三話 初戦闘とフィードバックと伝説の剣（後書き）

明久はどこでもバカ扱い（笑）なのはもはやデフォなんでしょうか？
さて、ここで質問です。この物語はテイルズシリーズの技をメイン
に使ってるのですが、明久達に使って欲しい技があったらどうかコ
メントしてください！！

あ、でも明久には魔法は使えません。だってバカですから（酷い！
！byアキちゃん）

では、感想待っています！！

第四話 伝説と料理と変わらないもの(前書き)

今回は明久達が街に入るところです。

第四話 伝説と料理と変わらないもの

魔獣（イレエヌの話によると、マーマンって名前らしい）を倒した僕は、そのまま近くの街、クロスオパール街に招待された。

僕が『ここがどこかわからない』って事を知った三人は、とりあえず自分達が住んでいる家に案内されることになったんだ。異世界に来て早々、嵐の海に投げ出されたり、マーマンに襲われたり、召還獣のフィードバックに苦しんだりと色々悲惨な目に会っちゃったけど、親切な三人に出会えたつてのは嬉しいなあ。

僕はそんなことを考えながら隣を歩く三人を見る。

金色の長い髪にパッチリとした青い瞳、姫路さんクラスのナイスバディの天然な性格の美少女、フィーナ。

青みがかかった銀色の長髪に、もみあげの部分からがびよっこりと出ているアホ毛。僕の髪の毛と同じ色の強気そうな瞳を持った美少女、イレエヌ。

亜麻色の髪の毛に狼の耳と尻尾を持ち、露出の高い衣服を身にまとった（しかも故意で）イタズラ好きな美少女、シャオ。

この世界に来て三人に助けられたのは、本当についていた。それになんか伝説の武器みたいな剣まで手に入れちゃったし。今はとりあえず鞘がないから、代わりにフィーナから貰った布で刃の部分をぐるぐる巻きにしている状態だけだね。

それで、僕が招待されたクロスオパールって街なんだけど……

「へえ……本当にRPGに出てくる街みたいだな……」

「明久、あなた何を言ってるの？」

おっと、つい口に出しちゃったみたいだ。

イレエヌから訝しげに見られながら僕は「何でもない」と言っ

おく。武器屋や道具屋、宿屋を見ながら僕は街の北に位置する大きな館に僕は招かれた。

「すごい立派な屋敷だね」

「うん。と言つても、私達の家じゃないんだけどね」

「えっ、そつなの？」

僕は目の前の大きな屋敷を見る。

玄関前の広い庭に、その真ん中には綺麗な噴水、綺麗な花が植えられた花壇。そして目の前にある見た目三階まであるとっても大きな屋敷。ひよつとしたら霧島さんの家よりも大きいかもしれない。

この街の……領主って人が住んでるのかなあ？

「うんにゃ、領主はおらんぞ」

なんてシャオが僕の横で呟く。どういうこと？

「この街の領主は数ヶ月前に逃げ出したのよ」

「えっ、どうして!？」

イレーヌの言葉に僕は驚く。街の領主ってこの街で一番偉い人でしょう？そんな人がなんで逃げ出してんの？

「この街の領主は悪政を強いていてね、税は搾り取るだけ搾り取り、影人が近づいていると分かった瞬間に、街の兵士をほとんど連れて逃げちゃったのよ」

うつわ、なんだその絵に描いたような小悪党は……………。

しかも街の兵士全部連れて逃げ出すとか……………どんなワガママ野郎だよ。きつとデブで頭ハゲのおっさんなんだろうなあ…もしくは雄二みたいな悪党面か……………。

「まあ逃げ出した後、思いっきり遠くからファイアボールを何発もぶち込んでやったけどね」

そう言って雄二が極悪な作戦を立てた時のような笑顔を浮かべているイレーヌ。

まあ、僕も同じ立場だったら同じことやってるだろうなあ。

「ついでにあやつが乗っている馬車や食料とガルドを運んでいる場所に大砲ぶち込んでやったのじゃ」

うわあ……………とんでもない事やったなあ。資金も何も無いって状態で、その領主の人一体

どうやって生活しているんだろう。

「馬車を壊した後、怒りながら帰ってきたんだけど……………みんなで追い払っちゃったんだ……………」

そういつて苦笑いを浮かべるフィーナ。へえ、そりゃ大胆な事をやったなあ……………

「ついでに兵士達も私達側につきちゃってね。みんなして領主をボロボロにしてこの街から追い払っちゃったんだ」

「あやつ、兵士にも人望無かったからのう。ワッチらが謀反をやっ

たら面白いように加わってきおったわい」

兵士にも裏切られるって…まあ、今までやってきた事を考えると当たり前か……

僕がその場にいたら確実にポコポコにしていたな。うんうん。

「で、私達がその時のリーダーみたいなことをやっていたから、この街のリーダー的な事をあのバカ領主の代わりにやってるのよ。で、その時の戦利品で家を奪ったのよ」

「くつくつく、ざまあみい。ここにあつたあやつの肖像画とか全部八つ裂きにして燃やしてやったわい」

あつ、それはちょっとやりたかったかも。

「ねえ、石像とか残ってる？あつたら落書きしてやりたいんだけど」

「おつ、お主もそつち側の人間かえ……ひゃっひゃっひゃ、機会があれば一緒にどうじゃ？」

「あんたらねえ……」

僕とシャオがニヤニヤしながら話していたらイレーヌが呆れ混じりに僕らを見る。？なんだろう、僕が首をかしげていると……

「そろそろ家の中に入ろうよ。二人とも」

「あんたの話をしなきゃならないからね、それに今後の方針も」

「あつ、そつだね」

とりあえず落書きの件は後回しにして、僕は屋敷の中に入った。

「……いただきます！」「……」

僕ら四人は屋敷に入った後、食事を頂いていた。

屋敷に入って気付いたんだけど、三人はメイドとか執事とかは雇ってないみたいなんだ。三人とも普通の家の生まれらしいから、メイドとかに働かせるのは何だか嫌だ、って話らしい。だから、この家の家事は自分達でやってるんだって。偉いなあ……でも部屋が多すぎて掃除が行き届かない場所もあるから、時々お手伝いさんを雇って掃除をしてもらっているらしい。

色々話したいことがあったけど、まずは食事をしてからって事で！ということ、目の前には豪勢……とはいえないけど、美味しそうな食事が並んでいた。

「ふふふ、どうかな？私が作ってみたんだけど……」

「あつ、これフィーナが全部作ったんだ」

そうやって目の前にあるシチューを一口スプーンで掬って飲んでみる。まるやかな野菜と香草をベースに、ぶ厚いお肉とかがミルクとチーズのスープに合ってとても美味しい。特にこのお肉、けっこのジューシーで美味しい。

「すっごく美味しいよ。フィーナって料理上手なんだね」

「あ、ありがとう」

ああ、本当に美味しい……前にいた世界で食べていた姫路さんや姉さんの料理を食べているから、女の子の手料理って『ダメ、絶対』みたいな感じの料理ばかり食べていたからなあ……いや、あの料理は『ダメ、絶対』以上の威力があったと思う……。

「明久……なに涙流しながら食べてるのよ」

「うん……女の子の手料理で臨死体験しないなんてことが嬉しくて……」

「あんだ……一体何があったのよ……」

美味しい。美味しいよ……これが本物の女の子の手料理なんだね。ここ最近、姫路さんや姉さんの手料理を頻繁に食べる機会が割と多かったからなあ……

「あ、明久……主、どんな食生活送っておったんじゃ？」

「うん……今は姉さんの料理を食べたり、自分で作ったりしてるんだけど……」

「けど？」

「姉さんがシチューを作ると……必ずピンク色の湯気をあげる真っ黒なスープが出来て、一口食べると、必ず眠たくなっちゃうんだ……」

「それなんて劇薬！？というより、本来白はずのシチューが真っ黒って……………」

「……………それ以前に…湯気って白いよね……………?」

みんなして僕の姉の料理の腕に戦慄を覚えている……………まあ、そりゃそうだろうなあ……………

「……………(冷や汗)……………」

三人とも僕の話にひいている。うん、でもこれが僕の日常なんだもんなあ……………姫路さんが一時的に僕の家滞在することになって以来、料理をもっと美味しくする！とか言って二人して僕の家で料理の研究をやっちゃってるみたいだから……………ふっ、わかるだろう？あの二人が家にいるんだ……………僕が必然的に二人の料理を食べなきゃいけないるんだ……………

「あつ、このローストチキン、美味しいね」

「あ、ありがとう……………あの、こっちも食べる?」

「うん……………」

こっちして涙を誘うような僕の食生活を聞いた三人から憐れみの視線を受けつつ、僕は少し塩気が多い女の子の手料理を食べました……………

食事を食べ終わった後、僕らは執務室？って場所に来て一つのテーブルをはさむような形で僕は彼女達に質問されていた。

まあ、たしかに色々聞きたい事はあるだろう。見慣れない服に、僕が出した召還獣とかね。それに僕も色々聞きたいと思ってたところだし、調度いいや。」

「で、改めてあなたに関して色々聞きたい事があるんだけど……………」

「うん、僕も聞きたいことがあるんだ」

「まずは私達からよ…あなた、本当に八耀士なの？」

「はちようし？何それ？」

なんだろう、『はちようし』って？僕が首をかしげていると、フィーナがニコリと優しいげな微笑を浮かべて教えてくれた。

「八耀士ってのは、私達の世界に伝わっている伝説なんだ」

「へえ……………」

「遙か昔、人々は平穏な時を歩んでいました」

目を閉じてゆっくりと語りかけてくるようにフィーナが物語を語り始める。

「そんな人々の前に、突然魔界より現われたる『影人』が、人々の住んでいる土地を襲い始め、人と影人の戦争が始まりました」

ありきたりだなあ……………どうせこの後、人がピンチになって正義の

味方っぽい奴が現れて悪役を倒して終わり！みたいなオチなんだろうなあ……僕がそんな風に話を聞いていたら、ちよつと違う内容になってきていた。

「人が絶体絶命の危機に陥ったとき、天より七人の姫君と女神が現れ、人に魔法の叡智を授け、共に影人たちと戦い始めました。そして、とうとう彼らを魔界に追いやることができました」

「ふんふん、それでハッピーエンド？」

「ううん、ここからが重要なんだよ」

？ どういうことだろう。

「影人を魔界に追いやった女神達ですが、その力を想像以上に使い果たしており、数百年間、影人を魔界に封印するところまでしかできませんでした……」

「えっ、それじゃあ封印が解けたらどうなるの？」

「魔界から影人が現れて、世界は再び危機に陥ります……ですが、女神達は数百年後の未来に、『こことは違う世界より、自分達の力を持った八耀士が現れる』とお伝えしました……八耀士は七人の姫達が使っていた火、水、風、土、雷、光、闇の属性を。そして女神が使っていた『空』の力を持った若者達が現れるであろう……その時まで、我らはこの戦いをけして忘れずに伝え続け、いずれくるであろう、影人との戦いに備えるのでした……これで、この話はお
終い」

「ふうん……」

つまり、この物語の結末は数百年後に持ち越しで終了したということらしい。

それにしても別世界から、ねえ……いや、なんだか胡散臭い話だなあ……まあ、御伽噺なんてこんなものか。

「で、それで僕がどうして八耀士って話になるの？」

そう言うと、フィーナが僕の持っている剣を指差した。

「その剣、エデン・ヘヴンズだよね」

「えっ……」

なんで知ってるの！？そう聞く前にイレーヌが手で僕を制し、フィーナの変わりに話してくれた。

「伝承に載ってるのよ。八耀士が使う八つの武器がね…炎の籠手、イグニート・ブレア。光の杖、シャイン・フレイヤ……そして大空の剣、エデン・ヘヴンズ…つまり、あんたが持つてるその武器は八耀士が使う物の一つなのよ」

「へえ……って、えッ！！」

それって……つまり……

「多分、あんたは八耀士の一人ってことなんでしょうね。もっとも、あんた自身自覚は無いみたいだけど」

マジで？

何これ！？急に異世界に飛ばされたかと思っただけならいきなり主人公みたいな扱いにされちゃってんの、僕！？

「ふむ…伝説の八耀士もこうしてみるとワッチラとさして変わらぬようにみえるのお…」

「そりゃそうでしょ！僕、ただの学生だよ！？」

「向こうでは、でしょ？」

そう言っただけでイレーヌは僕に指をさして真剣な表情で話し始める。

「いい、あなたはこの世界では伝説の存在、八耀士の一人なの。それも上位属性である大空の力を扱える人間よ。王都のお偉方の耳に入ったりしたら問答無用であなたを戦場に送り込むために躍起になるでしょうね」

「なんだよそれ！僕はそんなの認めないぞ！！」

「認めなくても、お偉方はそんなこと関係ないわ。影人の戦争を終わらせるためなら、なんだってやるつもりなんだから」

「だからって…えっ、ちょっと待って。影人って、物語の話じゃ…」

僕がそんな風に聞くと、イレーヌとシャオは呆れたように、フィナは苦笑いを浮かべていた。？ なんてだろう。

「あのねえ…あんたは仮にも八耀士なのよ？」

「だから？」

「御伽噺の存在であるあんたがいるんだから、当然影人もいるのよ。つてか、私達が今戦っている相手つてのが、影人なの！」

「えっ……マジで？」

「マジだよ」

「マジよ」

「マジじゃよ」

その言葉に僕は啞然とした。

つまり……あれですか？僕はババアの実験に無理やり付き合わされたあげく、別世界にワープして、その影人と戦う勇者御一行みたいなことをやらされるわけですか！？

「それにしても…伝説の武器の使い手、ねえ……………」

僕が冷や汗を流していると、イレーヌが何か考え込んでいた。どうしたんだろっ？

「あっ、いえね。伝説ではそれぞれの武器を扱う人間にはこう記されているのよ」

そう言っつてイレーヌは近くの本棚から一冊の本を取り出して僕の前に出して見せてくれた……んだけど、これは……………

「何で、英語？」

「何言ってるの？あんた」

いやだって、目の前にある文章ってどれもあれですよ。僕の世界ではアメリカの人たちが使っている英語……一応、僕でもちよつとは……いや、少しは……うん、ごめんなさい。読めません。

一応、yesとか、noとかは読めるけど……他にも知らない単語ばかりで全然読めないや……

僕が苦笑いを浮かべながらパラパラとページをめくるイレーヌ。そしてあるページにたどり着くと、そこを僕に見せるように置いてくれた。

「ほら、ここ」

そう言われても読めません。……唯一読めるとしたら……

「えっと……これ……空……ごめん、後読めない」

うう、仕方ないんだよ！僕日本人だよ！ ばいおばあちゃんだ
って言ってたじゃないか！『ここは日本だから英語はいりません』
って言っていたような気がする！多分！！

「……仕方ないわね、読んであげるわよ」

「そうしてくれると助かるよ……」

「この一説なんだけど……『大空の剣振るいし者、そのもの天空のよ
うに澄み渡りしものを心に持ち、空のごとく広き懐を持つ者である』
……」

？ どういうことだろう？

そう思っていると、イレーヌがなんともいえない表情で教えてくれた。

「えっと……まあ、最初は後ろのほうから言った方がいいわね」

「えっ、普通前からじゃないの？」

僕がそう言うと、イレーヌは気まずそうに視線をそらした。何でだろう？

イレーヌは咳払いを一つすると、僕の事が書かれているであろう、文章の後ろ部分を指差して意味を教えてくださいました。

「この『空の如き広き懐』っていうのは、多分…人としての器の事を言ってるのだと思うわ」

「広き懐というのは、おそらく『優しさ』という意味が込められておるの」

「優しい心の持ち主か……なんとなくだけど、明久から優しい心を感じるよ」

「あははは、ありがとう」

フィーナが眩しい笑顔を向けて僕に嬉しい事を言ってくる。それにしても少し照れるなあ……こんな風に僕の事が伝説として語り継がれていたなんて……

なんて思ってた時だった。イレーヌがすまなさそうというか、とても言い辛そうに口を開いた。

「……………その、とりあえず言っておくわね。別に私が書いたわけじゃないの、だから私に対して怒らないでちょうだい」

「？」

なんで怒る必要があるんだろう？

僕が首をかしげていると、イレーヌはもの凄く言い辛そうに口を開いた。

「この『天空のように澄み渡りしものを心に持ち』、って文章なんだけど……………」

「あつ、うん。きつと『澄み渡った』ってのは純粋な心を持ったって意味だよな」

フィーナがまた嬉しい事を言ってくれた。

そっか……………純粋な心、か……………そんなものを持っているかどうかわかんないけど、なんだか照れるなあ……………

思わず頬が熱くなって頭をかいていると、イレーヌがため息混じりに首を横に振った。

「違うわよ……………」

「「えっ？」」

どういう事だろう？『澄み渡った』ってことは純粋、って意味じゃないの？

「私もそう思ったんだけど…あんたを見ていて気付いたわ」

大爆笑してしまいました……うう、これはこれで酷い。
僕は世界が変わっても、立ち居地はあまり変わらなかったみたい
だ……。

「明久は『語り継がれしバカ』の称号を手に入れました」

「いらん!!」

第四話 伝説と料理と変わらないもの（後書き）

吉井明久 称号 語り継がれしバカ

彼のバカはついに伝説として語り継がれていた。

「まあ、伝説と言っても不名誉以外の何物でもないがな」by雄二

明久のバカはついに伝説に……

次回は戦闘編です。どうかお楽しみに！あと、明久は『戦迅狼破』

か、『獅子戦吼』のどっちを覚えさせたらいいでしょうか？術技の

コメント、感想をお待ちしています。

第五話 会議と鼓舞とムッツリな悪友（前書き）

タイトルから想像できるように、今日は彼が登場します。

第五話 会議と鼓舞とムツツリな悪友

明久達がいるクロスオパールの街から西に十五キロ程離れた位置にある木々が生い茂る湿地帯、バロニル湿原。崖に囲まれている上、木々が生い茂っているせいか辺りは昼間だと言つのに薄暗く、また湿気が多いせいで妙な肌寒さまであった。

その中に、一人の男がいた。

そいつは暗闇に上手く紛れ込み、小柄な体を生かして狭い隙間などを潜り抜け、行く先々にうごめく魔獣の横を走りぬいていく。寒色系の髪の下から見える三白眼の目を細め、気配を感じた彼は再び動き始めた。

明久サイド

僕がある程度落ち着くまで時間をもらい、ようやく心を落ち着かせた頃は、昼がもう夜になった頃だった……。部屋のランプを灯りに、執務室では僕とフィーナとイレーヌとシャオを中心に、鎧を身に付けたいかにも『兵士』って感じの人達が目の前にいた。

その中で一番強そうな格好の人が前に出てきた。

「イレーヌ、この街に影人が近付いているってのは本当なのか？」

「ええ…残念なことだけど事実よ、ガルマンさん」

その言葉に動揺する周りの兵士の人たち。

そういえばイレーヌ、会議が始まった途端今までの…ちょっと強気そんな態度が消えて高橋先生みたいな真面目な雰囲気をもとっているなあ…こういった雰囲気慣れてるってことなのかな？

「それであなた達にやってもらいたいことなんだけど……」

なんか全然話を聞いてないというか、話を聞かされていない僕にとってはどういう事かよくわかんないんだけど………そしたら、フィーナがこっそりと僕に耳打ちしてくれた。

（あのね、私たちの街の近くに『烙印』を押された魔獣が発見されたの）

（らくいん？何、それ）

（烙印って言うのはね、影人が魔獣を操る時に自分の魔力を込めた焼印を魔獣の体に刻みつけた時にできる証のことをいうの。その烙印を押された魔獣は影人の魔力によって通常の魔獣よりもはるかに強い存在になって、影人の手下になるの）

へえ…つまり、烙印を押された魔獣は影人のペットになるのか…
…しかも普通の奴の何倍もパワーアップした奴になるなんて…なんというか、厄介だなあ。

（ちなみに、明久が倒したマーマンにも烙印があったんだよ）

（そうなの！？）

これは驚きだ。どうりで鉄人よりもタフだったわけだ。え？例えがおかしくないかって？いいんだよ、あれは人外生物みたいなもの

だから。

……って、あれ？その烙印がついた魔獣がこの近くにいたって事は……

(それって…影人が近くにいてることなんじゃないの!?)

(さっきからそう言っておるのに…主)

そう呟いて僕をジト目で見るシャオ。うっ、し、仕方ないじゃないか!!さっきまでもの凄い精神的ダメージを負っていたんだからさ!うん、これは仕方ない。仕方ないよね、ね!

「コラ明久。自分のバカさ加減を棚に上げて同意を求めてるんじゃないの」

「痛たたた!!」

呆れたような表情を浮かべて僕の耳をひっぱるイレーヌ。うう、だってアレだよ?『バカ』って伝説として語り継がれているんだよ?これは誰だって傷つくでしょ……

「はいはい、愚痴は後でフィーナが聞いてあげるから」

フィーナから「えっ?」って間の抜けたような声が聞こえたのはきつと気のせいじゃないと思う。

「でも今は目の前の問題に集中して。この作戦、私達とあなたが鍵なんだから」

「えっ?」

どういう事？僕が首をかしげていると……

「イレエヌ、そいつがお前らのいう『切り札』という男か？」

「ええ、そうよ。彼とは今日偶然出会ったのだけど、刻印付きの魔獣を一人で、それも一撃で倒す程の実力を持っているわ」

イレエヌの言葉に周りにいた兵士たちがざわりと騒ぎ始めた。

『マジかよ……』

『刻印付きの魔獣を一人で……』

『しかも一撃だと？俺達なんか五人がかりでないと戦えないっていうのに……』

そんな驚きの言葉が執務室の至る所からあがる。

「そついえば自己紹介がまだだったわよね…明久、お願いできるかしらっ。」

そう言っつてイレエヌは僕の背中を軽く押して兵士たちの前に僕を立たせた。うっ、みんなから鉄人には及ばないけど、なんだろう…強そうな気配を感じる。正直、鉄人で免疫がなかったら逃げ出していたかもしれない。

なんて考えていたらイレエヌが僕の背中に手をかけ、耳元に口を寄せてきた。

（明久、名前と名字は逆の方がいいわ。その方がみんなに伝わりや

すい)

? ああ、そうか。一応は初対面だもんね。よし、Fクラスの時と同じような要領で…っと、危ない危ない。名前は逆に言わないと

……

「コホン…えーっと、アキヒサ・ヨシイです。気軽に『アキちゃん』って呼んでくださいね」

「……………はい?」「……………」

……………あれ?なんか不評だだだだだだだだだだ!!

突然僕の背中を思いつきりつねられた。首を後ろに回すと、イレ
ーヌが「何やってんのよ!このバカ!」と言いたげな表情で僕を
見ていた。そしてすぐに呆れたような目になると、兵士たちの方に
振り向いて口を開いた。

「緊張は解けたかしら?」

「……………えっ……………」

「とりあえず、すぐにあいつが攻めてくるって訳じゃないから、この部屋にいる間は体を落ち着かせていなさい。その方が冷静に判断できるわ…ねえ、明久」

ぎりり 僕の背中の皮が思いつきりつねられた音(ねじれ+)

「うん、そうだね!みんな、影人が来るかもしれないから緊張する
のもわかるけど、冷静に、ね!」

僕の言葉を聞いて兵士の人達は戸惑いつつも、頷いてくれた。
僕は冷や汗を流しながらイレーヌに背中をつねられながら耳打ち
されていた。

（あんだバカ！？今はいつ影人がくるかわかんない状態なのよ！何
考えてんのよ！？）

（えっ、普通に自己紹介しようかと……）

（今は対影人戦の会議なのよ！？自己紹介のやり方ってものがある
でしょうが！！）

（うっ…ごめん）

どうやら僕は自己紹介で失敗したみたいだ。そりゃ僕が百%悪い
けど、僕は向こうでは普通の学生だったんだよ？こんな風に街の危
機に対しての会議なんてやったことがない。精々試召戦争で雄二達
と話すぐらいだ。

その時、今まで背中をつねっていたイレーヌが僕の肩に優しく手
を置いてくれた。

（……まあ、一応ありがとう）

（えっ？）

（偶然かどうかは分からないけど、あなたの言葉のお陰でみんなが
落ち着きを取り戻しているわ）

その言葉に僕は周りにいる人の顔を見る。

さっきまで色々と不安げだった顔の人が多かったけど、今はみんな

なで落ち着いた顔で話し合っていた。

(明久、後で作戦を言うからあなたは鼓舞をお願い)

えっ？マジで？

(ええ…どうもあなたは周りから『リーダー』みたいな感じに思われてるのよ)

嘘ッ！！ちよつと待ってよ！なんでそんな事になってるの！？いくら何でもおかしすぎない！？僕は一応よそ者だよ！？しかも世界規模の！それが何をどうなったらこうなった…
なんて思っていたらシャオが横から近づいて教えてくれた。

(そりゃそうじゃろ、刻印付きの魔獣を一人で、しかも一撃で倒した男なのじゃからな)

うっ……そういえばさっきの
鼓舞ってあれだよな？試召戦争で雄二が僕らを奮い立たせるために
言う言葉…って、それを僕がやれと！？

「会議はここまでよ。私達はこれからすぐに行動を起こすわ」

「わかった」

「明久」

イレーヌにそう言われて僕は前に出た……えーっと、どうしよう。
僕はそんなことやった事もないし、第一僕はリーダーっていう柄じやない。でもなんか期待の込められた視線が僕に集まってるし……

仕方ない！ここは『あのゲームの人』の言葉を使わせてもらおう……
僕は近くに立てかけられていた剣を手にとって引き抜いてからみ
んなに振り向いた。Fクラスの奴らに見られていると思いなから、
兵士の人達を見ながら息を吸って叫んだ。

「兵士諸君！！」

僕は出来る限り凛々しい表情を作るように努力し、あの時のあの
言葉を必死に思い出して自分なりに変えながら大声で叫ぶ。

「僕らの前には魔獣の軍勢。その背後には影人が控えている！容易
い相手だとは思わない！逃げたくなるのも無理はない！！」

僕の言葉に茶々を入れずに兵士の人達は静かに聞いてくれている。
僕は緊張しつつも、あの時の雄二になったような気分になりながら
続ける。

「だけど…思い出してほしい！僕らがなすべきことを！僕らの後ろ
にあるものを！」

そこまで言うと僕は自分の剣をかざした。ここからが重要な台詞
だ！！ちよつと台詞を変えて僕は言い放った！！

「僕らは剣士だ！その剣で大切な人達を守る剣士だ！！誰にも強制
はしない。だけでも…もし志を同じくする者がいるなら、この一戦、
共に戦おう！！」

そこまで言うと僕は剣を天井に向けて大きく掲げた。

すると、僕のように兵士の人達が同じように剣を掲げてくれた。

ようし、最後に言っておくか！

「みんな、大切な人を護れ！僕らの力を今こそ存分に發揮するんだ
ああああ
！！！！！！」

「『おおおおお』

「！！！！！！」

まるでFクラスの時のような…いや、あの時よりも凄い気合いの入った声が執務室に響き渡った。そしてドタドタと兵士のみんなは僕とフィーナ達を残して出ていった…と思ったら一人だけ戻ってきて…あれ？たしかこの人、最初にイレーヌと話していたガルマン、って人じゃなかったっけ？まだ何か用があるのかな？

「悪い、それ俺の剣だから返してくれないか？」

「あ、ごめんなさい」

そういえばこの剣って僕の持っていたエデン・ヘヴンズじゃなかったっけ…最後の方でかっこつかないなあ、僕…と思っていたけど、フィーナ達が僕の肩をポンと叩いて

「ナイスだよ、明久！」

「ええ。あなた、やるじゃない！」

「見事な鼓舞じゃったぞ！」

「あはは……そうかな？」

いや、ぶつちやけるとTOVのあの名台詞を僕なりにアレンジし

ただけなんだけどね……丸パクリはしてないけど、それでも言ってみたかった台詞なんだよね。

「さて、それじゃあ私達もいくわよ!」

? 行くつてどこに? 僕が首を傾げていると、フィーナが教えてくれた。

「これから影人のアジトに乗り込むんだよ」

「へえ……」

「へえ、じゃないわよ。あなたも一緒に行くんだから」

「え、っ!??」

マジで!??……って、そりゃそうだよなあ……あんな大見栄きった台詞を言っておいて自分だけ出ない、なんて無責任だよなあ……

「それじゃあ、作戦通りに私達『だけ』で行くわよ」

なんですと?

「えっ!??ちよつと待って!今『私達だけ』って言わなかった!??」

「ええ……そうだけど」

「それってフィーナとイレーヌとシャオだけで行くつて事!?!危なすぎるよ……!」

女の子だけで影人なんて危ない…いや、会った事はないけど危険な奴の場所に行かせるだなんて雄二じゃないんだから、そんなことさせる訳にはいかない！

「明久、一応言っておくけど…私達はこの街で一番の実力者なの」

「兵士は全員、街の防衛に専念してもらって、ワッチラ少数人数で影人と戦うのがこの街は安全なんじゃ」

「でも、女の子だけなんて…」

「何言ってるの、明久も一緒だよ？」

なんですと？

えっ、ちよつと待って？今フィーナさんなんと仰りました？僕も一緒に？えっ？何で！？WHAT!?

「いや、そこはwhyじゃないのかしら？」

知らん。そんなことはどうでもいい。重要なのは僕がどうして行くのか、ってことだ！

なんて思っていたけど、突然フィーナが僕の右手を包んで……

「ごめんね…でも、お願い明久…私達に力を貸して！」

「勝手にあなたを巻き込んだ事には申し訳ないと思ってるわ…でも私達には戦力が必要な…もう藁にもすがる思いなのよ…」

「すまぬの、主…じゃが、魔獣を一撃で倒せる主の力がどうしても必要なんじゃない！」

「みんな……」

戦った経験は…僕には無い。

ケンカや試召戦争で争った事は何度かあるけど、あれとは全く違う命がけの戦い。さっき一回やったぐらいだけど、あれはどっちかというとケンカの方に近い感じだった。そんな僕が行っても足手まといにしかならないと思う…けど。

目の前に微かに震えている両手に包まれている僕の右手を見る。多分だけど、怖いんだろうな……無理はないと思う。だって女の子なんだから、命がけの戦いが怖くないなんてありえないに決まっている。

気付いたら、僕は目の前で項垂れているフィーナの頭に手を置いていた。

「…知らないよ、僕は実戦経験なんてほとんどないよ」

「うん…」

「英語だって読めない、魔法や技だって使えない…」

「うん…」

「そんな僕でいいなら…仲間に、してくれないかな？」

そこまで言った瞬間、フィーナが頭を上げてくれた。

その顔には、微かに涙の痕があった…きっと、僕に対して申し訳

ない気持ちで一杯だったんだろうけど、でも…ね、ここまで言ってくれている彼女たちを見捨てるなんて僕にはできなかつた。

やれやれ、何をやってるんだろう…僕は。

本当ならもつと大事な事だつてあるかもしれないのに…

でも…目の前に苦しんでいる人達を見捨てるぐらいだったら、僕は手を差し伸べたい。

まったく、物語の主人公になつた訳じゃないのに…何やってるんだか…

「ありがとう…明久!!」

「えっ、うわっ!!」

突然フィーナが僕の胸に飛び込んできた。僕は突然のことだつたからそのまま床に倒れて…つて痛い!後頭部を思いつきりぶつけた

……

でも、胸に当たっている柔らかなマシユマロのような感触は嬉しいかも……

なんて思つた時だつた。

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

「……ツツ!!????」「」「」

突然天井の一部から赤い液体が噴き出してきた。何!?何事!???と思つた次の瞬間、そこからズルリと小柄な…寒色系の髪の毛に

三白眼の青白い顔をした僕と同じ文月学園の制服を着た男が執務室の床に落ちてきた。

こ、こいつは……まさか……

「な、なんじゃ？こ奴は……」

「あ、明久と同じ服を着ているわね……」

「あ……明久……？」

フィーナが僕から離れて僕の背中にくっついた……いかんいかん、落ちつけ！煩惱退散！！今は……目の前にいる……

「大丈夫、ムツツリーニ？」

「……あ……明久……」

震えている手で僕にデジカメを手渡すムツツリーニ。

「……青と白……撮れた……俺の代わりに……（ガクッ）」

「ムツツリーニイイイ

！……！！」

慌ててムツツリーニに駆け寄る僕。後ろにいたフィーナからキヤツと言う声が聞こえたけど……ごめん、今はこっちの方が重要だ！

何！？青と白って何！？一体何を見たって言うのさ！！ムツツリーニ……！！

「ちょ、ちょっと明久、そいつ大丈夫なの！？」

第五話 会議と鼓舞とムツツリな悪友（後書き）

明久称号 『パクリ野郎』 たとえパクっていても知らぬが仏、カッコよければそれでよし！向こうで中二病だなんだと言われてもここでは関係ないので。

ムツツリー二称号 『ムツツリスケベ』 必死に否定していても最早みんなが知っている事。それでも彼は否定する。そんなあなたに送ります。『……………いらん！』

はい、と言うわけでムツツリー二君登場！バカテスの中では好きなキャラなので、早めに登場させたかったので登場させちゃいました！

今回明久がやった鼓舞ですが、これは私が敬愛する『和尚様』の作品、『バカとキセキと恋姫無双』という作品で明久がやっていたのを思い出し、明久にやらせてみたいと思って今回、勝手にやっしまいました。

軽い罪悪感がありますけどね……

さて、次回はいよいよ対影人戦です！なんかバトル編と言っておいでバトルが始まってませんが、次回からようやくバトルが始まります！！では、どうかお楽しみに！！ 術技のコメント、お待ちしております！！

第六話 鼻血と闇の刀と共鳴技（前書き）

今回はムツリーニの初陣です！！ついでに後書きで明久達の現段階の術技について掲載しておきます。

第六話 鼻血と闇の刀と共鳴技

「えっと、この人は明久の友達……なんだよね」

「（コク）……………土屋康太」

鼻にティッシュを詰めたムツツリーニが三人に自己紹介をする。

「僕は寡黙なる性識者^{ムツツリーニ}って呼んでるけどね」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニがいつものように否定するけど、三人にはもうこいつがエッチだと言う事は知っているだろう。

「そっか…私はフィーナ・エルセレット」

「ワッチはシャオ・ムウランじゃ」

「イレエヌ・セレスティよ、よろしく」

修羅場から、少したった後のこと。

僕達は執務室に突然現れた悪友、土屋康太ことムツツリーニに救命措置を施し、更に回復術をかけて復活したムツツリーニを囲んで僕達は互いに自己紹介をしていた。

「……………明久、これはどういう状況？」

ムツツリーニが僕にそう言ってくる。

「いや、それは僕が聞きたいよ。どうしてムツツリーニがここにいるのさ?」

「……………この街に入った時、俺と同じ服を着た人間がいたと聞いて」

なるほど、それでこの屋敷に侵入したと…いや、それはそれでおかしいぞ。

「普通にきなよ、ムツツリーニ。突然の事で驚いちゃったじゃないか」

「そうよ、いきなり天井から血が噴き出すからおば…なんでもないわ」

おば?今イレーヌは何て言おうとしたんだろう?まっ、いつか。

まあ、ムツツリーニもいきなり異世界に飛ばされて動揺したんだろうし、僕だってあまり自分の現状がよく分かってないんだし…正常な判断ができなくて仕方ないか。でも僕は気になったのでちょっと聞いてみる事にした。

「ムツツリーニ、どうして天井なんかにいたの?」

「……………胸の谷間を見たくて……………なんでもない」

……………こいつは異世界に来てても変わってないようだ。

ムツツリーニの言葉に反応してフィーナとイレーヌが胸を隠す動作をしている…と思ったらシャオがニヤニヤしながらムツツリーニに近づき始めた。

「まったく…思った以上の時間をくつたわ」

「すまぬのう。こういう男を見るとからかいたくなるのじゃ」

「もう、シャオってば……」

再び蘇ったムツツリーニと僕は、フィーナ達と一緒にだだっ広い夜の草原を馬で駆けていた。

僕は影人のアジトを直接叩くために、街を馬で出発してから二時間くらい経っていた。僕達は今、イレーヌに作戦の説明を受けている。

「いい、私達は今から影人のアジトに向かうわ」

「場所は魔獣が来る方向から予測してあるから、大まかな位置は目的の場所に行つてからになるんだ」

なるほど、RPGでもダンジョンに入ってからボスの場所に向かうつてというのが基本だもんなあ…ちなみにムツツリーニには影人うんぬんの話は既に伝えている。その後にムツツリーニが『俺も着いていく』と言つて、僕らと一緒に来てくれている。ムツツリーニの実力はよく知ってるし、情報収集ならムツツリーニの左に出る奴なんていない！僕らも快く了承した。

……えっ、左じゃなくて右だつて？知らん。

まあ…それはいいんだけど………（グラリ）おっと！

「明久、大丈夫？」

「う、うん……」

フィーナの腰に手を回して僕は緊張しながら応える。

僕とムツリーニは馬に乗った経験がないから、必然的に誰かの後ろに乗る羽目になるんだけど……どの女の子もスタイルは良いし、可愛い……で、悩んだ挙句僕はフィーナに、ムツリーニはシャオの後ろに乗る事になったんだけど……

「おやおや、主。大丈夫かえ？」

「……………無論だ（ボタボタボタ）」

シャオの後ろの方でムツリーニが鼻血を流しているのが手に取るようにわかる。僕だってフィーナみたいな子にずとくっ付いているせいか、鼻の先がさつきから熱い。それにシャオは丈が短めの上着に胸に布を巻いただけのようなへそ出しスタイルに、短めのスパッツをはいているだけだ。最初にシャオを見た時だって鼻血を噴き出していたからなあ……今は多少慣れているんだろうけど、それを至近距離から見ているんじゃムツリーニの体力は毒の沼地を歩くよりも早く減っていくに違いない。

「……………これは乗り物酔い（ボタボタボタ）」

「ひゃっひゃっひゃ、体は正直な奴じゃのう、主」

「……………意味不明。（ボタタタ）」

ムツリーニ、君が乗っている馬が心なしか嫌そうな顔になってるよ？

なんて思っていた時、僕たちの乗っていた馬がちょっと揺れ（むにゅん）「ひゃわっ」ふおおおお！！今の何！？腕になんか魅惑的

「いつもの事って……」

あれ？なぜかフィーナが僕の言葉に苦笑いを浮かべているぞ？どうしてだろう。

イレーヌがやれやれと言いつつ、近くから木の枝を集めて手のひらから炎を出して枝を燃やして焚火をしてくれた。

「ついでだから、ここら辺で明久に戦い方でも教えておくわ」

「僕に？」

ええ、と言ってイレーヌは懐から紫色のビンを取り出した。……

……あの、それってもしかしますけど……

「ダークボトル？」

「良く知ってるわね。その通り、よー！」

そう言ってイレーヌはビンの蓋を開けて数滴、辺りにばらまいた……って何やってんの！？

「ちよっ！それ使ったら魔獣が寄ってきて……」

「数滴なんだから近くの魔獣しかこないわよ………あっ、もう来たわよ」

「げっ！！」

僕たちの前に狼の魔獣、ウルフが三体と、斧みたいな嘴を持った

アックスビーク…だっけか？そんな名前のモンスターが僕らの前に現れた。…ってヤバくない、コレ！？？

「明久、剣を抜きなさい！」

「あつ、うん！」

言われて僕はすぐにエデン・ヘヴンズを腰に下げた鞘から引き抜く。

「今回は私達は見ていただけよ…危なくなったらフォローするけど、基本一人で戦いなさい！」

「りよ、了解！」

改めて『本物』の魔獣と目の前から対峙してみ分分かる。もの凄い威圧感が、僕らを殺そうとする殺意が……どれも鉄人程じゃないけどね。でも鉄人には威圧感があっても『殺意』は無かった。肌に刺さるような冷たい感覚が僕の体にビリビリと伝わってくる。

一歩下がって僕は近くにいるムッツリーニに目で合図を送る。

(ムッツリーニ、僕が魔獣を抑えておくから、イレーヌを頼むよ)

視線だけで会話しながら、僕は目の前に牙を立てて襲い掛かってくるウルフの攻撃をエデン・ヘヴンズを使って防ぐ…ぐっ、鉄人程じゃないけど、重い……！！

「……………明久、大丈夫か？」

ムッツリーニの声を聞きながら僕はウルフを弾き飛ばす。

「一度この世界では戦ってるからね…なんとかなると思う。それより下がってた方がいいよ、ムッツリー二には武器が無いんだからしようがないよ」

「……………っ!?!」

「どうしたの!?!ムッツリー二…!」

突然ムッツリー二から驚きの声が出た瞬間、ムッツリー二は…自分、無意識のうちに目の前にスツと手をかざした。すると、ムッツリー二の足元の地面から…いや、影の中からヒュン!と一振りの黒い刀身を持った刀が出てきた。

ムッツリー二はそれを逆手に持つと、その刀の名前を呟いた。

「……………ジ・ダークナイト」

「……………ムッツリー二…君も八耀士だった「明久!危ない!!」っ!」

驚きのあまり僕は思わず止まってしまった。その瞬間、僕は後悔した。殺気に気付き、慌てて振り返った時にはもう既にアックスビークの斧の嘴が僕に迫って来ていた。

くそ! Fクラスで散々身に染みていた経験だったっていうのに! 今から間に合うか…と僕が苦し紛れに剣を構えた瞬間だった。

「……………陽炎」

突然目の前にムッツリー二が現れ、真下に向かって一直線に刀をアックスビークの体に突き刺していた。

た、助かった…けど。

「む、ムッツリーニ！？今、君技を…」

「……………明久、目の前に集中」

言われて僕は目の前にまだ三体残っているウルフに視線を向ける。そうだ、ムッツリーニの言うとおりだ…今は命がけの戦いをやっている最中。Fクラスの連中に追われているつもりになるんだ…集中集中……………

その時、僕の頭の中に数個の術技が浮かび上がった。

(これって……………もしかして、エデン・ヘヴンズが教えてくれた？)

今まで僕の頭の中に色々な事を教えてくれたのは、このエデン・ヘヴンズを持った時だった。……………という事は、ムッツリーニも自分の武器に技の出し方を教えてもらった…って言う事なのかな？

……………っと、危ない危ない。目の前に集中しなきゃ。

「ムッツリーニ、背中には任せるよ」

「……………任せる」

よし…戦闘開始だ。

僕は近づいてきたウルフの牙での攻撃を避ける。フツ、こんな攻撃、鉄人の攻撃と比べれば止まったも同然だ！！

僕は剣を地面に擦るように横に振るう。地面に剣がぶつかった瞬間、剣の先から衝撃波がウルフに向かって飛んだ！

「魔神剣!!」

僕の放った魔神剣はウルフに見事に直撃する!そのままウルフは「ギャン!」という悲鳴を上げてどこかに飛んでいく。よし、まずは一匹だ!!

「……………飯綱落とし」

隣でムツツリーニの静かな声が響く。

ムツツリーニに向かって突進していたウルフの攻撃が、ムツツリーニにぶつかった瞬間、ムツツリーニの姿が掻き消える。まさか…残像!?なんて速さなんだ!そのままムツツリーニは空中で回転しながら真下にいるウルフを切り刻んだ。

いいぞ、だんだん僕達は戦うのに慣れてきたような感じがした。

僕とムツツリーニは最後の一匹に向き直って、一気に接近すると僕達はそれぞれの獲物を手にしてそれぞれの技を放った。

「崩襲脚!!」

僕の空中からの強烈な飛び蹴りと……

「……………焰」

ムツツリーニが突き刺した地面から噴き出す炎の技が……

共鳴…した!!

「紅蓮襲撃!!!」

僕がウルフに向かって飛び蹴りをぶつけた瞬間、僕の周囲が勢いよく炎が噴き出し、ウルフは炎に包まれてそのまま倒れた。

「……………」

僕達は自分が今起こした事に啞然としていた。

えっ…………？何これ！？さっきは勢いで使っちゃったけど、なんとんでも無い事しちゃったような気がする…………

「む、ムツツリーニ…今、何したの？」

「……………お前こそ」

僕達はお互いに訳が分からないまま、首を傾げた。
その時だった。

「きゃあああああ

!!!」

「!!!」

今の…フィーナの悲鳴!?

僕達は一斉に駆けだして悲鳴が聞こえた方へと向かう。

「フィーナ!!!」

僕らから少し遠くに離れた位置に地面に座っているフィーナと、大きな紫色の毛皮を持った熊の魔獣がいた。

あれってもしかしてエッグベアって奴か！リアルで見ると本当に大きいんだなあ…なんて言ってる場合じゃない！

シャオとイレーヌは他にも襲い掛かってくる魔獣に苦戦しているみたいだし…フィーナは…右足から血が流れていた…きっと魔獣の攻撃を受けて怪我しているんだ…

彼女の前にエッグベアがその丸太みたいな巨大な腕を…くそっ！もつと速く…風のように走れ！！！！

そう思った瞬間、僕の持っていたエデン・ヘヴンズの宝玉が光を放って、僕の周りに若草色のオーラをまとわせた。

「これって…あの時の…って、うわぁ!？」

ギョーン！！

突然僕の走っているスピードが上がって、一気にフィーナとエッグベアの間に入った。そのままエッグベアから振り下ろされる腕の一撃を剣をかざして受け止める…ぐう、さすがにこれは重いなあ…日頃鉄人の攻撃をくらっついていなかったら間違いないと沈んでいたと思う。エッグベアの腕を押し返し、僕は剣を構える。

よし…このまま一気に仕留めてやる！！

「だああああああらっしやあああ

！！！！！！」

剣を下から上へ斬り上げて、僕はそこから体重を乗せて一気に振り下ろす。

斬!!!!

「虎牙破斬!!!」

僕の虎牙破斬をくらったエッグベアは頭から血を噴き出し、大字になって地面にぶっ倒れた。

僕は剣を鞘に収めると、そのままフィーナに振り向いて出来る限りの笑顔を作る。

……………なぜかって？それはね、正直怖かったからだ！こう見えて結構ガクふるなんだ。いくらFクラスの連中から殺気と怒号が込められた命がけの追いかけてここが常日頃だからといっても結構怖かった…

それでも、僕はなぜか笑顔を作ってフィーナに手を差し伸べていた。

ぶっちゃけると見栄以外の何物でもないんだけど、仲間に関心はかけられないし、ね。

「大丈夫、フィーナ？」

「あつ……………うん。ありがとう、明久……………」

どうしたんだろう？フィーナの顔がなんだか赤い気がするけど…まあ、焚き木の火の近くだし、僕の見間違いだよね。

「……………またか、お前」

ムツツリー二の意味の分からない言葉が後ろから響いてきたのが気になったけど、僕はようやく終わった戦闘に今はただただホッとしたかった。

明久は『フラグファイター』の称号を手に入れました。
フィーナは『初恋少女』の称号を手に入れました。
ムッツリーニは『鼻血MAN』の称号を手に入れました。

第六話 鼻血と闇の刀と共鳴技（後書き）

明久 称号『フラグファイター』 誰にでも手を貸し、誰にでも優しく接する！そんなあなたはいつの間にか女の子に好かれてしまう…けれどその気持ちには気付かない！そんなバカに送る称号。

フィーナ 称号『初恋少女』 『えっと…あの時は足を怪我してて回復術を使う暇もなく魔獣が目の前に現れて…もうダメだ！って思った時に彼が助けてくれて…そして笑顔を見せて…』 初めて恋をした少女に送る称号。

ムツツリーニ 称号『鼻血MAN』 否定していても体は正直！純真なるエロ心を持った少年に送る称号。

明久『術技』 魔神剣 崩襲脚 虎牙破斬

ムツツリーニ 『術技』 焰 飯綱落とし 陽炎

明久・ムツツリーニ 共鳴術 崩襲脚×焰 紅蓮襲撃

今回出した共鳴術ですが、TOXのPV見ててやってみたいな〜と思って即興で作ってみた技です。他にも考えていますが、皆様からのコメントもお待ちしております！！

さて、今回は前半はギャグで後半はバトルだったんですが…展開が難しい！次回は影人との戦いだと言うのに大丈夫なのでしょうか、軽く心配です。

では、次回をお楽しみに！！

第七話 沼地と泥の影人と作戦勝ち（前書き）

いよいよ影人戦です！ たった一話ですけど、お楽しみください！！

第七話 沼地と泥の影人と作戦勝ち

「ファーストエイド」

フィーナの手のひらから優しい光が傷ついた彼女の足に降り注がれる。その光が触れた場所から、傷がどんどん治っていき、完全に治った後、フィーナは笑顔で立ちあがった。

「復活！」

そう言っただけでフィーナはVサイン。

うんうん、良かった。女の子が怪我をしたままなんて可哀想だね。

そして……

「…………… ナイス笑顔（パシャパシャパシャ！）」

お前はどこでもそれが、まったくちよつとは空気を読んで欲しいよね。

なんて思った時だった、イレーヌが立ち上がって突然頭を下げてきた。

「……………ごめんなさい、フィーナ」

「どうしたの？イレーヌ」

「…明久達に戦闘経験を身につけようと私がダークボトルを使ったから……それで、あなたが死にそうになって…明久もごめんなさい」

「大丈夫だよ、油断した私も悪いんだし」

「そつだよ、それにピンチになったらフォローするのが仲間でしょ？」

僕はそうやって笑顔で応える。どうやらイレーヌは自分がダークボトルを使ったせいで仲間がピンチになったという事に責任を感じているみたいだ。……なんていうか、責任感が強い女の子なんだな。

「……ありがとう、二人とも」

そう言って笑顔を浮かべるイレーヌ……うわぁ、なんていうか……凄い綺麗な笑顔だ。なんていうか……大人っぽいというか、そんな感じの笑顔を浮かべていた。目元の涙を拭っている姿がまた綺麗で僕は思わず笑みを浮かべてしまう。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

お前はこつこつくらいシャッターを切ることを忘れる。

「……………一枚三百円」

「二枚セットで買った。まったく、ムツツリーニはもうちょっと空気を読みなよ」

「ちゃっかり注文しているあなたが言う？」

………なんのことやら。そういう僕の手にはムツツリーニがおそらく執務室の天井からとったであろう、彼女たちの胸の谷間写真がそ

の手の中に数枚あった。……うん、眼福だ。と思ったと同時にちよつと疑問を抱いた。

いつプリントアウトしたんだろうか、そもそもどうやってプリントアウトしたんだろう？……と思つたら、なんか目の前でノートパソコンをカタカタ打っていた。

むっ、今の画像は……

「ムツツリーニ、あとでその写真ちようだい……っていうか、ノートパソコンってこんな場所でも使えるの？」

「……………（コクリ）電池さえあれば、基本的にどこでも使える」

「あつ、そつか。携帯と一緒に……でも電池が無くなつたら終わりでしょう？」

そつ言つて僕はブレザーのポケットから携帯を取り出す。

………そついえばあれから結構時間経つちやつたし、そろそろ電池が一つ減つてもおかしくは………あれ？

「電池が……減つてない？それに………」

僕は左上に光っているアンテナのマークを見て驚いていた。

そこはさつき見た時は圏外と表示されていたのに、今はアンテナが三本しっかり立っていた。どうなつてるの？

「……………明久、どうした？」

「あつ、うん。アンテナが立っているんだ……ちよつと雄二達と連絡してみるよ」

そう思って僕は登録してある雄二達の番号に片っ端からかけてみた。

でも……

『おかけになつた電話は、現在電波の届かない所にいるか、電源が入っていないため、かかりません』

さつきからこの言葉ばかりだった。

はあ……と僕はため息を吐いて携帯電話を閉じてポケットに入れる。アンテナが立ったのはよかったけど、つながらないんじゃない意味が無いじゃないか……ムツツリーニは携帯持ってないし。

「明久、さつきから何やってんの？」

「何やらさつきから小さな箱をいじっておるが……」

僕らを怪訝そうな顔で見るフィーナ達。

あつ、そうか。僕らにとって当たり前の物だけど、この中世？みたいな世界の彼女達にとっては携帯電話やノートパソコンとかはオーバーテクノロジーなんだっけ。

「明久達の世界の道具なのかしら？」

「うん……まあ、そうなんだけどね」

イレーヌの言葉に曖昧に答えながら僕は携帯電話をポケットにしまい、ふと僕はさつきムツツリーニと一緒に使った術技の事を思い出した。

「ねえ、さつき僕とムツツリー二が戦いの最中にノリで使った合体技があるんだけど、あれって何なの？」

その言葉にイレーヌはギョツと目を見開いた。えっ、何？

「……………あなた達…リンクアーツ共鳴術技を使ったの!？」

「リンクアーツ共鳴術技?」「」

それって確か、TOXに付いている新システムだったけかな?たしかリンクでつながっているパートナー同士がゲージを溜めて特定の術技を発動させると合体技が出せる…っていうアレか。えっ!?!マジで!?!それを僕やつちゃったって訳!?!

「リンクアーツ共鳴術技は強い絆で結ばれた者同士でなければ発動できないものよ…それをたった二度めの戦闘で使うなんて……………」

信じられない、とでも言いたそうなイレーヌの表情。

僕だつて正直自分のやった事に未だに驚いている。なんとというか、ムツツリー二と僕が技を出した瞬間、体が『こう動けー!』って勝手に動いてほとんど無意識のうちに発動させたようなものだし。あつ、そつだ。

「ねえ、次はイレーヌ達とできないかなあ?」

「どづかしら?正直言って、自信ないわ。戦闘でほとんどぶっつけ本番にやれ、といっているようなものだから」

「実際にやってみないとわかんないよね」

「そうじゃのう、ワッチらも最近になってできるようになったばかりじゃし」

三人とも苦笑しながらそう言う。

なるほど、どうやらこの共鳴術技リンクアーツというものはかなり難しい技みたいだ。それを僕とムツツリー二は無意識のうちに発動させたのか……ちよっとだけ嬉しいと思ったのは秘密ね。

それから馬に乗りながら目的の場所に行くまで、僕達はそれなりの数の戦闘を繰り返した。きっとゲームとかだとレベルが1か2くらい上がったに違いない。でも残念な事に、この世界はゲームじゃない。敵から攻撃を受ければ服は破れるし怪我もする。下手をすればそのまま死んじゃうことだってある。僕とムツツリー二も最初の方だけは調子に乗っていたけど、度重なる戦闘で怪我をする方が多くなってきた。制服も攻撃を受けたりして結構あちこちボロボロになってきていた。帰ったら直さないとなあ……

「……………無事に帰れたらの話」

ムツツリー二がそう言って不安になるような事を言ってくる。たしかにそうだけど、何もこんな状況で言わなくても……

僕達は今、モンハンとかで出てきそうな沼地にいる。周りは薄暗い霧に包まれていて、あちこちに水たまりや、腐った木々、カビの生えた地面とか、とにかくジメジメとした環境だった。

僕に気を使ってくれたのか、馬に乗れない僕を後ろに乗せている

(まだ恥ずかしいけどね) フィーナが僕に振りかえって話しかけてくれた。

「明久、大丈夫?」

「無理はしないで。いざという時はフォローするわ」

「ありがとう、二人とも」

まあ、普段からFFF団の連中に四六時中追われている時と比べればそれなりに楽しただけだね。そしてフィーナはムツツリー二の方にも視線を向けた。

「ムツツリー二さんも無理はしないでくださいね」

ズルウ!!!

あつ、ムツツリー二が落馬した。泥の中に頭を突っ込み、そのままつっつーと地面を滑って木にぶつかってようやく止まった。僕達は地面にギャグ漫画のようなずっこけをしたムツツリー二に駆け寄った。

「……………なんだか…本名が薄れてきた」

ドンマイ、ムツツリー二。けれどフォローはできないよ。だって落馬しながらデジカメを構えて馬に乗っている三人の写真を撮ってるんだから…あとでその写真をくれるように交渉しないと。……あ、そういえば聞いてなかったっけ。

「ねえ、イレーヌ」

「何？」

「ムツツリーニの武器、ジ・ダークナイトって言うんだけどさ、あれの伝説ってどうなの？」

僕はこの世界に来て大空の剣、エデン・ヘヴンズを手に入れた…のは良いんだけど、その使い手、つまり僕について記されていたのはバカという不名誉極まりないことが書かれていた。僕がこんなのなら、ムツツリーニにはいったい何が書かれているっていうんだ。僕の突然の質問にイレーヌは唇に人差し指を当てて「うん」としばらく考えていた。何と言うか、考える仕草まで綺麗なんだな。

「って、痛っ」

と黙っていたら突然フィーナに足をつねられた。なぜに!? なんて女の子を綺麗だ、可愛いだ、なんて思った途端毎度毎度僕はこんな目にあうのさ!? 僕の周りの女の子はエスパーばかりか!??

「……ばか」

「ふい、フィーナ? どうしたの!??」

なぜかフィーナは頬を膨らませて怒っていた。普段美波や姫路さんから受ける関節技やプロレス技やどこから取り出したのか不明な拷問器具による制裁と比べればとても可愛らしいものだけど、相変わらず訳が分からない! 僕が何をしたらって言うのさあ!!

「あっ、思い出した」

と、僕が訳の分からない攻撃（珍しく可愛らしい感じの）を受けた数分後、イレレーヌがさつき僕が質問した伝説の一文を思い出してくれたみたいだ。

「たしか…『闇の中に常に潜み、己の欲に忠実に生きるが純なる心を持つ者』だったような気がするわ」

なるほど、つまりは……

「ムツツリスケベだっということだね（よね）（じゃな）」「」

「不名誉な！！」（ブンブン）」

どうやら僕とイレレーヌとシャオの三人で同じ答えに行き着いたらしい。それを必死に否定するムツツリーニ。

いや、ムツツリーニ？今更否定されても、もう手遅れだと思うよ。多分ムツツリーニが最初にフィーナ達と出会った時から君がスケベだと言う事はもう知ってると思うから。

それにしても、僕はこの世界では『バカ』として語られていて、ムツツリーニは『ムツツリスケベ』と伝説として語られているんだな……そうなると、他のみんなはどんな風に語られているんだろう？

なんて考えてた時だった。僕の前で馬の手綱を握っているフィーナがくすくすと笑っていた。何も笑わなくても…これでも僕らにとっては結構深刻な問題なんだよ？と思っただけじゃなくてイレレーヌもシャオも同じように笑っていた。まったく、三人とも酷いなあ…そりゃムツツリーニのエロは隠しようもない事実だけどそこまで笑わなくても。

「……………お前のバカもな」

失敬な。少なくとも雄二程じゃないよ。まったく、なんだって異世界に来てまでバカ呼ばわりされないといけないんだか。バカは雄二だけで充分だよ……………でも。

その笑顔を見ていたら、いつの間にか僕も笑顔になった。

さつきまで周りに注意しながら沼地なんて言う不気味な場所を歩いてきたから、体がいつの間にか緊張して固まっていたけど、みんなの笑顔を見たらその妙な力も体から多少抜けたみたいだ。体に力を入れすぎたら疲れちゃうもんね。いやあ、助かったなあ。体から無駄な力が抜けて頭が冴えてきたみたいだ。

「……………明久」

「うん」

本当に助かったよ。

こいつの気配にいち早く気づけたんだからね。

僕とムツツリー二は馬から飛び降り、それぞれの獲物を手にする。そして僕はそいつがいる木に向かって魔神剣の衝撃波を放った。

バキイ！！

木が盛大な音を立てて崩れ落ちていくが、そいつは特に慌てた様子も無く、地面に降りてきた。地面に降りてきたそいつは一言で言う、人の体の代わりに、泥の体で出来た

デブだった。

「…よく気付いたものだな。人間にしてはやるではないか」

「そう、別に大したことないよ？」

「……………この程度、造作もない」

僕らFクラスは他人のわずかな気配や行動などを感知して行動できる。そうでもしないと鉄人の鬼の補習から逃げられないからだ。最近僕らがこういったスキルを持っているのを知ったせい、鉄人は僕達に隙を見せないようにしている。……新しいスキルを考え付かないといけないかもしれない。

「明久、ムツツリー二さん！」

「二人とも大丈夫かえ！？」

後ろからフィーナとシャオの音が響く。

フィーナは僕より後ろに、イレーヌはさらに後ろ、そして僕とムツツリー二とシャオは目の前のデブに対峙するように構える。これは僕らが馬で歩いている最中に決めた陣形だ。物理攻撃を専門とする僕とシャオ、敵の不意を突くように動くムツツリー二は前に、フィーナは僕らの援護と、隙を見て敵に攻撃を仕掛ける為に僕らとイレーヌに挟まれるような形に、そして魔術主体のイレーヌは一番最後尾になった。

「うっ……………」

フィーナが目の前にいる影人の迫力に怯んだのか、声を漏らした。

何だと！？なんて奴だ！自分でムツツリーニを殺っておいて、罪の意識すらないと言うのか！？影人って奴はみんなこんなものばかりなのか…おのれ、許さないぞ…！みれば、フィーナとシャオもムツツリーニがやられた事に怒っていた。ありがとう、僕の悪友のために怒ってくれて……

「フィーナ、ムツツリーニを頼むよ！イレーヌ、シャオ、僕らでムツツリーニの仇をとろう！！」

「任せて！ムツツリーニさん、大丈夫ですか！？」

「…え、ええ」

「うむ、承知じゃ！！」

三人の言葉を背中浴び、僕は左手にあるエデン・ヘヴンズを強く握りしめた。この泥デブ野郎、ムツツリーニの仇は必ずとってやる！！

「……………勝手に殺すな」

後ろで息も絶え絶えなムツツリーニのツッコミが聞こえた。

いや、ぶつちやけほとんど勢いで言っただけだね。でも安心しろムツツリーニ。お前の出番は最後の方に取っておくさ！

僕とシャオはヴェロシユに向かって走り出す。

「行くぞ！虎牙破斬！！」

「幻竜拳！！」

僕の斬り下ろしから斬り上げの二段攻撃とシャオの連続パンチがヴェロシユに向かつて放った…瞬間、僕らの前から泥が盛り上がり、僕とシャオを弾き飛ばした。

「うわっ！！」

「がふっ！！」

な、なんだ、今の！？泥が突然僕らの方に…見れば、ヴェロシユは泥を自分の右手にくっ付けて大きな籠手のような物を作り出していた。

「ふん、ガキ共が調子に乗るな」

そう言つてヴェロシユは籠手が付いていない方の手でパチンと指を鳴らした。

瞬間、辺りから額に刻印を付けたウルフやマーマンが姿を現した。

「くっ、卑怯だぞ！この泥野郎！！」

「はん！貴様、勝てば官軍という言葉を知らんのか？」

「知らん！！」

そんな難しい言葉を僕が知ってる訳ないだろうが！！

「堂々と言つものでもないだろうが！？」

ヴェロシユが驚いたように目を見開いてツッコミを入れてくるけど無視する。今は辺りにいる魔獣をどうにかしないと……待てよ、

たしかこの辺りには……僕は辺りを見渡す。そこには水気をたっぷり吸った泥の地面と、湿った木が点々とあるだけ。

さてよ……あれなら……よし、これでいこう!!

僕はヴェロシユに向かって剣を突きつけ、大きな声で叫ぶ。

「ヴェロシユ！お前が卑怯な手でくるといふのなら、僕達はそれを真正面からブチ壊してやるさ!!」

「ふん、ほざいている」

僕はニヤリと笑いながら剣を地面に向かって振り下ろした。

瞬間、目の前に大量に泥飛沫が上がって僕とヴェロシユの間に一瞬だけ壁を作った。

「もんどりゃあああああああああ!!」

僕は泥の壁に突っ込んで行く。泥が顔や服に付いたりしたけど、そんなのはいつもの事なので気にせずヴェロシユに向かって剣を振り下ろす。

「爆砕陣!!」

剣を地面に叩きつけた瞬間、僕の正面に小さな爆発が起きる。ヴェロシユはとっさに籠手を構えて防いだけど、その籠手の表面がうつすらと焦げた。くう、爆砕陣って結構腕にくるものなんだなあ。なんて思った時、ヴェロシユが僕に向かって左腕で殴りかかるところだった。

「なんの！」

「だけど僕はそれを首をひねってかわす。結構ギリギリだったけど、なんとかかわせ…」

「がつ！？」

僕の腹に突然走る痛み。

「見ると、ヴェロシユが僕の腹に蹴りを叩きこんでいた…ぐっ、さっきのはフェイントだったのか！？僕は蹴りの勢いに負け、泥の地面を転がる。」

「明久！おのれ影人おおお！！」

「シャオが叫びながらヴェロシユに向かって走っていく。シャオが腰の回転を使ってヴェロシユにパンチを繰り出すけど、その攻撃は容易く防がれてしまい、すぐ近くにいた魔獣の的になってしまった。僕は痛みこらえて立ち上がり、シャオと魔獣の間に割って入った。」

「シャオ、大丈夫…！？」

「すまぬ、明久！」

「どうやら無事みたいだ。ホッとすると同時に僕はタイミングを見計らってもう一度爆砕陣を放った。…これで、どうだ！？」

「二人とも、どいて！風よ、己が道を阻むものを薙ぎ倒せ…エアブレイド！！」

「イレーヌの声が響き、僕とシャオはとっさに横に飛ぶ。」

そして、一秒もしない間に風の壁が泥や土を舞い上がらせながら僕らのすぐ横を通り過ぎた。

「ぬぐうおおおおあああああああああ！！！！」

ヴェロシユが悲鳴をあげて吹っ飛んだ。そのまま岩の壁に激突！凄い威力だなあ、エアブレイド。さすがのヴェロシユも今の風の刃は防げなかったみたいだ。泥の籠手にヒビが入っていた。そして僕も今の悲鳴の間に作業を終わらせておく。

やった、場所も調度いい！このまま一気にアレを……なんて思ってた時、僕の真横にウルフが近付いていた。

くっ、しまった！最後の最後に油断した……僕はとっさに右手で顔を抑えてガードしようとした瞬間。

「レイトラスト！」

「……………雷電」

ヒュン！ドガシャーーン！！

僕を襲おうとしていたウルフは、突然横から飛んできた金色の軌跡に弾かれて、その後に着てきた刀に体を貫かれ、その刀に向かって空から青い雷が落ちてきてウルフに電撃を浴びせた。

今のって……もしかして。

「フィーナ！ムツツリーニ！」

「大丈夫、明久？」

「……………油断大敵」

ありがとう、二人とも！ナイスタイミングで戻ってきてくれたよ！！でもその鼻に詰めた鼻血止めが無かったらカッコ良かったのに！残念、ムッツリーニ。

「さて、そろそろトドメといくぞ…ヴェロシユ…！」

「ぐっ…なめるな、人間風情が…！」

そう言っただけで起き上がってくるヴェロシユ。用心してか、周りに自分の配下の魔獣を集めてきた。きつと盾にでもするつもりなんだろう。やる事が泥なだけに汚いなあ。

でも、ね。

「みんな、いったん下がるよ…！」

「えっ？なんでよ、明久!？」

「いいからいいから」

怪訝そうな顔になりつつも、僕の言葉に従ってくれるみんな。よし、この辺りでいいかな？

「だああああああああらっしやあああああああああああああああああああああああ……！」

僕は全身に渾身の力を込めて持ち上げた。

今までこつそりと作業をさせていた召喚獣で、この辺りにある一番大きな大木を。

「……………はっ？」

ヴェロシユが驚いたような表情で僕の召喚獣が持ち上げている大きな大木を見ていた。まあ、そりゃそうだろうね。あんな小さな体で自分の体の何十倍もある大きな大木を持ち上げているんだもんね……………結構、僕にもフィードバックで重さが伝わってくるけど、どうってことない。

……………実はヴェロシユに剣を突きつけたあの時、僕は召喚獣を召喚するキーワード『試験召喚^{サモン}』を言っていたんだ。

『僕は真正面から壊してやるさ！！』

の後。

『もんどりゃああああああああ』

って、僕は言った。これは一度ババアの試運転に付き合わされた時に身に付けた教訓だ。

『壊してやるさ』『もんどりゃあ……………やるさ』『もん』『……………』さもん』『試験召喚^{サモン}』ってね。

そして僕がやたら爆砕陣を使ったのにも理由がある。爆砕陣は使った瞬間、爆発を起こすから、目隠しと大きな音で召喚獣が木の根を壊している音を隠すのもってこいの技なんだ。

僕の作戦は見事に成功！後は…わかるよね？

「くたばれデブ野郎おおおおお」

「！！！！！」

僕は召喚獣に大木を思いっきり投げつけるように指示を出す。僕の召喚獣は綺麗なスローイングフォームを取ると、勢いよく大木をヴェロシユに向かって投げつけた。

ブオン！！なんていう凄まじい風切り音を聞きながら、僕は大木の先にいるヴェロシユと、その周りにヴェロシユが集めた魔獣達が慌てて逃げ出そうとしているようだけど、もう遅い！

「う、うわあああああああああああああああああああああ
あああ！！！」

ドガツシヤアアアアアアアン！！！！

飛んできた大木が見事にヴェロシユ達の場所に命中、よっしゃ！
今で魔獣達は全滅したかな？

「うっ…ぐう」

と思つたらヴェロシユだけは生きていたみたいだ。体は大木にはさまれて身動きは取れないみたいだけど、驚くほどの生命力だ。影人って結構タフなんだな…でもね。

「じゃあ！一気にボコるぞおおおお

！！！！」

「なっ、貴様らあああ

！！！！」

身動きの取れないヴェロシユに僕らは一斉に飛びかかっていった。
今まで受けた人の痛み、存分に思い知れええええええええええええええ

！！！！

こうして、この世界に来て初めての影人戦は僕の見事な作戦勝ちで
終わった。

第七話 沼地と泥の影人と作戦勝ち（後書き）

はい、今回は久々にバカテスの召喚獣が登場しました。やっぱりバカテスだから召喚獣を出してみたいと思って、今回やってみました。次回は日常編みたいなのをやってみたいと思います。そろそろ明久達に旅をさせたいなあ……あ、共鳴術技のコメント、待っております！これとこれを合わせてこんなのはどうだろう？なんていうオリジナル技もお待ちしていますので、どうかよろしくお願いします！！

第八話 夢と特殊スキルと勉強（前書き）

今回はバカテストを書いてみました。

第八話 夢と特殊スキルと勉強

バカテスト 生物

第一問 人間にとって有益となる(例・野菜などを天敵から守ってくれる)動物を一般的になんというか、答えなさい。

イレーヌ・セレスティの答え

「益獣」

教師のコメント

「正解です。益獣とは逆に、害となる生物を害獣と呼びますので、覚えておくといいでしょう」

土屋康太の答え

「Hな女^{ひと}」

教師のコメント

「それは男、というか変態の人にとって有益なものかと」

フィーナ・エルセレットの答え

「友達(協力しあって生きていけるから)」

教師のコメント

「間違いですが、先生はこの回答には好感を持てます」

吉井明久の答え

「食べられるならなんでもいいです」

教師のコメント

「この回答に君の食生活に疑問を抱きました」

〈夢〉

深い、深い、湖の水面。そこに映る満月を見つめる私。
水面に映る私の姿を見る。

白い肌、白い長い髪、そして……背中の、蝶のような形の……光の羽。

私は変わった。

自らでなく、他人の手によって変えられた。

私が私だった頃は、アレは聞こえなかった。コレは見えなかった。
感じなかった。

けれど今の私は聞こえる。見える。感じる。

私は……誰？

心に広がる冷たい感覚、拭いさるるように私は唄を紡いだ。

伴奏者もいない、人のものとは違う歌声が湖に響き、音の波紋を空に響かせた。

一人で、ずっとずっと……………

「ッ！！」

目が覚めた私は、勢いよく起きあがった。原因は先程の夢だ。

手のひらをみると汗が浮かんでいた。寝間着には汗が沁み込んで肌に張り付いて気持ち悪い。

ああ……………まただ。

私はまだアレの恐怖から逃れていない……………フィーナ達といれば、それを忘れる事はできる。けど、いざ一人になると不安になる。寂寥感がどうしようもなく湧きだし、私の体を蝕んでいく。肉体的ではなく、精神的な寒さが私の体を包み込み、知らない内に私は自分の体を抱きしめる。

「……………もう、いや」

こんなのは嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

寂しいのは嫌。一人なのは嫌……………みんなのところに行きたい。

そう思った時だった。

コンコン

「……………！」

ノックの音がして私は顔を上げた。

するとドア越しから声が聞こえてきた。

「イレーヌ、起きてる？ご飯ができたよ」

この声は…明久の声……。

私は髪をかき上げ、立ち上がる。

今は誰でもいい。声を聞きたい。その人の姿を見たい。人に…触れたい。ドアを開けて明久の顔を見ようと思い、ベッドから立ち上がってドアを開けた。

瞬間、明久はギョツとなるように体をのけ反らした。

「ちょ…ちよつとイレーヌ！？どうしたのその格好！！？」

「……………？」

言われて改めて私は自分の姿を見る。

寝る時は楽な姿が好きなため、私はシャツ一枚で眠っている。最近少し大きくなってきた胸を窮屈にしないために前のボタンを三個くらい外していたりする。

そして私はさっきの夢のせいで冷静じゃなかった。

そのせいで気付かなかった。

私は胸を大きく見開いたシャツ一枚の格好でミニスカートよりも際どい状態で素足をむき出しにしているという大胆な姿になっていた。

「……………ひゃあー！」

ボタン！ベシンー！

「ぶべっー！」

思わず声を上げてドアを思いっきり閉めた。閉めた瞬間、明久の間抜けな声が聞こえてきたような気がしたけど、今は気にしていらなかった。

「……………最悪の目覚めだわ」

そう言っただけはため息をついた。

明久サイド

影人を倒してから三日ほど経ったある日、僕とムッツリーニはかつてない敵と対峙していた。

いや、正確に言えばこの敵とは何度も僕達は戦っていた。だけれど何度やっても、何回戦っても、こいつはビクともせず僕らを蹂躪していく。今度こそは、次こそは、そうやって何度も自分に言い聞かせて戦ってきた。

……………けど、ダメなんだ。

……………僕らじゃこいつには何度挑んだって勝てない。

……………僕らを弱虫というのなら言えばいい。僕らを意気地なしと
いえば言えばいい。

人間には不可能なことだってある。

人には翼が無いから空を飛ぶ事はできない。

人には毛皮が無いから裸で寒さを耐える事なんてできない。

人にはえらが無いから水の中で生きる事はできない。

……そう、人間はどこまでいっても人間でしかないんだ。だからこそ、色んな道具を発明したんだと思う。けど所詮人間なんて道具が無ければこの世で最も弱い存在なんだ。なのに人間は傲慢にも環境を破壊して欲望を満たそうとしている。

もう十分なはずだ。

僕らは気付くべきなんだ。

人には人のあるべき姿があるはずだって。だから、だからこそ……

……

「日本人である僕（俺）達に英語はいらないんだああああ

！！！！！」

「二人とも、静かにして」

僕らの魂の叫びがイレーヌの部屋に響き渡った……………。

影人を倒して数日間、僕とムツツリーニはフィーナ、イレーヌ、シャオの三人にお世話になっていた。その代わりに、って言う訳でもないけど僕達は街の周辺にいる魔獣を倒したりして、できる限り

彼女たちの役に立とうとしていた。
役に立とうとしていたんだけど……

「率直に言ってしまうえば、この世界の文字が読めないと仕事が無いわ」

ズバツとキツイ一言を言うイレーヌ。

うう、おかげで僕とムツツリーニは昨日からイレーヌの部屋で勉強をさせられているんだよ……

「明久、このスペル間違ってるわ。正しくはknowじゃなくてknowsよ」

「うう、はい……」

「ムツツリーニ、あなたさっきからペンが止まってるわよ」

「………できるなら本名で呼んでくれ」

昨日からずっとこんな感じ。厳しいっっちゃ厳しいけど鉄人程じゃないし、それに教える事は結構分かりやすいから頭には入ってるんだけど……それでも、元来僕らは勉強が得意じゃない。むしろ嫌いな方だ。だからこそ、鉄人がやっている補習は毎度毎度脱走を試みたりしてたんだけど……

(ムツツリーニ、正直どう思う?)

(………逃げようと思えば容易い)

視線だけで会話する僕ら。これもFクラスと言う名の環境によって磨かれたスキルだ。他にも口の僅かな動きだけで会話したり、相手の行動を視線から予測したり…僕の場合、磨かれたスキルは『集中回避』だ。

Fクラスの連中はなぜかよく僕を目の敵にする。そのせいか、最近僕は反撃をするために相手の目の光から行動を予想、同時に時前に鍛え抜かれた相手の『殺し』の攻撃を瞬時に察知するという特性を身に付け、僕はそれらを回避しながら敵の背後に回り込むという特殊スキルを身に付ける事が出来た。つと、話がずれちゃったね。まあ、そんな風に僕とムツツリー二はさつきからこんな風に特殊スキルを活かして会話してるんだけど……

(逃げ…づらいよね)

(……………美少女を泣かすのは紳士のやる事じゃない)

さつきからイレーヌは真剣に僕らに勉強を教えてくれている。解らないところがあれば、解るまで一緒に真剣に悩んで教えてくれているし、適度に休憩も取ってくれる。正直に言って鉄人みたいな浅黒い人外生物なんかの補習よりも美少女が教えてくれているこっちの方が天国だった…んだけど、やっぱり勉強に対するやる気はあまりでなかったりする。

だから僕とムツツリー二はさつきから『頑張ってるやっています。だからそろそろ終わりにしない?』という気配を醸し出させている。鉄人にはあまり効かないんだけど、他の人になら結構効いたりする。五分後……

「ふう、今日はこれくらいにするわね」

「「よっしやああああ

！！！！！」

僕とムッツリーニの魂の叫び。

やっとアルファベットから解放された…僕とムッツリーニはテーブルの上に広げたノートと筆記用具を片づける。

鉄人と違ってイレーヌは僕達にはかなり良心的な勉強指導してくれる。解りやすいし、何より美少女が教えてくれるっていうのが目の保養にもなる。鉄人だったら暑苦しいだけだもんね。

「それじゃあ、そろそろお昼にしましょ。お昼の食事当番は……」

「……………俺だ」

そういつてスクツと立ち上がるムッツリーニ。この屋敷にはメイドさんはいないから、基本的に家事は僕達が当番制でやってるんだよね。ちなみに僕は買い物当番だから…夕方頃にいこうかな。干し肉とか、干物とかの日持ちする食料を買って欲しいって言ってたし。

「ムッツリーニさん、そろそろご飯の支度を…」

「……………解っている」

フィーナが扉を開けて入ってきた。そっか、今日はフィーナも料理当番だったんだっけ。これは楽しみだ。フィーナの腕前は知っているし、ムッツリーニは『紳士の嗜み』という理由で料理が上手いという事を知っている。

「今日のお昼は何？」

「え…っと、ぱ、パエリアだよ。ほ、ほら、この前明久が好きだっ

て言ってた……」

「本当！？それは楽しみだよ」

「あ、うん。た、楽しみに待っててね」

そう言っただけか顔を赤らめて言うフィーナ。一体どうしたんだろ、僕の顔に何か付いてるのかなあ？……まあ、いいや。パエリアは僕の好物だし、これは楽しみがさらに増えたかも。

「……………相変わらず、鈍い」

何言ってるのムツツリーニ？……とりあえず意味が分からなかったからスルーしよう。

さてと、お昼ができるまでどうしようかな……

「それじゃあ、明久。お昼ができるまで文字の勉強を……」

続けましょう、とイレエヌが言う前に僕は動き出していた。

「飛天翔駆！」

僕は開いていた窓から空中に浮かびあがってからの急降下ライダーキックをぶつ放して逃げ出した。いくら目の保養になるといつても、これ以上勉強を続けていたらさすがに僕の体力がもたない！！僕は窓から飛び出すと、一目散に逃げ出して行った。

イレエヌサイド

……何やってんのよ、あいつ。

逃げ出すにしてもわざわざ術技使う必要ある？

後ろで窓から飛び出して勉強から逃げ出して行った明久をポカン、といった表情で固まっているフィーナ。なんだか余計な事をやってしまったかもしれないわね。

「ムツツリーニ。私は彼を探してくるから料理の方、お願いするわ」

「……………わかった」

「あっ…じゃあ、私も」

「フィーナは料理当番でしょ。シャオを餓死させる気？」

「あう」

やれやれ、この娘ったら。こういう天然な所、ちよつとは直した方がいいかもしれないわね……一階から、『ワツチはそこまで卑しくないわ〜！』という大声が響いてきたけど、とりあえずスルー。相変わらずいい耳をしてるわね。……雲行きが少し怪しくなってきたわね…早く探しに行つてあげないと。

イレーヌは『悪夢の記憶』と『同級生教師』を、明久とムツツリーニは『Fクラス生徒』の称号を手に入れました。

第八話 夢と特殊スキルと勉強（後書き）

称号紹介

明久 ムツツリーニ 称号『Fクラス生徒』 勉強は嫌いだが、その代りに様々な特殊スキルを持つ普通じゃない生徒に送る称号。
『まったく自慢はできないがなb y悪鬼羅刹』

イレーヌ 称号『悪夢の記憶』 未だ逃れられぬ過去の記憶。彼女の過去に何があったのか……

『同級生教師』 同じ年だけど、頭は良いので出来の悪い生徒にしっかりと勉強させる貴女に送る称号。

さて、始めりました日常編ですけど、今回はイレーヌをメインに進ませようと思っております。今回は明久のシリアスモードを発動させようと思っておりますので、楽しみにしてください！

第九話 雨と新月と彼女の過去（前書き）

今回はちょっとシリアス気味な話です。明久大活躍！どうかお楽しみ下さい。

第九話 雨と新月と彼女の過去

バカテスト 日本史

第二問 ロシア最初の遣日使節、ラクスマンが来航した都市は？また来航した年と、その理由も記しなさい。

M希・H路さんの答え

「都市 根室」

「年 1792年」

「理由 エカチエリーナ二世の命で日本に通商を求めるために来航したが、拒否された」

教師のコメント

「正解です。早く皆さんと合流できるといいですね」

吉井明久の答え

「来航した都市・根室」

「年 1792年」

「理由 通商するために日本に来ましたが、拒否されました」

教師のコメント

「正解ですが、吉井君が当たっているという事に先生は違和感と驚きを隠せません」

土屋康太の答え

「理由 女性を我がものにする為」

教師のコメント

「わざわざ日本に来てまで女性を求める理由が分かりません」

イレーヌサイド

「まったく、どこに行つたのかしら……」

あれから私は明久を探して街中を走り回っている。正直雲行きも悪くなつてきているし、雨が降ってくるかもしれないから帰りたいたいんだけど……

「……明久を置いていく訳にはいかないわよね」

……せつかく、仲良くなれたというのに嫌われたくないし。……つて何考えてるのよ、私。

ここ数日で明久達の事を見てきて、そんなこと考えるような奴じゃないって、知っているはずよ……バカで、物覚えが悪くて……それでいてバカをつくぐらいのお人よし。この前、馬車にはねられそうだった子供を自分の身も顧みずに飛び出して助けにいった。その姿に、正直私は感動した。

フィーナも明久と同じで、傷ついている人が目の前にいたら迷わず回復術をかける娘で、自分の体力の限界まで頑張っちゃうお人好きな女の子。

見ず知らずの人のために駆けだしていける……そんな姿に、私は少し憧れを抱いていた。

……だからこそ、私はフィーナや明久と一緒にいたかった。

私は街中から少し離れた小高い丘にまで足を運んでみる事にした。これだけ街中を探してもいないのだから、もしかしたら街の外まで

逃げていったのかもしれないし。そうなる……

「……私までお昼はお預けかしらね」

ちよつと苦笑いをして私は丘まで走っていった。

「明久……どこ？」

丘に着いた私は大声で先程から明久の名前を呼んでいた。

いい加減そろそろ出てきてほしいんだけど、彼の姿は先程から全くと言っていいほど見えなかった。途中で購入したサンドイッチをパクつきながら私は辺りを見渡す。

小高い丘から見える景色はとても綺麗で、遠くの山までよく見える。多分、この辺りでは一番の名所なのかもしれない。私はここが好きでよく足を運んでいた。意外にこの場所は地元の人間に知られていなくて……それでいて一人になるにはうつつけの場所だから。

ドクン

「……………ま、さか!？」

突然苦しくなる胸を抑えて私はその場に座り込んだ。呼吸が乱れ、体が鉛のように重くなる……まさか、今日が……新月だったなんて……今……こんな時に……くるなんて……

私は、そのまま意識を失った。

明久サイド

僕、吉井明久は悩んでいた。理由は前回の逃走のことだ。こつちにきてから英語英語のアルファベット漬けの毎日だったから、僕のキャパシティが十分に限界を迎えて思わずイレーヌの授業から逃げ出してしまった。

うう、帰ったらきつとイレーヌ怒ってるだろうなあ……これが鉄人辺りだったら普通に戻っても罪悪感とか一切感じないんだけど、イレーヌだと話が365度くらい違ってくる。え？5度多いって？……？……うっ！またこの間違いを……穴があったら入りたい。できるなら頭から真つ逆さまに。

まあ、そんな訳で僕はちよつと屋敷には帰りづらい状況にいる。それも街中にいたままだと、この文月学園の制服のせいでもどこに行っても目立つから街中にいる訳にもいかず、そのまま外に出ていた。まあ、雲行きが怪しくなってきたから雨の水でも飲めば、昼ぐらい平気で過ごせるかも。人間の体って言うのは、水だけしか摂らなくても一週間ぐらい平気で乗り切れるもんね。ついでに辺りには雑草が生えてるし、その気になればコレを食べて過ごせるかも。なんて思ってた時だった。

「明久ー……どこー？」

「……えっ、イレーヌ!？」

慌てて地面に横になって身を伏せる僕。なんでこんなところにイレーヌが!?まさか僕を追ってここまで来たのか!?もしかして僕を探しに来たとか?いったい何でだろう?

『決まってるだろ、お前を連れ戻しに来たのさ』

でたな！僕の中の悪魔め！！

でも天使よりはマシな意見を言ってくれるだろうから、とつとこの状況を説明してくれ！

『ふっふっふ、それはだな

』

『お前を連れ戻して拷も』

終わる訳にはいかない！うおおおおお！断罪の煌剣！！アイ
ンソファウル ！！！！

『ぎゃああああああああああああああああ！！！！』

『うお！なんか現れた天使が連続攻撃の後に光の一閃をくらってぶ
っ飛んでったぞ！？』

はっ！？今僕はいつたい何を…？なんか自分の中の天使が現れた瞬間、僕の中でリミッターが一瞬だけ解除されて思わずとんでもない必殺技を放ってしまったような気がする。

くく明久はLv1秘奥義・アインソファウルを手に入れましたくく

やった！ついに僕は秘奥義を手に入れたんだ！！声優つながりだけど、これは嬉しいや！しかもLv1ってことはまだ上があるってことか！！早く手に入れたいなあ………じゃない！そんなことより今はイレーヌをなんとかしないと…悪魔！どうすればいいんだ！？

『まあ待て、明久。ここはまず彼女の様子を見るんだ』

様子を見る…それでどうするの？

『じっくり動きを観察する』

ふんふん、それで？

『隙を見て、ガバツと襲いかかれ』

アインソファウル！！！！！！

『どぐうわああああああああああああああああ！！？』

おのれ悪魔め、貴様も天使と同じだったか！再びリミッターを一瞬だけ外して僕は自分の中にいた悪魔に向かって天使と同じように剣の連続攻撃を浴びせた後、膨大なエネルギーを持った光の一撃をぶつけてやった。

まったく…そんなことやってたら僕の今までの経験上、返り討ちか、僕が殺されるに決まってるじゃないか！！

えっ？同じ意味じゃないのか、って？知らん。

なんて僕が一人心中でバトってる時だった。

ドサリ

「？」

なんだ今の何か倒れたような音は？気になって顔を上げてみると、そこには雪のように白い肌の少女…イレーヌが地面に倒れてい

た。緑色の草原の中に、そこだけ雪が残っているような印象が一瞬だけ浮かんだけど、僕は慌てて立ち上がってイレーヌに駆け寄った。

「イレーヌ、どうしたの！？大丈夫！？？」

僕はイレーヌを抱き上げる。その体は恐ろしく軽く、まるで彼女の体が本当にそこにあるのか疑ってしまうかのようだった。呼吸もかなり荒く、正直素人目の僕でもマズイとわかる。早く街に行つて医者に見せないと…なんて思った時、よりもよって最悪なタイミングで。

ザアアアアアアアアア

！

雨が降ってきた。しかもかなりの量だ。このままじゃイレーヌが衰弱死してしまうかもしれないから、僕はなるべく彼女に雨が当たらないように背中背負うと、近くにあって葉がかなり生い茂った大きな木の下に入った。これならなんとか雨をしのげるかな？

「イレーヌ、大丈夫？」

木を背もたれにして、イレーヌを楽な姿勢にした僕は彼女に声をかけてみるけど、イレーヌはピクリとも動いてくれなかった。とりあえず体温が下がってこれ以上体調を悪くするのはアレなので、僕は自分の制服の上着を脱いで彼女にかけてあげた。

ぐうううう……

………かけた瞬間、僕のKYな腹は盛大な自己出張をしてきた。うう、さすがにそろそろお腹が減ってきたなあ……幸い、水はたく

さんある訳だし。そう思つて僕は立ち上がつて水を飲もうとした…
その時だった。

突然イレー又から淡い光が溢れだした。

「……………えっ!？」

驚いて僕は思わず尻もちをついてしまったけど、僕は目の前の光景に驚きを隠せないでいた。だつていきなりイレー又から光が……つて、あれ?よく見たら違つていた。

『イレー又から光が溢れている』んじゃなくて『イレー又に光が集まつている』だった。…やれやれ紛らわしい……………ん?

えっ!?!?なんでイレー又に光が集まつているの!?!?おかしくない!?!?いくら異世界だからと言つても普通人に光が集まつては来ないよね?……………もしかしたら僕が知らないだけで、この世界では結構当たり前のようなことなのかもしれないけど……………それでも、僕は目の前で眠り続けているイレー又を見つめる。

さつきみたいに苦しげな表情じゃないけど、今度は体がぼんやりとした淡い光に包まれていて、そして……………

「これ……………羽だよな」

いつの間にかイレー又の背中から四枚の光でできた羽が生えていた。その光の羽は、まるで消えかけの電球みたいにチカチカと光つたり消えたりしていたけど、だんだんと光の羽が現れている方が多くなつてきて、それに関係しているのか、イレー又の顔色が少しずつ良くなつてきていて、赤みがさしてきていた。

「……………大丈夫かな?」

とりあえず僕はさっきの真っ白な顔からほんのりと赤みがさした顔になってきたのを見て安心し、『ぐぎゆるるるるるるるるるるるる』……安心したせいかわ、腹が盛大に自己出張をし始めた。うう、お腹減ってきたなあ……

そこで……僕は見た。

目の前で空から降り続ける雨に。

「……………」

僕はゆっくりと立ち上がると歩き始めていた。

イレエヌサイド

「……………」

気だるい調子で私は目が覚めた。けれど視界はまだぼんやりとたたまたままだ。

この『眠り』から覚める時はいつもこうだ。この『私』になつてから、もう何回この眠りを繰り返したのだろう……。でも今日は少し違った。温かな……優しく、いつまでも包み込まれていたいような……そんな温もりに私は包まれていた。

少しずつ視界が戻ってくる。そして気付いた私を包んでくれたもの。

それは誰かの上着だった。触った事も無い材質に全体が黒い服。これって……もしかして。

私は少しずつ戻ってくる視界を頼りに前を見た。そこにいたのは……

深海のように深い青の世界に染まっている…草原。

その青の世界を作り出している…おそらく眠った後に振り始めたのである…雨。

そしてその雨の中で大口を開けて雨を飲んでいる…明久、って！

「あなた何やってるの!？」

「うわぁ!??？」

思わず自分の今の状況を考える暇もなく、明久の奇行にツッコミをいれてしまっていた。

明久サイド

「あなた何やってるの!？」

「うわぁ!??？」

突然響いた大きな声に僕は驚いた。

ゆっくりと振り向くと、そこにはさっきまで眠り続けていたイレーヌが起きていた。良かった！

「イレーヌ、目が覚めたんだね!！」

「ええ、それはいいけど…あなた、何やってるの!？」

イレーヌがかなり驚いたように僕に近づいてくる。本当にどうしたんだろう…? 僕はただ単に…

「お昼抜きになったから、雨水を飲んでるんだよ」

「はい、その発想おかしい! なんで雨水で飢えを凌ごうとしているの!？」

「えっ? 人間って水だけでもなんとなるもんだよ。実際僕、塩水と砂糖水だけで一週間、乗り切れたもの」

「あなた元の世界でどういう食生活送ってきたの!？ 出会った時から本当に疑問に思うんだけど!!！」

「えっ? 普通の食生活だけど」

姉さんが来てから普通じゃなくなっただけだね。

「ごめん、あなたの世界には行つた事ないから知らないけど、その食生活はけして普通ではないと断言できるわ」

「そんなバカな!？」

「なんで本気で驚いたような表情ができるのよ!？ 普通に考えて当然のことでしょ!？」

実際に塩水と砂糖水だけで過ごした僕はいったい何なのさ!？ はあ、とため息をついて頭を抱えたイレーヌ。だけどその背中か

ら光の羽が現れている事に気付くと、表情を急変させて

「み、見ないで！！！」

そう言っつて両腕を抱いて背中を木につけて震え始めた。

えっ？どういうこと……？

僕が首を傾げながらイレーヌにどういう意味か聞こうとしたけど

…僕はその時見てしまった。

イレーヌの、彼女の怯えたような表情が。

「……………」

その表情を見て…僕は……気が付いたら彼女の体を優しく抱きしめていた。

「……………」

「……………」

っつて、何やってるんだる僕。

こんなこと思い切った事をいきなりやっちゃうなんて……………。下手すりゃ変態だ、って言われてもおかしくないことだぞ。

だけど……なぜだかわからなかったけど、僕はイレーヌにはこうしなくちゃいけない、っつて思ったんだ。多分、さっき見えた彼女の怯えたような表情の中に見えた僕は『寂しい』っつて表情も見えたよ

うな気がするから。

ザアアアアアア

雨の音だけが聞こえてくる世界の中、どれぐらい経ったのだろう。ようやくイレーヌが動いてくれた。

……なぜか僕の体に腕を回して。

……えっ？なんで！？まさかこのままジャーマンスープレックスにもっていくつもりなの！？あれはもの凄く痛いんだよ！！異端審問会から何十回もくらったからわかる！そして美波からも何百回もくらったからわかる！毎度くらって頭が無事なのが奇跡に思えるんだよ……えっ？桁がおかしくないかって？大丈夫、これが僕達にとって『普通』だから。

なんてしばらく僕はこの状況に戦慄していたんだけど、イレーヌがいつまで経っても技を仕掛けてこないからおかしい、と思って僕はきつく閉じていた目を恐る恐る開いてみる。

彼女…イレーヌは僕の胸に顔を埋めて震えていた。時々嗚咽が聞こえる事から、おそらく泣いているんだろうと解る。

僕はこんな時…どうしたらいいか解らない。

だから…彼女が落ち着くまでこうやって優しく抱きしめている事しかできなかった。

「……ありがとう、もういいわ」

そう言ってイレーヌはゆっくりと僕から体を離して行った。

彼女の瞳にはまだ涙が溜まっていたけど、もう流れる心配はない

みたい。いやあ、よかったよかった。

「そっか…じゃあ、帰ろう」

そう言っただけはイレーヌの手を取って歩き始めようとしたんだけど…うわ、まだ雨降ってるよ。早く止まないかなあ……………。

「待って」

そう言っただけはイレーヌは僕を呼び止める。どうしたんだろう…僕が首を傾げていると、項垂れた状態でイレーヌは口を開いた。

「訳…聞かないの？」

「えっ？」

「だから…この…羽のこととか、どうしてこんな体なのか…………」

その言葉から僕は…なんとなくだけど予測してみる。多分、イレーヌはこの世界でもかなり珍しい体質なんだろうと想像できた。そりゃ気にはなるけど…………

「聞いてほしいの？」

僕の言葉にイレーヌはビクリ、と体を震わした。やっぱりね。

「イレーヌ、聞かれるの怖いんでしょ？」

「…！」

その言葉に一瞬だけ驚いたような表情を浮かべると、すぐに項垂れてコクリ、と頷いてくれた。

「じゃあいいよ。それで」

「……………どうして?」

「どうしてって…だって、怖いんでしょ?」

「ええ……………でも気味悪くないの?こんな…得体の知れない…忌避さねてもしょうがないような存在に……………」

「ごめん、『きひ』《忌避》って何?」

「……………」

うつ、なんか黙り込んだじゃった……………うーん……………
とりあえず今の会話の流れからいうと、『嫌われる』っていう意味なのかも。うん、きつとそうだね。って、いうか……………もしかして

「ねえ、ひよっとしたら」

「?」

彼女が顔を上げて僕を見つめる。僕はその瞳をまっすぐに見つめながら言う。

「僕に君の体の事を話したら嫌われるんじゃないか、って思ってる?」

「！！！」

驚いたような表情になるイレーヌ。

やっぱりか、なんかそんな感じがしたんだよね。

彼女と会って数日しか経ってないけど、イレーヌは僕らの…というよりは、人の輪の中に入っていきこうとするような感じがあった。

なんていうか…一人になるのをできるだけ避けているような、そんな感じ。僕とムツツリー二と一緒に勉強してたのって、多分自分の傍にいる人は、出来る限り多い方が嬉しいからだと思う。よく考えてみれば、この世界の人達ってみんな英語を覚えている訳だから、教わるのなら別にフィーナでも、シャオでも良かったと思う。

……まあ、シャオの場合ムツツリー二に命の危機が再来しちゃうんだけどね。

それはともかく、僕が見てきたイレーヌは、出来る限り一人を避けていたような気がする。まるで寂しいのが嫌で誰かにくっついて歩いていく子供のように。

だから……言わなくちゃ。

「ねえ、イレーヌ」

「……………」

「僕は君の過去は知らない。頭がいい君と違って、僕はバカだけど…君が一人でとても怖い経験をしたんだ、っていうのは解るよ」

「……………」

「でもね、そんな君でも間違いはあるんだよ」

「……………間違い？」

「うん。それはなんだか解る？」

彼女は首を横に振るう。

「そっか、じゃあ答えを言っね」

僕は彼女に教えてあげた。

「僕と、イレー又はもう仲間なんだ」

「……………え？」

「だから仲間。たった短い間だけけど、僕達はもう仲間なんだ。互いの深いところは知らないけど、それでも少しばかり相手の気持ちや癖とかが解る仲間」

「……………」

「それでね、そういうのって相手を好きじゃないと出来ない事なんだ」

「……………好き？」

「うん」

そう…こんな風に誰かの事を解ろうとしたり、自分の間抜けな部分をさらしたりするのって、その相手を好きじゃないと出来ない事

だ。多分だけど、イレーヌはその事について知らないんだと思う。
僕は笑顔を浮かべるとゆっくりと話し始めた。

「ねえ、イレーヌ。僕はね思うんだよ…仲間って言うのは、本当に何もかもさらけ出さないといけないと、仲間じゃないのかな？って」

「……………だって…そうなんじゃ、ないの？」

「自分の嫌なことを無理やりさらけ出したって、自分が嫌な思いするだけでしょ？それをしなきゃ『仲間』じゃないなんておかしいよ。だったら僕は『仲間』なんていらない」

「……………」

「だからね、僕は思うんだ。『嫌な事を隠している部分も受け入れる』のが、本当の仲間なんかじゃないのか、って」

「……………！…！」

イレーヌが驚いたような表情を浮かべる。そして再びポロポロと涙をこぼし始めた。

僕はイレーヌの頭にそつと手を置いて優しく撫でてあげる。今度はこつちが正しいんじゃないのかな、って思ったから。

「……………ありがとう、ありがとう明久……………」

涙混じりに僕にお礼を言ってくるイレーヌ。それほどの事でもないよ。だって仲間なら当たり前のことでしょ？

さてと…そろそろ帰りたいんだけど、まだ雨降ってるよ……………フィーナ達、心配しているだろうなあ。

「ねえ、明久……」

イレーヌが僕の服を引っ張って僕に話しかける。一体どうしたんだろう？

「あのね……話そうと……思って」

それから彼女は一拍置いて真剣な表情で僕を見ていった。

「私の、過去」

イレーヌサイド

私はどこにでもいる普通の子供だった。

騎士の父と優しい母と、私よりも二つ下の弟を持った普通のお姉ちゃん。学校に通って友達と遊んで、そんな毎日を暮らしていた。ただそれだけだった……なのに。

ある日、それは音を立てて崩れた。

突然街に見知らぬ赤い鎧を身に付けた集団が襲い掛かってきた。

鉄と鉄が打ち合う音、様々な魔法が街中を飛び交い、たくさんの子供や大人の悲鳴が入り混じった光景は今でも覚えている。その中で、私は一人の兵士によって連れ去られたのを覚えている。

ここで私の記憶は一度途切れる。

次に目を覚ました時は液体が満ちた透明な容器の中だった。全裸の状態ではその容器の中にいた。私の他にも、たくさんの人が同じように容器の中にいた。中には見知った顔もいたけど……そして私は気付いた。私の体が『普通の人間』じゃなくなっている。って事に。

「普通の人間じゃない？」

ええ……だって普通の人間には見えないものが、聞こえないものが、感じないものが、私には解るの。だって……私は……

「私は……月の精霊ルナと人間のイレエヌを融合させた存在……半人半霊なのよ」

そう、私はルナであると同時にイレエヌでもある存在。

半分精霊となった私は、この世界で魔力を扱うのに必要なマナの色を見る事ができる。マナの移動する音が聞こえる。マナの流れを感知することができる。

でも、所詮は不完全な存在。

本来相入れない関係の精霊と人間を……どんな方法かは知らないけど……無理やり一つの体に押し込めた。それによって私はある時期になると倒れるようになった。

その時期は決まって新月の晩の日。その日、私は必ず……いつかはわからないけど、倒れてしまう。

「えっ？でもおかしくない！？だってルナって月の精霊でしょ？だったら月の満ち欠けぐらい……」

……それが解らないから、私は不完全なの。

月の満ち欠けにすら気付けない……いや、月がどんな風に欠けてい

るか忘れてしまう。そういうのは人間の性質なの。精霊は何かを必ず何かを司っている。それが彼らの使命だから……でも私はその使命が曖昧になった存在。

人と精霊が一つになった結果、出来上がったのは失敗作。

そんな言葉が容器越しから聞こえてきて……怖くなって、それで……私は満月の晩、施設をルナの力で破壊して逃げ出した。

それから私は一人、旅をしながらフィーナ達と出会って……そして、明久達に出会った。

明久サイド

「……………」

正直、僕は彼女の話を聞いて啞然としていた。でも次の瞬間には強く拳を握りしめて

「ふざけるなあああああ

！！！！！！」

僕は大声で怒鳴り散らした。なんだよ、それ！！半分精霊で、半分人間……しかも失敗作だつて！？無理やり連れていかれて、勝手に体をいじられて……その結果がこれか！？ふざけるな！！！！

「なんだよそれ！理不尽じゃないか！！イレー又は何も悪い事なんてやってないのに！！」

僕は歯が砕けるんじゃないか、つてぐらい強く喰いしばった。握りしめた拳から爪が食い込んだせい、血が流れていて痛い……でも、

それ以上にイレーヌがそんな目にあつた事に腹が立って仕方なかった。

僕が怒りに震えている時、イレーヌがそつと僕の手を両手で包んだ。

「ありがとう、明久…私のために怒ってくれて…私の言葉、信じてくれて……」

「当たり前だよ！イレーヌは僕らの仲間だ！！怒るのは当たり前だよ！！！」

「ありがとう……ありがとう……」

イレーヌは僕の手を強く握って再び涙を流し始めた。

僕は雨が止んで光が差した空を見て、強く睨みつける…こんな理不尽な事をやった誰かを……その時だった。

僕の視界に、なんか赤い集団が遠くの草原を街に向かって歩いているのが見えた。あれって……まさか……

気がついたら僕はクロスオパール街に向かって慌てて走り始めていた。

明久は『仲間バカ』の称号を手に入れました。

イレーヌは『半人半霊』の称号を手に入れました。

第九話 雨と新月と彼女の過去（後書き）

称号紹介 吉井明久『仲間バカ』 大好きな仲間を信じ続ける。

自分がバカにされるよりも、仲間がバカにされる方が許せない！そんな仲間第一のあなたに送る称号。

イレエヌ『半人半霊』 望まずに手に入れてしまった精霊の力と身体。人でもなく、精霊でもない私は誰？

重い…そしてシリアスって苦手だ……今回は色々無理をしながら書いてみました。次回から新たな展開が！！楽しみに待っていてください！！

第十話 盗撮と盗聴と僕らの旅立ち（前書き）

なんとか出来上がったので、投稿します。いよいよ明久達の旅立ちです！！

第十話 盗撮と盗聴と僕らの旅立ち

赤い兵士の集団が見えた僕とイレーヌは、大急ぎでクロスオパールの街の屋敷に帰っていた。僕らは手をつないで風のように空を翔けていた。周りの景色が、まるで自動車にでも乗っているかのようにドンドン過ぎていく。なんで僕らがこんなに速く走れるのかって？その理由は僕がエデン・ヘヴンズを手に持っているからだ。

えっ？なんで持ってるんだ、って？それはね、僕らの武器は普通の武器と違って、どこに置いてあっても、すぐに自分の手の中にワープさせることができるんだ。

それで僕のエデン・ヘヴンズは、僕に若草色のオーラをまとわせてくれるんだけど、そのオーラをまとった時、僕の体は羽のように軽くなって素早い動きが可能になるんだ。しかも今は上手くできないけど、使いこなせるようになれば空を飛ぶ事もできるんだ……まあ、今はできないけど。

そんな訳で、僕とイレーヌは馬なんかよりもずっと速いスピードで屋敷に帰っていった。時間からして見れば、二分ぐらいで着くことができた。普通なら歩いて三十分ぐらいの道のりが、全速力で走ればこんなに速いなんて……うん、この世界に来てから思ってたけど、僕って凄い！

「いや、あなた……というよりは武器の方が凄いいんじゃないのかしら？」

イレーヌがそう言うってくる。……うう、わかってるよ。でもコレって結構扱うのが難しいんだよ？

なんて愚痴ってたって仕方ないので、僕とイレーヌは屋敷に入ると、早速執務室の方に入った。そこにはフィーナやシャオ、そしてムッツリーニの三人がいた。シャオが僕達の事に気付くと、声をか

けてきてくれた。

「おお、主ら待ってたぞ」

「ええ、ちよつと明久を探すのに手間取ってね…それよりも、帰る時に気付いたのだけれど……」

「解っておるわ、これじゃろ？」

そう言つてシャオは僕らに数枚の写真を見せた。多分ムツツリーニが撮影したものなんだろう…そこには、僕らの見た赤い集団の姿がそこにあつた。しかも、遠目だった僕らと違ってカメラのズーム機能を使ったので、そいつらの姿がよくわかる。

どれも赤い仮面や赤い鎧を身に付けているけど、軽そうな鎧や、重そうな鎧とか色々違っていたりした。なんかRPGで出てきそうな雰囲気、魔獣も何体かいたり、結構大部隊なんだな……それがこの街に近づいてるって、いったい何でだろう？

「軍旗から見て、相手は帝国のラ・ジャーガの国じゃな」

「ラ・ジャーガ？」

それが、こいつらの名前？………つていうか、こいつら良く見たらさつきイレーヌから聞いた赤い鎧の連中…もしかした………！！

（明久、落ち着いて…私なら大丈夫）

イレーヌにそう言われて僕は…少しだけ落ち着く。

本当なら今すぐ飛び出していつてぶつ飛ばしてやりたいんだけど、今はその時じゃない………落ち着け僕、落ち着け………なんて思ってた

ら、シャオが口を開いた。

「ああ、明久とムツツリは知らなかったな……ラ・ジャーガというのは、言ってしまうえばこの世界にある巨大勢力の一つじゃ」

「……………一つと言う事は、他にも？」

ムツツリーニの言葉にフィーナはコクリと頷いた。

「うん…南の大陸を統治する軍事国家シャフェラン。そしてこの街が所属している北の連邦国家テルクティス。そして今この街に向かっているのは、東の帝国ラ・ジャーガ……」

ふんふん、つまりこの世界には国が三つもあるってことか。で、そのうちの一つがこの街に向かってきている……………って、なんで？

「もしかして…戦争になるの？」

なんて僕はちよつとした冗談で言ってみた。いくらなんでも影人との戦いがあるのに、人間同士で争うなんて、いくらなんでもおかしいでしょ。

でもイレーヌは顔をしかめると、僕の言葉に頷いた。

「……………可能性はあるわね」

えっ！？マジで！？？

「ちよ、ちよつと待ってよ！なんで！？」

「……………いくらなんでも、おかしい」

慌てる僕とムツツリーニが騒ぎ立てるけど、フィーナ達は「落ちて着いて」と言ってきた。

「影人って言う敵がいるのにどうして国同士で争うのか…って、明久達は言いたいんだよね？」

フィーナの言葉に僕とムツツリーニは頷く。まさしくそうだ。影人って言う敵がいるのに、なんで国同士で争わなきゃいけないのか訳が解らない。

「このラ・ジャーガっていう帝国はね…この世界、アミシエステイアの覇権を狙っている国なんだよ」

「ごめん、覇権って何？あつ、なんか隣でイレーヌがため息混じりに教えてくれた。どうやら覇権っていうのは、他の国を征服して手に入れた権利の事を言うらしい。ふん…って、つまりはガチで戦争を起こそうとしてるって訳！？マジで！??」

「影人と戦っている他の国を攻めてある程度疲弊させるのが目的でしょうね…でも何か腑に落ちないわね」

「？何がだろ…イレーヌの言葉が気になったけど、今は目の前で起きようとしている戦争をどうにかしないと…試召戦争とはまったく違う、本物の戦争…僕の手は知らない内に震えていた。うう、情けないなあ…僕。」

そんな僕の右手をフィーナが、左手をイレーヌが優しく握りしめていた。

「明久、怖いのはみんな一緒だよ。だから…一緒にがんばろ」

「あなたは私に仲間の大切さを教えてくれたわ…大丈夫。あなたは一人じゃないわ」

二人の言葉は僕の胸にとても染みだ。Fクラスではけして聞けない言葉に僕は不覚にも泣きそうになった。

「……………明久」

「どうしたの、ムツツリーニ？」

ムツツリーニが何やら機材を取り出してテーブルの上に置いた。ファイナとイレール又とシャオは突然現れたこの機材に『何これ？』みたいな表情を浮かべていたけど、僕は別の意味で『何これ？』と思った。

だって、その機材が盗聴マイクの装置だったからだ。

ムツツリーニはその機材を操作しながらこの装置を出した理由を教えてください。

「……………実は、兵士たちに気付いて写真を撮った時にリーダーっぽい奴の鎧に盗聴器を付けてきた」

「えっ！？マジで！？？」

なんとムツツリーニはあの軍勢の中を潜り抜けてリーダーっぽい奴に盗聴器をセットしてきたらしい。……………っていうか、なんでそんなもの持つてるんだ？とツツコミをしたいけど、大体理由は解ってるからスルーしよう。今掘り出す話題でもないし。

「……………みんなはそれを聞いてる。俺はこっちを見ている」

そう言ってムツツリーニはノートパソコンを取り出して何かよく解らない機材をセッティングして、そして自分の顔に近未来的なゴーグル……って、それって僕が前『召喚獣補完計画』で使ったゴーグルじゃないか。

「それって何が映ってるの？」

「……………GPSを付けたカメラを持たせた召喚獣を使って兵士たちの様子をリアルタイムで見ると。街に武器を持って近づいてきたら報せる」

おお、それは凄い。なんかムツツリーニのスパイグッズが初めてそれらしい使い方をされているような気がする。

あつ、ちなみにこの世界ではムツツリーニも召喚獣を召喚出来て、しかも僕と同じように物に触れるんだ。さらに、いつでもどこでも消すことができるし、戦死になっても時間を置けば復活してるんだ。いやあ、便利便利。

それにしてもやるなあ、ムツツリーニ。たしかに召喚獣の大きさなら敵に気付かれずに近づいて盗聴器を仕掛けられるし、カメラを持たせればこんな風に遠くに偵察にいける。ムツツリーニ自体、スパイみたいな行動が得意だしね……その行動の原動力が下心だというのが若干残念だけどね。

でもそんな便利な召喚獣にも一つだけ弱点があるんだよなあ……まあ、そのことはまた今度って事で。今は目の前の盗聴マイクの会話を聞かないと。

「……………そろそろ始まる」

ムツツリーニは慣れた動作でカメラ映像を見ながら、片手間で盗

聴マイクを操作していた。さすがに慣れてるなあ……。なんて僕が感心していると、マイクから声が聞こえ始めた。

『（ザ、ザザツ）で、街の警備状況はどうだ？』

「きゃあ！箱から野太い男の人の声が！？」

「な、なにコレ！？一体どうなってるの！??？」

「ま、魔術か！？いや、このような魔術など聞いた事も無いぞえ！？」

とまあ…この中世の時代、機械などという物を見たことが無いフイーナ達は、突然しゃべりだした盗聴器に驚きまくってる。無理もないけど。

「三人とも落ち着いて、これは遠くにいる相手の会話を聞ける装置なんだ」

「そ、そう…なの？」

おつ、さすがはイレエヌ。他の二人と違っていち早く落ち着きを取り戻し始めたみたいだ。

「うん、今から聞ける事は重要な事だろうし、しっかり聞いておく
う」

「……りよ、了解」「」

まだ多少動揺しているみたいだけど、とりあえず三人とも落ち着

いたみたいだ。……さてと、一体何が聞けるんだろう。

『ガルザム將軍、どうしますか？』

おっ、誰かの名前が出たな……ガルザム…將軍、って呼ばれるぐ
らいなんだからきつとももの凄く強い奴なんだろうなあ……

『ふん、決まっている……我が主の望みはこの街を使い、宣戦布告
のかがり火として使おうとおっしゃっていた。ならば我らのやる事
は一つ』

ガルザムという男は、そこでいったん切る。そして……言ってく
れた。ある意味最悪な、そして僕でも予想できた最悪な答えを。

『総員、戦闘配備だ！今日、この日を持ってこの街を落とすぞ！！
我らラ・ジャーガの栄光をこの手につかむために！！』

『オオオオオオオ』

！！！！

！！！！！！

兵士たちの叫びが聞こえなくなった後、今度は忙しくドタドタと
動き回るような音が聞こえ始めた……って！ちよっ、マジで！？

「むっ、ムツツリーニ！兵士たちの様子は！？」

「……………部隊みたいなのを編成してこっちに向かってきている。
とりあえず召喚獣をこっちに戻す」

そう言ってムツツリーニは召喚獣の操作を始めた。そっか、いくら召喚獣がいつでもどこでも消すことができるといっても、カメラがこっちに戻ってくるって訳じゃないか……っていうかガルザムって奴め、この街を落としてどうするつもりなんだ？

「明久、早く兵士の人達に伝令を！」

シャオが慌てたように僕に声をかけてきた。

たしかにそうだ。このままじゃ街の人達に被害がでる……なんとかしないと。

「……………心配ない」

そういつてムツツリーニが僕らにマイクを差し出した……………何これ？

「……………スピーチ用の放送機器。スイッチを入れれば街中に声を届かせることができる」

おお！それは便利だ！！なんか下心とは色々関係ないような気がするけど、今の状況ではかなり役にたつ！ナイスムツツリーニ……………あれ？それじゃあなんで僕が逃げ出した時にそれを使って呼び戻さなかったの？

「……………まだ準備ができていなかった。それよりも、早く何か言え」

「あっ、そうだね……………」

ムツツリーニが放送機器のスイッチをONにしたのを見てから僕

はマイクに向かって大声で叫び始めた。

『カン！カン！カン！カン！（ゴン！）いったあ！？』

痛っ！なんか突然シャオに頭を叩かれたぞ！？一体何で！？？

『主はアホか！なんでこんな便利な物を使ってわざわざ声で半鐘のマネをするんじゃ！？』

『いや、だって…この時代の人って緊急時は半鐘で動くんでしょ？だから緊急時だから知らせようと思って……』

『普通に報せんかい！ええい、ワッチがやる！主は下がっておれ！』

シャオにそう怒鳴られて僕は下がった。うう…結局僕ってこういう時に役に立たないなあ……なんて落ち込んでいると、フィーナとイレレーヌが僕に話しかけてきた。

「明久、早く街の人達をできるだけ遠くに避難させるよ！」

「ええ、シャオが…どういふことか的確に状況を説明してくれているみたいだし、私達は被害を出さないように街の人を避難させましよう」

二人にそう言われて、僕はコクリと頷いた。

たしかに、いつ敵軍の兵士がこの街に来るか解らないんだ。なら今すぐにも逃げ出せる人を逃がしておかないと。

「ムッツリーニはどうするの？」

「……………もう片付けは終わった。俺も一緒に行く」

早っ！さっきまでたくさんスパイグッズを出してなかった！？それを今の一、二分の会話の間に全部片付けたっていうの！？良く見たら、ムッツリーニの召喚獣もいつの間にか戻ってるし……………さすがムッツリ商会の会長を務めるだけはあるな……………。

さて、僕らも早く避難活動をしなないと……………でも、それからどうすればいいんだろう。

そう思いながら僕らが屋敷を出た時だった。

「フィーナ！イレーヌ！シャオ！明久殿、土屋殿！！」

と、僕らの前には兵士の皆様方が僕らを待ち構えていた……………なぜか、兵士の人達の中央には大きな酒樽が置かれていたけど……………いや、いきなり何事！？

僕が慌てていると、兵士の一人……………たしか、ガルマンさんだった？その人が袋を抱えて僕にそれを渡してきた。

「これは……………街のみんなからもらった道具一式です」

袋の中を見てみると、オレンジグミやアップルグミ、ミックスグミにパンや卵や干し肉や魚の干物や香草、さらにこの世界に来てからムッツリーニの新たな生命線のライフボトルまで入っていた。

「……………それは、俺達が今まであんたらに世話になった礼だ」

「えっ？」

それって……どういうこと？

僕が疑問に思っただけで、ガルマンさんを見ると、ガルマンさんは僕の肩に手を置いた。

「……影人をあんた達が倒してくれた時、俺達は話しあっただけ……このままじゃいけない、ってな」

「どういう意味ですか？」

「……つまりな、俺達はこの街の兵士だ。本当なら街を誰よりも前に出て守らなきゃいけない存在なんだ」

その言葉に、ガルマンさんの後ろにいた兵士の人達が頷くのが見えた。

「なのに俺達とくれば……前の領主がいた時はクビになるのが怖くて、ただの言い成りに成下がり、奴がいなくなったら今度は俺らよりも小さな……余所者の子供に頼ってしまっている」

「えっ？」

その言葉に、僕はキョトンとなった。僕とムッツリーニはたしかに余所者だけど、フィーナ達は違うんじゃないの？と思っただけだ

「私達も……元々この街の住人じゃないの」

「えっ？そうだったの！？」

僕の言葉に三人は頷いた。

そういえばイレーヌは研究所から逃げ出して旅の途中でフィーナ達と出会ったって言ってたっけ……ということは、三人ともただ通りがかった街のリーダーをやっていたって言う事！？うわぁ……それはなんていうか……

「お人好し、などと主が言うでないぞ」

うっ！またシャオに心を読まれた！！……いやだってさぁ……

「明久、多分だけど明久だって絶対同じ事をやってたと思うよ」

「そうね……この中では一番のお人好しさんだからね」

「……………同感」

ちよ、ムツツリーニまで！？なんかさっきから色々言われてるけど、ガルマンさんが咳払いをしたので話を戻す事に。

「それで、俺達は自分達の足で歩く事に決めただ……あんた達はそのまま街を出て逃げるんだ」

「「そんなこと……！」」

僕とフィーナの叫びがハモった。けどガルマンさんが僕達を手で制した。街の人達を放って自分達だけ逃げ出すなんて……出来る訳ないよ！たった数日だけど、僕はこの街の人達にはかなりお世話になった。その人達に何もしないで帰るなんて出来る訳ないよ！！

「…………それを言うなら、俺達も同じだ」

ガルマンさんがそう言うてきた…えっ??どういう事?

「あんた達は、余所者の身で俺達の街を救ってくれた。その恩を大して返す事も出来ずにこうやって逃げ出させる準備しか俺達にはできないんだ…正直、齒がゆいばかりだ」

そう言うっていたガルマンさんだけど、決意のこめた瞳で僕達を見た。

「吉井殿、あんたは俺達に兵士としての誇りを思い出させてくれた恩人だ!ここは俺達が守る街だ!あんたらはもう十分俺達のために動いてくれた!だから…ここは俺達に任せてくれえ!!!」

そう言うつと突然ガルマンさんは僕の肩と股間を掴んでそのまま思いつきり持ち上げて　　って何でえええええええええええええええええ!???

そのまま僕はお酒とかを作る酒樽の中に放り込まれた。中には毛布が敷かれていて、痛みは無かったけど…突然のことに僕は何が何だかわからな　　「ひゃわあ!」「きゃあ!」「のわっ!」「……………っ!?!」はい?

上を見上げると、そこにはフィーナ、イレーヌ、シャオ、ムッツリーニが僕と同じように樽の中に放り込まれて……………って!

「ちよつとまぎゃばらっせにゃああ!!!」

奇妙な叫び声を上げながら四人は僕の場所に落ちてきた……………

正直…四人は、死ぬる。まあ、なんとか死なずには済んだけど、その後色々な物が樽の中に押し込められ、僕ら五人はすし詰めの状態に……うっ、フィーナやイレーヌからいい香りが…なんか柔らかなものに僕に押しつけられて……ってヤバイヤバイ！なんか違う事を考えるんだ…えつと素数だ！素数を数えよう！！1 2 3 4 5 6 ……えっ？もう間違ってるって？うそん。

「……………」

樽のふたが閉められ、外から声が聞こえてきた。

『よし！さっそく吉井殿達を川に流すぞ！！』

『慎重に運べよ！俺達の恩人を必ず逃がすんだ！！』

いや、恩人だと思っているのなら投げ込まないでよ………って、うお！

突然樽が持ち上げられ、僕は樽の中でバランスを崩して尻もちをついてしまった…と思ったら、僕の上に誰かが押し掛かってきて…僕の顔が突然マシユマロのように柔らかくて温かなものに包まれた。

「ひゃ、ひゃうん…！」

「もぶっ！？」

い、今のって…フィーナの声！？すごい艶っぽい声だったけど…まさかコレって…！い、いいいい、いわゆるあれですよね！？胸が僕の顔に！？

なんて慌てていたらさらに悪い状況に……

「う、うん！！再生の癒しを彼の者に与えたまえ……ヒール！！」

「イレー又はムッツリーニの持ち物を濡らさないように注意してて！シャオはこっちでムッツリーニに心臓マッサージをー！」

「りよ、了解！！」

酒樽の中でムッツリーニを救うべく動き出す僕ら。携帯電話の灯りを頼りに僕は『いつも通り』の要領でムッツリーニに輸血や人工呼吸器、果てはムッツリーニがなぜか持っていたAEDを使って必死にムッツリーニに救命措置を施していた。

『あ、明久殿：何やら中で色々大変な事になっていそうですが、そろそろお別れです』

外からガルマンさんの声が聞こえてくるけど、僕らには返事をしている余裕なんて無かった。ちゃぶん、という音が外から聞こえてきたから、多分川か何かに浮かばせてそこから僕らを逃がす段取りなんだろう、と頭の片隅でそんな事を考えながら僕はムッツリーニの脈を測りながら人工呼吸器を使ってムッツリーニに酸素を送り、フィーナはさつきから必死に回復呪文を唱え続け、イレー又は僕らの荷物を血で汚さないように必死にキープしてくれていたり、シャオは必死にムッツリーニの心臓マッサージを繰り返したりと、なんだかもの凄いカオスな旅立ちになってしまった……

この先、正直どうなるか…不安でしようがないよ……

『ムッツリーニは『ムッツリスパイ』の称号を手に入れました』

第十話 盗撮と盗聴と僕らの旅立ち（後書き）

称号紹介 ムツツリーニ『ムツツリスパイ』 ムツツリな彼には様々な便利グッズが…それを駆使して何をするのかは…もう誰もが知っていたりする。

やっぱりバカテスですからね、シリアスなまま突っ走るわけにもいけないので、このようなカオス展開で旅立たせてみました。

今回はかなりムツツリーニが活躍しましたが、次回はようやくバカテスメンバーの一人と合流できます！！……そう、『彼』が登場します！！楽しみに！！

第十一話 悪夢と奇襲と僕らの旅模様（前書き）

総合PV23000にユニーク数が2880…だと…嬉しいけど
プレッシャーが……それでは第十一話、ついに『あいつ』が登場し
ます…！

第十一話 悪夢と奇襲と僕らの旅模様

バカテスト

英語 次の英文を訳しなさい

S p r i n g h a s c o m e .

イレーヌ・セレスティの答え

「春が来た」

教師のコメント

「簡単すぎましたかね」

土屋康太の答え

「来い、バネよー!!」

教師のコメント

「ポ モンじゃないんですから……」

吉井明久の答え

「バネが来た」

教師のコメント

「ある意味不気味な光景になりそうですね」

??? サイド

目が覚めたら…グロテスクなゾンビの頭が釘バットで撲殺されるシーンだった。

俺はその光景に戦慄しつつ、自分の今の状態を見た。椅子に体を鎖でガッチリと固定され、両腕は後ろに回されて手錠でつながれていた。さらに両足も床に固定されていて、一步も動ける状況じゃ無かった。

「……お早う、雄二」

俺、坂本雄二の名前を呼ぶ声がする方　隣に顔を向けると…

そこには俺の小学生の頃からの幼なじみが…翔子がそこにいた。

何か言おうとしたが、俺の口には猿ぐつわがあつて文句も何も言える状態じゃ無かった。翔子は俺の肩に自分の頭を乗せると、ほう…と至福そうな声を漏らす。

「……このまま時が止まればいい」

下手に動けば俺の時が止まりそうだ。

そんな硬直状態（物理的）がしばらく続くと、ゾンビ映画が終わった。翔子は慣れた動作でDVDを取り出す。タイトルは…『乱れ狂う腐肉の雪月花』。もうどこからつっこんでいいのか解らないタイトルだ。

「……雄二、他に何が見たい？」

翔子が俺の方を向いてそう言ってくる……今はこの状況で頭を落ち着かせるため、できるならアクションとかを避けてアットホームとかラブロマンスとかの映画にしてくれると助かる……
そして翔子が取り出した映画のタイトルは……

- ・ 戦国ZONBI (上映時間4時間2分)
- ・ 屍の如く3 (上映時間3時間57分)
- ・ デッドライジング・アローン (上映時間5時間15分)
- ・ 生徒会の魑魅魍魎殲滅 (上映時間4時間59分)

どれもタイトルからして心が休まる物が無かった。

というかなんだ、このどっかで見た事のあるようなものを変えたようなタイトルは！？しかもどれも上映時間長え！一番短くてもほぼ4時間使ってんじゃないかねえか！！

「……雄二、どれが見たい？」

早く自由になりたいが、それも叶う事はないだろう。というより、翔子。『どれが見たい？』とか聞いてくるんだったら猿ぐつわぐらいい外してくれ。

「……じゃあ、全部見る」

「ッ！！？！？」

まだ何も言っていないぞ！？

というより、全部で18時間13分ぐらいかかるぞ！！？？一日が

ほぼ丸々潰れたのと一緒じゃねえか！せつかくの俺の日曜があ
ッ！！！！！！

「ハッ！！」

屋根の上で眠っていた俺は悪夢にうなされて目が覚めた。
なんつー夢を見ちまったんだ…というより、せつかく忘れかけて
いた最悪な日曜日の事を思い出すような夢を異世界に来てまで見る
なんて思ってもいなかったぞ……
冷や汗をびっしょりとかいた俺はため息をついた。

「はぁ…やれやれ」

再びため息をつく立ち上がる。
………屋根の上には刃物を持った男が四人、俺を囲むように立っ
ていたからだ。

「…誰に雇われた…って、聞くのも野暮か」

俺の呟きに反応するかのように、俺に向かってくる男達。

「あいにく嫌な夢見て気分悪いんだ……」

それぞれが手に持ったナイフで俺の体を貫こうとするが……

「遠慮はしねえ」

四つのナイフが俺の体を刺し貫く瞬間、俺は空中に飛んでいた。重力に引かれて俺の体は男達の中心に落ちていくが、俺は両足で向かい合っていた男二人の顔面を蹴りつける。

「ぐおっ!!」

なんて声が聞こえてきたが、俺はそれを無視して屋根の上に着地すると、すぐに目の前にいた奴に足払いをかける。

「うお！」

そいつはバランスを崩して屋根の上に倒れるが、俺はそいつの足をつかむと、背中から俺に向かってくる奴に向かってブン投げてやった。

「ぐおっ!!」

さらにもう一撃だ。ぶっ飛べ、バカ共!!

「魔神拳・双牙!!」

右腕を思いっきり振り上げると、奴らに向かって青い光をまとった衝撃波が真っ直ぐ奴らに向かって行く。さらにおまけに左腕からも衝撃波をぶっ飛ばす。二つの衝撃波は狙い通り奴らに命中して、そのまま屋根から転げ落ちていった。へっ、人の命を狙おうとした罰だな。

さてと……っと、その前に。

「てめえで最後だな」

俺の後ろに近づいていた奴に、ブレザーの中に隠してあったゴツイ拳銃を取り出してそいつの腹に押し付け、引き金を引いた。

ドン！ドン！ドン！

三発の銃声と共にそいつはぶっ倒れる。まあ……一応弾丸の威力は調整してあるし、死にはしねえだろ。

さてと、今度こそもう一眠りするとしようかな。調度ストレス発散できたし。

……この世界に来てからこんなんばつかだな。まあ、今の俺の状況を考えれば当然、か。……あのバカ共は何やってんだろうな。

明久サイド

「やれやれ、やっと出番か」

「いきなり何言ってるの、明久？」

僕の呟きにフィーナがキョトン顔で僕を見つめる。いや、大した事はないんだけどね……ただ単にやっと僕のナレーションになっただけの話。さあ、気合い入れないと。

クロスオパールの街から逃げた（強制的に）僕達。酒樽に押し込められて川に流されてから数時間。ムツツリー二もとりあえず一命を取り留めて、僕らは流れ着いた岸から適当に辺りを歩いてきた。

川上の方向へ行けばクロスオパールの街の方へ行くんだろうけど

… 僕は行く訳にはいかなかった。

今行ったところで僕らにはどうする事も出来ないだろうし、何より街がどんな状況なのかも解らない。敵の兵士に付けたムツツリー二の盗聴器もどうやら何らかの拍子で壊れてしまったらしく、ノイズしか流れてこなかった。

本当ならすぐにでも僕は街に向かいたかったんだけど、イレーヌに窘められて僕らはこれからの行動について考えていた。

… 本当ならイレーヌだっけすぐに街に向かって赤い鎧の連中、ラ・ジャーガの事について調べたいんだらうけど、それを抑えて僕らの事を優先してくれているんだし、ここは彼女の言うとおりにしておいた方がいいと思った。

「明久、ワールドマップを出してくれないかしら？」

「あつ、了解」

兵士の人達に渡された荷物の中に入っていたワールドマップを開いて位置を… ごめん、全然無理だ。うう、せめてこのぐらいの役には立ちたいなあ… 前は… 考えてみたら僕全然役に立ってないし…。

「ほら、明久。早くワールドマップ」

「うん……」

ため息をつきながら僕はイレーヌにワールドマップを手渡す。周りを見渡してみると、フィーナが近くの川を見ていたので、僕は気になって聞いてみた。

「フィーナ、何やってんの？」

「あつ、明久…ほら、川の中見てみて」

フィーナに言われて僕は川の中を見てみる。

川の水は現代社会ではほとんど見る事ができないくらい透き通っていた。その現代社会に生きる僕は、その川の綺麗さに思わず見とれてしまった。もっと見ようと顔を近づけた瞬間……

ザッパアン！！ 川の中から巨大魚登場した音

バクン！！ 僕の頭が魚に噛まれた音

「もがああああああああああああああああああ！！！！？」

何っ！？突然僕の視界が真っ暗に

！！！！！！？？？？ というか、

痛い！！さっきからガジガジって噛まれてる！なんか知らないけど噛みつかれてる！！

「あ、明久！？」

近くでフィーナの声が驚いたような叫び声が聞こえてくる。そりゃそうだろう、僕の今の姿はきつと恐ろしくシユールなものに違いない。

「いや、驚いている点はそこじゃないんだけど……」

？ それじゃあどこなんだろう……なんて考えている余裕はない。僕は未だ噛みついてる魚の頭だと思える場所をさっきから殴りまくり、地面に叩きつけたりしているんだけど、この魚、中々タフでさ

つきから体力が一向に落ちる気配が無い。
なんて思ってた時、突然魚の動きが鈍くなった。一体どうしたんだろう？

その答えはすぐ近くから聞こえてきた。

「明久！私が魚を引っ張るから、明久は思いつきり後ろに下がって！」

「Nice、フィーナ！」

僕は言われた通り引かれている方とは逆の方…後ろに向かつて思いつきり足に力を込めて下がった。しばらく引っ張り合いが続いていた…フィーナが思いつきりひっぱってくれているんだけど、正直首がもの凄く痛い。さらに魚も離れてたまるかと僕の頭を思いつきり噛みついてくるから痛い。Wで痛い！マジで痛い！！ちょ、血い出てない！？僕の頭から流れているのって、魚の水！？それとも僕の血！？どっち！？……なんてしばらくやっていたんだけど、魚が力尽いたのか、ようやく僕の頭から離れていった……んだけど。

「うわっ！？」

「きゃあ！？」

僕とフィーナは勢い余ってそのまま尻もちをついた。

痛てて…やれやれ、とんだ災難だったなあ…

「明久、大丈夫？」

「うん、大丈夫……ッ！？」

バツ！と僕はフィーナから目をそらした。えっ？どうしてかって

？それはね……

フィーナの白い服が濡れて肌に張り付いて下着が見えているからだよ！！

ふおおおおお！！ヤバイ！鼻が熱くなってきた！！落ち付け僕！こういう時は因数分解を数えるんだ！！え？それは数えるものじゃないって？わかって………たよ、うん！本当！！

「あ、明久………どうしたの？」

なんてフィーナが聞いてくるけど、正直言い辛いし見辛い。マズイ、このままじゃ僕の命が危ういかもしれない………でも言わないと命が危ないし、言っても命が……あれ？どっちも死ぬのか、僕。

………とりあえず何もやらないよりも、やる方が後悔は少ないっていうし、僕は意を決して行動した。

「……………（ピッ！）」

………僕は無言でフィーナの胸元を指差した。視線をそらしながら………うん、正直に言っただけが限界。言葉にもできない。だって………フィーナ、君ってホントにスタイル良すぎ。直視した瞬間、僕はムツツリーニみたいに鼻血を噴き出す事確実だ。なんだってあんなに柔らか………うっ！思い出したら鼻血が！！

「……………？……………ひゃわ！？」

ババっ！！

「可愛らしい声を上げてフィーナは自分の胸元を隠した（と思う）」

……さあ、あとは野となれ山となれだ……

僕は体の力を抜き、相手の力に逆らわずに攻撃を全て受け流す構えを取る。こうすることにより、衝撃が吸収されずに分散して、できるだけ僕の生存時間を延ばすことができるんだ……ふっ、これも美波や姫路さん、姉さんに散々黄泉の国を見せられて付いた特技なんだ。

……なんてやってたんだけど、いつまで経ってもお仕置き攻撃が来ない。あれ？おかしいな……??

僕は目を開けてみると、そこには顔を赤くしてできる限り僕の方に体を向かせないようにしているフィーナがいた。フィーナは僕の事に気付くと……

「あ、明久……こっち見ないですよ……」

「あっ、う、ごめん……」

うっわ、なんだこの展開は!?

……と、とりあえず僕は自分の着ていたブレザーを脱ぐと、フィーナに着せてあげた。

「明久……?」

「か、風邪をひくと大変だから、ね」

そうやって僕はそのまま視線をそらした。濡れた女の子の姿を見るなんて、男らしくないだろうし……実際はもの凄く見たいんだけど、ここは我慢。もしかしたらお仕置き……なんていう展開になるかもしれないから。

……って、あれ？よく考えてみればなんだこの展開は!?!?なんかどっかのギャルゲ的な展開だぞ!?!?濡れた女の子に『風邪ひくよ?』

なんて言っ上着を着せてあげるなんて！！こ、ここで『あの台詞』
が言われたら僕は……！！

「……………明久の服、暖かいや…それに…いい匂い」

「ぬぐうわあああああ

「……………！！！！！！！！」

ザッパアアアン！！！！

「あ、明久！？」

僕は恥ずかしさのあまり、勢いよく川の水の中にダイビングして
いった……落ちつけ僕！こんなギャルゲ展開に身悶えてるんじゃないな
い！！心頭滅却煩惱退散支離滅裂鳳凰天駆烈震天翔……………ぶくぶく。

「きゃあああ ……！！明久！明久あ！！」

「ちよっとどうしたのよ、フィーナ！」

「なんじゃなんじゃ？」

「……………騒がしい」

遠くからなんだか声が聞こえる…って、イカンイカン！精神集中
精神集中……………ボコボコ、ぶくぶく……………じぶつ

第十一話 悪夢と奇襲と僕らの旅模様（後書き）

称号紹介 坂本雄二『悪鬼羅刹』 幼馴染との確執により、日々喧嘩に明け暮れるようになった貴方に送る称号（超臣蔵様より）

吉井明久『ギャルゲの主人公？』 その鈍感さやフラグなどを建てる無自覚な行動はまさにそれに相応しいのだが、彼の周りにはなぜか様々な死亡フラグが盛り沢山…そんな貴方に送る称号。

さて、今回書き終えて思った事ですが…雄二ただ出てきたただけだあ ！しかもゼロス風味に！！（笑）

次回こそは！！次回こそは明久達と合流させたいと思っております！！それでは、次回を楽しみに！できるだけ早めに投稿しようと思います！！では。

第十二話 路地裏と僕と雄二の戦い（前書き）

ようやく雄二が合流しました。

第十二話 路地裏と僕と雄二の戦い

あの惨劇から二日……今現在、僕らは右手側に見える海を見ながらよくわからない道をとことこと歩いてきた。

一応、イレーヌが地図を片手に色々調べてくれて、ここをまっすぐに行けばサヴァーンっていう港町に到着するらしいけど、実は歩き始めてもう丸一日ぐらい経つんだよね。RPGの勇者達って、こんな風に世界を旅してたのかなあ……なんて思ってたなら。

「むっ、明久達！戦闘準備じゃ！！」

シャオの声に僕らは一斉に反応する。

彼女はこの世界で『獣人族』っていう種族らしくて、獣の特性を持っている人……って思えばいいらしい。それで、シャオは犬……じゃなくて狼の特性を持つてるから、耳や鼻がもの凄く効く。だからこそ遠くから近づいてくる敵の気配にいち早く反応できる。

当然僕とムツツリー二もFクラスで鍛え上げられた気配察知や特殊スキルなどを駆使してすぐさま戦闘配備を済ませる。

ムツツリー二は背中に背負っている剣　　ジ・ダークナイトを抜き、僕は左手に布で縛ってぶら下げた鞘　　TOVの主人公、ユーリが剣を持っているのと同じ感じ　　を勢いよく振って鞘だけ飛ばし、空中で剣　　エデン・ヘヴンズをジャグリングしてキヤッチ、そして構える。

……えっ？普通に腰に下げて抜いてただろ、って？いや……こっちの方がカッコいいし、僕は左利きだし……べ、別にいいじゃないか！あの鞘投げスタイルがカッコ良くてやってみたかったんだよ！！

「……………明久、来る」

ムツツリー二の言葉に反応して、僕はすぐにハツとなって構える。危ない危ない……

そしてついに僕らの前に魔獣が現れる。現れたのは二本の大きな触手を持ったローバーに、大きな亀の魔獣トータス。そしてぶよぶよとした緑色のグリーンスライム。どれもゲームの中では何度も見た事のあるモンスターだけど、実際に見てみると迫力がある。

……もつとも。

「鉄人と比べれば、ザコも同然」

僕とムツツリー二は同時に頷く。正直、鉄人の方が迫力も覇気も圧倒的に上なので大して僕らはビビらずにいる。ある意味何度も脱走を試みて良かったと、この時本当に思ったよ。人生、無駄な事なんて何一つ無いという言葉は正しいと思う。

僕とシャオ、そしてフィーナは地面を蹴って敵に接近する。ムツツリー二は素早く動いてイレーヌに近づく敵をいち早く迎撃するために後援に回ってもらっている。ちなみに、フィーナがどうして僕と同じ前衛に出ているかというと、彼女も僕と同じで剣術を扱えるからだ。

今まではメイン武器である剣を封じて、あえてサブ武器のチャクラムだけで戦っていたらしい。どうしてそんな戦い方をしていたのかと聞くと、イレーヌとシャオの動きに合わせてためと、チャクラムを自分自身の動きに馴染ませるためらしい。

そうになると僕らと動きを合わせるためにしばらくチャクラムを使った方がいいんじゃないの？って思ったけど「明久たちなら大丈夫！」って笑顔で言われちゃった。正直、信頼されているみたいだから嬉しかった。

……っと、いつの間にかローバーが僕に向かって触手を振り回していた。危ない……なんてね。

「遅い!!」

僕はFクラスの環境で身に付けた特性『集中回避』を発動させて殺気を感じる攻撃をかわすと、そのまま敵の背後に回り込む。ふっ、僕にとってこの程度の攻撃をかわす事なんて容易いことさ。

「明久!」

フィーナが僕の名前を叫んで自分の腰に下げている剣を引き抜く。彼女の剣は細剣^{レイピア}。とても細い剣で、防御とかには向かないけど……

「ピクシー・スピア!!」

ヒュヒュン!!

目にも止まらない速さで剣を上と下に閃かせ、触手を切り裂いて最後に突きを放つ。その連撃にローバーは一時的に動きを止める。細剣の弱点は一撃は弱い攻撃だけど、軽い剣だから素早い連続攻撃を放つ事ができる。その連続攻撃を活かして……

「閃皇衝!!」

僕は地面を抉るように横薙ぎに剣を振るった。剣を振った軌跡から光の壁が噴き出してローバーを真っ二つに斬り裂いた。TOGのアスベルの衝皇震の光バージョンの技、って感じかな?目の前にいる敵には強烈だけど、囲まれた時には不向きな技なんだよね……

まあ、それは置いといて……このまま一気に決めよう!

「フィーナ!」

「OK！」

僕とフィーナの間に一瞬だけ青い光のラインが現れ、僕は魔神剣を、フィーナはウィンドランスの技を同時に放つ。

リンクアーツ
共鳴術技

最初に僕が斜めに斬り上げ、隣でフィーナが逆方向に斜めに斬り上げる。その時に風の十字刃が現れる。

「「絶風刃!!!」」

風の十字刃は一直線に飛んで行ってそのルート上にいた魔獣：おつ、トータスが真つ二つになったぞ！あとはグリーンスライムだけだ！！僕とフィーナは早速向かおうとしたけど……

「……………焰」

「鷹爪襲撃！」

ムッツリーニとシャオが同時に技を放って、二人の間に青いラインが……おつ、そういえばムッツリーニ達も使えるんだっけ……
いったいどんな技なんだろう。

共鳴術技

「「クリムゾン・ドライブ!!!」」

おお…それぞれの武器に炎をまとわせた二人がスライムを囲むように攻撃して…トドメがシャオの空中からの急降下キックに、ムツツリー二の火柱攻撃！凄いい！なんかもの凄くカッコいい技だ！！えっ？それならもう少し詳しく教えるって？……僕には……無理だ……。

「やれやれ、私の出番は無かったみたいね」

そう言っつてつまらなさそうに杖で肩をトントンと叩くイレーヌ。

「そうだね。まあ…このチームにかかればこの程度の敵はイレーヌの出る幕も無く倒せるよ」

近距離中距離と戦い分けれて、回復術も使えるフィーナ。素早い動きが得意なシャオ。忍者みたいに動けるムツツリー二。攻撃術が得意なイレーヌ。このパーティならどこに行っても戦える気がするもんね……まあ、僕が足を引っ張らなければだけど。

「それはみんなが言える事よ、明久」

「そう言うものかなあ……？」

僕のできる事といえば剣を振り回しての攻撃ぐらい。しかも連続攻撃の類はあまりない。今あるものといえば『散沙雨』ぐらいだし。あとは隙の多い攻撃が多いかな？だから誰かのサポートが無いと正直一人で戦うと結構きついんだよなあ……でもイレーヌは優しい笑顔を浮かべて。

「大丈夫、あなたは十分活躍してくれているわ。でも次からは私の

出番も頂戴。明久と共鳴術技を出してみたいし」

「あっ、それは僕もそれはやりたいかも」

「じゃあ…約束よ？」

「うん！」

そっか、僕も一応役に立ってるのか……よし、なら少しでも期待に応えられるように頑張らなきゃいけないな。

「よし！それじゃあ街まであと少しだ、頑張って行こう！！」

「……オオ

！！！！」

その後も何回か戦闘を繰り返したけど、大して苦勞もしないで僕は港町・サヴァーンに辿り着いた……んだけど、着いた途端突然雨が降りだしてきて慌てて僕は宿に駆けこもうとしたんだけど……その時、僕とムッツリーニは妙な気配を感じた。

「ムッツリーニ……」

「……………（コク）誰かに、見られている」

僕らはFクラスで鍛え上げたスキルを使って……えっ？もういいって？わかった。…実は街に入った時から妙な気配……誰かに監視されているような……そう、鉄人の補習室みたいな感覚を僕らは感じ

ていた。

「ムツツリーニ、ちょっと様子を見てくるからフィーナ達を頼むよ」

「……………（グッ）任せろ」

そう言っつてムツツリーニはブレザーからスタンガンを取り出す…
…そういえばムツツリーニのサブ武器つてスタンガンだったっけ。
とりあえず、ムツツリーニに彼女達を任せて僕はそのまま彼女達と
別れて路地裏に入っつて行く。入っつてから少しして、僕は睨みをきか
せながら言い放つ。

「かくれんぼ？そろそろ出てきなよ」

僕の言葉に応えるように…屋根の上から覆面をかぶつた数人の男
が僕に向かつて襲い掛かってくる！！くっ、やっぱりいたのか！！！！
僕は鞘を投げ飛ばしてジャグリングしてから剣を掴んで、近くに
いた男のナイフの一撃を防ぐ。その横から別の奴が出てくるけど…
…甘い！

「ふん！！」

僕の右手には『ブラックレザ』っついうグローブがはめられて
いて、これで僕は拳での攻撃ができるようになってるんだ…えっ
？お前何気にユーリに憧れてるんじゃないのっか？…憧れ？何
それ美味しいの？

「だらっつしゃあー！！」

僕は近づいてきた男の鼻面に裏拳のぶつけてやった。うめき声と

共にそいつは鼻血を出して倒れる。その後すぐに僕はナイフを構えている男に向かって剣を振ろうとした…その時、僕の後ろから気配が！！

慌てて横にかわすと、さっきまで僕のいた位置にナイフが降り下るされていた。危ない…危うくやられるところ…僕の後ろに、もう一人…剣を持った男が近づいて来ていた。

マズイ、このままじゃ…やっぱり僕一人じゃ…

その時だった。

「魔神拳！！」

僕の真横を青い地面を移動する衝撃波が通り過ぎ、僕に襲いかかろうとしていた男をぶっ飛ばす…僕は聞き覚えのある聞くに堪えないブサイクな声を耳にして、後ろを振り向く。

そこには一人の男…たてがみのように逆立った赤い髪、鍛え上げられた長身の体。見るも絶えないブサイクな顔…こいつはまさしく

……

「雄二！？」

「よう、明久。お前の間抜けな顔も久々だな」

ニヤリと嫌味な笑顔を浮かべながら僕の隣に立って男をぶん殴る雄二。

「なんだと！？それは僕の台詞だ！！」

それにカチンときながら僕は剣を振って雄二の近くにいた男をぶつ飛ばす。

「ったく、久しぶりなのに全然変わんねえのな、お前」

そう言って雄二は…炎のような紋章が描かれた雄二には勿体無さ過ぎるくらい豪華な籠手を使って攻撃を防ぐ。

「それも僕の台詞、だっ！！」

僕は路地裏の入口で起きあがるうとしていた男に魔神剣をぶつ放す。

その後、僕と雄二は目の前にいる敵の攻撃を剣で、籠手で防ぎながら背後から近づいてくる気配に、雄二と視線だけで合図すると同時に僕らは後ろにバックジャンプ。

その時、偶然にも僕と雄二の間に青い光のラインが浮かび上がる。

共鳴術技

僕は魔神剣、雄二は魔神拳を同時に放つ。

最初に僕が衝撃波を放った後、今度は雄二が僕と同じように衝撃波を放つ。そして……

「「魔神連牙弾！！！！」」

トドメに僕と雄二が同時に衝撃波を放つ。僕ら二人が放った衝撃

波は今までの何倍もの大きさを飛んでいって……

「くわあああああ

！！！！！！！！」

悲鳴を上げながら男達は後ろにあった荷箱ごと、どこかにぶっ飛んでいった。

ふう、さっきはマジであせったよ。

さてと。

「明久」

「うん、雄二」

僕らは互いに笑顔を浮かべて……そして。

「くたばれえええ

！！！！！！」

同時に拳を放って相手に殴りかかった。

僕のパンチと雄二のパンチが一瞬交差して互いの顔に突き刺さる

！！くう、こいつめ……

「明久……てめえがこの街に来てくれて俺は嬉しいぜ……」

ギギギ……と僕らは互いの獲物を使って鍔迫り合いをしていた。

「ならもつと喜びなよ、殴りかかってなんかこないで！ついでに僕

にポコポコにされるバカ雄二ー!!」

「うるせえ!てめえが美少女をそろそろ連れてこの街に入ってきたのを見て、こっちは喜ぶ気が失せたんだよ!!っーか、なんでテメエが俺に殴りかかってくんだよ!!」

「雄二の事だ!僕がギリギリピンチになってから駆けつけた感じで僕に貸しを作ろうって魂胆なのは解りきってるんだよ!!」

「ちい!明久のくせに頭が回るじゃねえか!!」

やっぱり凶星か!僕がお前とどれぐらいの付き合いだと思っただよ!!それぐらいお前の普段の行動から簡単に推測できるわ!!!!

「大体明久てめえ、なんだってこんなタイミングにこの街に来てんだよ!!」

「僕にそんな事言われても仕方ないだろうが!!」

「俺がこの世界でどんぐらい苦労してるか解ってんのか!」

「知るか!僕だってこの世界に来てから色々苦労してんだよ!!」

「.....(ガンのくれ合い)!!!!」

僕らがそうやって取っ組み合いのケンカを続けようとした瞬間.....

「け、ケンカはダメ　　!!ピコハン!!」

「「んごあ!?!」」

痛い！地味に痛い！！

僕と雄二の頭にピコハンが落ちてきて僕らの頭を叩いた。初めてくらったけど、結構痛いんだね、コレって！！

頭が多少グラグラしているけど、僕はなんとか倒れないで踏ん張ると、目の前にいる金髪のナイスバディ美少女、フィーナを見る。

「痛くて…フィーナ、いきなりなにするんだよ？」

僕は頭を抑えながらピコハンを投げてきたフィーナに尋ねる。

するとフィーナは頬を膨らませて僕に近づいてきた。

「さっき路地裏でもの凄い音が聞こえたよ！明久、一体何をやってたの？」

「あつ…えっと、その……」

む、ムツツリーニめ…いったい何をやってるんだ？と思ったら、フィーナの後ろでジト目で僕らを見るイレーヌとシヤオの足元でムツツリーニが鼻血を出して倒れていた…ああ、成程。どんな目にあつたのかは解らないけど、なんとなく想像できてしまう。

するとさっきまで怒っていたフィーナが僕の体をペタペタと触ってきた。一体どうしたんだろう？

「明久、怪我とかしてない？どこか痛むとことか無い？」

「あゝ…うん。だ、大丈夫」

どうやらフィーナは僕にケガが無いか心配だったらしい。僕の体に怪我無いか体をペタペタと触ってるみたいなんだけど…正直近

すぎ、さつきからその豊満な胸が僕に当たってるんだけど。

「……明久、お前『また』なのか」

後ろで呆れたような感じの雄二の声が聞こえてくるけど、なんのことが解らないからスルー。まったく雄二といい、ムツツリー二といい、時々訳が解らないことを言ってくるから困るよ。

「あなた…明久達と同じ格好をしているわね」

イレーヌが僕らを横目に見ながら、雄二に話しかける。

「ああ、俺は坂本雄二。あんたは？」

「私はイレーヌ・セレスティ。明久の仲間よ」

「ワッチはシャオ・ムウランじゃ」

「あっ、私はフィーナ・エルセレットつていいいます。あの…どこか怪我してない？」

フィーナがそう言って雄二に向かって行く。本当に優しい娘なんだなあ。

「大丈夫だよフィーナ。雄二の心配をするなんてどぶにガルドを投げ込むようなものだよ」

「……今すぐレイズデッドが必要な体にしてやるか？」

「ふっ、そうなるのはどっちかな……？」

言いながら僕は不敵に笑ってポケットからポイズンボトルを取り出す。

すると…雄二も僕と同じようにポイズンボトルを取り出していた。

「やるか、明久……」

「ああ…いずれは決着をつけないといけないと思ってたしね」

「へっ、ほざいてろ……」

僕らは互いに相手を睨みつける。雄二め、この世界に来てからそれなりに強くなっているみたいだな。隙をなかなか見せないな……
だけど僕だってそれなりに強くなっているはずだ。

そして…互いに獲物を手にして一気に駆け寄る。

シャカシャカシャカシャカ（僕と雄二がボトルを振るう）

ブシャアアアアアア（お互いの顔にポイズンボトルをかける音）

バタバタバタバタバタ（僕と雄二が目を抑えて悶え苦しむ音）

「目があ、目がああああああああああああああああ！！

！！

くおおおおお！染みる！染みるう！！コーラよりもずっと染みるう！！！！

「やってくれるじゃねえか…明久あ」

「雄二こそ…さすがは僕のライバルだ……」

だがここからは本気だ。

僕はポケットからリキュールボトルやフレアボトルなどを取り出す。雄二も同じようにパラライボトルやダークボトルを取り出したみたいだけど……ふっ、それでこそやりがいがあるというもの。

「行くぞ明久あ

！！！」

「くたばれ雄二い

！！！」

自らの宿敵に向かって僕は走り出した……

「何やってんのかしら？あいつら……」

「あう…またケンカ……」

「ひゃひゃひゃ、面白い奴らじゃのう」

「……まあ、いつものこと」

そんな呟きが雨の降る街に溶けていった。

〳〵明久と雄二は『迷コンビ』の称号を手に入れました〳〵

第十二話 路地裏と僕と雄二の戦い（後書き）

称号紹介 吉井明久 坂本雄二 『迷コンビ』

息が合ってる様で合っていない、そんな二人に贈る称号。『くたばれ、この下衆野郎おおおっ！！！！by 観察処分者&悪鬼羅刹』

称号効果：この称号を付けた場合、特定のキャラ二人での共鳴技の威力が+10%

彼らの関係はやっぱりどの世界でも変わらないものなんですよね
（笑）

さて、実はお知らせがあります。夏休みがそろそろ終わりそうなので、更新スペースがまちまちになりそうなんです。なるだけ早めに投稿する予定なんです、遅くなるのは確実なのでご了承して下さい。

それでは次回を楽しみに！！

第十三話 宿と現状と観察処分者仕様（前書き）

一週間ぐらい空いてしまいましたが、なんとか更新します。

第十三話 宿と現状と観察処分者仕様

バカテスト アンケート

旅で必要だと思ふ物を答えてください。

フィーナ・エルセレットの答え

「友達」

教師のコメント

「なるほど、この回答からあなたはとても友達想いなんですな。先生はその思いをずっと大切にされていて欲しいと思います」

坂本雄二の答え

「吉井明久」
いげにえ

教師のコメント

「先生はこの回答を見て少々度肝を抜きました。坂本君、いくらなんでもそれは……」

吉井明久の答え

「坂本雄二」
いげにえ

教師のコメント

「……………ある意味あなた方は親友なんですわね」

激戦（雄二との）を終えた僕達は、雨で濡れた体を温めるために
フィーナ達に予約した宿屋に連れて行かれた。

ちなみに宿は相部屋だった。本当なら男女別けておきたかったの
だけれど、どうも宿屋の都合によって六人部屋の大部屋しか借りる
事ができなかつたらしい。思春期真っ盛りの男子としては少々煩惱
が出てしまいそうなシチュエーションなんだけど……………。

「……………すまない、先に逝く」

「ムツツリーニ…君だけ先に逝かせはしない……………雄二！」

「ああ、解っている。『いつも通り』だな」

そのシチュエーションにドキドキする間もなく、冥府に落ちよう
としているバカな悪友を助けるのに僕と雄二は救命活動をしていた。
まあ、ムツツリーニだしね。僕だつて結構緊張しているこのシチュ
エーションにムツツリーニのキヤパで耐えられるわけがないよね。
というか、一体どんな妄想をしたらこんなに鼻血を噴き出すのが
謎だ。

「明久、輸血パックはあるのか？」

「うん、ムツツリーニがこの世界に持ってきたみたいで、すでにム

ツツリー二に輸血しているよ」

「そうか…くっ、この脈だと心肺機能は低下している。明久、他に使えるものは!?!」

「大丈夫だよ、雄二!人工呼吸器にAEDまでムツツリー二はこの世界に持ってきているから大丈夫だ!」

「そうか、相変わらず鼻血の予防は完璧なんだな」

言いながら僕は心臓マッサージを繰り返し、雄二はベストなタイミングで人工呼吸器を使ってムツツリー二に酸素を送る。この作業を何度か繰り返し、ようやくムツツリー二の手に巻いた心電図は正常な値を示す位置になった。

「よし、あとはしばらく横になっていれば問題ねえな」

「だね。念のために不死虫とアオキノコで調合した栄養剤の点滴も打っておく?」

「なんでモンハンのアイテムがここにあるのか…: つつこんでおきたいが、まあいい…: そうだな…: ついでにライフボトルも点滴しておくか?」

「あはは、それ名案『ねえ、明久…: ん?』」

僕と雄二が会話していると、苦笑いを浮かべたフィーナ達が見ていた。一体どうしたんだろう?

「前から思ってたけど…: 明久達、随分慣れてるね」

「ははは、まあね。このぐらい日常茶飯事だし」

その言葉にフィーナ達が引きつったような顔になった。？ 僕、なんかおかしいなと言ったかなあ？

「このバカが、ちったあ言葉選べよ……」

そう言っただけで雄二が頭を抱える。なぜだ？ 僕は何がおかしなこと言っただのか……？

僕が悩んでいる間に、雄二は手を叩いて自分に注目を集めるような動作をして、僕ら全員、雄二の方に視線を向かわせた。

「まあ、とりあえずこの話題は置いておこう。まずは俺達の現状を見ることにするぞ」

「現状？」

「ああ、俺達は別世界に来ているだろ？」

「そりゃそうだよ。じゃなきゃテイルズの技なんて僕らが使えられないよ」

「そうは言っただけでねえだろ……俺達がどんな風に行動していたのか、これからの行動方針を話し合おうって言ってんだ」

それと、と言って雄二はテーブルの上にある炎の紋章が施された豪華な籠手を手に持つ。

「こいつが一体なんなのかについてもだ。ここまで言えば解ったか、

バカ」

最後が余計だけど、とりあえず雄二の言いたいことは解った。つまり僕達が今まで何をやってきたのか、それを話した上で、これからどんな風に行動するのかというのを決めようとしているのか。

雄二の言葉にイレーヌは感心したように呟く。

「たしかに……これからどんな風に行動するのは重要だわ」

「そうだね。目的も無しに世界を行動するなんて得策じゃないもんね」

二人の言葉に頷く僕達。

とりあえず僕らは今まで何をやってきたのか雄二に話すことにした。フィーナ達との出会い、モンスターとの初戦闘、初軍議。そしてムツツリー二との血塗れの出会い。影人との戦闘、そしてこの世界について。

僕らが今まで経験している事に関してある程度話し終わると、雄二は神妙そうな顔つきになっていた。

「……………腑に落ちないな」

そして次に出てきた言葉がそれだった。 ? 何言ってるんだ、こいつは？

「なあ、明久。そのラ・ジャーガっていう国は何で戦争を仕掛けてきたんだと思う？」

「えっ？この世界の覇権を手にしたからじゃないの？」

「それは解っている。問題はそこじゃない」

「えっ、それってどういう意味？」

「どうして自分達の首を絞めるような真似をしたかってことだ」

自分達の首を絞める？ますます意味が解らないぞ……なんて思ってたらイレーヌも雄二の言葉に同意してきた。

「ええ、私も同じ意見よ」

「えっ？」

イレーヌまで？一体どうということなんだろう……。

「考えてみる、明久。この世界には影人っつー化け物みたいな連中がいるんだろ？」

「うん」

雄二はまだ会ったことがないみたいだから疑問形なんだろうけど、僕とムツツリーニは一度会ってその手強さを知っている。まあ、僕の作戦勝ちでなんとかあったんだけどね。

「そいつらは世界中のあちこちで悪さをやって、国の脅威ともなってるんだ」

「そうだね」

「そんな状況でだ、国と国同士が争ったらどうなる？」

「戦争になるね」

そういうと雄二は頭を抱えだした。え？僕なんかおかしなこと言っただけ？

「それは小学生でも解ることだ。俺が言ってるのはその先の事だ」

「先の事？」

「そうだ…そうだな。例えば今のFクラスとAクラスが試召戦争をやったらどうなる？」

「雄二が霧島さんに負けて、結婚させられる」

「恐ろしい事言うんじゃないよ！！その後はどうなんのかって聞いてんだよ！！」

その後？その後かあ……えっと、雄二が霧島さんに負けて結婚させられる。FFF団が嫉妬に狂って謀反が始まる。学校で逃げまくる雄二、家に帰れば霧島さんに雄二が処刑させられる……

「樹海の奥……いや、霧島さんは金持ちだから火口っていう可能性も」

「俺の後についてじゃねえ！！というより、俺が処刑されるのは避けられねえのか！？」

「いや、無理でしょ。普通に考えて」

「……………（コクリ）」

「いつはいまさら何言ってるの？」

「……………たく、Aクラスに負けたらFクラスの設備はどうなる？」

「えっと……………ボロくなるね」

「そうだ。さらに言えばAクラスにボコボコにやられたお陰でFクラスの戦力はほぼ無いものになる」

「そりゃそうだ。というより、試験戦争をやった後って基本どこのクラスも点数が減らされて戦力が……………あっ、成る程。」

「ようやく解ったか……………」

「うん、つまり戦争をやると国同士がボロボロになるってことだよ
ね」

「ああ、そしてどうなる？」

「えっと……………」

「……………根本が影人ならどうする？」

「確実に自分よりも弱い奴を襲うね」

……………ああ、ようやく解ってきたぞ。雄二の言いたいことが。

「そういうことだ。影人つー脅威があるのに戦争をしてんのが既

におかしいんだよ」

確かにそうだ。僕らのいた街が影人という脅威にさらされていたと同じで、どこの国も影人の対策について必死なはずだ。それなのに、戦争なんてやっていけば国が弱ってしまつて影人に対抗できなくなつてしまつ。それなのに。

「ラ・ジャーガは侵攻した…言われてみればおかしいよね」

「そうだ、それがわからねえ…自分の国を疲弊させてまで、なんのメリットがあるつてんだか」

「覇権を手に入れたいのなら、自国の戦力は保つておきたいはずなのに……」

僕らの部屋に重い沈黙が満ちる。いつたいなんでラ・ジャーガはこんな事をやっているんだろう？冷静に考えてみれば、イレーヌの体の事に関しても本当にあいつらなのか？つて考えちゃうし…正直、ヒントもキーワードも何も解つてない状態で考えても意味があるのかなあ？

と思つたら、雄二も同じ考えみたいだ。とりあえずこの話はここでお終い。ここからは僕が雄二に報告する方だ。

「それで明久、お前が俺に言いたかつた三つの事つてのはなんだ？」

「うん、一つ目なんだけど……ねえ、雄二。携帯のアンテナ、立ってる？」

「ああ…さっきトイレで時間を確かめようとした時に気付いた」

そう、雄二の携帯が使えるようになっていたみたいなんだ。僕も最初この世界に来た時、携帯は圏外だったんだけど、ムッツリー二に会って携帯のアンテナが三本しっかり立った状態になった。その時他の人に連絡してもつながらなかったんだけど……

「じゃあ雄二、かけるよ」

「おう」

ピッ、という音と共に僕は雄二の番号を呼び出す。数秒後……

『……雄二、電話。雄二、電話。雄二……愛してる』

……雄二の携帯から霧島さんの声で録音された着信音が流れ始めた。しかもラヴコール付きで。

ズシャア！！！！

おお、雄二が盛大にすっ転んだぞ。まあ、解らなくもないけど……。

雄二はすぐに立ち上がると携帯をもの凄い速度で操作していた。多分今の着信音を解除&削除しているんだと思う。まあ、それは後で一緒に剣で語り合おうじゃないか、雄二。今は……。

「つながったね」

「……………ああ、そうだな」

冷や汗を流しながら荒い息を整えている雄二が僕の言葉に同意してくる。どうやら普通に携帯はつながるみたいだ。この世界に来て

からバッテリーは一向に減らないし、これからは連絡するのに結構便利になったな。だけど他の人に電話してもつながらないや…雄二も同じだった。なんでだろう？

「……おそらのだが、出会ってない奴とは携帯がつかないという仕組みなんだろう」

「それって、僕達がこの世界で出会わないと携帯が使えない、ってこと？」

「ああ…つたく、色々面倒な事になっちまったな」

まったくだ。それってつまり、出会うまで互いの安否が確認できないということだ。僕やムツリ二、雄二があの妙な空間に巻き込まれたということは、他のみんなも巻き込まれたということだろうし……姫路さん…美波…秀吉……それに霧島さん、工藤さんもみんな大丈夫だろうか……。

「まあ…俺達にできるのはあいつらの無事を祈るぐらいしかないだろう…今は自分の事に集中してろ」

一見冷たいように聞こえる雄二の言葉。けれどそれは事実だ。納得はできないけど。

「……それで二つ目なんだけど」

「おう」

「雄二、実はこの世界、召還獣をいつでも召還できるんだ…こんな風に、試験召還！」

僕がキーワード言うと同時に足元に幾何学模様の魔法陣が浮き出て、その後に僕の姿をデフォルメしたような姿の召還獣が現れる。

「わぁ…やっぱり可愛いなあ」

そう言っ僕を召還獣を抱き上げるフィーナ。あう、ちよっ…そんな胸に押し付けられないで…か、顔が顔一杯に柔らかな感触がフィードバックで伝わってくるううう!!!

あー幸せえ、窒息う。。。

「起きろバカ」

ゴスツ!!!

「痛あ!?!ちよ、何をやる雄二!!!」

「話の最中にお前が勝手に逝こうとするからだ。せめて話し終えてから逝けや」

こいつめ…それはつまり話が終われば僕はどうなってもいいって言っんだな?おのれ、こっとなったら仕返しを考えておかないと…あっ、そうだ。あれがあった。

「ねえ、雄二。一応雄二も召還できるか試してみてよ。もしかしたら僕とムツツリーニだけ、っていうオチかもしれないし」

「ん?まあ、それもそうだな。確認のために召還しておくか…試験召還!」

雄二の言葉と共に魔法陣が展開され、その中から現れる雄二の姿をデフォルメしたようなので、白学ランの裏に虎が刺繍され、その手に棒を持った僕と同じチンピラ装備をした召還獣だった。

「わぁ…こつちも可愛いね」

「ん、そうか？」

「うん！明久やムツツリー二さんののも可愛いけど、雄二さんののも可愛いなあ……」

「あはは、そうだね。本人はブサイクだけど」

「微少年のお前よりはマシだ、バカ」

おのれ雄二……今すぐにも僕は雄二を八つ裂きにしてやりたい衝動を抑えて僕は雄二に一つの事を教えてやる事にした。

「雄二…いい事教えてあげようか？」

「あ？」

「目指せ、世界チャンピオン（ゲシッ）！！」

言った瞬間、僕は思いっきり雄二の召還獣を蹴り飛ばし、タンスの角に頭をぶつけてやった。その結果、雄二は……。

「のぐうわぁあああああああああああああ……！！」

突然頭を抱えて床に悲鳴を上げながら転げまわる雄二を見下ろし

て僕は優越感に浸る。

「あ、明久……これは、どういう意味だ……」

「教えてあげるよ、雄二。この世界での召還獣は……全て僕の召還獣と同タイプになるのさ」

「なっ……しよ、召還獣が観察処分者仕様になっっているだど!?!」

おお、雄二が今までに無いってくらい驚いてるなあ。

この世界で召還できる召還獣は、観察処分者の特性を引き継いでいるかのように、物理干渉できたりするんだけど……実はフィードバックの特性も引き継いでるんだよね。ムッツリーニも一度同じような目に会って大変な事になったんだけど……くくく、雄二、ざまあみる。

さてと、最後の一つだけど……まあ、これは僕がただ単に気になるって言うだけの話なんだけどね。

「ねえ、イレーヌ」

「あつ、な、何かしら?」

突然の僕らのやり取りに啞然としていたイレーヌが、僕の言葉にハツとなっていた。まあ、これが僕らの日常な訳だしね。とりあえず僕はイレーヌに質問する。

「雄二の八耀士の伝説って何?」

そう、僕が知りたかった……ついでに雄二に教えておきたかったことだ。僕が『バカ』でムッツリーニが『ムッツリスケベ』として語

り継がれているんだから、雄二だってそれ相応な内容に違いない。

「えっと…火の籠手イグニート・ブレアだから……たしか『数多くの兵を率いる知将、その身に劫火の如し信念を持つが、水の姿を冠した愛する者には弱い』だと思っただけ」

「おい……それは……つまり……」

頭を抑えた雄二が青い顔をして聞いてくる。水を冠した愛する者……水、水……ああ、なるほど。僕は頷くと、雄二のために言ってあげた。

「つまり雄二は霧島さんに尻に敷かれているって語り

」

「唸れ俺の灼熱の拳い！……！……」

「 ツツツツ危アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア……！！！」

炎をまとった雄二の拳が僕の顔面に一直線に向かってきたので、僕はマトリックスのようにその一撃をかわす。おのれ！何をしやがる……！

「ふざけんな！なんで異世界に来てまで翔子に弱いと語られてんだよ……」

「……雄二、安心しろ。明久はバカとして語り継がれている」

「ムツツリーニはムツツリスケベとしてだけ」

「「「.....o r s「「「

僕ら三人はガツクリと肩を落とした。

正直、異世界に来てまで僕らの立場はあまり変わってないという事が今回の話し合いで解ったことだったかもしれない.....今更だけどね（涙）

「「坂本雄二は『語り継がれし尻に敷かれマン』を手に入れました
「「

「いるかあああああああ

！

「！...！」

第十三話 宿と現状と観察処分者仕様（後書き）

称号説明 坂本雄二 「語り継がれし尻に敷かれマン」 実家だろ
うと、学校だろうと、異世界だろうと変わらぬ関係。変わらぬ好意。
あなたはもう、彼女からは逃げられない…… 『捕まっただまるか

！！！！by悪鬼羅刹』 ……逃がさないby学年主席』

坂本君はどこまで行っても霧島さんからはけして逃れぬ運命なの
ですね（笑）

次回もなるだけ一週間以内に投稿しようと思います！では。

第十四話 二重召喚とバーストアーツと血塗れの少女(前書き)

今週は一挙二話更新です！

第十四話 二重召喚とバーストアーツと血塗れの少女

「……………とりあえず、お前らが今までやってきた事は大体解った。
となると、次は俺だな」

雄二にピッタリな称号が入ってから数十分、ようやく落ち着きを取り戻した雄二は、ようやく自分がこの世界に来てからのことを話し始めた。

「俺は気がついたら近くの森の中に倒れてたんだ」

「えっ？嵐の海に投げ出されたんじゃないの？」

と僕が言うと雄二とムツツリー二は三白眼になった。え？違うの？

238

「明久、お前よく生きてたな……………」

「えっ！まさか僕だけなの!？」

「……………（コクリ）俺も、森の中だった」

そんなバカな!？なんで僕だけ嵐の海に投げ出されて雄二達のように前科持ちがなんで僕のように酷い目に会ってないんだ!？

「誰が前科持ちだ、バカ。そんなの知らねえよ」

「嘘だ！絶対に雄二がなんかやったに違いない!！」

「俺にあの状況で何ができたんだよ!？」

ぐうぐうづ……腑に落ちん!納得できない!!なんで僕だけこんな目に……と思ったらフィーナが僕の肩をぽんぽん、と優しく叩いた。

「あ、明久……落ち着いて。ね？」

そう言つて優しい目で僕に語りかけてくるフィーナ。ぐう、命拾いしたな雄二。

「なんで俺がそんな目で見られなきゃなんねーんだよ……まあいい。それでそのまま街道に行つてみたら、この街の自警団の連中がモンスター……魔獣供と戦つてるのを見てな、情報を手に入れられるだろうと思つて、そいつらの代わりに魔獣供をぶつ飛ばしてやったんだ」

「へえ……ひよつとしてその時にはもうイグニート・ブレアは持つてたの?」

「ああ、森の中で魔獣に出会つてな、その時に手に入った。まあ、だからこそさっきのような案も浮かんだんだがな」

なるほど、さすがに向こうでは悪鬼羅刹つて言われた雄二でもさすがに丸腰で魔獣と戦うなんてのは無理みたいだ。それもそうだろう、向こうでは僕も雄二もムツリーも色々と異名……僕の場合は観察処分者つていう不名誉極まりないものだけ……を持つているけど、それでも普通の人間だったわけだ……えっ?それは無理があるつて?知らん。

……今でこそ、魔獣と普通に渡り合えるぐらい強くなつてるけど、それは僕らが伝説の武器と召還獣を持っているからだ。無かつ

たら……せいぜい善戦するぐらいだったと思う。えっ？っ。やっぱり普通じゃないじゃんって？ 聞コエマセン。何モ聞コエマセン。

「それで俺はこの街で『旅の傭兵』って事にして、ここで働いてたんだよ」

「へえ、傭兵か…それって僕でもできるかな？」

「安心しろ、魔獣と戦うだけだからバカでもできる」

言った瞬間、さっきまでのイライラに加えて今の一言に腹が立った僕は雄二に殴りかかるうとしたけど、イレーヌとフィーナが僕を後ろから抱きついて僕を抑える。

「だ、ダメだよ！ 落ち着いてよ明久！！」

「明久、雄二に襲いかかろうとしないで！ 話が進まないから！！」

「なんで止めるんだ二人とも！ こいつには今すぐ僕の秘奥義であるアインソファウルをくらわせなきゃいけないんだ！！」

「それは体罰じゃなくて処刑じゃろ」

シヤオが呆れたような視線で僕を見る。

ぐううう… 命拾いしたな雄二い！！ 二人の優しさに今だけは感謝しろ… 今だけはな。

「雄二とやら、あまり明久をからかうでない。話しが一向に進みません」

「おう、悪いなシャオ」

僕に謝る気はないのか？

「そんなものない。でだ、傭兵を続けていて解ったんだが…この街、どうも税の徴収が他の町よりも重てえんだ」

「えっ？」

「海に行けばバカ強い魔獣がいて船もロクに出せない状況だし、漁師の連中は船を出せずに税を貯める一方。貧しい連中は税そのものを払える状況じゃねえ…それで自警団の連中も必死になって稼いでるんだが…思った以上の成果が出てねえんだ」

雄二の話聞いてフィーナ達が悲しそう顔をした。僕はというと…少しだけ、ここの街の領主に腹が立っていた。

「まったく…この街でもそのような奴がおるんじゃない…腹立たしい」

シャオが憤慨したような言葉を口にする。まったくだ。

なんとかいうか、僕らがいたクロスオパールの街よりも悪い状況のように感じる。あそこは影人っていう脅威には見舞われていたけど、僕らが退治してしまえばそれで終わりだった。その後は本当に平和そのものだった。

そうになると、僕らのやることは一つだ。

「ねえ、雄二。今から屋敷に向かって領主を追い出さない？」

「あ？」

「だから、僕らが暴れて領主を追い出すんだよ。そうすれば……」

「いやそれは無理だ」

雄二がそう言っつて首を横に振る。なんで？さっきも言っつたようにこの街の領主を追い払えばクロスオパールのように平和に……そう思っつていた僕の考えが浅はかだと、次の雄二の言葉で思い知らされた。

「税を払えない街の子供が人質に取られてんだよ」

「……なっ！？」

雄二の言葉に僕ら全員驚く。子供が人質つて……そんな。

「税金が払えない家族は例外無く子供をさらわれる。もうこの街の大半は子供を連れ去られている……解つたか？下手に踏み込めば子供がどうなるかが」

雄二の言葉に誰も反論できなかつた。なんだよそれ……税金が払えなきゃ子供を返さないなんて……そんなのつて……僕が拳を握り締めていると、雄二が真剣な顔つきで僕をまっすぐと見ていた。

「明久、お前が今感じてるのは解る。俺も納得がいなくて実は領主の屋敷の周りを調べてたんだ」

「……えっ！？」

僕ら全員の驚きの声が出る。

マジで！？普段作戦や指揮とかそうこのばかりやってた雄二が！？

「ああ……って言っても、俺はムツツリー二みたいにスパイ活動は専門じゃねえからな。中々上手くいかなくてついには目を付けられちまう始末だ」

「ひょっとして……僕らが戦ったあれって……」

「ああ、俺の命を狙っていた連中だ。多分俺と同じ格好のお前らを見て、俺の仲間だと思ったんだろ。まあ、間違いでもないがな」

なるほど、街に入った時に見られている感じだったのは、文月学園の制服を着た僕らを雄二の仲間だと思って監視してたからだったのか……あながち間違いでもなかったけどね。

「とりあえず、ムツツリー二には早速スパイ関係の仕事をやってもらおうと思う……いけるか？」

「……問題ない。すぐにでも出れる」

「そうか、頼むぞ」

「……了解。とりあえず、これ」

そう言ってムツツリー二は雄二にトランシーバーを手渡した。試召戦争の時にもかなり有効活用していた物だし、携帯を持たないムツツリー二にはこれで連絡が取れるね。

「よし、一時間毎に連絡を頼む」

「……………（コク）」

雄二の言葉に頷いた後、ムツツリーニは荷物を持って部屋を出て行った。きつといい仕事をしてくれるに違いない。

「さてと、ムツツリーニが戻るまで俺らはとりあえず最低限の準備でもしておくか」

「準備って何をすればいいの？」

「回復用のグミやボトル関係は必須だろ。あとは携帯できる食料だな」

「えっ？塩水ならすぐ傍にあるじゃないか」

「ここは港町なんだから、海水なら波止場に行けば大量に食料は手に入るじゃないか。」

「……………」

僕の言葉にフィーナ達が一斉に三白眼になる。え？何かおかしい事言っただ、僕？

「……………それで耐えられるのはお前だけだ、バカ」

「明久…あなた前にも言っただけど、普通はそんな食生活なんてしないからね」

「そんなバカな！？僕は実際に昼食をソルトウォーターで乗り切ったんだよ！！」

「それが塩水なのには代わりねえだろうが、バカ……」

雄二が呆れたように言ってくる。けど人間って水だけでも一週間ぐらいは……

「明久……ワツチの干し肉、いらんかえ？」

「明久…今度…ううん、次からは食べたいご飯はなんでも言っていよ。好きなものを好きなだけ作ってあげるから……」

二人の優しげな目や言葉が今は逆に辛い。

「まあ、明久うんぬんはこの際置いておく。とりあえず準備をするぞ、フィーナとシャオは一緒に買物に行ってもらおう。イレー又と俺はムツツリー二の情報を元に作戦を練っておくぞ」

「僕は？」

「ほらよ」

そう言っただけで雄二は僕の手一枚の紙切れを手渡した。何だこれ？なんか魔獣の詳細と地図が載せられているけど……まあ、イレー又のおかげでそれなりに英語が読めるようにはなったからなんとかこれも読めるっちゃ読めるけど。

「俺が今日退治する予定だった魔獣だ。さっさと行って来い」

「なんで僕だけコレ!?!」

「作戦立てるのにバカはいらねえ。その間は暇だろうし、お前が余計な騒ぎを立てるのは目に見えている。だから街からとっとと離れてそいつを倒してる。今後の資金にもなるからな、それぐらいは役に立て」

フィーナ達とのあまりの扱いの差に僕は涙した。

「まったく雄二の奴……………」

雨が降る中、僕はエデン・ヘヴンズを肩に担いで森の中を歩いていた。

なんで雨が降っているのに外に出ているのかというと、理由は単純だ。魔獣が雨の日じゃないと出てこないからだ。なんだか特定の天気じゃないと出てこない魔獣がいるらしい。それが今から僕が退治しようとしている魔獣…ホーン・スネークだ。

写真…じゃない、絵を見ると蛇の頭に水牛のような角を持った化物物だった。やれやれ、こんな奴と戦え、だなんて雄二も無茶を言ってくるよ。

「まあ、鉄人と比べればザコなんだろうけど」

そう自分に言い聞かせ、僕は雨が降っている中、森の中を歩き続ける。なんでも森の奥にある沼地にそいつはいるらしい。これは帰るのが夜になるかもしれないなあ……………。

ちなみに僕の体にはあの若草色のオーラ…『天ノ羽衣』っていうのをまとつていて、これはちょっとした防御呪文みたいなものなんだ。たとえば体が羽のように軽くなって通常よりも素早い動きが可能だし、このオーラは敵からの攻撃を防いでくれる効果もあって、今現在僕はこれを雨具のように使って雨を弾いているってわけ。うーん、便利。

「さてと、早めに行かないと……むっ」

僕は鞘を投げ飛ばし、ジャグリングして構える。

その瞬間、巨大な黒い熊　　ブラックベアという魔獣が襲ってきた……三体も。

「げっ、三体!？」

丸太のように太い腕から繰り出される爪の一撃を僕はかろうじて避ける。その時、僕の胸元のネクタイがビリ、という音を立てた。危なかった…あと少し避けるのが遅かったら確実に一撃をもらっていた……。

「三対一か……なら」

僕は腕を突き出し、その腕に装着されている腕輪を使う……そうこの腕輪は……!

「^{ダブル}二重召還っ……!」

僕の呼び声と共に腕に装着された白金の腕輪が光りだし、目の前

に二つの魔法陣が顕れ、その中から二体の召還獣が現れる。これは以前召還大会で僕と雄二が手に入れた腕輪で、主獣と副獣…つまり、召還獣を二体同時召還できるものなんだ。

これで数は同じだ……行くぞ!!

「でやあ!!」

僕は踏み込むと同時に一気に跳躍する。召還獣達もそれに続く。そして狙いを僕の近くにいるブラックベア一体に集中させる。

これには理由がある。いくらなんでも一体に一人ずつなんてのは、まず無理。目の前の敵と戦いながら近くの召還獣の様子と敵の様子を同時に見ないといけないし、そんなのは残念な事に、不可能に近い。

だからこそ僕は標的を一体に絞る。僕と主獣で集中攻撃。副獣は横から襲い掛かってくる敵の応戦、もしくは一緒に戦う! シンプル・イズ・ベスト! これが一番効率の良い戦い方だ。

「いけえ!!」

そう言っただけで主獣がブラックベアの足を攻撃する。その攻撃によるめくブラックベア。そのまま副獣がブラックベアの脳天に木刀を叩き込み、ブラックベアはその一撃が効いたのか、地面に背中から倒れた。チャンスだ! トドメは僕が一気に仕留める!!

「爆砕陣!!」

空中で一回転すると、そのまま剣をブラックベアの腹目掛けて振り下ろす。

ドガン!!

「グウアアアア

！！！！！」

僕の一撃を受け、ブラックベアが断末魔の叫びを上げる。よし、まずは一体目だ。

「グルウア！！」

「くっ！！」

殺気を感じた僕は、とつさに空中に跳んだ。

するとさっきまで僕がいた地点にもう二体のブラックベアの一撃が振り下ろされていた。

あ、危ない……あと少しかわすのが遅かったら確実にやられていた。

だけど調度いい。ここは牽制だ！！

「蒼破刃！！」

僕は剣を振り上げる。その先から蒼い衝撃波がベア達に向かって飛んでいく。この技は魔神剣の改良版で、魔神剣を空中で発動すると、こんな風に蒼破刃に変わるんだ。まあ、魔神剣の方が威力は上だし、蒼破刃にすると貫通性がなくなるんだけどね。

「グルウ……！！」

僕の蒼破刃の一撃を受けてブラックベアの一体が体制を崩す。今だ！！

僕は召還獣に命令を出すと同時に着地し、自分も攻撃の体制を取る。召還獣達がブラックベアの足を同時に払うと、そのまま僕は駆

け出す。

「魔神閃光弾!!!」

剣による連撃をくらわせると、そのまま跳躍してからの魔神剣の
パワーアップ版をブラックベア達に叩き込む……よし、今だからえ
!!!必殺・バーストアーツ!!!

「腹あくくれ!!!天龍滅牙!!!」
てんりゅうめつが

僕は目にも留まらぬ速さで剣を振るう。これは最近気付いた事な
んだけど、僕らは奥義からつなげるようにバーストアーツを発動で
きるんだ。当然、フィーナ達やムッツリーニ、多分だけど雄二も使
える。

「グルウアアアアア
!!!!!!」

!!!

僕のバーストアーツを受けて堪らず悲鳴を上げて倒れるブラック
ベア達。

ふふふ、まさかこの世界でユーリ達が使っていたバーストアーツ
を扱えるなんて…思ってもいなか……

「んぎゃあああああああああああああああ!!!」

突然僕の腹に走る激痛。痛い!血は出てないけど痛い!!!しまっ
たあ!!!

僕の前には真つ二つになった召還獣があった…うう…うっかり斬
ってしまったみたいだ。せつかく格好よく決めたところなのに……
……。

僕はポケットに入っていたアップルグミを食べた。体力は回復したけど、りんご味のグミに塩気があった……。うん、塩気が利いて中々美味かったよ。

あれから一時間、それなりに戦闘を繰り返しながら僕は森の中を歩いていった。多分、そろそろ目的の沼地が見えてきてもおかしくないと思うんだけど……。なんて思ってたなら、ようやく目標の沼地が見えてきた。

「さてと、ホーン・スネークは……。っ!？」

目標を探そうとした時、僕は懐かしい臭いを感じた。

そう、かつてFクラスで何度も見てきて……。そして自らも流し、浴びた……。血の臭いだ。

僕は鞘を投げて剣を手取る。どうでもいいけど、この後鞘はどうするんだ、っていう言葉はやめてね。気付いたら手元に戻ってるんだもん。ご都合主義ということだ。

「……………こっちか」

僕は血の臭いがする方に向かって歩いていく。できる限り気配を小さくして音を立てないように移動する。ふっ、まさか鉄人の授業から脱走する時に身に付けたスキルが役に立つなんて……。って、この説明は何度もやってるか。

ひょっとしたらホーン・スネークが獲物を捕らえて捕食中、なんて場面に出くわすかもしれない。それならそれで好都合。蛇っての

は、食べている間は獲物を飲み込むのに必死で、他の行動は一切取れないから、その隙について倒せる。

僕はそう考えながら血の臭いの発生源に辿り着く。

まるで丸太のように太く、長い体……そして蛇の頭に水牛のように捻じ曲がった極太な角を持ったアナコンダみたいに大きい巨大な蛇……ホーン・スネークがいた。

とりあえず、初めにその巨体を見て驚いたけど、僕は大体予想してたので、これはOK。

そして辺りには夥しい程の血痕がある。これも臭いから察してたので問題なし。

でもさすがにこれは予想外だった。

だって……一人の、僕よりも背が低い女の子が……その蛇の首に噛み付いて血に塗れながら蛇の血をすすっていたのだから……。

「……………えっ!？」

僕は思わず声を上げていた。

だって僕が倒そうと思ってたホーン・スネークが倒されていて、さらにそれを倒したのが僕よりも小さい女の子で……その女の子が血をすすってるんだよ!？」

「……………見てしまったんですか？」

女の子が立ち上がる。

見たところ、身長は僕より頭一個半ぐらい低い感じかな……子猫を

思わせるような金色の瞳に水色の長い髪……服装は……なんていうか、黒いドレスって言うていいのかな？それと黒いブーツ。そして、体中についている夥しい程の血。

一見してみると、彼女から流れているみたいに見えるけど……それは近くで死んでいる蛇の血だ。それが彼女にかかっているだけだ。

「……見たんですよね？」

雨の中、僕と彼女は出会った。

第十四話 二重召喚とバーストアーツと血塗れの少女（後書き）

バーストアーツ紹介 吉井明久 『天龍滅牙』 ユーリの天狼滅牙を明久なりにアレンジしたバーストアーツ。最後の一撃に敵を大きく浮かせるので、つなぎとしても役に立つ技。

さてさて、ロリキャラが出てきましたが…これから明久はどうなるのか、次話をお楽しみに！

第十五話 名付けと牢屋とオーバーテクノロジー（前書き）

フィーナ「最近、少しずつ影が薄くなってきたような……」
「ごめん、もうちょっと出番待って。」

第十五話 名付けと牢屋とオーバーテクノロジー

「…見たんですよね？」

降り注ぐ雨の中、その雨を浴び続けながら、血塗れの姿の……僕より頭二つ分くらい低い女の子が僕を見てそう言った。

「……………えーっと、この状況ってどうすればいいんだろう……こういうのって、確実にこの後かなり危険な感じのフラグが立つ展開だよな……………どうしよう。そうだ！こういう時は漫画やゲームとかの主人公みたいな雰囲気になればいいんだ！ようし、ここは名作の『シンフォニア』の主人公になりきるような感じで……！」
僕はいったん深呼吸をして、相手の女の子の目を見ながら口を開く。

「人に名を尋ねるときはまずは自分から言うものだ！」

「…はい？私、名前なんて言ってますんよ？」

しまったああああああああ

！！！！！！

何やってんの、僕！？いくらなりきると言っても今のセリフはこの状況には不適切すぎる！！いやでも言ってみたかったセリフなんだけどね……………よし、シンフォニアがだめなら他のシリーズならどうだ！！

「アキヒサ・ヨシイ…それが僕の名前。君は？」

「…一応修正しようとした気持ちには解りますが、ぶっちゃけ思いつきり不自然です」

ぐつはあ！以外に厳しい一言が…うう、だってこれぐらいしか思いつかないんだもん！

女の子はため息をついた後、真剣な表情になった。

「…とりあえず、私の最初の質問に答えてもらいます。見たんですね？」

「うん」

彼女の真剣な表情に僕は頷く。

「…それで、あなたはどうするんですか？」

「へっ、どうするって？」

いきなり僕に向かってどうするか発言。そう言われても…

「どうするって…うん、僕はただそこで倒されてるホーン・スネークを倒しに來ただけだし…まあ、一応は倒した証を手に入れたいかな？」

そう言っつて僕はアナコンダ並みの大きさに若干ビビリながら僕は蛇の口を無理やり開けて、その中の牙を引き抜く。ついでに頭の水牛のような角を引っこ抜こうとする。

「むっ……」

これは…思った以上に深いな。僕は思いつきり力を込めて引っこ抜こうとするけど、一向に抜ける気配はない。

「ぬぐぐぐぐぐぐ……」

腰に力をいれ、綱引きの要領で角を思いっきり引つ張る。くそう、なかなか抜けな

ズルウ（雨のせいで濡れた角で手が滑った音）

ズシャア（僕が泥だらけの地面に後頭部から落ちた音）

ゴロゴロゴロゴロ（背後が坂だったせいで転がっていく音）

ガツン（途中にあった木に額を打った音）

音）
ゴロゴロゴロゴロ（頭の痛みにしたうち回りながら転がっていく

音）
バツシャアン（沼に顔面から突っ込んだ音）

「ぎゃあああああああ！頭があ！！というよりは頭部が集中的に痛い！！！目があ！目がアアアアアあああああああ
あ！！！！！！」

ぐうおおう、なんだこの連続集中的コンボは！？最初に後頭部、額、トドメに顔面つて…どうして満遍なく頭部にダメージが！？しかも沼に突っ込んだ時に目にも沼の泥水が入って染みる！！コーラやポイズンボトルに比べれば微々たる威力だけどやっぱり染みる！！と、僕が沼の中で頭の痛みにした打ち回っていると、僕の前に手が差し伸べられた。

なんとか目をこすって視界を取り戻すと、そこには呆れ顔のさっきの女の子が僕に手を差し伸べていた。

「…何やってるんですか」

「うう、ただ単に角を取ろうとしたただけだよ……」

初対面の女の子に格好悪すぎるところを見られてしまい、肉体的なダメージと僕のメンタルに若干のダメージが…

「…そもそも角というのは引っ張って取れるものではありませんよ」

「えっ？」

突然の言葉に僕は驚き、女の子は呆れながら応える。

「…角というのは頭蓋骨から直接伸びています。ですから持ち帰るのなら角を折るか斬るかしなければいけませんよ…というより、いつまで沼に浸かっているつもりですか？」

うっ、こんな僕よりも年下の女の子に教えられるなんて…メンタルに更にダメージが…まあ、この子の言うことには一理あるし、とりあえず僕は彼女の差し伸べられている手を握る。

……思ったよりも、ずつと小さな手。なんだかこのまま少し力を入れたら砕けてしまうんじゃないか、と思えるくらいに…あれ？それじゃあどうやってあの蛇を倒せたんだろう？

「…あの、早く上ってくれませんか？」

「あっ、じゅめん」

女の子にそう言われて僕は立ち上がろうとした、瞬間。

「あっ！」

「えッ！？」

ズルウ（女の子が足を滑らせた音）

ズドツ（僕のみぞおちに女の子の膝がめり込んだ音）

バツシャアン（二人して沼に落ちた音）

「…す、すみません！」

「だ…大丈夫……」

慌てたように女の子が謝ってくる。

痛い！もの凄く痛い！！みぞおちは人体急所だから下手すると死ぬ部位なんだよ…うう、でもすぐに謝ってくれたみたいだし、ここは年上として優しく赦してあげよう。なんてことを考えながら僕の上に乗っている女の子に話しかけようとしたら……

「大丈夫…：…お願いします…：…なんでもします。ですから、ですから……」
えっ？」

彼女は頭を抑えて、もの凄く体を震わせていた。

えっ！？…どうしたの！？？

「ね、ねえ！…どうしたの！？」

女の子がバツと僕の首から顔を離す。その頬は若干だけど赤くな
ってた…えーっと、今この子もしかして……

「…す、すみません……気付いたら吸ってました」

「えっ？」

マジで？僕今、血を吸われてたの？いやいや、そんなのありえな
いよね。だって別段痛くなかったし……いやいや、まさかね。うん。

「吸血鬼になるなんてありえないよね！うん！！」

「…何を言ってるんですか？」

呆れ顔で僕に聞いてくる女の子。いやいや、元はといえば君が僕
の血を吸ったからであって……あれ？

「ねえ、さつきも血を吸ってなかった？あの蛇の」

「…はい。確かに吸ってました……って、見てなかったんですか？」

「いや、見てたけど…」

あれでお腹一杯にならなかったのか？自分よりもはるかに大きい
アナコンダの血をすすっていて、それでまだ足りないなんて…この
子の胃袋ってどれぐらいの大きさなんだろう。

「…言っておきますが、胃のサイズは平均的です」

「えっ？なんで僕が考えてる事が解ったの？」

どうして僕の周りは考えが読める女の子が多いんだろう……

「…ぶつちやけますと、言葉にしているので駄々漏れです」

「バカな!？」

秀吉には及ばなくても、それなりにポーカーフェイスが得意だと思ってたのに!!

なんて考えていたら女の子が口元を触りながら聞いてきた。

「…あの」

「ん、どうしたの？」

「…気を、失わないんですか？」

「へっ?」

いきなり何言ってるの、この子?

さっきの噛み付きなんて特に痛くなかったし、血を吸われている間も別になんとも……

「別に平気だけど……」

「…本当ですか!？」

そう言って僕に顔を近づけてくる女の子。いやあの、もの凄く近いんだけど……それと、さっきから僕達かなり密着してない?しか

も沼の中で。正直いつまでもこのまま、って訳にはいかないから、とりあえず僕は彼女に提案してみた。

「とりあえず…沼から出ない？」

「……そう、ですね」

僕に言われて、ようやく自分達の現状に気付いたみたいだ。僕達は沼に落ちないように気をつけながらゆっくりと陸に上がる。

「うえ、あちこちどろどろだ……」

沼の泥や苔で正直、僕の着ている文月学園の制服は見るも無残な格好になっていた。僕と同じように、彼女も体中泥だらけだった。まあ、雨が汚れとか流してくれるんだろうけど、さっきも言ったように、このままじゃ風邪は確実だ。

「風邪ひいちゃうな…どこかで服を乾かせる場所ないかな？」

「……………」

？どうしたんだろう、なぜ僕から少し距離を取ってるような…

……

「…年下の服を脱がしたいんですか？」

「誰もそんなこと言ってないのに!？」

とんでもない言葉が飛んできた。僕はただ風邪をひかないためにどこかで休める場所を探そうかと思ったただけなのに!

「…ちなみに、「冗談です」

「えっ？あ、そうなの……」

「半分は」

「え？もう半分は!？」

なんかこのやり取り、雄二と一緒に新学期の頃にやったような気がする。

「…まあ、あなたにそんな打算があるとは思えませんけど……とりあえず、向こうに根元が大きく開いた木がありましたので、そこに行きましょう」

女の子が指を指す方には、少し遠い場所にある大木の根元がぽっかりと開いている場所があった。

「うん。そうだね…えっと」

そこまで言うてから僕は気付いた。僕、この子の名前知らないや

……

「ねえ、君の名前は？」

「……………018」

「せろいちほちっ」

なんだそりゃ？もの凄く変わった名前……というよりは、なんだかマンガとか禁書とかで出てくる生体番号とかそういう印象があるなあ。

「それ、君の名前なの？」

「……………私の番号です」

「……………」

うーむ、なんだかマジで禁書目録の生体番号とかの雰囲気だなあ。でも番号じゃなあ……………あつ、そうだ。

「じゃあ、エステルって名前はどうかかな？」

「……………えっ？」

女の子……エステルが驚いたような顔で僕に振り向く。
ははっ、そりゃ驚くよなあ……でも僕はこの子に『エステル』って名前をあげたかった。TOVのあの子とは性格とか体格とか全然似てないんだけど、僕はどうしてかそんな名前をあげたいと思った。

「エス、テル……………」

「うん。勝手につけちゃったけど……どうかな？」

「……………」

エステルはしばらく「エステル……エステル……」って小さく呟いていた。よくみたら、無表情だったエステルの口元が微かだけど笑

っていた。きつと嬉しいんだね。

「さっ、エステル。早くいかなッ！！（ゴスッ）」

突然後頭部に痛みが…うつ……一体、だ…れ、が……ここま
で考えながら僕は泥の地面に倒れた。うつ…視界が揺れる…。揺れ
た視界の中、僕の横から全身鎧を着た兵士が数人…多分、こいつら
が僕を…！！

僕は見た。エステルが…さっきまで少しだけ笑顔を浮かべていた
エステルが……小さな体を震わせていた。

ギュツと強く目をつぶって頭を抱えて小さな体を更に小さくして
いた。エステルの前に一人の…白衣のジジイが歩み寄った。

「ふん、まったくたかが血を吸いにいくのに、どれだけ時間を使っ
ている！この愚か者が！！」

ゴスッ！！

鈍い音が雨の中に響いた。エステルがそのまま湿った地面に倒れ
る。

こ、このクソジジイ……女の子の頬を殴りやがった…極悪な雄二
でもそこまでやらないぞ……！！！！

僕が今のジジイの行動に怒りを覚えていると、倒れたエステルの
頭に汚い靴で踏みつけ始めた。こ、この下衆野郎おおおお！！！！

「か…ら……」

「ん？」

全身に力を込める。視界はまだグラグラ揺れているけど…そんな

こと関係ない！！こいつだけは…こいつだけは今すぐぶっ飛ばさなきゃ気が済まない！！！！

「エス（ゴスツ）……テル………」

僕はジジイに飛び掛ろうとした途端、また殴られた。今度は視界が揺れるだけでなく、一気に僕の世界が暗転していく……ぐっく、そお…エ、ステル………」

バキッ！

「あう………」

「ふん、人に姿を見られおって……愚図が」

「どうします？この男」

「見られたからには生かしては帰すわけにはいかん。見たところ何ももって無さそうだな……屋敷の牢屋にでも放り込んでおけ」

「はっ！」

「くくっ、私の新たな実験動物が増えたな」

ぴちゃん

「ん……………」

頬にかかった冷たい何かに僕は意識を取り戻した。

「痛つ……………」

意識が覚醒した途端、頭に鈍い痛みがはしる。ぐう、雄二に殴られた時と同じくらいのたんこぶができてるし……………というか、ここはどこだろう？

目に入ったのは冷たい岩でできた床。そして、鉄格子!? えっ!? なんて!?!? 僕、さっきまで森の中にいなかった!? それがどうして…まさか、あの後ジジイに連れ去られたのか!? やば、森に行った時はすぐに変える予定だったから、ほとんど何も持ってきてない……………

「えっ!?!? どこ、ここ!?!?」

慌てて起き上がって鉄格子に手をかけて揺さぶってみる。くそっ、硬いなあ……………ならばこれな『P i P i P i P i!』って、誰だよ!? せっかく格好よく鉄格子を破ろうとしている時に……………って、もしかして!?!?

僕はブレザーの内ポケットの中にある携帯を取り出す。よかった。これは取り上げられてなかったみたいだ。さすが防水加工されている携帯。泥の中に入ってもバッチリ機能しているみたいだ。

携帯を開いて電話をかけている相手…雄二との通話を開く。

「はい、もしもし」

『てめえ、どこほつつき歩いてやがるんだ、バカ。早く戻ってきやがれ!』

開口いきなりでバカかよ。

今すぐにも雄二に殴りかかりたい衝動を抑えながら僕は口を開く。

「ごめん、今すぐには戻れない」

『……何があつた』

僕の言葉から何かを察したのか、雄二の声が真剣みを帯びた。こ
ういう時、こいつは本当に頼りになる。

「許せない屑がいたんだ……僕は今、そいつのアジトにいる」

『そうか、ならメールを送れ』

「メール?なんで?」

『ムツツリーニが諜報活動の一環にこの辺り一帯の地図を作成した
んだ』

恐るべし、ムツツリーニ。まさかそんなスキルまで身に付けてい
るとは…恐らくそれも下心の産物なのだろうけど…で、メールを送
ってどうすればいいんだ?

『お前の携帯にはGPSの使用コードメールがあるはずだ。そいつ
でこっちからサーチする』

なるほど。僕や雄二達の携帯には、いざという時（FFF団から逃げるときや、鉄人から逃げる時とか）のためにGPS機能付きの携帯になっている。これは『友人を探す』というサービスもあるから、いざという時にお互いの場所を判別するために僕達には必要なものだ。ただし、これはサーチする相手の携帯電話の方から、専用のコードメールを送らなければならない。しかも三十分にコードも新しいものに更新されてしまうけど、今の僕達には必要なものだ。

「わかった。すぐに送るよ」

『ああ、それまでは待機してる』

「了解」

< 雄二サイド >

「お、来たな」

P i r r r r r r r

明久と通話をし終わった数秒後、あいつは言われたとおり、俺の携帯にGPSの使用コードメールを送ってきた。俺はそれを確認すると、メールをSDに保存し、ムツツリー二に携帯のSDを手渡す。それを受け取ると、ムツツリー二はノートパソコンを起動させて明久の位置を割り出し始める。相変わらず諜報活動の事になると頼りになる奴だ。

……………それが下心の産物だというのが残念で仕方ないのだがな。

「えっと……さつきからムツツリーニさんは何をやってるの？」

フィーナが首を傾げてそう聞いてくる。

そういや、こいつらにとっては俺らが使っている携帯電話やノートパソコンってのはオーバートクノロジーだったっけ。

「明久の居場所をムツツリーニの道具で探ってたんだ」

「そんな事できるの!？」

「ワッチの鼻でも、そんな事はできんぞ？」

イレーヌとシャオが驚いたような表情になる。まあ、そりゃそうだよな。このファンタジー世界で、離れた人間がどこにいるかを見つけるだなんて事、できる奴なんておそらく俺ら以外はいないだろうしな。

「……………見つけた」

「おっ、そうか」

さすがムツツリーニ。

SDを手渡してから一分も経たないうちに明久の居場所を割り出したか。さてと、あのバカは一体どこに……………マジか。

俺は明久のいる場所を見て驚き半分、呆れ半分といった心境になる。あいつめ、自分がどんな場所に入ったのか解ってねえのか？

「まったく、あのバカは何やってんだ？」

「えっ?どうしたの!？」

俺の呆れ声に、フィーナ達が驚いた声をあげた。俺はムツツリー
のノートパソコンを見るように促すと、再び明久の番号を呼び出
した。

「えっ!？ここって……」

「何やっておるんじゃ？あやつは……」

「もう、何やってるのよあのバカは……」

後ろから聞こえてくるフィーナ達の声聞き流し、明久の着メロ
『二人三脚』のサビを聞き流しながら、数秒待つ。

『何、雄二?』

少し苛ついたような口調で電話に出る明久。

ほう、あいつがここまで怒るなんて…よっほど胸糞悪い事をやっ
たようだな。まあ、そのほうが俺としても都合だ。

「明久」

『何?』

「思いつきり暴れまくれ」

『……いいの?雄二』

おっ、声にうずうずといった感情が入ったな。

「ああ、俺らもすぐにそつちに行く。それまで好きなように暴れまくれ。屋敷に侵入したら携帯に電話するから、マナーモードにしておけよ」

『了解！（ブツッ）』

バカが喜ぶ声と共に電話を切る。さてと、あいつには思いっきり暴れてもらうとするかな……陽動として。

別にこれはあいつを生け贄にしたいからとかじゃねえ。今のあいつは夏休みするとき、肝試し勝負で常夏コンビと対峙した時と同じでスイッチが入っている。

だからこそ、俺は振り返って告げる。

「お前ら、明久が陽動をしてくれているこの時がチャンスだ！今からクソ領主の屋敷に殴り込むぞ！！」

あいつがバカをやっている間に俺たちは俺たちのやる事を思いっきりやらせてもらうぜ。

しくじるなよ、明久。

第十五話 名付けと牢屋とオーバーテクノロジー（後書き）

さて、今回名前をつけてもらった女の子、エステル。元ネタはもちろんTOVなのですが、一応理由はあります。それは続きをお楽しみに！！

次回も一週間空くと思いますが、どうか気長に待っててください！！

第十六話 チャージと天然特性と領主の思惑（前書き）

一週間ぶりです。今回は雄二達が暴れます。

第十六話 チャージと天然特性と領主の思惑

「いいの？雄二」

肌寒い牢屋の中、僕は電話越しに聞こえてくる雄二の声に歓喜していた。

『ああ、俺らもすぐにそっちに行く。それまで好きなように暴れまくれ。屋敷に侵入したら携帯に電話するから、マナーモードにしておけよ』

その言葉に僕はこれ以上ないくらい喜んだ。

まったく、好きなようにだなんて……雄二も『たまには』気が利いた事を言ってくれるじゃないか……。まあ、きっと何か考えがあったの事なんだろうし、僕がそのためになんらかの要因……というか、駒みたいな感じになっているんだろうけど、そんなのどうでもいいや。

あのクソジジイをぶっ飛ばせば、なんだっていい。

「了解！」

僕は軽快に返事をして雄二との通話を切る。言われたとおりマナーモードにして携帯をポケットの中に戻す。さてと、派手に暴れますか……

「来い！」

僕が左手をサッと掲げると、一瞬だけ眩い光が僕の手のひらから放たれ、次の瞬間には僕の手の中に空色の片刃剣、エデン・ヘヴン

ズが装備されていた。僕達八耀士の武器は、どんなに離れていても、こうして召還獣みたいにすぐに手元に呼び出すことができるんだよね……さすがに鞘までは呼び出せなかったみたいだけど……今度買わないと。

なんて考えている間、巡回の兵士が僕の前に通りかかった。

「むっ、貴様！何をして……」

「魔神剣！」

兵士の言葉を最後まで聞くなんて事をせず、僕は鉄格子に向かって剣から放たれる衝撃波を思いつきりぶつけてやった。

ドゴオ！！

「じわあ！？？」

僕の魔神剣を受けて、鉄格子は豪快な音を立てて碎ける。ついでに後ろにいた兵士もその余波を受けて壁までふっ飛んでいった。

「ぐう、き、貴様……」

おっ、以外に丈夫だな……でも！

「牙狼撃！」

「ひでぶっ！！」

ユーリの技である拳技、『牙狼撃』を兵士の兜越しの顔面に叩き込み、兵士をもう一度ダウンさせる。今度はバッチリ気を失ったみ

たいだ…なんか世紀末漫画みたいな悲鳴をあげてたけど、とりあえずスルー。

………ついでに。

「あつたあつた」

兵士の懐からアップルグミやライフボトルとか、ガルドとかを抜き取って僕は満足げに頷く。

えっ？それって泥棒じゃないのかって？いいのいいの、だってゲームでも敵に勝ったらアイテムとか貰えるでしょ？それに相手は僕の命を奪おうとして来てるんだよ？これぐらいで文句を言われる筋合いなんて無いもんね。

「さてと、行きますか！」

少し重たくなった財布を懐に入れて、僕は屋敷の中を歩き始めた。さてと、今の僕は少し頭にきてるからね…今なら兵士の一人や二人くらい楽勝に……

『なんだ！今の音は！？』

『地下牢から聞こえたぞ！！』

『『『脱走だ！！！！』』』』

『各兵、迅速に動け！人海戦術を使って一気に捕らえろ！！』

『『『了解！！』』』』

「さらばだ…」

僕はとつさに天井付近に備えられていたダクトの中に潜り込む。この狭い廊下で、しかも地理がまったく解っていない場所では明らかに僕の方が不利だ！

くう、FFF団からの激しい逃走戦術がまさかこつちの世界でも役に立つだなんて…まさか雄二！僕を囷に使ったな！？

「おのれ雄二い

！！！

！！！」

僕はできる限り小さな声で怨敵の名前をダクトの中で叫んだ。

あの野郎、あとで目にももの見せてくれるわ！

雄二サイド

さてと、あのバカがバカをやっている間にこつちも潜入しないと。な。

雨が未だに降り続けている中、俺とムツツリーニ、フィーナ、イレイヌ、シャオの五人は屋敷の入り口を覗ける場所に身を隠していた。潜入する、つってもすぐにじゃねえ。あのバカの方に敵が集中した時に、俺達が潜入するのが一番効果的だ。屋敷の中の人間は対応に追われて混乱状態。その間に俺達は明久を（偶然見つけたら）回収し、ついでに領主をボコる。

「大丈夫かな…明久」

フィーナがそう言って不安そうな顔つきになる。

やれやれ、明久の言ったとおりこいつは本当に優しいんだな。初めて会った俺にまで本気で心配していたみたいだし。まったく、こない子に好意を寄せられてるだなんて……明久の野郎、後で絶対に異端審問会と一緒にぶち殺してやらねえと……まあ、今は手足全ての生爪を剥ぎ取るだけで赦ゆるしてやるう。

「そろそろじゃないかしら？」

イレーヌの言葉を聞いて、俺は入り口にいる見張りの兵士達の様子を見る。どうやら中で明久が暴れまくっているせいでかなり動揺しているみたいだな。

「よし、一気にあいつらをのして潜入すっぞ！フィーナ、イレーヌとイレーヌはすぐに詠唱を始める！ムツツリーニとシャオは俺が撃った瞬間に言われたとおり、行動を開始しろ！！」

「……………了解」

「う、うん！！」

「わかったわ」

「承知じゃ」

俺の合図を聞いた二人はすぐに術の詠唱を始める。

おー、すげえ。二人の足元から幾何学模様の魔法陣が現れたぞ。フィーナの方は…翼を模した…なんつーか、『神聖』とかを連想させる魔法陣だった。あいつの周囲に光の羽が舞い上がっているのも

イメージの拍車をかける要因になっている。イレーヌの方は…なぜか俺はその魔法陣が『炎の下級魔術』という事がすぐに解った。この魔法陣を見るのは初めてだが、俺にはそれが解った。おそらくだが、俺の持つている武器…火の属性を持つイグニート・ブレアが関係しているんだろうな。まあ、俺の勝手な憶測に過ぎんがな……俺は懐からこの世界に来て道端で拾ったゴツイ拳銃を手にする。こいつは俺の魔力を弾丸にして撃つ事ができるから、威力の調整ができる。まあ、俺自身あまり銃の扱いには慣れてねえから、あまり離れすぎると当たらねえが……今は関係ない。ただ撃てばいい。それだけで俺の役割は終わる。

「おらよー！」

ドン！

俺は見張っていた兵士の一人に向かって弾丸をぶつ放す。だが俺の撃った弾丸は兵士の近くの壁に当たるだけに終わる。やれやれ、まだまだ練習が必要みたいだな。それでもって俺の予想通り、敵は俺達に気付いて俺を捕らえようと向かってくる…へっ、バカが。

「フィーナ！イレーヌ！」

「聖なる翼よ…ここに集いて御心を示さん、エンゼルフェザー！」

「揺らめく焰、猛追…ファイアボール！」

フィーナからは虹色の光をまとった複数のチャクラムが、イレーヌからは火球が放たれ、こっちに向かって走ってくる兵士達は見事にその餌食になる。さてと、あいつらは……。

俺は入り口付近で待機していた兵士達の方に目を向ける。俺の目

の前でやられた兵士達を見て応援を呼ぼうと屋敷の方に駆けているのが見えた。

まあ、当然の判断だろうな。自分らよりも明らかに実力が上の奴に一人で挑もうなんて……………明久^{バカ}以外以内だろうしな。

だがそんなもの当然、俺は予測していた。ついでは対応策もすっかりと準備してな。

最初にフィーナ達が魔術を放った瞬間、ムッツリーニとシャオを兵士の影になるように移動させておく。魔術が兵士に当たった瞬間に炸裂した魔術が目隠しとなり、一瞬だけが兵士達の視界を奪える。その一瞬の隙にムッツリーニとシャオは兵士に近づき……………

「ほい」

「あべしっ!」

「……………ふっ」

「……………っ!」

ムッツリーニとシャオが屋敷の中に入ろうとした兵士達を手際よく気絶させる。ムッツリーニはFFF団で鍛えられた隠密スキルを使って後頭部を手刀一発で気を失わせ、シャオは…小細工無しの正拳突きでみぞおちを突いて眠らせていた。

……………どうでもいいが、シャオにやられた奴の悲鳴が棒世紀末漫画みただったのは気のせいかな?

……………まあ、いい。とりあえずスルーしておくか。

「よし、明久が囷になっている間に潜入する。各自、作戦通りに行動しろ!」

俺がそう言っただけで逃げ出した瞬間、俺は誰かに引つ張られて動きを止められた。振り向くとフィーナが俺の服の裾を掴んでいた。どうしたってんだ？

「……………ねえ、あとで明久は助けるよね？」

そう言っただけで涙目になって俺を見つめてくるフィーナ。やれやれ、明久も罪な奴だな。

「大丈夫だ、必ず（最後の方で）助けに行く」

「本当！？」

「当然だ。あいつにはまだ重要な（逃げる時の囷という）役割があるからな。ここで失う訳にはいかねえ」

「解った！私、がんばるね！！」

そう言っただけでフィーナはふんす！とどっかで見たとような気合の入れ方をして屋敷に向かって走っていく。明久の野郎、なんかこっちの世界に来てからフラグを建設するのが上手くなっただんじゃねえのか？

「……………」

俺はひそかにあいつに会ったとき用のために準備を始めた。知らない奴には言っておこう……………

俺はあいつの幸せが大嫌いだ。

屋敷に潜入した俺達だったが、いくら明久がほとんどの兵士を相手にしていると云っても、それで見張りがいなくなると言ったら、答えはNOだ。数が減ったとしても見張りは少なからずいる。

現在、俺達はその見張りと対峙していた。

「くそっ！まさかこっちからも侵入者が……」

そう云って兜の下でおそらく苦虫を噛み潰したような顔になっているだろう、兵士に向かって俺達は一齐に飛び掛る。

「おらぁ！連牙弾！！」

ドドバキィ！！

「ぐぐぐらっ！！」

俺の連続攻撃をうけて兵士はぶっ倒れる。さっきからこれの繰り返しだ。明久の野郎、もう少し兵を多くひきつける事できねえのかよ……ったく、面倒だ！！

「お前ら、少し時間をくれ！」

俺はそう云うと銃と籠手にセットするように構える。そして自分の体の中を流れる気をその一点に集中させる。

こいつは俺の特性、『チャージ』だ。

明久やムツツリー二と違って俺はあそこまで素早く動く事はできねえ。だが力ならあいつらに負ける気はしねえ。こいつを使うことで俺の技は性能を飛躍的に上げ、さらに変化する！

たとえば、俺が普段使う『魔神拳』が……

「剛・魔神拳！！」

兵士に一気に接近し、そいつの真正面の地面に俺は拳を振り下ろす。拳が地面に触れた瞬間、今までの魔神拳とは比較にできない威力の衝撃波が兵士を襲う。

「たわらばああああ！！」

衝撃波を間近で受けた兵士は、悲鳴をあげて吹っ飛んでいく。どうでもいいが、この屋敷の兵士っていちいち悲鳴をオーバーにしないといけない習慣でもつけてんのか？ さっきからうぜえぞ。

「きゃあ！」

突然響き渡るフィーナの悲鳴。

悲鳴がした方に視線を向けると、フィーナがバランスを崩して兵士に向かって倒れこむところだった。俺は拳銃を引き抜き、イレーヌは杖を手にして兵士に向かって俺達は攻撃を放っていた。

「ぐぐぐへらわあー！！」

またしても意味不明な断末魔をあげながら倒れる兵士。

ドテツ…ブシャアアアアアアアアア！！！！

その後を追うかのように地面に思いつきり顔からすっ転ぶフィーナ。転んだ時にフィーナのスカートが翻り、中の縞パンが見えた瞬間、鼻血を噴き出すムツリーニ。そしてフィーナ同様、その場に

崩れ落ちる。だがその手にはしっかりとデジカメを手にしていた。あの一瞬に撮影したってのか？ ったく、相変わらずだな……後で交渉しねえと。

「あいたた……」

「大丈夫かえ？ フィーナ」

「うん。なんとか……あれ？」

フィーナが立ち上がるうとした時、手に皮袋をいつのまにか持っていた。俺は怪訝そうな顔つきになりながらフィーナの手からそれを取り上げると、袋の中身を見て……絶句した。

中身は大量のガルド硬貨。つまりこいつは兵士の財布だった。

「あっ、あれ？」

「主……またなのか」

「まったく、この子は……」

そう言っただけ息を吐く二人。また？ 一体どういう事だ？

「わ、私ね……戦闘中、時々敵の前で転んで……その時、敵の持つてるものをいつの間にか手にしちゃう変な癖があるんだよ……」

「……ある意味、天然スキル」

そう言いながら鼻にティッシュを詰めているムッツリーニ。俺はどっちかって言うとも明久の『集中回避』や俺の『チャージ』と同じ、

特性だと思っぞ……天然っぽいかな。

『アイテムステイル』とでも名付けるとするか。

フーか、こいつって『シンフォニア』のヒロインに似てるよな……
胸と回復術使える以外ほぼ全部。

『おい！さっきの大きな音はどうした！？』

なんて事やってる間に通路の向こう側から兵士達の話し声が……
……っと、アホな事やってる場合じゃねえか。

「ムツツリーニ！フィーナ！イレーヌ！シャオ！一気に突っ切るぞ
！！！」

「……了解！」「……」

俺達は屋敷の奥に向かうべく、走り出した。

明久サイド

「迷った」

ダクトの中で僕は呟いた。

さっきからダクトの中を匍匐前進しながらうろつる回っていた結果、自分の居場所がどこかさっぱり解らなくなってしまった。

雄二達に話を聞こうにも、ダクトの中はせまくてポケットから携帯を取り出せず、仕方なく匍匐前進をして移動するという事を繰り返

返していた。今日は厄日なのか？
ため息を吐いて右手を前に出した。

カン！

「えっ？」

明らかに周りとは違う一枚の鉄板が、ダクトの床に貼り付けられていた。僕はその一枚の鉄板を拳で軽く叩くと、軽い音が返ってきた。おそらくこの下は空洞…つまりなんらかの部屋になっているんだ。

「ラッキー！」

今まで散々な目に（ほとんど雄二のせい）会ってたけど、ようやく僕にも幸運がやってきたってことだね。

「試験召喚！」
サモン

狭い通路の中では動く事ができないから、僕は召喚獣を呼び出す。僕の体のサイズだと、移動するのに精一杯なダクトも、召喚獣のサイズなら余裕で動かす事ができる。よし、一気に壊して………さてよ。ちよっと試してみようかな。

僕は頭の中でイメージした事を召喚獣に命令してみる。僕の召喚獣は空中で一回転すると、そのまま木刀を鉄板に向けて振り落とす。

「爆砕陣！」

ドガアァン！！！！

僕の十八番、爆砕陣。

もしかしたら…と違って試してみたんだけど、召喚獣も僕の術技を扱えるみたいだ。これはラッキー。何事も挑戦してみるものだね。僕は満足気に頷いて召喚獣を消す。これはいい情報を手に入れたぞ。後でみんなに教えないと。

「よつと」

僕は空けた穴から身を乗り出して、ダクトの中から身を翻す。一瞬の浮遊感の後、硬い床にすたん、と着地する……飛び降りた場所は結構高かったんだけど、僕の足は特に痺れる事もなく普通に立って。おお、向こうじゃ考えられないくらい強くなってるなあ…なんだかこの世界に来てから自分がどんどんレベルが上がっている気がする。よし、無事に元の世界に帰れたら鉄人に復讐をしてやる！

僕は思わず笑みを浮かべた時だった、むつとするような薬品の臭いが鼻を刺激してきた。

顔をしかめながら周りを見渡すと……信じられないものがあつた。

「えつ…なつ………!?」

周りにあつたのは様々な試験管や薬品、何かの標本。

一瞬学校の科学室を連想したけど、すぐにそんなものは吹き飛んだ。目の前にあるもの…それが僕の視線を釘付けにしていたからだ。

それは、人間がすっぽりと入るような巨大なガラス管。……中は何かの液体が満ちていた。そしてその水の中にいる…僕よりも年下の……全裸の小學生ぐらいの女の子………!!

「だ、大丈夫!? ねえ!!!」

僕はガラス管に近づいて中にいる子供に声をかける。けどこの子はピクリとも動かないで液体の中に力なく浮かんでいた。

僕はそれを見て、この子が手遅れなんだという事を察した。察してしまった！！！

「くそお！！」

僕は力任せにガラス管に拳を叩き込む。ビキリ、という音を立ててガラス管にひびが入って続いてガシャアン！という音を立ててガラス管は砕け散った。冷たい液体が体にかかってくるけど、そんな瑣末事を無視して中から液体と一緒に出てきた子供を抱きとめる。

首の頰動脈の部位を探してみる。もしかして、もしかしたらの可能性にすがってやってみた行動だったけど……結果は最悪なものだった。

いつもムツツリー二の脈を計りながら救命活動をしていた僕だからこそ、解る。この子は既に亡くなっている。

ギリツ、と僕は歯を食いしばると、着ていたブレザーを脱いでその子に着せてあげる。花を手向けてあげられなくて、ごめんね。

僕はゆっくりと立ち上がると近くの壁を思いつきり殴りつける。

「あのクソ野郎……」

ここで何をしてるのかなんでどうでもいい。

脳裏に浮かんでくるしわくちゃんな面に嫌味な笑みを浮かべているジジイ。そいつがここでこんなくだらない事をやっているのを知ることができた。

「エステル……」

ぼつり、と僕は呟いた。

おそらく彼女はここにいる。そしてあのジジイに酷い目に合わされている。そんなことはバカの僕でも簡単に想像できた。

「あーあー、何やっちゃってしてくれてるんだい？」

唐突に響く、金切り声。

僕は今すぐにも殴り飛ばしてやりたい衝動をグツとこらえ、声が聞こえた方向に顔を向ける。

そこにいたのは細い手足に針金のように細い目をした顔を持った……あの時エステルを殴り飛ばしたジジイだった。

その隣に驚いた表情で僕を見る……水色の長い髪に金色の瞳を持ったエステルがいた。

「君、それがどれくらい希少な物が知らないのかい？それだけ大きなガラス管はひとつそろえるだけでも予算が要るんだよ。まったく」

呆れたように言うジジイ。

どうでもいいよ、そんなの。それよりも……

「この子は一体どうしたの？」

僕はそう言ってブレザーをかけてあげた女の子を指差す。

それを見たジジイはため息を吐いた。

「やれやれ、せっかくの実験体が台無しじゃないか……君、これがどれだけ崇高なものなのか知らないのかい？」

「……質問に答えろよ」

自分でも信じられないくらい恐ろしい……自分の口から出たとは思

えない声でジジイに話しかける。僕の言葉にピクリと反応するジジイ。

「……まったく、これだからガキは嫌いだ。礼儀というものを知らん」

「……………」

何が礼儀だ。人の質問に答ええないのが礼儀なのか？

僕はジジイを無視してエステルの方に振り向く。暗い表情で僕を見つめるエステル。そんな彼女を見ていたら……いつの間にか僕の中にあつたどす黒い感情が消えた気がした。僕はエステルに微笑み、そして……そつと手を差し出した。

「エステル、僕と一緒に行かない？」

「……え？」

エステルが驚いたような表情を浮かべる。

その表情には、驚きだけじゃなくて……なんていうか、こんにゃく……じゃなくて、困惑が混じっていたけど、その他に期待とか希望とか……そういうのも含まれているような気がする。

「エステル？なんだね、それは」

豆鉄砲を食らったハトのような表情で聞いてくるジジイ。正直、人の質問に答えなかつたジジイの言葉に耳を貸す気はないのでスル……しようかと思っただけど、それではジジイと一緒にいたいな気がして腹立たしいので、答えてやることにした。

「その子の名前だよ。018なんかと比べればずっと可愛らしいでしょ?」

そう言っつてふぶん、と胸を張る僕。それに対してジジイの反応は

……

「貴様、人の所有物に勝手に名前を付けている……」

酷い罵詈雑言だった……というか、所有物?

僕は聞き捨てならない単語を聞いてしまったせいか、再び心の中にどす黒い感情が湧いてくるのを感じた。ふっ、まるでFFF団の一員となった時のような気分だよ。

「これは被験体018……私が偶然拾い、今日まで育て上げ、そして……私の研究で最も成果を上げているものだ!!」

え?

ひけんたい?

なんだそれは……それって、つまり。

この子は実験につき合わされているのか?

「こんな……こんな酷い実験を子供にやっているというのか、あんたは!!?」

耐え切れず僕は大声で怒鳴り散らす。

しかし僕の叫びを鼻で笑うジジイ。この下衆野郎お……!!!!

「はん!酷い実験だと?愚かな……これは人類の進化のために必要なものなのだよ!」

「人類の…進化？」

何を言ってるんだ？こいつは……………

「影人…そやつらが現れてから人類は未曾有の危機に瀕している」

「……………」

語り始めるジジイ。僕は今すぐにも殴りたい衝動を必死に抑えながら耳を傾ける。ジジイのためにはなく…エステルのために。

「この街の領主の子供として生まれた私は…幸せな生活をしていた…だがあいつらが現れてから私の人生は狂った！狂わされた！！永久の愛を誓い合った妻を失い、兄を！父を！母までも失った！！」

「……………」

僕はジジイの言葉に耳を傾ける。最初語り始めたときは適当に流そうかと思っただけ、聞いているうちに…なんだか、思ってしまった。

目の前にいるジジイが、あまりにも可哀想だと。

「私は誓った…必ず奴らを皆殺しにしてやると！！そのために私は研究を始めた…今の人類とは比較にならない、新たな人間を生み出すと！！！！」

「新たな…人間？」

「そつだ！人の身でありながら、人ならざる力を行使する存在…影

人に対抗するならば、人の力を超える人を生み出そうと思ったのだ
！！」

「それが…この、実験？」

「そうだ！人間の持つ潜在能力の開花…高い適応能力と高い感応力、そして想念の強さ！それらを高めた人間を生み出すために、私が作り上げた薬の実験を………っ！！」

薬！？それって…つまりは薬物投与！！？

ゾクリ、と僕は全身に震えが走ったかのような感覚に襲われる。

僕のいた世界でも、薬物に関する警告は耳にタコができるくらい聞かされていた……まあ、話の途中で聞き飽きて雄二達と抜け出そうと画策したりしてたけど。

それでも…どんな症状になるのか、どんな風に生きなきゃいけないのか等々の事が載せられている記事を見ると……なんというか、とても居た堪れない気分になった。それと同時に怒りが湧き出てきたのも……そんな人の人生を不幸にしてしまう物だと知っていたいながら、それを人に売り渡す奴らに……。

「ふざけるなよ……」

僕は目の前にいるジジイを睨み付ける。

「薬物がどんなに危ないものか、解ってるでしょ！？それなのに、子供達にそれを知ってて使うなんて……おかしいよ！！」

「はん、何がおかしい？」

「何！？」

「子供はいい…大人と違い未発達な分、より精密なデータを取る事ができる…」

この、ジジイ……未来ある子供にそんな目に合わせているのか……？仮にも領主だっというのに市民に高い税金を払わせて…子供を誘拐して……………。

ジジイの言葉に、僕の中で様々な言葉のピースが組み上げられていく感じがした。

強い魔獣がいて海に出れない。

なぜか？それは海から逃げる人を抑えると同時に、他の港から船がこの街に来るのを防ぐため……

そんな状況下での街の悪政

人質に取ら

れている子供

そしてこの研究施設。

「この街の仕組み全部…この薬物実験のための行動……？」

「くくく、さすがにここまでヒントが出れば解るか……」

バカにしたように笑うジジイ。

………きつと雄二ならこの実験施設を見た瞬間、なんとなくだけで理解していたかもしれない。でも、一つだけ気になる。

「………どうやって、魔獣なんか操ったの？」

僕は今まで、魔獣を操る人のことを知らない。操れるとしたら影人ぐらいだと思っていたからだ。だからこそ僕は疑問に思った。

「ふん、そんなことは貴様には関係のないことだ」

そういつて僕の言葉はあっさりと一蹴された。おのれ少しは答え
たつていいと思うぞ……。

僕は少し黙ってから今までの事から考え、そして口を開く。

「よし、エステル！やっぱり僕と一緒に行こう！」

「いきなり何を言っているのだ、お前は!？」

ジジイが僕の言葉に驚いている。ぶつちゃけ、知らん。お前の事
なんてどうでもいい。

僕はゆっくりと右手を伸ばし、エステルに微笑む。

「エステル、君がここで酷い目に…ほんの少ししか知らない僕が言
うのもアレだけど、それでも知ったから…君の事」

「……………」

エステルが黙って僕の言葉を聞いてくれている。

隣でジジイが何かわめいているけど、そんなものはスルー。

「初めて会った時、僕はエステルの目の中に…その、もの凄く辛く
て、寂しいような…そんな気持ちを見たような気がするんだ……………」

「……………」

「それに…僕の勝手な考えだけど、きつと薬物実験以外にも、酷い事、たくさんされてるんでしょ？」

「…私の事を可哀想だと思っただんですか？」

今まで黙って僕の話聞いていたエステルが口を開いた。

僕はその事にちよっぴり驚きつつも、その質問に答えてあげる。

「可哀想…っていうのは少し感じたよ。でもそれ以上に、僕はこう思っただ」

僕はエステルの目をまっすぐ見つめる。

そして僕が感じたこと。思っただことを素直に告げる。

「僕は…エステル、君を守ってあげたいって思っただ」

第十六話 チャージと天然特性と領主の思惑（後書き）

次回は明久が大活躍です！

第十七話 エステルと狂戦士〈バーサーカー〉と明久タイム（前書き）

タイトルのとおり、今回は明久タイムです！

第十七話 エステルと狂戦士〈バーサーカー〉と明久タイム

《エステルサイド》

物心ついたときから私は一人でした。

そのせいで『あの場所』にいて、そこから必死に逃げて…そして行き場を失った私は見知らぬ街の路地で蹲る日々を過ごしました。

陽の光を全て街の中央に奪われ、路地裏で一人歩く。周りには羽虫や、ネズミ。ナメクジなど、陽の光を避けているものばかりが集まる敗者の溜まり場。

泥水をすすり、レストランの裏手のゴミ箱の残飯を漁る日々。

そんな時に、一度だけ希望を見た瞬間がありました。

私に手を差し伸べてくれる人がいたんです。

おじいさんは私を車に乗せると、まず黒い長袖のワンピースをくれました。その後、船に乗りました。本当はどんな場所なのか、海がどんな風に広がっているのか気になりましたが、おじいさんは『危ないから』という理由で探検させてくれませんでした。

最初は不満がありました。私のことを大切にしてくれているんだと考え、我慢しました。

でもそれは間違いでした。

屋敷に連れて行かれた私に待っていたのは、様々な薬物投与、実験。

『あの場所』と比べればマシなのだろう。

けれど、やってる事は『あの場所』と変わらないものばかり。

実験の結果、私は普通の人よりも何倍の感応力を持つようになり、肉体的にも強化されました。その結果、手に入れてしまったのは…人の感情のゆらぎや無意識な悪意や善意などを感じてしまえるよう

になりました……。

結果、私はこの人が持つ無意識な悪意に怯える日々を過ごして
ました……。

目の前で微笑みを浮かべながら私に手を差し出す…アキヒサ・ヨ
シイという人。

初めてこの人と出合ったときは、私にとっては衝撃的でした。
なぜならその人からまったく悪意などが感じられなかったからです。
普通、どんな人間にでも善意や悪意などが無意識のうちにあるもの
です。それなのに、明久さんにはそれが感じ取れなかった……それ
だけでも私には衝撃的でした。

それなのに、その後見せた行動もある意味衝撃的でした。
私が倒したホーン・スネークの素材を取ろうと失敗し、頭部を打ち
つけながら沼に落ちていく様は…正直言って無様極まりない光景と
しか言いようがありません。沼の中で目を押さえたり、頭を抱えた
りしながら悶える様を見ながら私は…気がついたらその人に手を差
し伸べていました……今思えば不思議で仕方ありませんが……。
手をつないだとき、足を滑らせて私も一緒に沼に落ちてしまった時、
私は今までの光景がまざまざと蘇り、無意識で恐怖心を露わにして
しまいました……。

すると……どこからか温かな、雨や沼の水で冷えた私の体を心地よ
い温かさで包んでくれるものを感じ、気付いたら…私は明久さんに
抱きしめられていました。

人に初めて抱きしめられた私は…もっとその温もりが欲しく、気
付いたら……なぜか明久さんの血を吸ってました。

今思えば本当になぜ？と感じてしまう行動でしたが、その血を飲
んだ瞬間、私の体は不思議と今までの実験の影響による倦怠感や疲
れなどが消え失せ、楽になっていました。

それからこの屋敷に連れて来られ、再び再会した明久さんは、私

の過去を聞き、そして…私に手を差し伸べてくれました。
出会ってから少ししか経っていませんが、これは彼の本心なの
だと思います。

……… 打算や思惑が彼にあるとは到底思えませんし。

でも、その手を取るのに私は抵抗がありました。

また裏切られるのでは？

そう思うと、その手を取るのが怖くて仕方ありません……。

でも、取りたい…あの温もりをもう一度感じたい………

いいんですか…？

私のような化け物が……

もう一度、希望を抱いても。

明久サイド

手を伸ばしながら、僕は黙ってエステルからの返答を待つ。

僕は手を伸ばしているだけだ。これを取るのか、取らないのかは

… エステルにしか決められない。

時間からしてみれば、ほんの一分。

その間、ジジイが何か喚いていたような気がするけど、僕はひた
すらエステルだけを見ていた。

やがて、ずっと俯いていたエステルが顔を上げて僕の目をまっす

く見た。

「…いいんですか？」

「えっ？」

突然口を開いたエステル。その目には、どこか僕にすぎるとような感じがあった。

「…私は普通の人とは違います」

「うん」

「…私は…人の血を飲む化け物です」

「だから？」

「…本当に、いいんですか？」

「うん。僕は最初から言っているはずだよ」

一拍置いて、僕は言う。

「エステル、僕は君を守ってあげたい。君が独りになることに怯えているのなら、僕が…ううん、僕達が守ってあげる」

その瞬間。

気のせいなのかもしれない…でも、僕は確かに見た気がする。

エステルは瞳の中に、希望の光が宿ったのを。
そして僕に向かって一歩を踏み出そうとした時だった。

「ふざけるな!!」

突然ジジイがエステルを殴り飛ばす。

この野郎、ちょっとは空気読めや。それどころから女の子を平然と殴り飛ばすな。

「貴様にどれだけのガルドを注ぎ込んだのか解っているのか!? もつともつと私の研究の役に（バキイ!）」

「明久パアーーーーンチ!!」

「ぶべらばつ!!」

それ以上ジジイの戯言を聞く気はないので、今までの鬱憤を晴らすように僕はジジイの面を思いつきりぶん殴ってやった。軽々と宙を舞った体が、勢いよく鉄板の床に叩きつけられ、乱暴に手足を投げ出しながらゴロゴロと転がっていった。

「いい加減にしなよ……」

「ぶつ、ぶつ……」

「あんたが今までバカをやったせいで、どれだけの人が苦しんだか解ってるのか？」

地面に倒れながら、起き上がろうとするジジイを睨みつけながら

僕は背後にいるエステルに手を置く。

「家族を影人に殺された…それは確かに悲しい事なのかもしれないけど…！」

そのせいで傷ついたり子供達の事も考えずに、自分の悲しみを晴らしたいだけで、こんな事をしていたなんて…僕は、許せない！！

「それで誰かを殺していい理由にはならないだろ！！どんなに辛い事があつたとしても、誰かが大切に抱えているものまで奪って良い理由にはならないだろうが！！！」

自分が悲しいと思うことを、他人に平然とやるなんて…そんなのは間違っている！だから僕は、目の前の男を絶対に許せない。

「……お前に何が解る？」

ふらふらとした足取りで立ち上がるジジイ。

「家族を失って悲しみにくれた私には…人生を台無しにされた私には…もう、これしかないのだ！家族の無念を晴らすために、私は全てを投げ出して影人を倒すために人生を捧げると決めたのだ！！」

「だからって、誰かの人生を台無しにして良い理由にはならない！！」

僕は目の前のジジイの言葉を真正面から否定する。

「自分がやられて悲しかった。それが悔しかったからって、誰かにそれを押し付けるなんて間違ってる！！」

えええええ！！！！」

ジジイは青筋を立てて大声で怒鳴る。

今の言葉に怖くなったのか、僕の後ろでエステルが僕の背中にしがみついていたのが解った。

でも僕は逃げない。その声を、怒りを体に受けながらも逃げる訳にはいかない。

あそこまで勝手に怒鳴ったんだ。相手から受ける怒りも受け、それを真っ向からぶち壊してやる！

「何も知らないくせに…私をバカにしやがって…バカにしやがって……」

……………あれ？

なんか様子がおかしいような……。

「ここまで私がそれだけ苦労したのか知らないガキに…これ以上関わってられるか…ジャギ！」

ダンッ！！

突然上から降りてくる、一人の男ッ！？

全身を動きやすそうな赤黒い格闘服に身を包み、両手に爪のよう
に湾曲した刃を持った剣を両手に一つずつ持っている。赤黒い髪に
隠れた鋭い目に、薄い笑顔を浮かべている。

その男を見た瞬間、僕の体の中にゾツとするような感覚が走る…
そつだ、これは…… F F F 団の連中、特に狂戦士と化した連中が醸
し出すオーラッ！???

「誰をやらせてくれるんだ？」

「そこにいるバカな顔をしたガキだ！見た目からしてバカそうだが、腕はバカ並みに強いぞ！！」

……なんか、今まで散々説教していたのがバカらしくなってきたような気がする。このクソジジイ、今すぐ殴り倒して髪の毛全部むしって頭にハゲって書いてやる！！

僕が怒りに任せて殴りかかろうとした瞬間、ジャギという男が僕に向かって飛び掛ってきた。

「うわっ！」

すれすれのところで僕は身をひねって攻撃をかわす。危なっ……
あと一秒遅かったら首を斬られてたよ！？

「今から三秒で倒してやる……いーち……」

そう言っ僕に爪のような剣を振り上げて襲い掛かってくる。
その一撃を僕は首をひねって避ける。くお、速い！鉄人には劣るけど、それでも近いほうだぞ！？

「にー……」

そう言っ僕に剣を振るうジャギ。だけどそれを避ける僕。
避けた瞬間、懐に潜り込んで……エデン・ヘヴンズを右手に呼び出す。
今回は振り投げる暇は無さそうだから、一気に決める！

「さんっ！」

ザン！！

「ぐあ！？」

鞘から抜刀した僕は、そのままジャギの腹を剣で斬る。とりあえず浅めには斬っておいた。人殺しは嫌だもんね。

「三秒、経ったよね」

後ろにいたエステルに確認を取る。エステルはコクリと頷く。

「はい、確かに三秒はとっくに経っています」

そう言って頷くエステルだけど、表情は硬い。

そりゃそうだ。ここからは相手が本気になって襲い掛かってくる時間だ。きつと苦戦するだろうけど……なんとか耐えないと。

「くくく、ひやははははははははは！いいな、いいなあ上がったきた、上がってきたぜえ！！」

「うわっ！？」

なんだ！？急に変わったぞ！？？

なんて考えている間に僕に接近してくるジャギ。慌てて僕はエデン・ヘウンズの刀身でジャギの剣を防ぐ……ぐあ！？重っ！！なんだこの力！？鉄人の拳並みの威力があるぞ！？？

なんて考えているうちに、もう片方の剣で僕に追撃を仕掛けるジャギ。まずい、このままじゃ……瞬間、僕の前に水色の影が割って入った。

「獅吼滅龍閃！！」

ズドオン！！！！

「ごわっ！？」

ライオンの…獅子の形の鬨気をもろにくらって、悲鳴をあげて吹っ飛ばすジャギ……今のつて、ひよっとして……

「エステル？」

「…大丈夫ですか？明久さん」

そう言っつて僕に振り返るのは、さっき獅吼滅龍閃をぶつ放して、大の大人を吹っ飛ばした水色の髪の毛に金色の瞳を持った少女、エステル。えーっと、今のつてひよっとしてエステルがやったの？

「…はい、私の身体能力は通常の人間よりも高いので。ついでに言いますと、普通の人間が見える『可視光線』の波長を大きく超える電磁波まで捕らえますし…私の体から微量な電磁波も常に放出されてますから、たとえ暗闇でも正確に敵の居場所をサーチすることができます」

わお。なんだそのグルメ細胞で強化された人みたいなのは……あつ、だからホーン・スネークを倒せたのか。納得。

「…それと、私にはこれがあります」

そう言っつて見せたの是一本の…杖？

「…グレイセス、起動。AXEモード」

エステルが呟いた瞬間、杖に幾何学模様の魔法陣が展開され、杖の形が変わっていき、それはエステルの体ほどもあるような光の刀身を持つ巨大な斧になった。

「…これが私の武器です。ここで学習したことを生かし、独学で作り上げた可変形多様武器…グレイセス……私を、守ってくれた武器です」

そう言ってギュツと杖を握るエステル。

きつとエステルは今までこれを使って生きてきたんだ…自分を守るために、生き血を吸わないと生きていけない自分を生かすために一人で、その杖を使って生きてきたんだ。というか……

「凄いや、エステル！そんな格好良いのを作れるなんて！！」

「えっ！？そ、そうでしょうか……」

「うん！」

僕 の 言葉 に 頬 を 染 め る エ ス テ ル 。

いや、そんなそこまで赤くなることないのに……って、そっか。

この子は、こんな風に当たり前のように褒められるなんて事があったのか……なら、僕との出会いで少しづつ『当たり前』を知っていけるといいな。

穏やかな雰囲気に含まれていたのが唐突に終わった。原因は……

「ひゃははははははははははは！……！」

「お前なあ！……！」

ガキイン!!と僕の刀とジャギの爪のような剣がぶつかり合う。
ええい、ちよつとは空気を読むということを知らないのか、こいつ
は!?

「こ…の、邪魔するな!!」

僕は渾身の力でそいつの剣を弾き飛ばす。ここから一気に決めて
やる!!

「魔神剣!!」

「ぐお!!」

剣から放たれる衝撃波をぶつけて怯ませる。そのまま一気に懐に
踏み込んで……

「爪竜連牙斬!!」

剣を振り落とし、続けて側転の要領で蹴りを入れ、更に斬りつけ
るといふ連続攻撃を浴びせかける。ようし、ここで!!

秘奥義

「終わる訳にはいかない!!」

自分の中のリミッターを一瞬だけ外し、僕の剣は眩しいばかりの
光を放つ。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

「お前を殺すぞ明久あ！！！」

そう言っつて突っ込んでくるジャギ。くそっ、こいつめ…まるでT
OVのあいつみたいじゃないか！いくら僕がユーリスティルで戦っ
てるからってこんなオプシヨンまでいらな…さてよ、ユーリスタイ
ルか……なら、ユーリが使う技じゃなくて……これならどうだ！

「雷斬衝！！！」

「ぐあ！！！」

剣に光の力を込め、雷の力と一緒に放つ技だ！ユーリは使えない
技だから……これなら……

「くははははははははははは！！！！いいぜえ、上がってきた上がって
きた！！最高だぜ明久あああああ！！！！」

「バカな！？」

ユーリスティルの技じゃないのに！？なんて考えているうちにジ
ヤギが天井近くまで飛び上がって……

「なーに、バカやってんだよ。明久…フレアショット！」

ドン！！

「ぐあ！！！！」

突然感じたバカの気配。それと同時に響き渡る銃声、そして炎に包まれて吹っ飛ぶジャギ。そのままジャギは天井付近に備えられていた窓を割って外へと吹っ飛んでいった……
今のつて…ひよつとして……

「雄二!？」

「よう、元気そうじゃねえか」

そうやってニヒルな笑みを浮かべる雄二。この野郎、美味しい場面で見れやがって……

「……………無事か、明久」

「大丈夫、明久!？」

そうやって雄二の後から現れるムツツリー二に、フィーナ。

「怪我は…無さそうね」

「心配したぞ」

続いて現れるイレーヌに、シャオ。うーん、なんだかとっても久々に会ったような感じがするぞ。

「みんな、来てくれたんだね!」

「当たり前だよ！明久は私達の大事な仲間なんだもん！」

「そうね、見捨てるなんてことはしないわ」

「主がおらんと、つまらんしな」

そう言って笑顔で僕を迎えてくれる三人。うんうん、これだよ。こんな風に支えあうのが本当の仲間だよ。

「……………明久」

「ムツツリーニ」

「……………いい絵がかなり取れた」

グッジョブ。

「後で取引するか否か、検討しようじゃないか」

やっぱり君は最高だよ、ムツツリーニ。

「ほらよ、明久」

そう言って僕にライフボトルを投げつけてくる雄二。こいつめ、何気に僕を労ってるんだな。まったく……………じゃあ僕も。

「はい、雄二」

そう言って僕は雄二にミックスグミを投げつける。

「ん？」

「ライフボトルのお返しだよ。それでも食べなっ」

「おう、そうか。悪いな」

そうやって雄二はミックスグミを、僕はライフボトルのふたを開けた。

ふっ、そのまま飲み込め！！

(くたばれえ

！！！！！！)

僕は口の中にライフボトルを、雄二が口の中にミックスグミをそれぞれ口にし、そして……

「ぐがあああアアアアあああああああああああああ
あ！！！！！！」

一緒になっ悶え苦しむ。

ぐおおお、辛い！！なんだこれは！？めちやくちや辛いいいいい！！おのれ雄二！さてはライフボトルの中にタバスコか何か入れたな！？唇が辛さで腫れちゃったじゃないか！！

「バカ明久！回復用のグミになんてものいれてやがる！！」

僕と同じように真っ赤に腫れた唇で雄二が怒鳴ってくる。

「アホ雄二！そっちこそライフボトルになんて勿体無いことをしてるんだ！！」

そう言っ取っ組み合いの喧嘩を始める僕と雄二。

「くたばれ雄二！」

「死ね明久！」

「魔神剣（拳）！！（バキィ）」

「三散華！！（ドドドン）」

「爪竜連牙斬（弾）！！（ドガ、バキ、ゴス、ズベシ、ドゴン）」

「ぐあああああああああああああつ！！！！」

僕と雄二は全身の痛みに転げまわる。

おのれ、ここはライフボトルを無駄にした雄二が僕に一方的にやられる展開じゃないのか！？

「えつと……あの」

「ん？誰だ、このチビガキは？」

「チビガキ……」

雄二の言葉に、若干落ち込んだ表情になるエステル。

「雄二貴様！ちよつとは考えて物言え！！」

「てめえにだけは言われたくねえ！！まさかここでもか！？このフラグ魔が！！！」

「黙れ！幼馴染みの霧島さんを手駒にとっているエロ詐欺師じゃないか！！！」

「誰がエロ詐欺師だ！バカ明久！！」

「誰がフラグ魔だ！アホ雄二！！」

ええい！エステルを紹介は後回しだ！！まずは目の前の奴を倒さなければならぬ！！世界の為にも、霧島さんの為にも、こいつは今すぐ消し去るべきなんだ！！！！

フィーナの仲裁のピコハンが僕らの脳天に当たるまで、僕は世界の為に戦った。

第十七話 エステルと狂戦士へ「バーサーカー」と明久タイム（後書き）

書き終えてからの一言……

あれ？明久つてここまで熱い奴だったっけ？なんか主人公途中から入れ替わった？と感じてしまいました（汗）

でも最後での雄二とのやり取りで、ああ明久だ。と安心した自分がいます…

今回はメインイベントから離れたサブイベント的なものになります！どうかお楽しみに！！

第十八話 暗躍と釘パンチと酒場イベント（前書き）

ファンタジー世界で、酒場特有のイベントといえば……？

第十八話 暗躍と釘パンチと酒場イベント

某日某所

暗闇に浮かぶ大広間。

その中央に位置する場所に玉座に座る男。鋭い眼光を持つてはいるが、大して鍛えてはいない体つきをした男。玉座に座るには『不適切』な姿だが、その男から放たれている異様な重圧は、充分にその玉座に座るだけはある程『適切』だった。

その男の前にいるのは、明久と対峙し、自らの行いを認めずに逃げた領主。今、その領主は顔を青くしながら男の前に跪いていた。

「……で、たった一人の小僧に良い様に言われて、おめおめ屋敷を放置して逃げてきたのか……しかも、用心棒にくれてやったジャギまでも撃退されるとはなあ………」

「う、ぐっ………」

薄い笑いを浮かべながら男は言う。

男が言葉一つ放つたびに、領主の男は全身に氷柱こむすびで刺し貫かれるような、寒々しさを覚え、手は汗ばみ、体は小刻みに震えだしていた。

「……まあ、それはどうでもいい。ジャギは俺様の手にも余る代物だったし、撃退したその小僧に奴は心を奪われちまったようだし、俺様としては少しばかり肩の荷が下りた気分だな」

その言葉に、領主の男は少なからず安堵する。

「だが」

ぐちゃり。

領主の男の右脇腹から右腕までの部分が潰された音が大広間に静かに広がり、静かに消えていった。

「ぎゃ、ぐぶつ、あああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！」

領主は右の上半身を潰された激痛に絶叫する。

床を無様に転がりまわり、血を撒き散らしながら激痛に涙と鼻水でどろどろになった顔でわめいている姿を見ながら、玉座の男はため息を吐いた。

「たくよお、なーに人様の技術をさも自分が開発したように言うかねえ……お前、あれだよ？たかだか『プラン』の一つの、それも端っこの分野を任されていただけの分際で、ほざき過ぎ。ちよっとは自重って言う言葉を知って教訓にしとけ……来世でな」

そう言つて男は右手をまるで近寄つてきた木の葉でも払うかのようになんて軽く横に振るつた。

瞬間、領主の体はまるで弾丸のように横に飛び、壁に勢いよく叩きつけられた。

ぐしゃり、という音が響くと同時に男の肉と血で描かれた赤い海がそこに広がる。

男の無残な末路に、特に気にした様子もなく男はふん、と鼻を鳴らす。

「おいおい、勘弁してくれよな」

野太い声と共に、一人の…ニメートル以上はありそうなスーツを身に付けた巨漢の大男が現れる。

「こつこつ血のりつてのは、結構取り辛いんだよ。やるならせめて『綺麗』にやってくれねえか？」

言いながら大男はどこからか呼び出した黒スーツの男達に命令を出し、床と壁の汚れを拭うように命令する。その行動を見ながら玉座の男は「ふん」と鼻を鳴らす。

「そいつは悪かったな。まあ、おかげで俺様の気が晴れたんだ。勘弁してくれ」

「やれやれ」

男の言葉に、大男は苦笑いを浮かべるだけだった。

明久サイド

領主の屋敷の事件から三日。

エステルが僕らの仲間になってからそれだけの日々が過ぎた。

最初、僕はエステルが仲間に加えられるのか不安だったんだけど、エステルは普通に僕らに加わっていた。

フィーナはエステルを妹のように可愛がっていて、雄二も元々あった子供好き、という面があつてか、普通にエステルと接していた。イレーヌは…なんというか、似たような傷を分け合っている者同士、共感する部分があつたのか、特に仲が良い感じになつていた。……シャオとムツツリー二が怪しい目でエステルを見てたのが氣になつただけ。

そして領主の事なんだけど…屋敷の中を搜索したところ、奴はどこかに逃走したみたいなんだ…それも、自分の家を爆破するというとんでもない方法で。屋敷が炎に包まれた中、僕達は必死に捕まっていた子供達をつれて逃げてたから、雄二の予想だと、その混乱に乗じて逃げたんだろう、との話らしい。まったく、最後の最後まで他人の事を考えない奴だなあ…今度会つたら丸坊主にして額にハゲつて書いてやる！

それで、助かつた子供達だけど…イレーヌの話だと、助かつたのは屋敷に連れていかれた数から二割ほど減つてたという事実が出てきた。

連れてこられた子供の数は800人近く。そこから二割引かれたからつまり……約160人の子供達が今回の領主の実験で犠牲になつたということだ。亡くなつた子供達の遺体は未だ瓦礫の下か、あるいは別の機関に買収された可能性もあるらしい。瓦礫を涙を流しながら素手で掘り返している両親の姿を見ると…正直、僕は悔しい思ひがあつた。

もっと早く僕らがこの街に来ていれば…こんな風に涙を流す人を減らす事ができたんじゃないのか、って……。そんな風に考えてたら雄二に思いつきりどやされた。

『後悔してんじゃねえよ。悔しいなら止まつてる暇なんてねえだろ』

その言葉を聞いて、僕はハツとなった。

悔しい思いをしているのは、僕だけじゃなかったって気付けたから……。

フィーナも、イレーヌも、シャオも、ムッツリーニも、そして……雄二も。

でも、過ぎてしまった時間は二度と戻ってこない。だからこそ、僕らは歩かなきゃいけない。雄二はもう歩き出していた……なら、僕も歩き出さないと……。

残酷な言い方なのかもしれないけど、僕が……人間が悔しがったりしても死んだ命が蘇ったりなんてしない。死んだらそれつきりだから。だからこそ生きている僕らは前を向いて歩かなきゃいけないんだ。

けれど、僕は納得なんてしないよ？

また今回みたいな事があつたら、迷わず突っ込んでいくって言う自身はある。

そこで今回よりも酷い事実や……それをやる人間の強い信念があつたとしても、僕は僕のワガママで助けられる人を助けようと思う。また踏み込んで後悔するかもしれない。でもそんなの関係ないよ。何度やったって、そんなのは知ったこっちゃない。

なんだって僕は伝説で語られるぐらいの『バカ』だもんね。

まあ、そんな開き直りに似たような感じで僕は四日目の朝を迎えた。

「くー……すー……」

朝の気持ちいい布団の温もりに包まれながら、僕は夢と現の狭間をさまよつかのような感覚に身を委ねていた。

「……………（ゆたゆた）」

「うん」

なんだろう？この心地良い揺れは……

「……………（ゆたゆたゆたゆたゆたゆたゆたゆたゆたゆた）」

ゆたゆた）」

まるで揺り籠の中にもいるかのような心地良い揺さぶりに僕の意識は再び夢の世界に行きそうになる。このままだと、二度寝になっちゃうけど……これは仕方ないよね！みんなだっけと解ってくれるはず……

「なんだ、エステル。まだ明久は起きないのか？」

「……はい、さつきから揺さぶって起こそうと思ってるんですけど……」

「……」

「そのバカはその程度じゃ起きねえよ」

「……そうなんですか？」

「ああ、それにもっと手っ取り早い方法がある。どいてろ」

「……っ」

うーん、さつきから何なんだろう？

子猫みたいに可愛らしい声と、ブサイクな声がさつきから近くで聞こえて……

『三連……』

「敵バカの気配……!!」

命の危険を感じた僕は、先ほどまで浸かっていた夢の世界を一瞬で飛び出し、覚醒した瞬間、とっさにベッドから飛び出す。まどろみ？夢の時間？そんなものこの非常時に関係あるか！

『釘パンチ……!!』

ズガガガ

ン……!!!!

するとさつきまで僕の頭があつた場所に三連続のパンチが突き出され、ベッドが嫌な音を立てて盛大に軋む。おお、今の一撃に耐えるなんてすごいな……なんて思ったのは一瞬。すぐに僕は怨敵である敵バカに視線を向ける。

「雄二貴様！朝っぱらから何するんだ……!!」

「朝っぱらからうるせえなあ……人がせつかく起こそつと思つてやつた釘パンチの苦労を返せ」

「何でそれを使えるのかは置いとくけど、くらったら確実にアウト

だよね！僕の頭がどうなるのか、解るよね！？」

「そうだな、とりあえずザクロのように中身が…いや、中身なんて最初から無いから頭部が木っ端微塵に吹っ飛ぶだけだな」

「吹っ飛ぶだけ！？違うでしょ！」

「そうだな、血が辺りに吹き飛んで部屋が汚れるな」

「根本的な部分を言ってるんだ！！」

こいつは僕の命をなんだと思ってるんだ！？この前、こいつの言葉に感動した僕の気持ちを返せ！！

「とりあえず、とつとと着替えて下の食堂に降りて来い。他の連中は既に集まってるぞ」

「あ、うん。解ったよ」

「じゃあな」

そう言っ出て行く雄二。その後をてこてこ追いかけるかのように出て行くエステル…だったけど、くるりと僕のほうに振り返るエステル。

「…その、まだ挨拶がまだだったので……おはようございます、明久さん」

「おはよう、エステル」

短い言葉のやり取り。でも、エステルにとってはとても大切なやり取りだ。

今まで人との温もりというものに対して縁遠いものだったからこそ、僕らと触れ合う事で少しずつ人との関係を知っていければいいな。

「…では、失礼します」

「うん」

さてと、僕も着替えていかないと。

魔獣との戦いでボロボロになった生地を修理し、さらにイレーヌが様々な魔術を施してくれたパワーアップ版、『文月学園指定制服』を身に付ける。見た目や肌触りなんかは全然変わらないのに、これで炎や冷気などの耐性がついているんだから驚きだ。

とりあえず着替えたので、一階のレストランに向かおうと。

木造の床をとんとん、という音を立てながら歩いていく僕。途中で、魔術の力で明かりがつく…現代で言う蛍光灯みたいな物を見ながら、やっぱり異世界なんだなあ…と今更感たつぷりな事を思ってしまう。

最近当たり前のように術技を使っている僕だけど、本当なら一生目にする…あるいは、使うことなんてできない（というか、ありえない）もの…魔術に、こうして触れている。なんてことを考えてみると、これは少し感慨深いような…そんな気持ちになってしまう。

今まで架空のものだったものが、こうして現実のものとして使われているのは、科学技術が発達した僕らから見ると、ある意味衝撃的なような……

「どうした、明久？バカっぽい顔がバカ顔になってるぞ？」

台無しだ！

せつかく人が感慨深いものを感じていたって言うのに！！僕は文句を言ってるのと、近くにいた雄二に…って、あれ？

「雄二、なんでここに居るの？先に行つたんじゃ…」

「その前にトイレに行きたくなってな…んで、帰り道に偶然お前と合流したって訳だ」

「なるほど、それじゃ早く行こうよ。きつとみんな待ってるよ」

「だな。んじゃ朝だし…軽くブレッド10個に、オムライスにハンバーグにホットドックにスクランブルエッグにチーズハンバーガー3個にでもしておくかな」

「充分重くない!?!?」

魔術の事よりもこいつの身体の構造の方が僕は気になった。

『いただきまーす』

運ばれてきた食事を前に、それぞれが注文したものを口に運ぶ。

ほかほかと湯気を立てる海鮮クリームシチューに、ブレッドをひたし、ホワイトソースが染み込んだパンを咀嚼する。うん、ブレッドに濃厚なホワイトソースに海老や貝の風味が絶妙なハーモニーを奏でていて、とても美味しいや。

「なんだ、明久。そんなに美味しいのか？そのシチュー」

「うん。結構イケるよ」

「よし明久。おかつの交換をしようぜ」

「OK。僕はそこの半熟スクランブルエッグね。雄二は？」

「俺はそのシチューをもらう。こっちの食器にでも入れてくれ」

「解ってるよ。その分、シチューの量と同じくらいもらうからね」

「んな事、解ってらあ」

「じゃあ、交換だね。はい」

「ほらよ」

IN パセリ（半熟の黄身付）

OUT 貝の殻（ホワイトソース付）

「ヤんのかコルアアア」

「その言葉そっくり返すわボケエエエエ」

お互いに胸倉をつかみ合い、ガンのくれ合いを始める僕ら。なんてケチな奴だ！スクランブルエッグぐらい無償でくれたっていいじゃないか！

「何やってるのよ、あなた達は……子供みたいよ」

そう言いながら呆れ気味な視線を向けてくるイレーヌ。

「いや違うんだよイレーヌ。僕は寛大だけど、雄二がクズだからさあ」

「イレーヌ、明久と一緒にしないでくれ。子供並みなのは、コイツの頭だけなんだからな」

「……………ッ！！（ガンのくれ合い）」

「そういうところが子供みたいなのよ……」

「二人とも、喧嘩はダメだよ」

そう言ってフィーナが僕らの会話に割って入ってきて、僕らのスプーンを持つと……

「はい、これでいいよね？」

「「あ」

僕らがいがみ合っている間にそれぞれのおかずが交換されていた。

「ついでに私のも交換」

「なら、私も」

そのままフォークとスプーンを動かし、フィーナのポテトサラダ

と、イレーヌのハムチーズのサンドイッチも一緒に交換する。おお、かなりバラエティ豊かになったな。

「仕方ない、ここはイレーヌとフィーナに免じて許してあげよう、雄二」

「それはこっちの台詞だ」

雄二のシャツから手を離し、朝食を再開する。この後は今後どんな風に動くかを話すから、頭を使う分、朝のエネルギーは必要不可欠だ。

「まったく、朝食ぐらい普通に別けてあげられないの？」

「…普通に交換すればいいはずです」

イレーヌとエステルのクールコンビが呆れたような目で僕らを見る。

そんな事言われても、僕らが注文したもつて割とファミレスとかでも食べれちゃうものだし、何より自分で買って自分で食べるってなんか切ない。

ちなみに普通に交換など、たとえ異世界でも絶対にありえない。なぜなら量がまったく増えないからだ。男子高校生の胃袋を舐めるなよ！

「のう、ムッツリーニ。主らの世界でもこんな感じじゃったのか？」

食べてる間に、リンゴを丸齧りしていたシャオが犬耳…じゃなく狼耳を動かしながら、目玉焼きを上に乗せた食パンを食べているムッツリーニに聞いていた。

「……………（コクリ）ほぼ、毎日」

「……………主達、よっぽど仲が良いのじゃな」

なんて不名誉な。

けどこれ以上話していると、せっかくの朝食が冷めてしまつかもしれないし、大人しく食べるとしよう。雄二も同じ考えなのか、納得してなさそうな顔で食べてるし。

そして僕らが大人しく食事を再開しようとしたときだった。

「おおおう、さっきからうつせえぞー!」

突然響き渡る怒鳴り声。その後、いかにも柄の悪い男達が僕らの席に近づいてきた。

「お前ら、朝っぱらからうるさいんだよ!俺らへのあてつけか、アア!?!?!?」

「たくよお、ガキ供が!俺らギルド^{フレイム}火炎の狼^{ウルフ}の食事を邪魔しておいてタダで住むと思ってるのか?」

一昔前のチンピラみたいな反応をする男。普段なら無視したいんだけど…あいにく、今はちょっと雄二のせいでイライラしてるんだよなあ……なんて思ってたなら、雄二も額に青筋を浮かばせていた。

（雄二、こいつら殺っちゃわない?）

(いいこと言うじゃねえか明久。俺も調度こいつらにはイライラしてたところだ)

アイコンタクトだけで会話を終える僕ら。ふっ、こういう時程、僕らFクラスのスキルが役に立つ。さてと、まずは……

「あー、うるさくしてすみません」

とりあえずここは最初に自分の非を認める。こんな公共の場で騒いでしまったのは、マナー違反だもんね。

「はん、解ってるじゃねえか。解ってるなら慰謝料もらわねえとなア」

「だよな！悪いって思うなら誠意ってもんが必要だもんな！」

言いながらぎゃはははと笑いあうチンピラ供。僕は雄二とアイコンタクトした後、ムツツリー二にフィーナ達を下がらせるようにアイコンタクトを送る。

「なんで見ず知らずのあんたらに俺らが慰謝料払わねえといけないんだよ？」

「あん？」

「公共の場で騒いだのは、たしかに俺らに非がある。だがそれを言うなら、こうして周りに迷惑をかけてるお前らも同罪なんじゃねえのか？」

雄二の正論に、チンピラ供は予想通りの反応を見せる。

「んだとテメエ!!」

「俺らを舐めてんのか!？」

「舐めてねえよ。俺は正論を言ったまでだ」

「こ、このクソガキがああああ

!!!」

男の一人が雄二に向かって拳を高く振り上げて雄二に向かって勢いよく突き出した。

それに続いてか、僕の胸倉をチンピラの一人が掴んだ。
瞬間。

「ふん！」

「はっ！」

「ぐぐばあ!??」

『ッ!!????』

迫る拳を、首を振っただけでかわし、そのどてつ腹に拳を放つ雄二と、胸倉を掴んだ手を捻り上げ、そのまま逆に相手の胸倉を掴んで床に投げ落とす僕。そして突然の反撃に驚いたチンピラ達がそこにいた。

雄二はパキパキと拳を鳴らしながら立ち上がり、僕もそれに続いて立ち上がる。

「さてと、そっちから仕掛けてきたんだ」

「反撃されても…文句はねえよな」

「……………手を貸そう、明久、雄二」

そう言つてニヤリと意地悪な笑みを浮かべる雄二。

これぞ僕らの作戦。題して、『やってきたのなら殲滅しても文句はないよな?』だ。

僕と雄二が台詞を相手に対して、正論という名の遠まわしな挑発をして、相手にわざと先手を取らせた理由は、ここにある。

ここにはたくさん…それも『無関係な人』の目がある。

それを利用して、僕らの行動が『正当防衛』に見えるように仕向けたというわけだ。後で自警団の人たちに質問されても、ちゃんとした理由があつたから、という事にしてもらうためにもね。

それに……………

「「酒場で乱闘なんてやってみたかつたしね（からな）」」

「それが本音なんですよ!」

避難したイレーヌから怒鳴り声のようなものが聞こえてきたけど、スルー。だつて男としてはこういったシチュエーションは一度はやつてみたいものだったしね。ムツツリーニも同じ考えみたいだしね。

「……………ふん!」

「いぶおー!」

正拳突きをチンピラの腹に放つムツツリーニ。殴られたチンピラ

はそのまま数メートルぐらい吹っ飛ばされる。ムツツリー二め、向こうの世界にいた時では考えられないくらい強くなってるな。ムツツリ商会も今後は活動有効範囲をさらに広められるかもしれない。でも、強くなってるのは何もムツツリー二だけじゃない！

「おらぁー！！」

「遅え！二連釘パンチ！！」

「ぐはぁー！！」

相手から攻撃が出る前に雄二は相手の腹に釘パンチを放つ………と
いうか、雄二って実は体内にグルメ細胞でも持ってるんじゃないの？

「持ってねえよ」

雄二からの反論を聞き流しながら、僕は目の前のチンピラの体を、壁を駆け上がる要領で駆け上がって顎を蹴り上げ、そのまま宙で一回転して床に着地……しようとしたら床に転がっていたビンに足を滑らせ、バランスを崩したと思ったたらそのまま背後から羽交い絞めにされた。

へへっ、と笑いながら僕の顔を殴ってくるチンピラ。ぐう、痛い
なあー！！

僕は下半身に力を込めると、勢いをつけて前に屈んだ。

「どっせえい！！」

「「ぐ」へえー！！！！」

屈んだ拍子に前に突き出された僕より背が高いチンピラは、僕の

いわゆる、おばさんだった。この宿の女将さんといった感じかな？
手には先ほどの音の原因…フライパンとお玉がそこにあった。

「ああ！？なんだ、ババ…ぶべらっ！」

メンチ切ろうとしたチンピラを持っていたお玉の一撃で沈めるお
ばちゃん。強え……。

「口答えするんじゃないのぉ！アンタは人のアゲ足ばかりとって
エエエー！」

なんかどっかで聞いた事のあるような台詞を言い放つおばさん。
なんというか、おばさんの勢いに負けたのか、あるいは目の前で一
撃、それも調理道具のお玉で倒された仲間の姿を見てか（というよ
りは両方だろう）、チンピラ達は大人しくなった。やれやれ、せつ
かく体が温まってきたところなのに……。

（引き際だな、明久）

（だね）

（……………この辺りが、潮時）

最初からその場のノリと鬱憤晴らしでやってた僕らは場の空気を
察して、ここまでにしておく。

「ごめんなさい、おばちゃん」

「すみませんでした」

「……………（ペロリ）」

とりあえず、暴れたことは悪いので素直におばちゃんに謝る僕ら。するとおばちゃんは…

「誰がおばちゃんだつてえ！？お姉さんでしょうか！…！」

「「「えっ！？？」「」」

僕ら全員三白眼になる。

いや、あんたどつからどうみてもおばちゃんですよ？そんなパンチパーマーと割烹着というスタイルは、絶対にお姉さんはやらないと思うけど……

「なんだい、その『何言つてんだ、この人？』みたいな顔は！？まったくアンタは人のアゲ足ばかり取つてエエエ！！」

（（（ええ……………）））

人の話も聞かないで怒鳴りまくるおばちゃんを見て、僕らは朝だというのに壮絶な脱力感に襲われる。そのままグダグダとおばちゃんの説教をチンピラと一緒に数時間も聞かされるハメになった。

（雄二、逃げよう。僕らの魂の安寧のために）

（ああ、まったくだ……）

雄二とアイコンタクトで会話しながら、下半身に力を入れて一気に逃げようと、

「その二人イ！動くんじゃないよお！！」

「っ！！!?」

バカな！何で解つたの!?

まさか気配!?!逃走しようと感じた気配だけで察したというのか!?!そんなことができるのなんて鉄人だけだぞ!?!???

「人の話は最後まで聞くもんだよ!?!しつかり最後まで聞きな!?!」

いや、あんたさつき人の話なんて聞かずにチンピラさんぶっ飛ばしてたよね?

「口ごたえするんじゃないの!?!アンタは人のアゲ足ばかりとってエエエ!?!」

「なんで人の心読めるの!?!」

「口ごたえするんじゃないの!?!アンタは人のアゲ足ばかりとってエエエ!?!」

なんて奴だ!?!僕ら反論も何もやってないというのに!?!もうやだ、鉄人の補習並みに嫌だ!?!...周りをみると、雄二とムッツリー二も鉄人の補習を受けている時のような顔になっていた。僕の視線に気が付き、二人は同時に頷いた。

とりあえず、今日の一件で僕らの今後は決まった。

一刻も早くこの街を出よう、と.....。

第十八話 暗躍と釘パンチと酒場イベント（後書き）

あれ？おかしいな……最後のほうであんなおばちゃん登場させるつもりなかったのに……とりあえず、次回は旅立たせる予定です！

第十九 ステータス（前書き）

今回は、明久たちのステータスと、今まで手に入れた&コメントで贈って下さった称号を出します！

第十九 ステータス

吉井明久（CV：下野紘）

キャラ特性『集中回避』 自身の生命を守るために編み出された、危機的察知能力の一つ。敵の殺しを刹那に感じ取り、反撃を行うために敵の背後へと回り込むもの。

サポート『天の羽衣』 エデン・ヘヴンズの力を使い、自分とパートナーに若草色のオーラをまとわせる。オーラをまとっている間は、敵の攻撃をそらし、自身の素早さを上げてくれる。

称号一覧

観察処分者

別名、バカの代名詞。文月学園における生徒の底辺、不名誉の頂点に君臨するものに与えられる称号。

語り継がれしバカ

彼のバカはついに伝説として語り継がれていた。『まあ、伝説といつても不名誉以外の何物でもないがなb y 悪鬼羅刹』

パクリ野郎

たとえパクついても知らぬが仏。カッコよければそれでよし！向こうで中二病だ何だと言われても、ここでは関係ないのです。

フラグファイター

誰にでも手を貸し、誰にでも優しく接する！そんな貴方はいつの間にか女の子に好かれてしまう…けれどその気持ちには気付かない！そんなバカに贈る称号。

Fクラス生徒

勉強は嫌いだが、その代わりに様々な特殊スキルを持つ普通じゃない生徒に贈る称号。『まったく自慢はできないがなby悪鬼羅刹』

仲間バカ

大好きな仲間を信じ続ける。自分がバカにされるよりも、仲間がバカにされる方が許せない！そんな仲間第一の貴方に贈る称号。

ギャルゲの主人公？

その鈍感さやフラグなどを無自覚な行動はまさにそれなのだが、彼の周りにはなぜか同時に様々な死亡フラグが……そんな貴方に贈る称号。

迷コンビ

息が合ってるようで合っていない。そんな二人に贈る称号。『くたばれ、この下衆野郎おおおおっ！！by観察処分者&悪鬼羅刹』この称号を付けた場合、特定のキャラ二人での共鳴術技の威力が10%UP（超臣蔵様より）

一級尋問官

悪友にすら、冷酷に裁きを与える貴方に贈る称号。『くたばれ、雄二いいいい！！？byミスター鈍感』（超臣蔵様より）

最強のバカ

理屈とか常識とかそんなものは分からない。バカだから。だから……どんな事を言われ様とんだらうと、自分の正しいと思ったことを貫き通し、自分の心に絶対に嘘はつかない。そんな誰もかなわないバカに贈られる称号（夜叉龍様より）

本質デユラハン

首なし騎士Ⅱ首がないⅡバカ。そんな貴方に贈る称号。『召喚シテムにまでバカにされた…。by 観察処分者』（超臣蔵様より）

決意の剣

虐げられている人間の為に剣を手に取る者のみに贈られる称号（紅優也様より）

バカの逆鱗

一度触れたら対象をぶっ飛ばすまで収まらない！この称号をつけた場合、物攻+15%物防-10%（夜叉龍様より）

衣装称号・復讐を誓う精霊剣士の少年

初めて勇気をくれ、初めて守ってあげたいと思った少女のために精霊の騎士となる決意をした少年。（TOS・Rのエミル・キャスタニエ風の衣装になります）この衣装になると、戦闘時の台詞が変化します。

衣装称号・守る決意を持つ領主の息子

何も知らなかった幼少に起こった悲劇から、青年は騎士になる道を選んだ。（TOGのアスベル・ラント風の衣装になります）幻魔衝裂破を使えるようになります。

フィーナ・エルセレット（CV：水城奈々）

キャラ特性『フェザーライト』剣とチャクラム。異なる武器を聖なる光の力で自由自在に使いこなす。アピールをすると、剣主体にな

るか、チャクラム主体になるか選べます。

サポート『アイテムステイル』 天然ドジの本領を無意識で発揮し、ダウンした敵に向かって転び、その拍子に敵から高価なアイテムやガルドを盗む。

称号一覧

天然っ娘

純粹無垢。そして優しい心…そんな貴女に贈る称号。

ドジッ娘

何も無いところで転んでしまう。そんな貴女に贈る称号。

初恋少女

『えっと、あの時は足を怪我してて、回復術を使う暇もなく魔獣が目の前に現れて…もうダメだ！って思った時に彼が助けてくれて…
…そして笑顔を見せて…』初めて恋をした少女に贈る称号。

無垢なる魔性

幼い顔つきだが、その身体は成長しまくり！だがその成長の凄まじさは本人にとっては無自覚らしく、異性を無意識のうちに惑わす少女！Fクラス級の身体を持った貴女に贈る称号。

白衣の天使

白い衣服に回復術。戦闘では心と身体を同時に癒してくれる貴女に贈る称号。

衣装称号・クルシスの神子

世界のために自らを犠牲にしようとした…そんな優しくも薄幸な少

女。(コレット風の衣装になります)この称号をつけると、ジャツジメントを使ったとき、低確率でホーリー・ジャツジメントが発動します。

イレーヌ・セレスティ(CV:まだ決まってません)

キャラ特性『魔術昇華』 放った魔術に大気中のマナを注ぎ込み、更にパワーアップさせる魔術。例ファイアボール 昇華 バーンストライク。

サポート『オートマジックガード』 敵が魔術を放ってきたら、パートナーと自分にマジックガードを発動させてくれる。

称号一覧

クール系少女

第一印象は冷静沈着、そんな貴女に贈る称号。

悪夢の記憶

未だ逃れられぬ過去の記憶。彼女の過去に、何があったのか……

同級生教師

同い年だけど、頭は良いので出来の悪い生徒にしつかりと勉強させる貴女に贈る称号。

半人半霊

望まずに手に入れてしまった精霊の力と身体。人でもなく、精霊で

もない私は誰？

ツッコミ担当

ボケまくる仲間につっこみ続けていたら、いつのまにかそう呼ばれていた…望まずに手に入れてしまった称号。

第七音譜術士

クールでしっかり者だが、無類の可愛いもの好きな、ユリアの譜歌を歌う兵士。（この称号をつけると、ティア・グランツ風の衣装に変化します）この称号を付けると、ナイトメアが扱えるようになります。

シャオ・ムウラン（CV小清水亜美）

特性『鼓舞咆哮』 アピールをした時、自分とパートナーに『シャープネス』の効果がある咆哮をする。その時、低確率で近くにいる敵を気絶状態にする。

サポート『マジックアウト』 パートナーを狙って魔術を放とうとしている敵を、野生の勘で素早く察知し、詠唱を素早く中断させる攻撃を放つ。

称号一覧

獣少女

コスプレ？いえいえ、モノホンです。そんな貴女に贈られた称号。

露出狼

やたら露出が高い服を着ているのは、戦闘の面もあつたり、男を惑わす目的も…誘惑したがりなのあなたに贈る称号。

ムツツリ商会副会長

最近、ムツツリ商会に新たな人員が!? 『今入会すれば、特別サービスがありんす by 獣少女』

自称・噂の竜使い

竜にまたがり空を駆け、魔導器を破壊する。いつしか人々は竜使いと呼ばれるように… (この衣装を付けると、ジューディス風の衣装になります) 『月破紫電脚』が使えるようになります。

坂本雄二 (CV: 鈴木達央)

特性『チャージ』 技の発動後に、自身の闘気を武器に集中させ、技を『チャージ技』に変化させる。

サポート『ブレイカー』 喧嘩する日々によって磨かれた技。相手のガードを計算高い一撃で破壊する。

称号一覧

悪鬼羅刹

幼馴染みとの確執により、日々喧嘩に明け暮れる様になった貴方に送る称号。称号効果: 攻撃力、敏捷性 + 5% (超臣蔵様より)

Fクラス生徒

勉強は嫌いだ、その代わりに様々な特殊スキルを持つ普通じゃない生徒に贈る称号。『まったく自慢はできないがなb y悪鬼羅刹』

Fクラス代表

バカの巣窟、Fクラスの大將。バカを率いて戦う貴方に贈る称号。

迷コンビ

息が合ってるようで合っていない。そんな二人に贈る称号。『くたばれ、この下衆野郎おおおおおっ!!! b y觀察処分者&悪鬼羅刹』この称号を付けた場合、特定のキャラ二人での共鳴術技の威力が10%UP(超臣蔵様より)

語り継がれし尻に敷かれマン

実家だろうと、学校だろうと、異世界だろうと変わらぬ関係。変わらぬ好意。あなたはもう、彼女から逃れられない……『捕まっていたまるか ！！b y悪鬼羅刹』……逃がさないb y学年主席』

本質人狼

野性味溢るる、そんな貴方に贈る称号。(超臣蔵様より)

哀の奴隷

逃げようとも逃れられない。黒き呪縛を纏う貴方に贈る称号。『男とは……無力だb y悪鬼羅刹』特定のキャラとパーティが一緒の場合、基本能力値に+5%の補正(超臣蔵様より)

明久の幸せ潰し

明久の幸せを許さず、それを叩き潰す者に贈られる称号(紅優也様

より)

衣装称号・野生の山賊

槍を片手に、相棒のガルフと一緒に野山を駆け巡る山賊青年。(この称号を付けると、モーゼス・シャンドル風の衣装になります) 狼破が使えるようになります。

衣装称号・マルクト帝国軍大佐

死霊使い、腹黒陰険眼鏡、様々な異名を持ち、お茶目な皇帝の友人である帝国軍大佐。(この称号を付けると、ジェイド・カーティス風の衣装になります) 雷神旋風槍とエナジーブラストが使えるようになります。

ムッツリ
土屋康太(CV:宮田幸季)

特性『ムッツリアイ』自身の性欲を存分に使った技。対象を見ただけで、詳細なプロフィール(女性の場合はスリーサイズまで)を手に入れることができる。

サポート『ムッツリイマジン』ジ・ダークナイトの能力を使い、相手に幻影を見せてパートナーに攻撃が当たらないようにしてくれる。

称号一覧

寡黙なる性識者

土屋の名は知られずとも、男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑の名として知られている……』……………！！（ブンブン）』

ムツツリスケベ

必死に否定していても、最早みんなが知っている事。それでも彼は否定する。そんな貴方に贈ります。』……………いらん！b y寡黙なる性識者』

鼻血MAN

否定しても体は正直！純真なるエロ心を持った少年に贈る称号。

Fクラス生徒

勉強は嫌いだが、その代わりに様々な特殊スキルを持つ普通じやない生徒に贈る称号。『まったく自慢はできないがなb y悪鬼羅刹』

ムツツリスパイ

ムツツリな彼には様々な便利グッズが…それを駆使して何をするのかは…もう誰もが知っていたりする。

ムツツリ商会会長

某学園一の情報通にして、寡黙なる性識者の貴方に贈る称号。『……………今人会すれば、どれでも3枚無料。b yムツツリーニ』（超臣蔵様より）

本質吸血鬼

血と女を渴望する。そんな貴方に贈る称号（超臣蔵様より）

将来医者志望の格闘家

医療大学の研修生の少年。困った人は見過ごせないお人よし君です。（この称号を付けると、ジュード・マティス風の衣装になります。）

す) 快気孔が使えるようになります。

エステル(CV花澤香菜)

称号一覧

被験体018

拾われた場所で付けられた、自分の呼び名。

小さな恋心

初めて逢った貴方の温もり。助けられてくれた貴方の優しさ。私は貴方のことが大好きです(死ヲ司ル者様より)

花の名前を持つ記憶喪失少女

花畑で出会った一人の少女。とても強いけど、身近な危険も知らない、お花が大好きな女の子。(この称号を付けると、ソフィ風の衣装になります)アストラルベルトが使えるようになります。

第十九 ステータス（後書き）

以上です。なお、新しい称号などが手に入った場合は、随時更新させていただきます！コスチューム称号等、楽しみにしています！

第二十話 幻竜と船旅と魔法少女（前書き）

今週は一話しか書けませんでした…無念。

第二十話 幻竜と船旅と魔法少女

〃〃出張！鉄拳人生相談〃〃

鉄拳先生「私が諸君の質問に答えよう！」

【S本Y二さんのご相談】

鉄拳先生、俺の悩みを聞いて欲しい。

俺の幼馴染の女子は少々常識というものに欠けている。具体的に「恋人」と評して腕間接を極めながら歩いたり、天下の往来で俺のズボンとトランクスを脱がそうとしたり、逃げようとすればスタンガン（殺傷設定）で追いかけて来たりする。どうすれば幼馴染に常識を教えられるのか、教えて欲しい。

【鉄拳先生のアドバイス】

すまない、早くも出鼻を挫かれたような気分だ。悩みらしい悩みといえはそうなのだが、正直、どう答えればいいのか悩んでいる。なぜ校外に来てまでこんな一般生徒の悩みとは逸脱したものが寄せられてくるのだろうか……すまない、愚痴ったところで君にはまったく関係のないことだったな。

話を戻そう、君の幼馴染なのだが…ひよっとしたら何か精神的なもので病んでいるのかもしれない。そういう時程、君のような身近で理解がある人間という存在が必要になる。おそらく彼女にとっては、君がそれに当てはまるものだと私は思う。

辛い事だろうが、彼女を支えられるのは君しかいないだろう。相談や愚痴などは私が聞いてあげるから、どうか彼女の言葉に一つ一つ真剣に受け答えてくれ。

二日後

【S本Y二さんのご相談パート？】

鉄拳先生、二度目ですまないのだが聞いて欲しい。

先生の言われたとおりの行動を試してみたのだが、そのせいで俺は危うく『冗談』と称して婚姻届にサインをしそうになったり、ただかデコにキスしただけなのに『子供ができた』などとぶつ飛んだ発言をしたり、手足を拘束されてそいつの家に拉致される羽目になった。土下座でもなんでもするから、あいつに常識を教える方法を教えてくれ！頼む！！

【鉄拳先生のアドバイス】

……とりあえず先に謝っておこう、すまない。

まさか私のアドバイスが裏目どころの騒ぎではないようなものになっってしまうとは思ってもいなかった。なぜこつも私に寄せられる相談は心療科などに寄せられるようなものが多いんだ……教師として自身が無くなってくる。このような質問が続くのなら、再び全てを投げ出してこのコーナーを終わらせてしまいたい気分だ。……すまない、こんな事は君にはまったく関係のないことだったな。話を戻そう、君の幼馴染は精神的に何か欠落しているのかも知れない。こういう時は、無理やりにも医者に連れて行き、少しでも早急に原因を説明するところから始めなければならぬ。話はまずそれからだと私は思う。

【エルセレット・Fーナさんのご相談】

鉄拳先生、私の悩みを聞いてください。

私のお友達には、いつも喧嘩する二人がいます。顔を合わせるたびに喧嘩、食事の時も喧嘩、そんな毎日ばかり送っています。

二人とも私の話をよく聞いてくれず、いつも実力行使をして止めてなきやいけないんです。どうやったら暴力を振るわずに二人の喧嘩を止める事ができるんですか？差し支えなければ、教えてください。

い。

【鉄拳先生のアドバイス】

……………すまない、初めて生徒らしい悩みが寄せられてきて先生は今、もの凄く感動している。まさか学園外でようやくこういった相談を受ける事ができるとは…教師をやっている、心から良かったと思える瞬間だ。…すまない、話がそれたな。まずはその二人と真剣に話し合ってみるというのはどうだろうか？なぜ二人が喧嘩するのか、どういった事が確執の原因なのか、そういった事を聞かなければ何も始まることはないだろう。不安なのかもしれないが、先生は君の優しい言葉が二人の確執を解いてくれると信じているぞ。今後も、こういった質問をどんどん待っている。

【S本Y二さんのご相談パート？】

鉄拳先生、心療科の医者が『問題無し』と言ってきたのだが、俺はどうすればいい？

【鉄拳先生のアドバイス】

弁護士を呼んでもらってくれ……………まだこのコーナーは続ける予定だから、『これ以外』の相談なら何でも受け付ける。
だから…強く、生きてくれ。

真っ白な空間。

音も、色も、物も、何も存在しない真っ白な空間。
いや、せいかくには僕という存在がある。

ゆっくりと周りを見渡す。『やっぱり』僕以外いないみたいだ。

(また、この夢か……)

あの日…エデン・ヘヴンズを手に入れた日から、僕は時々だけど…
こんなおかしな夢を見る。

悪夢…とは違う。

だからと言って、良い夢、と言う訳でもないんだよなあ……。
だって。

『よお』

僕のすぐ後ろ、ゆっくりと振り返るとそこには真っ白なボディに
全身が縄のように盛り上がった筋肉に包まれていて、水牛のような
ねじれた角が左右から、眉間から巨大な角が一本生えていた。目は
真っ赤な、それもルビーみたいな宝石のような輝きを放っている。
そして、赤や青の刻印が体のあちこちに刻まれた巨大なドラゴンみ
たいな怪物がいた。

『ここに来るのは一週間ぶりになるなあ、明久』

僕と同じ声で話しかけてくるドラゴン…なんというか、シユール
だ。

「そつだね…グリース」

こいつ、グレイスに会うからだ。

グレイスはけけけ、と笑うと僕を見下ろしながら言葉を紡いだ。基本的にいい奴なんだけど、この見るからにおっかない…なんていうか、最初にこいつの姿を見たときはその姿に僕は情けない声を出して思いつきり逃げ出し、逃げられないと解ったら召喚獣を呼ぼうとしたくらいだ。……まあ、なぜか呼び出せなかったんだけどね。今だつてこうやって普通に会話しているけど、実際はちよつとだけ（本当にちよつとだよ？）冷や汗をかいている。

『おい、さつきからダラダラと汗を流しすぎだ。まだ俺になれないのか？』

「さて、なんのことやら」

僕は『少しだけ』流れる汗を腕で拭いながら、目の前のため息をついているバカドラの言葉を流す……いやいや、ホントだよ？未だに原始的な恐怖を抑えるのに必死になつてゐるわけじゃないんだからね！

『さてと…《空の恐怖》を受け入れる覚悟はできたか、明久？』

そう言つてグレイスは僕の目を見て尋ねてくる。

この言葉を僕は何度も聞いてきた。やれやれ、またか……

「いい加減別の夢を見たいものだよ」

『まだそれを言うのか！？』

悪夢とも、良い夢とも違う、いわゆる同じ展開ばかりで退屈な夢に、僕は飽き飽きしていた。

『だから、何度も言っているだろうが！俺はお前の使役しているエデン・ヘヴンズであり、お前の影でもある存在だと！！お前という存在を介してこうして話しかけているんだと何度言えば解るんだ！』？

あー、またこの台詞だよ…正直、聞き飽きたんだよなあ…ゲームのNPCみたいで。まったく、せつかくの夢なんだからもつとい夢を見たいなあ……

『おい！いい加減に現実を認めろ！！これは夢なんかじゃないんだよ！……！』

たとえばフィーナや姫路さんとかとデートしている夢とか…あ、でもどうせなら雄二での当てゲームをやるのもいい夢に違いないよなあ…あ、でも最近ファンタジックなことばかり起きてるから、たまにはSF的なものも……

『おい、聞いているかー？』

SFといたらやっぱり宇宙戦争的なものも良いよなあ…ライフルやガトリングとか、ビームサーベルを使ってエイリアンを無双ゲームみたいに薙ぎ払い、悪の帝王雄二をぶっ倒す！うーん、これはこれで爽快感がありそう『いい加減にしるおおおおお！！』つてうわあ！？？

「何するんだよ！いきなり大声を出して！！」

『やかましい、このバカが！なんだって俺の次の主はこんなにもバカなんだ！……』

失礼な、夢のくせに。

『ええい、このバカは行動で示さないと解らないようだな……』

グリースはそう呟くと僕に一步近づいてくる。まったく、夢のくせにリアルすぎるんだよなあ……こんなものよりも、僕はもっと別のものを見てみたいよ。

『今からお前に《空の恐怖》の一部を分け与えてやる……その力をどう使うかはお前次第だ……その力を使って、俺が話したことをよく思い出し、考えろ』

「あー、はいはい」

どうせ夢だし、とりあえず生返事で返しておく僕。

『頼むぞ！？マジで頼むぞ！？？』

「解った、解った」

なんだかかなり焦ったように僕に問いかけてくるグリース。まったく、どうせ夢の話なんだからもっと壮大なものにしてほしいよね。

『ええい、もの凄く不安だがこの停滞した状況が何も変わらないよりはマシだ！』

なんかヤケクソ気味になっているグリースだったけど、突然何百年も生きた巨木を思わせるような腕を空に向かって伸ばした。

『《空の恐怖》を体言せし、七つの神器より、三つの神器……』

星海より来たれし欠片、シユテル・ザアニユヒレイト星光の殲滅……

天の大いなる腕、かいな破滅ノ兆シ……

我儘なる空の凶手、天之爪痕……

我が天の楽園の名の元に、かのものに宿れ』

グリースが呪文めいた言葉を唱えたと同時に、僕の目の前に三つの光景が視界一杯に広がった。

一つは夜空から降り注ぐ流星の数々。それによって引き起こされる爆炎と、破壊。

一つは空から現れた巨大な光が大地を次々と切り裂いていく光景。

一つは巻き起こされた嵐によって大地が次々と刻まれていく光景。

どれも現実離れたような光景だけど、それを否定するにはあまりにもリアルすぎるような展開に、いつの間にか僕は体を強張らせてしまっていた。

これは…恐怖だ。

それも体の奥底から湧き上がってくる原始的な…恐怖。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ……………！！！！！！！！」

ザザーン…ザザーン

「う…ん……………」

潮風を浴びながら太陽から降り注がれる眩しい光に、僕は夢の中から現実へと戻された。

今僕がいる場所は船の甲板の上。

実は僕達は前回の一件があった後、わずか数時間であるの街を出発した。

そして行き先は外国の南大陸を統治する軍事国家、『シャフェラ
ン』。

雄二曰く、『兵団に追われている可能性があるのなら外国に逃げ
ておいた方がいい』らしい。まあ、あいつの事だから他にも色々理
由があるのだろうけど、とりあえず僕らはその言葉に納得して船旅
を楽しんでいるという訳。

「……………」

普段なら目覚めたばかりのこの時間は、基本的に眠気でぼんやり
としているんだけど…今回は意識がハッキリとしていた。理由は多

分、『アレ』だろう。

(なんなんだろうなあ……………)

ふう、とため息を吐きながら袖を上げて空を見上げた。

なんだかこの世界に来てから色々と僕の常識に、非日常だったよ
うなものが現実として飛び込んでくるような…最近ではそんな錯覚
を覚えてしまうような事がたくさん起こりすぎていた。

魔獣との遭遇、影人との初戦、一方的な宣戦布告、非人道な人体
実験、狂人との戦闘…は向こうでもあったな。

色々なことがありすぎて、さすがにちよつとだけ疲れたみたいだ。
そのせいかな、船に乗ってから僕は暇さえあれば眠るような生活を
送っていた。

ポケットから携帯を取り出し、時刻をしてみる。現在の時刻は二
時三十三分…って、ほんの四、五分しか眠ってないじゃないか……。

「わぁ！」

突然横から僕の顔を覗き込むように現れた金色の髪に青い瞳
を持った美少女、フィーナが声を上げて現れた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

えーっと…これって多分だけど、僕を驚かそうとした訳？そりゃ

足音も無く僕に近づいてきたのには驚いたけど、でもそんな優しそうな笑顔で、しかも「わぁ！」なんて可愛らしい声で言われたら……

…逆にときめいてしょうがないんですけど……！
まったく、違う意味で心臓が少しドキドキしてるよ……よし、お返しに……

「わぁ……！」

「わっ！」

僕の声に驚いて飛びのくフィーナ。

してやったり、とばかりに僕は少しだけ意地の悪い顔になってしまっ

「びっくりしちゃったよ……」

「ははっ、フィーナって人を驚かせるのって結構下手みたいだね」

「う、うん…そうみたい」

てへっ、そう言って片目をつぶって下を出して自分の額をコツン、というドジッ娘がよくやる『てへっ、やっちゃった』ポーズを取るフィーナ……。ぐお、な…なんて破壊力だ…これが天然の力だというのが……

「……………いい（パシャパシャパシャパシャ……）」

シャッターを押す指が霞むほどの速度でフィーナを撮りまくるムツリーニ。ナイスだ！後で交渉しなければ……いやいや、その前に撮影を手伝わなければ！

……って、あれ？

「ムッツリーニ(さん)、どうしてここにいるの？」

僕とフィーナの言葉が重なる。

「……雄二が集まれって言うてるから、呼びにきた(パシャパシャ)」

言いながら今度は小首を傾げながらキョトンとした表情になっているフィーナを撮るムッツリーニ。ううむ、天然の破壊力はこんな表情にも出ているのか……フィーナ！なんて恐ろしい娘！！
……って、雄二が？

「一体どうしたんだろう……？ムッツリーニ、何か聞いてない？」

「……特には」

「雄二さん、私たちに何の話なんだろう？」

「さあ？」

少し考えてみたけど、やっぱり解らない。

……まあ、あいつのことだ。きっと何か考えがあって僕らを呼んでいるんだろう。

そんなことを考えながら、僕は欠伸をしながらフィーナとムッツリーニと一緒に船室へと向かった。

「ただいま」

「早く座れ、フジツボ野郎」

なんかこのやり取り、新学期であったような気がする。

「雄二、さっさと本題に入ろうよ……」

そう言っ僕は欠伸を一つ……ふわあ。

「明久、お前眠そうだな……」

「主はこのところ寝てばかりじゃのう……」

「私に来るまで、甲板の上で眠ってたんだよ」

「……さすがに寝過ぎでは？」

口々にそう言っけど、なんか最近、眠たいんだよなあ……そういえば起きた時から、なんだか胸の辺りに変な感覚があるんだよなあ

……

「どうしたのよ、明久？」

「具合、悪いの？」

イレエ又とフィーナがそう言っ僕顔を覗き込んでくる。僕は大丈夫と返すと、椅子に座っため息を吐く。そのまま雄二の方に視線を向ける。

「…え、あ、あの……」

突然の言葉に混乱しているのか、エステルは明らかに動揺していた。

僕はエステルの頭にポン、と手を乗せて優しくなでながら言う。

「エステル、ここにいるみんな、エステルの事を大切に想ってる仲間なんだ。だから、思いっきり甘えてもいいんだ」

「…で、でも…そういうのってなんだか……」

「大丈夫だよ、その代わり僕らもエステルに甘える時だってあるんだから。持ちつ凭れつ、って奴だよ」

「持ちつ持たれつ、だ」

僕なんかおかしなこと言った？

「まあ、そういうことだ。こういう時は素直にありがとう、っていやあいいんだ」

雄二が（珍しく）優しくそうに言葉をかける。

「そういう事だよ。それに、今回選んだのはムッツリーニとシャオだから、きつとエステルに似合うはずだよ」

「…そうでしょうか？」

少しだけ不安げなエステル。

でも、さつきよりは明るそうだし、ここはもう一押ししておいたほうがいいかな？

「大丈夫、雄二みたいな原始人が選ぶ服よりもずっとマシなはずだよ！」

「ああ、そうだな。明久みたいな最底辺の生物が選ぶものよりはマシだろうな」

「………（ガスガスガスガス）」

無言で互いの脛を蹴りあう僕ら。この野郎、こんな時に人の悪口を言うだなんてなんて奴だ。

「……くすっ」

「……ん？」

エステルが口元を押さえて少しだけ笑っていた。何がそんなにおかしかったんだろう？

「どうしたの、エステル？雄二のブサイク面がそんなにおかしかった？」

「バカ、違うだろう。お前の顔から思慮深さが微塵も感じられなかったからだろ」

「………（メキメキメキメキメキメキ）」

再び無言で対峙する僕ら。今度は互いの顔を鷲掴みにしていた。ええい、こいつは人の悪口をいちいち言わないと気が済まない奴な

のか!?

「二人とも、喧嘩はダメ!」

そう言ってフィーナが僕らの手を払う。ちい、命拾いしたな雄二!

「まったくあなた達は…でも二人の言葉には一理あるわよ。エステル、今はありがたく受け取っておきなさい」

「…はい!」

エステルは幸せそうな笑みを浮かべる。

よく解らないけど、どうやら僕達の説得は無駄ではなかったみたいだ。

「それじゃあ、ムッツリーニ!例の奴を!」

「……………了解」

そう言ってムッツリーニは紙袋をシャオに手渡す。それも一つ二つじゃなくて、結構な数の紙袋を……こいつ、一体どれだけ作ったんだ?

「それじゃあ、ワッチはエステルをコーディネートしてくるの」

「…えっ、あ」

紙袋を受け取ったシャオはあつという間にエステルの襟首を掴むと、部屋に配備されているシャワールームに入っていった。

「……………ムッツリーニ、エステルに変なものは着せないよね？」

こいつの事だろうから、そんなものは無いだろうけど、不安なので一応聞いてみる。

「……………俺がそんな愚を犯すとても？」

そう誇らしげに言うムッツリーニに、漢を感じたのは僕だけじゃないはずだ。

「ムッツリーニ、これは……………」

「……………明久、呆けている場合かッ……………！」

そういうムッツリーニはすでにカメラのシャッターを切っていた。その速度、もはや指が残像になっていく速度だ…って、そんな暢気な事やってる場合じゃない！僕も手伝わなければ！！

「…あの、これは……………」

言いながらエステルは顔を赤くしてスカートを押さえていた。

普段下ろしている髪の毛は、二つのリボンでツインテールになっていて、服装は胸元に蒼い宝石が装飾されたリボンと、不思議な文様が施された白いマント。さらに黒のスカートにタイツといったいかにも『魔法少女』といったような姿だった。

「ほう、これは驚いたな……」

「うわあ〜、すごい似合ってるよ!」

「ええ、もの凄く可愛いわ」

口々に魔法少女と化したエステルを褒める。エステルは褒められるのに慣れてないのか、みんなの言葉に顔を真っ赤にして縮こまっ
てしまっている。

「凄いよ!ムッツリーニ!エステルがもの凄く可愛い!」

「……………この俺にかかれれば当然の結果。エステルを使用する武器
や、普段からの行動。さらに言動、動きやすさ、動作、仕草なども
緻密に計算し、さらに俺の特性、『ムッツリアイ』を多用し、身長、
体重、スリーサイズ等を計測し、シャオの『野生の勘』から微かな
動作から放たれる気配や香り等を計算に入れ、それらを元に服のデ
ザインを多種に用意し、ミクロン単位で製作した」

普段無口なムッツリーニが恐ろしいほど饒舌に話しているところ
を見ると、これは最高の出来らしい。たしかに、ムッツリーニの言
葉に偽りは無く、エステルがどんな動きをしていても『似合ってい
る』という言葉が出てしまう。そういえば清涼祭の時に葉月ちゃん
の服をその場で縫っていたのもあって、やっぱりムッツリーニはこ
ういう事に関しては天才的なまでの才能を発揮させるみたいだ。

「…あ、あの…明久さん」

「どうしたの、エステル?」

「…に、似合って…ますか？」

顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言うエステル。うーん、そんな心配しなくても、十分に……

「うん！もの凄く可愛いよー！」

「…ありがとうございます」

赤くなりながらも、微かな笑みを浮かべるエステルに、僕は思わず可愛いと思つて彼女の頭を撫でてあげた。

「……うう、エステル、ちょっと羨ましいよお……」

「…あれが年下の魅力つて奴なのかしら…い、いえ。だったら私は別のベクトルを計算して攻めるだけ…」

後ろでフィーナ達が何か小声で話していた。どうしたんだろう？
気になって振り返ろうとした瞬間……

ドゴオオオオオオン！！！！

突然船が大きく揺れた。

僕はバランスを取る事も出来ずに、そのまま床に思いつきり体を打ち付けてしまう。痛みに顔をしかめながら立ち上がりながら、立ち上がってみると、室外からドタバタとした足音や、声が聞こえてきた。

『おい、一体何の騒ぎだ!?!』

『影人だ!しかも蒼渦そうがのレヴィアンだ!!!』

『なんだって!?!?!』

『ちくしょう、よりもよってそんな厄介な奴が!!!』

室外から聞こえてくる言葉に、僕らは黙り込んでいたけど、やがて全員がゆっくりと立ち上がる。

「雄二、いけるね?」

「誰に物言ってやがる」

言いながら雄二は籠手を腕に装着していた。ムツツリーニも刀を逆手に持って戦闘体制が出来ていると無言で示していた。

「船を沈められるのは勘弁だ…全力で行くぞ!」

「そうだね…行こう、みんな!!!」

『おう!!!』

僕と雄二の言葉にみんなが気合のこもった掛け声で応えてくれた。さあ、この世界に来てから二度目の影人戦だ。気合を入れていく

ぞおおおお

!!!!!!

第二十話 幻竜と船旅と魔法少女（後書き）

鉄拳先生のコラムはまだまだ続く！

鉄拳先生「答えられる質問には出来るだけ答えよう！」

みなさん、鉄拳先生に質問をドシドシ送っちゃおう！

鉄拳先生「待っているぞ！」

第二十一話 分担と船上戦と僕らの日常（前書き）

最近、バカテストを出してないなあ……

第二十一話 分担と船上戦と僕らの日常

船旅の日記

吉井明久の日記

『船に何日も旅をするのなんて初めてだから、どんなものになるか楽しみだったけど、イレーヌの英語の勉強で楽しむ余裕なんてあまりなかったよ……でも潮風が気持ち良かったり、カモメに餌を上げたり、船の上で雄二達と模擬戦をやるのも、普段とは違う感じに思えたなあ…何だかんだで、楽しい一日だったよ』

教師のコメント

普段とは違う環境を楽しめているみたいですね。そういった環境の変化が、吉井君にとってはとても良い刺激になったようで何よりです。できるならそれを勉強の方に向けられるのなら、先生としてはとても喜ばしいものです。

土屋康太の日記

『船に乗ってから少しの間、平衡感覚が取れず、眩暈のような感覚が続いた。あの感覚は一体なんだったんだろうか？』

教師のコメント

船酔いです。

坂本雄二の日記

『甲板の上に立つと潮風と共に少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。様々な人間が乗る船旅の醍醐味の一つなんだな、と思った』

で暴れてるってことなのかな？……と、そんな暢気な事を言ってる場合じゃないな。

「明久、ここは二手に別れた方が良いと思う」

「えっ？何で？」

「理由は…まず船内にどれだけ魔獣が流れ込んでるか解らない。これだと、ここでパーティを分断するのは得策とはいえないだろうが、甲板で魔獣を操っている影人が船の中から増援を呼ばせる可能性がある。そうさせない為にも、船の中である程度魔獣の数を減らしておく人間が必要になる」

なるほど。たしかに船の上で戦ってる最中に援軍なんて呼ばれたら大変だもんね。

「でも海の中から呼び出す、って可能性はないかしら？」

「それもある…だが別ける理由はそれだけじゃない」

「他に、理由でもあるのかのう？」

「もし船底に魔獣なんかが入り込んでたら厄介だ。船底に穴でも空けられたのなら、それこそ一巻の終わりだ。それを防ぐためにも、危険だがパーティを別ける必要がある」

確かに…船の上で戦ってるのに、その船を沈められたらいくらなんでも僕らに勝ち目なんてない。僕ら人間は、水中の中じゃ素早く動けないもんね。

「よし、それじゃあ僕は甲板の方に行くよ」

「……一応聞いておくが、理由は？」

「僕は武器が剣だから、狭い場所だと上手く戦えないし、術技も割と大技が多いから、できる限り広い空間で戦った方が良かったんだ」

僕の戦い方は、ある程度広いスペースが必要になる。だから船なんかの狭い廊下は剣を充分に振り回せないし、拳や蹴り技だって周りのみんなの動きを妨害するようなものが多い。だからこそ、僕は甲板で戦った方が良かったんだけど……あれ？雄二、なんか驚いた表情になってない？

「どうしたの、雄二？」

「……あ、いや、なんでもない……」

「で、どうかな？」

「あー、まあ、お前は最初から甲板の方に向かわせる予定だったからな。こっちにいると邪魔でしょうがねえし」

自分で予想はしてたけど、割と傷つくんだけど、その言葉。

「まあ、そういう事だ。大技を使える奴は甲板、あるいは飛び道具等も甲板に向かった方が良く。だからパーティはこんな風になる」

甲板班

バカ《明久》 フィーナ ムッツリーニ エステル

船内班

俺 シャオ イレーヌ

なんか僕だけ文字違ってなかった？

「エステルは今回が初陣だが…お前のつて確か大技がメインなんだよな」

雄二の言葉にエステルはコクリと頷き、ステッキのような杖を取り出す。

「…アクセス、AXEモード、機動」

エステルがそう呟いた瞬間、杖に魔法陣のようなものが展開され、次の瞬間には光の幅広な刀身を持った巨大な斧がエステルの手の中にあつた。

「…他にも大鎌や大砲、ブレタターフォーム捕食形態などが……」

「今なんかサラッとトンでもない事言わなかった!？」

捕食!？それって何!??魔獣を食べる形態って事!？

「…正確には魔獣の体の一部を捕食、それをエネルギーとして手に入れることです」

「もの凄く生々しいぞ……」

「…私だって、このモードはあまり好きではないんですが、ピンチ

の時は便利なので付けてるんです」

表情を引きつりながら呟く雄二の言葉と同じタイミングで、僕は思わずエステルの武器から、グワツと現れた巨大な口が魔獣を食べているのを想像してしまった。なんかエステルの持っている杖がリアル神機に見えて仕方ない。

仕方ないんだけど……

「まあ、別にいつか」

「そうだな、よくよく考えてみれば、別にそこまでグロくないか」

「……………同感」

「…………いや、おかしいでしょ（じゃろ）（ですよ）！」「…………
フィーナ達が声を荒げて僕らにツッコミを入れてきた。なぜか、
エステルまで…………

何が？

「だって、タダ単に食べるだけでしょ？別に問題ないと思うけど？」

「いやいや、明久は平気なの！？」

「別に僕らに命の危険があるわけじゃないし」

「いや、まあ…そうですね…………」

「グロいものはFクラスで見慣れてるしな」

「……………殺されかけている明久よりは大した事はない、はず」

「……殺されかけている!???」「……」

ムツツリー二の言葉にフィーナ達がさっきよりも大きな絶叫を上げる。

さっきからどうしたんだろう?

「いや…どうしたのって……」

「なんなの?八耀士の人達って元の世界でどんな生活を送ってたっ
て言うの?」

「ワッチ、なぜか八耀士がそろつのがとてつもなく不安になって来
たんじゃが……」

「…新参者の私が言うのもなんですが、明久さん達の日常というの
がとても恐ろしくなってきました……」

おかしい。なぜか彼女達との距離が若干だけど開いたような気が
した。

僕が首を傾げていると、隣にいた雄二がため息を吐きながら口を
開いた。

「あー…まあ、俺らの日常は若干だけど普通じゃなかったからな…
…だからこそ、俺も明久もムツツリー二もすぐに戦闘に慣れること
が出来たんだよ」

「……な、なるほど……」「……」

なんか四人とも顔がもの凄く引きつってるけど、とりあえず今はここで駄弁ってる場合じゃない。そろそろいかないと。

「えっと、とりあえず行動を開始しよう。戦えるのは僕達だけなんだから！」

告げると同時に僕は立ち上がり、エデン・ヘヴンズを手に取り、右手に拳技専用のナックラーを装着する。

僕の姿を見てか、雄二たちも戦いの準備を始める。雄二は籠手を宙に放ると、両手を同時に突き出し、ガシャンという音と共に両手にイグニート・ブレアをはめた。ジ・ダークナイトを腰にはめながらムツツリー二も起き上がり、コクリと頷く。

さあ、戦闘開始だ。

《雄二サイド》

「……………」

船の中を走りながら、俺は明久のことを考えていた。

あいつ、この世界に来てからなんか変わったか？なんつーか、あいつが自分の力量を把握しながら自分で『適切』の場所を言ってきたやがった……四月の時の、俺の口車に乗せられてAクラスの奴と戦って負けた時とは違う……まさかあいつ、『成長』してやがるのか？

「へっ、だとしたら面白え……………」

あいつが俺とタメ張って戦えるようになる、ってか…面白え。バカのあいつがどれくらい成長するのか見てやるうじゃねえか。目の前に現れたオタオタを殴り飛ばし、その背後から攻めてくる魚人のマーマンに狙いを定める。

「やるぞ、イレーヌ！」

「了解よ」

俺とイレーヌの間に一瞬だが、青いラインがはしる。

へえ、明久とはぶつつけでやったんだが…こいつは凄え。俺の力とイレーヌの力が合わさって、でけえ力が使えると判るぜ！

「魔神拳！！」

「スプラッシュユ！！」

リンクアーツ
共鳴術技

「スプラッシュユライン！！」

俺の目の前に現れた水瓶を魔神拳で打ち上げる。打ち上げた水瓶から凄まじい勢いで水流が噴出し、まるでレーザーのように水が放たれる。レーザーのように放たれた水は、魔獣共を一気に撃ち貫く。だがこいつは水属性の技だ。水の中に住んでいるこいつらには大して効果がねえだろう。そこで必要になるのは…俺の銃と・

「やるぜ、シャオ！時間を稼げ！！」

「承知じゃ！！」

シャオが走り出し、前方から襲い掛かってくる魔獣どもを相手にする。その間に俺は拳と銃を合わせ、意識を集中させる。俺の中にある魔力を銃にリロードすると、力をチャージする。

「退け、シャオ！」

俺の声に反応し、シャオが俺たちの場所に下がったのを確認すると、俺はトリガーを弾く。

「シエル・ヴァンガード!!!」

ワイド・シヨットのチャージ技、シエル・ヴァンガード。

速度を増した広範囲の魔力弾を撃ち出す。前方にしか向かっていかず、しかも速度が普通の奴よりも遅いせいで避けられる可能性が高い技だが、こういった逃げ場があまりねえ場所なら威力を発揮できる！

ギヤオオオオオオン!!!!!!

俺のシエル・ヴァンガードに巻き込まれ、次々と魔獣共が薙ぎ払われていく。おーおー、以外にバカ強いもんだな、俺の力って。

「へっ、これが悪鬼羅刹の力、ってな！」

「言い得て妙とはこのことね」

「同感じゃ」

さてと、ちゃっっちゃと船底に向かうとするかね。

《明久サイド》

「うわああああ！助けてくれえ！！」

襲われている船員を見かけ、僕達は彼らを助けるべく、動き出す。

「聖なる翼よ、ここに集いて神の御心を示さん…エンゼルフェザー
！」

「引き寄せよ、闇の腕^{かいな}…ネガティブゲイト！」

エステルが出現させた闇の門から現れた漆黒の腕が魔獣を絡め止め、そこにフィーナの虹色の羽が魔獣を次々と打ちのめす。それでも残っている魔獣を僕とムツツリーニが打ちのめす。

「大丈夫ですか？」

「あつ、ああ。すまない」

声をかけた船員がすぐに立ち上がっているのを確認すると、僕はホッとした。よかった、特に怪我してるわけじゃないみたいだ。

「すぐに乗客のみんなを一箇所に集め、出入り口にバリケードを作ってください」

「あ、あんだ達は？」

「僕達は上で暴れている影人を倒します！」

「乗客の皆さんを、お願いします」

船員にそう告げた後、僕らは階段を上がって甲板に出る。

「……うわっ！多い！！」

甲板の上には凄まじい数の魔獣がいた。魚や亀、タコやイカなどの水の中に棲んでいる魔獣が船の上でマストを切り裂いたり、床を腐らせたり、あるいは……逃げ遅れた人を貪るように食べていた。くそっ！もう少し早く来ていれば……

「………明久、今は悔やむところじゃない」

「ムツツリーニ？」

「………今は………戦うときだ」

瞬間、ムツツリーニは懐から改造スタンガンを取り出し、近くにいたスクイッドに電撃を浴びせた。そうだ、今はこんなところで立ち止まってる場合じゃないんだ。一体でも多くの魔獣を倒し、影人を倒さないと……

「ありがとう、ムツツリーニ」

礼を言うとムツツリーニは振り向かず僕にグッと親指を立て、その後すぐに戦闘に戻った。その背中を見て、少しだけムツツリー

二がカッコいいと思った。

「よし、一気に行くぞ!!」

「うん」

「了解です」

よし、共鳴術技を使って、一気に数を減らそう。数が減れば、僕らが一人ずつ戦う事になってもなんとかなるはずだ!

「行くよ、エステル!」

「…お任せください!」

僕とエステルの中に青いラインが現れる。よし、これで僕とエステルはリンク状態になった。これならいけるぞ!!

「蒼牙刃!!」

「爆焰焼破!!」

共鳴術技

「…イノセントエッジ!!」

僕の武器とエステルの武器を合わせ、二人同時にもう片方の手を目の前に突き出す。

瞬間、僕の蒼牙刃がエステルの巻き起こした炎を一箇所に纏め上げ、灼熱の火球を中心に炎の渦が辺りを焼き尽くす。

「よし、続けていくよフィーナ!!」

「うん!」

エステルとのリンクを解除し、今度はフィーナとリンクする。おつ、視界の端でムッツリーニとエステルがリンクしたみたいだ。二人の間に緑色のラインが見えるぞ!

「一気に決めるよ、みんな!!」

「了解!!!!」

「くられ、新技!秋沙雨!!」

「ピコピコハンマー!!」

共鳴術技

「スターダストレイン!!」

僕が繰り出した無数の斬光が空中にある無数のピコハンに向かって飛んでいき、その二つが合わさり、まるで^{スターダスト}星塵のように輝く。その輝きを僕とフィーナが魔力で^{マナ}操り、甲板に雨のように降り注がせる。

「…行きますよ、ムッツリーニさん」

「……………できれば名前で呼んでくれ」

隣ではムツツリー二達も同じように共鳴術技を発動させようとしていた。

ムツツリー二がなんか言ってたけど、戦闘に集中しないとイケないのでスルー。

「獅吼滅龍閃！」

「焰」

共鳴術技

「獅吼爆炎陣！！！！」

エステルが放った獅子の鬨気にムツツリー二が炎を纏ったクナイを投げつけ、それが魔獣に当たった瞬間、巨大な爆炎が巻き起こり、その爆炎は周りにいた魔獣をまとめて焼き払った。

オオオオーーン！！！！

「ぐっ、まだ一体残ってたか！！」

憎々しげに僕は呟く。目の前には巨大な岩のような貝殻を背中に乗せ、その下から無数の触手を生やした甲殻類の魔獣……グレーターデモッシュが生き残っていた。

って、ボスクラスの魔獣！？あれってTOXの序盤に登場するボスだよな！？そんな奴を下っ端にしてる影人って……いや、今は目の前にいる奴を倒す事に集中するんだ！！

僕が前に出ようとする前に、ムツツリー二が前に出ていた。

「……………俺に任せろ」

咄くと同時にムッツリーニは剣を足元に刺し、手を忍者が印を結ぶように構える。するとムッツリーニから紫色の凄まじいオーラが吹き上がった。

「……………魔を封ずる闇の刻印」

言つと同時にムッツリーニは飛び上がり、クナイを八つ、グレーターデモツシュに向かって投げつける。

クナイが奴に刺さった瞬間、奴の周りに八つの魔法陣が現れ、その魔法陣がグレーターデモツシュの動きを封じていた。す、凄い…あの巨体の動きを封じるなんて…!

「封魔九印剣…!!」

そのままムッツリーニは光り輝く刀身を振りかぶり、兜割りの如く、一気に全体重を乗せた一太刀を浴びせた。固そうな殻を容易く切り裂くムッツリーニの一撃を受け、グレーターデモツシュは傷口から紫色の血液を噴出させながら絶命した。

パチン、とムッツリーニが刀を納めながら僕達のところに戻ってきた。

「凄いよ、ムッツリーニさん!」

「…グツジョブです」

「……………(ピシ)」

人魚の少女…多分、影人だろう。

その子が不思議そうに鼻血を出して倒れたムッツリーニを見るけど、とりあえず今はスルーしておこう。僕はAEDを取り出し、フイーナは術の詠唱を始める。

「スイッチON」

「再生の祈りよ届け…彼の者の御霊をここに、レイズデッド!!!」

AEDの心配蘇生の電撃と天から降り注がれる神々しい輝きが今、交わり、彼の者の魂をここに顕現する……………

共鳴術技

「レイズデッド・スパークキング!!!」

神々しい光をまとった電撃が、ムッツリーニを包み込んだ!!

蘇れ……………

「ムッツリイイイイイイイイイイイニ!!!」

光が収まると、ムッツリーニはゆっくりと起き上がった。

おお、ほぼノリで発動させた共鳴術技だったんだけど、なんか効

果はあつたみたいだ。

「……………明久」

「何？ムツツリーニ……………って！！」

「……………何をやっている、明久っ……………！！（ダバダバ）」

蘇生したムツツリーニが早くも顔を青くさせていた。

鼻血を流しながらも、必死に人魚の影人にシャッターを切っていた。恐るべし、ムツツリーニ。僕もその死をも恐れぬ行動に敬意を評し、ムツツリーニからカメラを借りるとシャッターを切っていた。

「二人とも、やめて」

「ごめんなさい。」

十数秒後、僕らはフィーナが放ったピコハンに仲良くたんごぶを作っていた。

第二十一話 分担と船上戦と僕らの日常（後書き）

ムツツリーニ大活躍！

諜報活動と保健体育以外で、ムツツリーニを活躍させてみたかったので、やってみました！

……次回、Fクラスの兵器が戦場に現れます。

第二十二話 海上と苦戦と男の意地（前書き）

海上戦です！明久に新たな力が…？

第二十二話 海上と苦戦と男の意地

明久サイド

ムツリニの蘇生を終えた僕らは、目の前にいる幼い顔をした
…美波よりはスタイルが良い人魚の影人と対峙していた。

彼女の名はレヴィアン。

どうやら水を自在に操れるみたいで、彼女の周りの水だけまるで
意思があるように彼女の周囲を囲んでいる。

レヴィアン：明らかに僕らが最初に相手にした泥の…なんて言っ
たっけ？まあ、いいや。あいつよりもずっと強そうな感じなのは、
間違いないはずだ。

「むう、あたしのグーちゃんを殺しちゃうなんて…あんた達、酷い
よ」

そう言ってむくれるレヴィアン。

けどその言葉には反論させてもらおうよ。

「そういうけどね、君だつて僕らの船を襲ったんだ…それに、その
せいで死んだ人もいるんだよ？」

僕の言葉にレヴィアンはニコリと笑みを浮かべた。

「別にいいじゃん 人間なんて、あたしの友達のご飯なんだし」

などと言う返事が返ってきた…って！この子、人間を餌としか見

てないの!?

「でもねえ…グーちゃんが死んじゃったのは悲しいよ…だからあんた達、死んじゃえ!!」

言った瞬間、彼女の周りの水が僕らに向かってまっすぐ飛んできた。

慌ててそれを避けると、床板に巨大な穴が開いていた。げっ!?!? なんて破壊力だ。

なんて考えてる間に、レヴィアンは次々と凶器と貸した水を飛ばしてきた。

「あっはははははははははは! さっきから避けてばかりだねえ? どうしたの、反撃しないの?」

「くっ…蒼破刃!!」

魔神剣の改良版、蒼破刃をレヴィアンに向かって飛ばす。けれど、その一撃は届くどころかずっと手前で水の奔流に防がれてしまう。

「レイ…トラスト!!」

「雷電」

フィーナのチャクラムと、ムッツリーニの雷をまとったクナイが同時に放たれる。けれど先ほどの僕が放った蒼破刃と同じように水の奔流を防ぐ。

「お・か・え・し」

レヴィアンが僕らに向かって膨大な量の水が波のように押し寄せ
る。慌てて僕は近くにいたフィーナに向かって飛びつき、ムツリ
ーニはエステルを突き飛ばしてなんとか波の射程外に逃がした。ナ
イス、ムツリーニ……こっちは無理だ……なら、僕が盾になれば
いだけの話だ！

ゴツツツツツ！！！！！！ 僕らはその水になす術も無く呑み込まれ
る。あがく事もできず、水の勢いと水の質量がかかったまま、僕ら
は壁に叩きつけられる。

「うっ……！」

「あぐっ……！」

「……………っ……！」

背中を強く壁に打ちつけ、全身を水の圧力によって潰される。

たしか……前に漫画で水って質量を持てば兵器になるんだっけ

……ポリタンクに入った水が、そのまま鈍器のように使えるように

「うっ……！」

喉元から粘っこい何かが上がってきて、たまらず僕は吐き出す。

吐き出したものの正体は唾液と胃液が混ざった血だった。

ははっ、漫画とかではよくある描写だけど、こんなにきついもの
なんだ……痛みをこらえながらなんとか立ち上がる。

周りを見てみると、僕がかばったフィーナには、目立った外傷は
なさそうだけど、それでもダメージはあったみたいで、どこか様子
がおかしかった。ムツリーニはというと、僕と同じぐらいダメー
ジを受けている様子だった。口から血を吐き捨て、立ち上がる。

「清き癒しよ……今こそ我が領域に入たりし者達に、祝福となりて具現せよ……ハートレス・サークル!!」

響き渡るエステルの声。

それと同時に僕らの足元に癒しの光の象徴である水色の光で描かれた魔法陣が現れる。そこから光が放たれ、円の中心に位置する場所から、光の粒子が僕らを包み込む。

おお、凄いや。さっきまで全身が痛かったのに、この光に包まれているだけで傷が全て治ったぞ!!

「ありがとう、エステル!」

「……例なら後で。それよりこの状況、まずいです、明久さん」

「えっ?」

突然どうしたの、エステル?

「明久さん、ここは船の上です……そして彼女の一撃は床板を容易く破壊しました……これが意味する事、解りますね?」

「えっ?えっと……げっ!??」

少し考え、僕は最悪な答えにたどり着く。

そうか……この上で戦い続けていたら船が確実に壊れて……下手すれば沈没する。

「……もし沈没しなくても、航海できなくなって漂流する可能性もある」

ムツツリー二の言葉も加わり、僕らは冷や汗をかく。

もしこのまま戦い続けていけば、僕ら乗っている船は壊滅的な打撃を受けて沈没、あるいは行動不能の状態になってしまうというわけだ……でも。

「だったら短期決着だよ」

そう言った瞬間、僕はレヴィアンに向かって剣を構える。

影人とはいえ、女の子に剣を向けるのにさっきまでためらいがあったけど、そんな悠長な事を考えていられるくらいの余裕は無い。

殺らなければ、殺られる。

ここはFクラスと同じ場所……つまり、戦場だ。

思考を切り替える。

僕らの目の前にいるのは……敵だ。

「よし、一気に行くぞ!!」

「オツケー!!」

「……了解」

「……………アイサー」

さあ、反撃開始だ!!

雄二サイド

「三散華！」

「三散華！」

リンク
アーツ
共鳴術技

「六散華！！！」

俺の拳が相手に突き刺さると同時に、シャオが蹴り上げ、再び俺が拳を叩き込む連続攻撃に、目の前にいた魔獣は見事に撲殺される。倒し終えた後、俺とシャオは互いの拳と拳をぶつけ合う。

「いい腕してるだろ、俺」

「当然じゃ、してなかったら捨てておくわ」

「おお、怖」

なんて軽いやり取りをしつつ、俺達は船の最下層にたどり着く。だがたどり着いた瞬間、俺は自分の予想が当たっていたことに舌打ちをした。

船には既に穴が開いており、その中から巨大な…大昔の恐竜時代の海にでも出てくる、海竜みたいな化け物が現れていた。そいつの周りには、うねうねとタコみたいな触手が体の周りから生えていて、かなり不気味だ。

…なんかこのシチュエーション、デステイニー2のボス戦を連想させるぜ……。

だがあれとは決定的に違うものがある。

それは甲板の上でもボス戦みたいなことが始まっていること。

もう一つは……

「今度は俺らが戦うハメになる…か、人生って何が起こるか解らねえもんだな」

銃はここじゃ使えない。下手をすれば船底の被害を拡大させちまう。

幸い、今は船に穴を開けたこいつが穴を塞いでいる役目を果たしているが…それでも穴から水が溢れるのは止まらねえ。

「ちっ、今はこいつをなんとかするしかねえ!!」

拳を固め、俺は一気に海竜の懐に飛び込むと、勢いよく拳を突きつける。

「灼光拳!!」

俺の拳が熱を持ち、まるで拳が太陽のように光り輝く。その熱量は凄まじく、こいつの周りから溢れ出てくる水を蒸発させるほどの熱がそいつの身を焼いていく。

よし…このまま一気に内部を……

「雄二! 離れて!」

「あっ…ぐおっ!?!」

「雄二!!」

しまった、長くその場に留まり過ぎたみたいだ。

気が付いたときには、奴から伸びてきた触手の一撃が俺のわき腹

を打ち据えていた。

「ぐっ、」は「！」

壁に体を打ちつけ、打ち付けた額から血が溢れてくる。水が膝を濡らすほど漏れてきてやがった。まずい……このままじゃ一時間もしない内に船が沈んじまつかもしれねえ。

パシャン

「ん？」

目の前には俺の吹っ飛んだとき、カバンから零れ落ちた一つの水筒があった……水筒のラベルには見覚えがある。

こいつは……たしか、姫路特性のミックスジュースだったような気がする。こつちに来る前にもらったんだが、恐ろしくてずっと手をつけなかった代物だ。

……今はこんなものぜんぜん関係ねえ。何か、何かねえのか？こいつを倒し、船を沈没から救う……そんなご都合主義もいいところの最高なハッピーエンドになれるようなものが……くそつ、んなものあるわけが……ん？

俺は目の前にある信じられない光景に目を疑った。

姫路からもらったミックスジュースが入った水筒の周りの水が……凍りついていた。

拾い上げてみると、水筒の蓋がさっきの衝撃のせいか、少しだけ緩んでいた。そこから漏れてくる水滴が、一滴でも水に触れるだけで俺の周りの水が一気に凍りついた。

「おいおい…姫路の奴、なんてもんを作りやがったんだ」

姫路め…とうとう、外部にまで影響を与えるものまで開発するとはな……材料が一体なんなのか知りたくもねえ……が。

「助かったぜ、姫路。おかげで微かだが見えたぜ…希望の光って奴が…！」

ははっ、マジで人生つてのは何があるか解らねえもんなんだな。

まさか今まで俺らを散々命の危機に追いやってきた代物が…こんな、異世界で、俺らの命を救う可能性を持ったものになるなんてよ……。

だがこいつは確実なんて呼べる代物じゃねえ。どれぐらいの量が必要なのかも解らないし、試している時間も余裕も無い。

一か八かなんて分の悪すぎる賭けなんざ実戦でやることじゃねえが……。

「上等だ、クソツタレ」

こいつがどこまで効くか解らねえ。もしかしたら焼け石に水の結果で終わっちゃうかもしれない。だが試してみる価値はある。

タオルを手に取り、ベルトに水筒を縛り付けてから海竜を睨み付ける。

「デカブツ、てめえがどんな理由でここを襲ったかはどうでもいい」

一歩、踏み出す。

もう水は俺の膝より上にあった。

残された時間はあまり無い。

確実な方法なんてものも、今の俺には無い。

だが。

俺の後ろには、あのバカ共がいる。

あいつら死なせない可能性があるってんなら…そいつに賭けてみようじゃねえか。

俺は雄たけびを上げながら、魔獣に向かって突っ込んでいった。

明久サイド

「獅子戦吼!!」

僕の右手から獅子の形になった闘気を目の前から迫ってくる水の弾丸にぶつけ、相殺させる。だがその次に襲い掛かってくる水の鞭に打ち据えられ、再び僕は床に倒れこむ。

くそっ…さっきからもう何度床に倒されてるんだ？

全身が悲鳴をあげるように痛い。

僕はさっきから一人で戦っていた。

フィーナとエステルは、回復術が扱える。けれど回復術を使うには詠唱が必要になり、それでどうしても動きが止まってしまふ。けれど回復無しで戦うのはハッキリ言って無謀すぎる。

だからムツリー二には、二人の護衛を任せている。二人に攻撃が迫ったら、すかさずそれに対応してもらったためだ。ついでに、レヴィアンは魔獣を次々と呼んでくるから、その対処も三人に任せ

ている。

つまり、現状でレヴィアンに真っ向から対峙できるのは僕だけになる。

フィーナが使ってくれた回復術で傷が塞がるけど、正直：体力がもうあまり残ってはいない。回復術は傷は治してくれるけど、消費した体力までは癒してくれない。

くそお……このままじゃ負けちゃう。

召喚獣を使おうとしても、レヴィアンは間欠泉のように噴き出している水の上……つまり、空中にいる。あそこまではどうやっても届かない。

飛び道具を使おうにも、レヴィアンが操る水で防がれてしまう。

何かないのか？

こんなところで負けるわけにはいかないんだ。

立ち上がった瞬間に、僕に水の鞭が襲い掛かってきて、凄まじい衝撃と共に僕は空中へと舞い上げられた。

「ぐ……………」

一瞬の浮遊感の後、落下する。

くそお、また床に叩きつけられるのか？このまま為す術も無く、殺されるのか？

そんなのは絶対に嫌だ……諦めたくない。僕は……僕は、まだ姫路さん達に出会ってない。フィーナ達が抱えているものを、何一つ解決していない。それをこんなところで終わりにしたくない。

「お……………
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお………」

突然僕の耳に響いてきた叫び声。

これは……雄二？

あいつがこんな大声を出すなんて……一体、下で何が……。
いや。

重要な事は、そこじゃない。

声からして、あいつもおそらくギリギリな状況になっているはずだ。

だけど、あいつはまだ諦めてない。

なら、僕も諦めるわけにはいかない。

どんな状況になつたとしても、たとえ腕が吹き飛ばしても、足をもがれようと、絶対に立ち上がってみせる。剣を掴んでみせる。絶対に……勝利をこの手で掴んでみせる。

決意のこもつた目で見上げた空。

そこにいたのは軽やかに空を飛翔する一羽の鳥。

思わず、手を伸ばす。

おい、鳥、お前はいいよな。そんな風に空を飛べてさ。

思わず嫉妬しちゃうじゃないか。

「僕も……お前みたいに飛びたい」

とくん

瞬間、僕の体からいつも纏っている『天之羽衣』のオーラが溢れ出してきた。

「!?!?」

突然の事に僕は驚きの声をあげる暇さえ無かった。
なんだ、これは！？体から何かが溢れてくる。

たく、ようやくお前と繋がったか。

僕と同じ声。でももの凄くガラの悪そうな口調で話していた……
まさか

(この声…グリス！?)

ああ、そうだよ。ようやくお前とリンクできた
みたいだ。さて、明久。お前はそのままだと確実に落ちる。そんな
死ぬ。

(なんだって!?)

けどよ、お前にはもう『空』の力があるんだぜ
?いいか、空はお前の敵じゃない。お前の味方であり、お前が使う
道具であり、お前の領域だ。まさか、自分の庭で好きなことできな
い、なんて言わないよな?

(……いや、僕の家マンションだから庭なんて無かったよ?)

誰もんな事聞いてねえ!! ようはてめえの力で
ある空でどうしたいのかって聞いてんだよ!!

(空………僕の、空)

脳裏に浮かんだのはさっきの鳥。

僕はさっき何を思い浮かんだ？

僕はあの鳥のように……

甲板の床が近づいてくる。もう三秒もしない内に僕の全身は床に叩きつけられるだろう。それでも、僕の思考はさっきの鳥のことで一杯だった。

僕は、あの鳥のように……

空を、飛びたい。

ゴッ！！

凄まじい音が、戦場に響いた。

雄二サイド

「うおおおおおおおおおおおッ！！！！」

脇目も振らず、俺は突っ込んでいく。

目の前から襲い掛かってくる触手を籠手で防ぎ、防げない場所から放たれてくるものは全て体を無理やりひねって致命傷を防ぐ。

もう水が膝まで来ている時点で俺は……いや、この場にいる俺達は素早く動く事はできない。だからこそ、こうやって動ける部位を動

かす事しかできない。わき腹や左肩が触手の一撃で肉をえぐり飛ばされ、そこから血が溢れている。しかも、わき腹の方は海水がかかる度に激痛が走って意識が飛びそうになる。

そこに触手が飛んできて俺の左わき腹に突き刺さった。今までえぐられていた場所よりもはるかに越える痛みが、俺に襲い掛かってくる。あまりの激痛に、俺はそのまま足を、止めてしまふ。

だが、絶対に俺は倒れない。

こんな痛みがどうした。

俺は倒れる訳にはいかねえ。

どれだけ傷つこうが俺は絶対に倒れるわけにはいかねえんだよ。

俺がここで倒ればあいつらを死なす事になる。

なにより……まだ会ってない。

まだあいつに……翔子に会ってねえんだからな！！！！

「おお……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

大気が、振動する。

俺の雄たけびにひるんだのか、周りにいたイレーヌが、シャオが、

そして…魔獣までもが動きを止めた。

チャンスだ。

今この瞬間を俺は逃さず、駆け出す。水の抵抗で進むのが遅いが、んなもの関係ねえ。重要なのは俺が前に踏み出す事だけだ！！

三メートル……………二メートル……………一メートル。

そして、辿り着く。

魔獣から二メートルだけ離れた位置、ここが俺の辿り着きたかった場所だ。

ここなら、やれる。

「イレーヌ、シャオ！俺のフォローしろ！！」

「え、ええ！！」

「解ったのじゃ！！」

二人の言葉を聞くと、俺は腰に巻いていた水筒を取り出し、中の蓋を開ける。

水筒の中には、まるでスポーツドリンクを思わせるような液体が満たされていた。

俺はそいつを投げようとするが、それを邪魔するかのようには海竜から触手が飛んでくる。だがそいつは俺には届かない。

「エアスラスト！！」

「叛陽陣！！」

イレーヌが放った無数の風の刃が、シャオが放った光の球が、触

ミシミシという音を上げて周りの壁が凍りついて膨張した水に押されて悲鳴をあげてはいたが、それも次第に止んだ。

いや、それにしても姫路の料理はマジで凄まじいな……まさかここまで力の秘めていたとは思わなかったぞ。

周りを見れば、辺り一面氷の世界。

見れば、イレーヌとシャオは体を震わしながら凍りついた水に腰まで浸かっていた。そうか、あいつらは俺より背が低いからもう腰まで水位が来てたのか……まあ、そういう俺も膝丈まで凍りついた水に浸かっている状態なんだがな。とりあえずさっさと脱出するか。

「灼光拳」

凍りついた水に手を当て、凄まじい熱を持った手で氷を溶かす。ある程度溶かしたら、足を引き抜いてさっさと脱出する。

近くでは、イレーヌが火の魔術を使って脱出しようとしていた。さて、こっちはなんとかしたんだ。

「お前の方はどうなんだよ、明久？」

明久サイド

ゴツッ！凄まじい音が、戦場に響いた。

瞬間、僕の体は凄まじい力で大空へと舞い上がっていた。

さっきと違うところ、それはその凄まじい力が僕のものだという事だ。

ゴツ、と空気が耳元で唸る音が聞こえた。
さっきまで僕が飛ばされた場所をあつという間に通り過ぎ、高く高く僕は飛翔した。

そして、僕は空中で制止した。

「あ……………あぁ」

空で僕は見た。

どこまでも続く大海原を、その先の、水平線の向こうにある緑色に区切られた…僕らがこれから向かおうと思っている大陸だ。

その大陸にある、まるで豆粒のように小さな街、森、湖、それら全てが僕の視界に納まっていた。

頬をなでる風邪が、とても心地いい……………ん？

「って、あれ？」

妙な違和感が首にあった。触れてみると、サラリとしている…ものの凄く長くなった僕の髪がそこにあった。

「な、なんで髪の毛がこんなに長くなってるの……………？」

苦笑いを浮かべながら、僕はどこまで髪の毛が伸びているのか、背中に手を伸ばして触れてみる。

「これって……………翼？」

僕の背には巨大な、それでいて力強さが満ち溢れているものがある。鳥のように一枚一枚の羽でできている、白い淡い光が漏れている翼。

凄い。

これなら、戦える。

僕は、みんなを守れる！！

羽を、動かす。

ドンツ！！という大気を弾き飛ばす音と共に僕は弾丸のように飛んだ。ゴオオオ！！と、大気を摩擦する音が聞こえる。さっきとは違う、これは落下じゃない。僕は……飛翔しているんだ。

青い海で一つの点となっていた船が、どんどん近づいてくる。そのままゆっくりと減速し、船の上にふわりと降り立つ。

「ただいま」

ニヤリと笑いながら僕は船の上に立つ。

「あ、明久？」

「……………明久……………」

「…明久、さん？」

「なっ……………なに、その姿は？」

僕の姿を見て、周りにいるフィーナにムツツリーニ、エステル…そして、影人のレヴィアンまでも驚いた表情をしている。

そりゃそうだ。さっきまで短髪だったのが長髪に、そして背中に

大きな翼を生やしている人が現れたら誰だって驚くだろう。でも。

「悪いけど、一気に決めさせてもらおうよ」

呟くと同時に僕は床を蹴る。

そのまま上空に向かって一気に飛んでいき、大きく旋回した後、一気に加速する。剣を構える。

僕の剣に、力が、膨大なエネルギーが収束する！！

そのエネルギーに太陽のような黄金の輝きが剣に宿る。

「終わるわけには行かない！！」

剣を両手で持つ。強大なエネルギーを剣に収束して上段に構える。僕の姿を見て察したのか、慌ててレヴィアンが手のひらに水を集め、氷の銚を生み出す……………レヴィアンはそのまま空中に三叉の銚を浮かせ、その柄に水を呼び集める。水の奔流は銚を高速回転させる。多分、あれが彼女の最強の技なんだろう。だけど、勝てる。

この技なら、勝てる！！！！

「約束される勝利の軌跡！！」

「凍てつきし槍よ、蒼渦を纏いて敵を貫け……………」

秘奥義、LEVEL 2

「メロウ・ランサー ああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！」

「てんらいきざん天羅靈輝斬！！！！！！」

一閃。

眼前に迫ってくる高速回転する氷の銛に対し、僕は剣を振るった。
アインソフアウルを超える膨大なエネルギーを纏った斬撃。

黄金の輝きの剣閃と氷の槍、直線状に放たれる黄金の光と青い光、
二つの光は空中で一瞬だけ交わり、そして……僕の黄金の光がレヴ
イアンの槍を打ち砕く。

「そ……ん……………」

レヴィアンの消え入りそうな声は、黄金の光に呑み込まれ、掻き
消され、そのまま海に直撃する。

ドバン！！という音が炸裂し、海から膨大な量の水が水蒸気の柱
が立ち上がった。

彼女の末路は、説明するまでもない。
倒した。

確信を持ったまま、船に降り立った途端、僕は意識を失った。

第二十二話 海上と苦戦と男の意地（後書き）

書き終えてから一言。

これ…バカテスだよね？でした（笑）

気がついたら明久や雄二が異常なまでに熱い台詞を言っていて、思わず、あれ？ですよ（笑）

次回は、明久たちではなく、彼女……………ではなく、彼がメイ
ンで登場する話です！！楽しみにしてください！！

第二十三話 入院と再会とわしと彼女の出会い（前書き）

今回から、主役が（一時的に）変わります。
誰になるかは、読んでからのお楽しみです！

第二十三話 入院と再会とわしと彼女の出会い

「う……ん……ぐっ!」

ゆっくりと目を開ける。

同時に全身に痛みを感じ、僕は思わずうめき声をあげてしまった。

「ここは……」

意識がゆっくりと戻ってくると、まず最初に鼻を衝いたのは消毒液の臭いだった。周りゆっくりと見渡してみると、どこかの個室らしい。窓の外からは海が見え、その景色に僕は少しだけど、落ち着きを取り戻した。

「よう、気が付いたか？」

「えっ?」

顔だけを動かし、隣にいる包帯だらけの悪友を見た。

「雄……どうしたの?」

額に包帯を巻いたボロボロの姿の状態の悪友を見て、思わず驚いた。こいつ、まさかここまでボロボロになったなんて……どれだけヤバイ状況だったんだろう。そのことを聞いてみると、ハッと笑った。

「何言つてやがる?お前の方がボロボロじゃねえか」

「え?」

言われて僕は自分の状況にようやく気付く。

左腕は包帯でぐるぐる巻きにされて指一本動けず、胸部にはギプスを装着されていた。ぶつちやけ全身が包帯だらけのミイラ状態。しかも体が鉛のように重くてうまく動けない。

「痛っつ……」

ビキリと体が痛む。

今更ながら自分の状態が重傷なんだと理解した。

ついでに、あの時いきなり腰近くまで伸びた僕の髪が未だに長い事に気付く。

「……………ねえ、雄二…なんで僕の髪、こんなに長くなってるの？」

「知るか」

ですよね。

まあ、とりあえずこの長い髪のごとは置いておくとして、今は現状の把握だ。

「あれから、どうなったの？」

「んー……………あの後には漂流状態だった…っつても二、三日で救助が来て、ボロボロだった俺とお前は意識を失ってそのまま病院に連れてこられたんだ」

「えっ！？病院……………ぐおおおお……………！！！」

し、しまった……………うっかり騒ぎすぎて傷が……………っ！！！！ぐおおおお、

マンガとかで傷に響くってというのがこれか!!吐血といい、こっちもかなりきついものなんだな……。
というか……。

「ちょ、ちょっと待ってよ……二、三日って…僕、どんだけ眠ってたの!?!」

「大体五日ぐらいだ」

………うつわあ。五日も寝てたなんて………なんか、マジでマンガみたいな経験を最近しまっくってる気がする……。

「……じゃあ、こっつて病院?」

「そうだ、んでもってお前と俺は最悪な事に同室だ」

「それはこっちの台詞だよ」

よりもよってこいつと同じ部屋なんて地獄以外の何物でもない。それにしても五日かあ…なんだか知らないけど、本当にそんなに眠っていたのか、全然実感ないや。なんか体のけだるさはあるし…それに。

グ〜

「………今の、お前か?」

「うん」

お腹空いたなあ………まあ、五日も何も食べてないからしょうがな

いか。はあ、なんか食べたいな。

「雄二、なんか持ってない？」

「持ってないが……大丈夫だろ、そろそろ戻ってくる」

戻ってくる？

誰が……って、あ！そうだ！！

「そうだ！！みんなは！？みんなは、どうしたの雄二！？まさか僕らみたいに怪我を！？」

「さわぐんじゃねえよ、バカ」

「誰がバカだって、バカ雄二！？」

「バカはお前だろ、さっきの会話で連想しろバカが！！」

「みんなが無事だったのは解ってる！だから怪我してないのか、って聞いているの！！」

「ああ、そうかい！！多少は怪我があるけど、無事だ！無事！全員生きてるっての！！解ったか、このバカ！！！！」

「ああ、そう！ありがとうバカ雄二！！」

「~~~~~つつつ！！！！！！」

き、傷が痛む。下手をすれば傷が開いたのかもしれない……。しまった……うっかり騒ぎすぎた……。まったく、雄二がさっ

さと答えないからこんな目に会っただぞ……。
涙目になりながら傷の痛みに耐えていると、ガチャリと扉が開いた。

「……雄二、起きた？」

え？

僕は開かれた扉から現れた一人の美少女を見て僕は驚いた。
サラリとした綺麗な髪に、美しい顔立ちをした美少女……。霧島翔子さんだった。

「き、霧島さん！？なんでここにっ！！」

うっかり騒いでしまい、その時ぶしっ！と腹から血が噴き出して

……！！！！

「んぎゃあああああああああああああああああああああ！

！！！」

絶叫しながらベッドの上でゴロゴロとのた打ち回る。ぐおおおお、傷口が開くってこんなに痛いのか！？

「アホが……。翔子、先生呼んできてくれ」

「……。解った。吉井、大丈夫？」

「うっ、うん……。回復術を使えば……。……」

「アホか、それが使えない環境だからこそ、俺らは入院してるんだよ」

え？それって…どういうこと？
すると雄二は真剣な顔つきで説明してくれた。

「俺らは今まで回復術を便利なものだと思ってた…けどな、どうも回復術ってのは、そこまで便利なものじゃねえんだとよ」

「便利なものじゃ…ない？」

「ああ…回復術ってのはどうも傷を塞ぐって面では有効だが…かけられた者の自己治癒力を使って治す…つまり、俺らは『回復術に促されて自分で治していた』ということだ」

「えっと…それってつまり」

「つまり、回復術をかけられれば、かけられるほど俺らは体力を消耗させる」

「それって…つまり、回復術を使うと俺らの体力が減るってこと？」

「そうだ。さらに減った自己治癒力で回復術をかけられると、回復が不十分になって俺らの体が回復術を拒否しちまうんだ」

「回復術を…拒否？」

僕言葉に雄二が深く頷く。

癒しの力を僕らの体が拒否するって…それって、どういうこと？

「考えてみる、俺らは自己治癒力を使って傷を塞いでいたんだ……それが空っぽの状態でかけられるんだ……体がありもしない力を使って傷を治そうとするのを体が勝手に拒否する。けれど回復術はそれを無理やり回復を促そうとする……結果、肉体がついていけずに崩壊する」

「げー！」

マジで！？回復術って実はそんな恐ろしい面を持っていたの！？？
普段ファイナから回復してもらってるけど、もっとかけてくれって言ってもダメ！って可愛い声で拒否されていたのはこういう理由だったのか……………。

「俺は受けたダメージがでかすぎるから、用心しての入院だが…今のお前は前のダメージが残ってるのと、無くした治癒力を回復させるために入院してるってことだ……………つつつても、確実にさっきので長引いたがな」

「ぐっ……………」

雄二の言葉で僕はお腹の傷が開いていた事を思い出す。

はぁ、向こうでは目立った外傷は無くして臨死体験していたのに、こういう中途半端な状態って案外きついものなんだな……………

なんてベッドの上でため息を吐いた時、視界の横で霧島さんが雄二に話しかけていた。

「……………雄二、退院はいつ？」

「そつだな、よくて三日だな……………まっ、あいつが復活しねえと旅に出れねえんだがな」

「……そう、でも三日は早い」

「は？」

「……たった三日じゃ、雄二の看病をしたって気にはなれない」

「何言つて（ドシュ！ドシュ！）じっ！ぐぼっ！……」

突然霧島さんが雄二の包帯が巻かれている腹部に、その白魚みたいに白い五指を伸ばして集中的に突きまくっていた。

え？いきなり何事！？

「しよ、翔子！？いきなっ！なにを！！がっ！！！ごっ！！！！！！」

「……雄二にはもっと入院してもらわないと、困る」

「ま、待て、翔子！早まるな！！この世界でそのノリは死活問だ……」

ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ……
あああ……！！！！

雄二の悲鳴が病院中に響き渡った。

僕はその光景を見ないようには必死に目を逸らしていたと同時に、一つの事を思い出していた。

それは姫路さんや美波に出会つと、僕にも同じことが降り注ぐかもしれないということだ。

なぜだろう、この前まで出会つたために必死になって生き延びよう

と思つてたのに、今は全然出会いたくなくなつてきた……
願わくは、次に出会つのが工藤さんか秀吉のどちらかであらん事を
祈りながら、僕は駆けつけてきた医者先生の先生に雄二と共に手術室に
連れて行かれるのだった……。

わしの名は木下秀吉。

文月学園の生徒であり、演劇部に所属してある、どこにでもいる
普通な　　いや、少々変わった悪友と一緒に暮らし、日々女扱い
されそうになつてゐる少々普通とはかけ離れた生活を送つておつた。
しかしいくら非日常な生活を送つておつたとはいえ、今回のそれ
は少々逸脱しておるとも言えるものじゃつた。

なぜなら、異世界に飛ばされることになつたからのう。

わしは今、森の中を歩いておる。

この世界に来てから、二ヶ月。わしは街を転々と渡り歩いておつ
た。

行く街で明久達を見なかつたかと尋ねたり、様々なバイトをした
りで路銀を稼ぎ、化け物……魔獣と呼ばれる奴らを退治する仕事を
したりと、割と多忙な日々を過ごしておる。

ちなみに、なぜ魔獣を退治できるようになつたかはというと……そ
れは別に後でも良いか。

バイトの方じゃが、主にわしの特技である演技を用いておる。
ウェイターならウェイターらしくなりきればよいだけの話じゃ。あ
のような演技くらいは、たやすいものじゃ。

しかし文字の方には焦つたぞい。

まさか英語などという言語がこちらの世界でも必要になるとは…正直、なんとか覚えようと必死になっておるが、いかんせんわしの頭は学問の方には特化しておらぬ。まあ、偶然学生カバンの中に入っていた英和・和英辞書のおかげでなんとかなっておるのじゃが。まあ、そんな風にわしはわしなりのやり方でこの世界を旅しておる。

その道中、森の中に作られておる街道をわしは携帯電話で時刻を確認しながらあるいておる最中じゃった……。

「グォルルルルル!!!」

「むっ」

突然獣道から熊の魔獣：エッグベアじゃったかの？そ奴がわしの前に出てきおった。

やれやれ、この世界に来てから一瞬でも気が抜けぬ日が多いのもっとも。

「姉上の折檻を受ける日々と比べれば大したことないがの」

ぼんやりとそんなことを考えながら、わしはエッグベアの爪の攻撃をかわす。

そのまま腰に下げてる…わしの武器、名をリヴァイブ・ゲイル。再誕の疾風という名を持つ、斬る事に特化した剣、湾曲剣^{サーベル}じゃ。

そして背中の方に隠しておるナイフを抜き出し、それを逆手に持ってわしはかけだす。

剣とナイフの二刀流。

これがこの世界でわしが身に付けた戦闘技術じゃ。

「行くぞ、魔神剣!!!」

剣を振り上げ、衝撃波を放つ。地を這う衝撃波は、そのままエッグベアの腹に炸裂し、エッグベアは体制を崩す。その隙を逃さず、わしは一気に懐に潜り込む。

「空襲剣！！」

突くと同時に斬り上げる技をぶつけ、エッグベアの体制を完全に崩し終えた後、わしは離れる。本来なら、ここでさらに連続攻撃を仕掛けるのじゃが、少々状況が変わった。

こ奴との戦闘中、こ奴の背後から魔獣がこちらに向かってくるのを確認したのじゃ。現れたのは数頭の狼。やれやれ、仮にも気高いと称されておる狼がこのようなハイエナのようなやり方をするとはのう……まあ、野性の本能という奴かの？

そう思ったわしじゃが……なんと驚くことに、あ奴らはエッグベアに向かって飛び掛り、そのままエッグベアを押し倒してしまった……そして、そのままわしに狙いを定めると、今度はわしに向かって走って来おった。

「わしを食おうなど百年早いぞ！！」

呟くと同時にわしは詠唱を始める。

この世界でリヴァイブ・ゲイルを手にしたとき、様々な技法を学び、習得した。それは先ほどの術技と……もう一つは魔術というものじゃ。

己の中で巡る、血液とも違う別の……魔力マナと呼ばれるものを知覚し、必要な分を収束、それを異なる形へ変換させ、開放し、放出する！！

「結晶よ、天より降り注ぐ光となれ……プリズム・フラッシュャー！」

「！」

「ぐおおおおおおお！……！」

ズガガガガガッツツツツ！！！！わしが生み出した光の剣が次々と狼の群れと中心で倒れておるエッグベアに降り注がれる。

ふむ、今のでほとんどの奴は倒したかの？

魔術はそれなりに高威力じゃが、時間がかかるのが欠点じゃからのう。それに、わしは正直に言うとお防御の方には秀でておらん。じゃから、詠唱の最中に潜り込まれたらそこで終わりじゃ。初めのうちは苦労したものじゃが……今となってはどのタイミングで放てばいいのか、すっかり体が覚えてしまっておる。

「悪いが、トドメと生かせて貰うぞい」

呟くと同時に、わしは五メートルぐらい跳躍した。

この世界に来てから、わし身体能力はかなり向上したともいえる。おそらく、向こうにいた頃の雄二など、瞬殺できるぐらいにはなっておるじゃろう。

……まあ、あやつもこちらの世界におるじゃろうから、あくまで『向こうの世界』なのじゃがな。

まあ、今のわしならこのぐらいの高さぐらい、勢いをつけずとも跳ぶ事はできる。

わしは左手に持っておるナイフを背中腰の腰についておる鞘に納めると、左手に魔力を集める。

形は槍。

生成方法は圧縮。

材質は深淵にありしもの、恐怖と安穩を司る、空虚なる存在……闇手の中に収束される禍々しい光を放つ一筋の槍を手にする、わしはそのまま槍投げの要領で下におる魔獣の中心にそれを投げつけ

た。

「デモンズランス!!」

ゴオン!!! 放たれた槍は見事にあ奴らの中心に炸裂。膨大な闇が圧縮された槍は、エツグベアに触れた瞬間、形を保っている事ができずに霧散するが、その段階で周りにいる狼達は霧散した膨大な闇によって発生する捻じ曲がった空間という奴に捕らわれ、体を様々な方向へと引っ張る重力により、肉体は耐え切れずに崩壊し、消滅する。

「ふう」

張り詰めた息をゆっくりと吐き出す。

存外、思ったよりも時間をかけてしまったのう。

しかし今の奴らの動きは妙じゃったの……推測に過ぎぬが、なにかから逃げており、その道中でわしらに出会い、邪魔だったから排除しようとしただけのように思えるぞい。

本来、動物というものは自分より大きな獲物は狙わぬ。それはこやつらとて、同じなはずじゃ。

それなら…一体何が？

ドガン!!

「ぐおおおおおおおおお!!!!!!」

「……………なるほどのっ」

わしの前には、高さ十メートルぐらいありそうな巨大な人骨の化け物がおった。

なにやら日本の妖怪にこのような奴がおったような気がするが…
…なんじゃったろう？ 思い出せぬのう。

などと考えておるうちに巨大骸骨はわしに向かってその腕を振り下ろしてきて、わしはその一撃を横に飛んで避けた。避けた場所の地面は凄まじい力でへこみ、ひび割れた。

むう、なんとという力じゃ… 紙防御のわしが受ければひとたまりも無い……。

「……やむを得ぬか」

街までまだ距離があるから、あまり使いたくは無かったのじゃが…
…仕方あるまい、ここは『あれ』を使い、一気にこ奴を仕留める…
…！！

己の体力を消費させ、自己の身体能力を向上させる荒技… わし
がこの世界で身に付け、そして一時死に掛けたほどの荒技… じゃ
が、今は必要な時じゃとわしは思った。

体の中に巡っている力を一気に圧縮…

「はあああ………」

そして…それを一気に放出させる…！！

「ストーム暴風の咆哮…！！」

ゴツツ…！とわしの周りから凄まじいほどの爆風が舞い上がる。

その風の勢いに押され、周りの木々が一斉に強風になぎ払われたかのように身をよじらせ、足元の地面は巻き起こされた風に草どころか、石まで吹き飛ばされ、一気に更地のようになったのじゃ。

さしもの骸骨も、わしの変化を感じ取ったらしく、攻撃はせずに、わしをただ黙ってじっと見ておった。

「悪いが、制限時間は五分じゃ。それまでに片を付けさせてもらおうぞい」

告げると同時にわしは駆け出す。

骸骨がわしに向かって腕を振り下ろしてくれば、左のナイフでそれを後方へ受け流し、その隙に右手のサーベルを閃かせて腕を断ち切るうとする。一瞬だけ手ごたえを感じたが、わしはそのまま力任せに剣を振るう。

ザンツツツ！！！！！

「おおおおおおおおおん！！！！！！」

丸太ほど巨大な腕を切り裂かれ、骸骨は絶叫を上げる。ふむ、見た目とは裏腹に神経でも持っておるのかのう？

まあ、今はそんなことを考えておる場合ではあるまい。時間もあまり無いし。

わしは今のうちに連撃を叩き込み、一気にこの戦いを終わらせることにした。

「飛燕連斬！！」

空中で身をひねるように両手の剣を閃かせ、空を舞う燕のように奴の骨の顔を切り刻む。

もう一押しじゃ！！

「崩龍斬光剣！！」

空中からジグザグに急降下するように斬りつけ、トドメに背を向けながら斬りつける。わしの中ではかなり上位に位置する奥義を受け、さしもの奴も体制を整えることが適わず、バランスを崩しておる……勝機じゃー！！

「調子にのるでないぞー！！」

わしの中に溢れる魔力を両腕に集中させる……

剣を交差させた瞬間、両腕から溢れる禍々しいと表現できる色を放つ闇の炎。

「塵も残さぬー！！」

わしはそれを振りぬき、闇の炎を骸骨に浴びせかける。その炎は普通の炎とは違い、相手を燃やし尽くすまで捕らえる性質を持つておる……つまり、こ奴はわしの炎に捕らえられたということじゃー！！
わしはそのまま両手を頭上へと振り上げ、こ奴にトドメを刺す。

「奥義！！」

振り下ろすと同時に闇の炎は先ほどよりもその勢いを増す。

「浄破滅焼闇ー！！！！」
じやうはめつしやうえん

ゴオオオオオオオオオオオオツツツ……！！！！灼熱の業火と化した闇の炎は骸骨の全身を完全に包み込み、その骸むくろの身体を灰へ

と変えていく……。

わしは背を向け、剣を振り下ろすと同時に告げる。

「闇の炎に抱かれて眠れ」

演劇部としての性なのかの……つい言ってしまった。

ふむ……どうせなら今度演劇のバイトでもないか尋ねてみるのもよいかのう。わしの得意分野じゃし、演技の腕が落ちておらぬか確かめられるしの。

などと考えながら剣を鞘に収め、その場を立ち去ろうとした時じやった。

「その人、お待ちください」

凜と森の中に響き渡る鳥のように高らかな声。

振り返り、その声の持ち主を見た時は思わず息を吞んでしまった。わしの背後には、軍服を身にまとった同い年くらいの少女がそこにおったからじゃ。彼女の姿は、伶俐という一言が似合うじやろう。意志の強そうな空色の瞳に、炎のような長い髪を後頭部で二つに結った姿は、演劇のために数々の女優を見てきたわしを一瞬でも見惚れさせるような魅力があった。

とはいえ、わしが見とれておったのは一瞬。

すぐにわしは、彼女の後ろに控えておる者の気配を感じ取り、それを彼女に感じさせぬように口を開く。

さすがに素の話し方では少々抜けておるじやろうし、ここは映画でよくやる交渉時の口調を再現した方が良いじやろう。

「何のようだ」

ちん、ちんなるんか、ちんか……。

第二十三話 入院と再会とわしと彼女の出会い（後書き）

というわけで、今回から秀吉を中心に物語が始まっています。
哀れ、明久。君の出番はしばらくお預けに……では、次回を楽しみに！

第二十四話同行と警備隊と常闇の国（前書き）

少し間が開きましたが、なんとか更新します。

第二十四話同行と警備隊と常闇の国

バカテスト・アンケート

旅をする上であなたが感じていることを素直にお答えください

『あなたが欲しい物を一つ答えてください。』

フィーナ・エルセレットの答え

『みんなの笑顔』

教師のコメント

苦楽を共にするからこそ、仲間の笑顔が一番の原動力になるとい
うことなんですね。とてもフィーナさんらしい答えですね。

449

土屋康太の答え

『Hな……男性用成人向けの写真集』

教師のコメント

ここでもですか。

坂本雄二の答え

『平穩』

教師のコメント

用紙がふやけていた理由はコメントを控えさせてもらいます。

霧島翔子の答え

『坂本雄二』

教師のコメント

アンケートにまったく関係の無い答えは控えてください。

秀吉サイド

巨大な骸骨型の魔獣を倒した後、わしは一人の少女に呼び止められた。

軍服を着用しておる少女は、わしを警戒してか、その手に持った拳銃を油断無く構えておる。ふむ、逃げようと思えば逃げられるが…今は大人しく交渉しておくでしょう。

「何のようだ」

できるだけ威圧感を込め、わしは歴戦の剣士を演技する。

わしの演技に驚いたのか、一瞬だけ顔の表情を変化させると、すぐさま彼女はわしを油断無く見据える。

「失礼します。私はこの先にあるライパス門所属の警備隊員、シル

「ファ・ヴァランス准尉です」

言いながら彼女は拳銃をしまい、わしの前まで歩み寄る。

ふむ、一応は敵意はなさそうじゃし、わしも応えるところでしょう……無論、態度は変えずにじゃが。

「そうか……僕の名はヒデヨシ・キノシタ。よく誤解されるが、僕は男だからその辺を間違いないようにしろ」

わしの言葉に、彼女と、彼女の背後に控えておった者達が絶句するような気配がもれてきた。……やはりどこでもわしはこのような扱いなのか……。

「……それで、警備隊が僕に何のようだ」

「えっ、あっ！は、はい！」

そこまで驚かれるほど、わしの言葉は信じられなかったのじゃろうか？

「その魔獣は、我々警備隊が本日討伐する予定で追っていた手配魔獣です……失礼ですが、それを倒したのはあなたですか？」

「ああ、そうだ。エッグベアと交戦していたら、ウルフの群れが乱入してきたのでな、そいつらを撃破したところにこいつがやって来たので、ついでに倒した」

わしの言葉に彼女の背後で隠れている警備隊員が微かだが、驚きの声を漏らしておる気配を感じた。

「そうですか……失礼ですが、詳しく事情を把握するため、私と同行しては行けませんか？」

「我々、ではないのか？」

「っ！」

わしの言葉にシルファとやらは驚きの表情を浮かべる。ふむ、この表情を見ると、やはり故意的に彼らの身を隠しているようじゃな。

「何、別に咎めはしない。君達にも事情はあるだろうから……だが、少なくともフェアではないはず。僕に交戦する意思はない」

「……解りました。全員集合！」

『ハッ！』

シルファの号令に従い、背後に控えておった軍服を着た者達が彼女の背後に整列する。ふむ……動きの一つ一つに無駄を無くしておるような感じがするの。軍人の役を演じる機会があれば、是非参考にしておきたいぞい。

「では、案内してくれ」

「……解りました」

シルファが着いてきてくださいと、警戒の色を薄めないままわたしを案内する。周りにおけるものはわしが倒した骸骨の死体とわたしを交互に見て少しばかりじゃが、わしに警戒と恐怖心を抱いておるようじゃな。やれやれ、こちらは本当に戦う意思はないと言っておるの

に……職業柄、というやつかの？

居心地の悪い空気のまま、わしらはしばらく歩き続けていた時じやった。先ほどまで明るかった空がいきなり暗くなり始めてきおった。

不思議そうな顔をしておると、シルファと名乗る少女が教えてくれた。

「おそらく、夜域よるいきに入ったのでしよう」

「よるいき？」

「闇の精霊の影響……という事しか私には解りません」

……… 同い年ぐらいの少女の口からあっさりと告げられた非現実的な単語にわしは軽い頭痛を覚えてしまった。精霊……魔獣……わしが使える魔術といい、わしは本当にファンタジー世界に来てしまったようじゃ、ということは今更ながら改めて認識させられたぞい……。

……… しかしそこまで考えてから、ふと気付いた事があった。

わしはこの世界に来てからまともに人と会話した事がない、ということに。

来たときは色々と混乱したものの、演技力を駆使してなんとか乗り切っておったが、ここまで来るまで、多くの人と接する機会はあるが、このように誰かと話すということはあまりしてこなかったような気がするのう。

せっかくの機会じゃ、話せるだけ話しておくとするかの。

「そういえば……僕はこの辺りの地位にはあまり詳しくはない……この先には、いったい何があるんだ？」

わしの質問に、シルファは横目でわしを見る…若干じゃが、その視線は睨みをきかせたものじゃった…ふむ、何か気に障るようなことをしたかの？…じゃが、わしは表情を変えずに気付いていない素振りを見せる。

数瞬の沈黙の後、彼女は口を開いて話してくれた。

「…ここから先は軍事大国であるシャフェランの首都、バラリスがあります…ですが同時に、影繰りのシェイディアの領域でもあるんです」

「シェイディア？」

「影人です…それも、かなりの高ランクに位置する怪物です。あいつのせいでたくさんの人が…っ！」

彼女の言葉には、どこか怒りというか、憎しみのような、そのようなものが込められておるような気がした。ふむ、このような口調から察するに、そのシェイディアという輩は相当な悪行 例えば、大量殺人など を行つてるようじゃな。

あくまでわしの勝手な予測でしかないが、それだけのことを平然とやっておる輩じゃ、どれだけの力があるか、正直解らぬ……じゃが。

「…明久なら、この話を聞いただけで動くじゃろうな」

「あきひさ？」

む、うっかり口にしてしまったか……まあ、この程度の事なら話してもかまわんじやろう。会話もつなげられるしの。

演技しておる口調を変えずに、わしは彼女に話しかける。

「悪友だよ、バカが付くほどのお人よしだ」

「お人よし…ですか？」

「ああ…勉強は僕と同じで最低ランクだが、行動力だけはある奴だな…いつもあいつを中心に、一緒になって騒ぎを起こしたり、起こされたり…まあ、賑やかな奴なものには変わりない…だが」

「だが？」

わしは笑みを浮かべながら堂々と胸を張って告げた。

「誰かの笑顔を見て、笑顔になれる奴だ」

あ奴はバカじゃが、そこだけは親友として誇れる場所じゃと思っておる。

誰かが助けを求めているというのなら、あ奴は誰であろうと助けに向かうじゃろう。そこには己の損得などという概念は一切存在しておらず、相手がどんなものでも助けに向かつていく。ヒーローのような存在。それが吉井明久という人間じゃとわしは思う。

…自分の事を一切考えておらぬところが短慮としかいいようがないのじゃがな。まあ、それだけあ奴も必死じゃということなのじゃろうな。

「…いい人、なんですね」

シルファの言葉に、わしは苦笑を浮かべる。

「ああ、いい奴だ。もっとも、今どこで何をやっているのかは検討

が付かないんだがな……」

まあ、バカだからきつとどこかで誰かのために無償の人助けでもしているのだろう、と言うと後方から苦笑の気配が漏れるのをわしは感じた。

無償の人助け。

一見すると大変素晴らしいものじゃが、そういうものはどの世界でも非現実的なものに近しいものじゃ。

誰かを助けると言うのは確かに人としては正しい行動なのじゃろうが、そのために自分のやっておる事を全て捨てて、誰かの元に向かうのなど、社会と言う中で暮らすわしらには、異常なものとなってしまふ。

誰もが自分の暮らしを平穩にしようと精一杯で生きている中で、あの奴の行動は、その平穩を維持しておるものから見れば、異常と感じえざるを得ない行動じゃ。

自らの平穩を壊してまで、誰かの平穩を守ろうとする行為。

それは一般論では正しくも、社会的論点では間違いとなる答えじゃが……。

「（あのバカにはそのような事、関係ないのじゃろうなあ……）」

再び笑みがこぼれたが、今度のは苦笑ではないような気がしたぞい。

「本当に……どこで何をやっているのだろうな」

この世界で明久達の居所を調べておるのじゃが、いかんせん、世界というものはどこでも広い。学校では有名（不名誉な方で）じゃったから、容易く見つかると思ったのじゃが、今のところ噂にすら聞いておらぬ。

「あいつらに出会うために、僕は旅を……っと」

ふとわしは敵の気配に気付き、視線を目の前の薄暗い街道に向ける。

幸い、周りある木が光を放っておるおかげで視界の確保には困らんから、わしは離れた位置における魔獣どもを見ることが出来た。

数は五体。

その内の四体は何度か戦ったことがある魔獣じゃった。

小柄な体に、緑色の体表に牙が生えそろった醜い容姿。ゴブリンと呼ばれるこ奴らは、それぞれの手にナイフを持っておった。こ奴らは素早く動いて攻撃を仕掛けてくるから、厄介なことこの上ないのじゃが、あ奴ら一人一人の実力はそこまで高くはないから、各個撃破していけば容易い連中じゃ。

じゃが、問題なのはそ奴らの後ろに控えておる者じゃ。

小柄なゴブリン共が更に小さく見えてしまうくらい大柄な体躯、頭の両サイドから角を生やし、筋肉が縄のように盛り上がった赤い体、その手には岩を削って出来上がった斧剣とも呼べるものを手に持った初めて見る魔獣じゃった。

魔獣達はわしらを見つけるや否や、こちらに向かって来おった。

「やれやれ、面倒な連中に目を付けられてしまったみたいじゃな」

ため息を吐いてわしは戦闘態勢をとろうとした時じゃった。わしの後ろにおる警備隊員達があしを見て驚いたような表情を浮かべておった。

「……はい？」

驚いたような声を上げるシルファ。ふむ…少し動揺させてしまっ

たよつじやな。

「すまぬの、先ほどまでは警戒をしておったから、少々口調を変えさせてもらっておったのじゃ。こっちがわしの本来の口調じゃ」

「は、はあ……でも、なぜ突然口調を元に？」

「初めて相対する輩がおるからの……そ奴を相手にするのに、演技なぞしておる暇は無い気がしただけの話じゃ」

そう言つとわしは鞘からリヴァイブ・ゲイルを抜き放ち、腰に収めておるナイフを抜き放つと、わしは詠唱を開始する。

「愚者を誘う闇の腕、ネガティブゲイト！」

ゴブリンの足元に突如として禍々しい光の魔法陣が現れ、その中から漆黒の腕が次々と伸びてゴブリン達を絡め取っていき、ゴブリン達の身動きを封じた。

「むっ？」

その時わしは少しじやが、違和感を覚えた。

今まではネガティブゲイトなどの中級魔術で仕留める事が出来たゴブリンが『足止め』程度で済んでいるということに、わしは少しながら驚いていた。

「……どうやら、注意せねばならぬのは奴だけじゃなさそつじやの」

呟いた後、わしは再び詠唱を始めようとしたのじやが……そのわしの横を何人かの警備隊員が潜り抜けて行った。

「刻印魔獣を確認、これより掃討戦を始める。総員…オーバーン・コンバット戦闘開始！！」

「……I s i r ! !」

シルファの凜とした声が辺りに響き渡り、その声に隊員達が一斉に応える。

最初に数人が武器を…先端を斧のようにした槍、ハルバードを手にしてゴブリンと交戦を開始する。ハルバードを用いてゴブリンと肉薄しておるのじゃが、わしはその姿にどうしても違和感を感じておった。

弱い魔獣であるゴブリンが、なぜあも強いのであろうか？

今もナイフとハルバードと言う武器で互角にやりあっておる…これは少々おかしい。じゃが待っていてもその答えが返ってくるとは思えぬので、わしは動く事にした。

シルファ・サイド

変な奴。

それがヒデヨシという人間に私が感じたものだった。

最初に出会ったとき、彼女…ではなく、彼はあの魔獣ランクでは上位に位置する程の骸骨魔獣…スカルイーターを圧倒していた。

流れるような剣戟。息をつかせぬ猛攻。まさに圧倒的だった。

私はその鬼気迫るとでもいいたいような戦い方に絶句していた。背後についている隊員達も、その光景を見て私と同じ心境になっていたと思う。

あれだけの実力、少なくとも私が住んでいた国では指で数えるほ

どしがいなかった。ましてや剣を用いて戦う人間など、さらに少なくなる。

その後、私は彼に接触してみた。もしも犯罪者ならば、治安を守る人間として逃がすわけにはいかないから。その予想は外れてくれた。

彼は警戒してはいたが、戦意は無いと言ってくれ、私達と同行してくれ、ことまで了承してくれた。

その答えに、私は心の底から安堵してしまった。

もしも彼がその気なら、おそらく私たちなど敵ではないのだろうから。

腰に下げている私の相棒：ファイブセブンC3の銃身をそつとなる。

魔導技術の発達によって拳銃が作られるようになってから三十年。遠距離系統の武器の資料を国外には流出させないように技術を独占していた国家だが、それは戦争を回避するために行った処置だと皇子は仰っていた。対人戦ではない、それを理由に『対魔獣専用』として様々な銃を次々と開発していた。

だが、所詮銃は武器。

どんな大義名分がそこにあると、使うものにとっては関係の無いもの。

言い訳だ。

皇子の言っていることは言い訳以外の何物でもなかったと私は知っていた。

対魔獣用と言っておきながら、万が一戦争にでもなった時は、一瞬の躊躇も無く、これを使うだろう。その時彼はどんな言い訳を使って人々を戦場へと送り込むのだろうか…。

などと考えていたら、私の隣を歩いている彼が突然不思議そうな顔をして空を見上げ始めた。

その顔があまりにも年相応で私はつい、彼にこの辺り特有の現象であると教えた。教えた後、なぜか彼は自分の額に手を添えて頭が

痛くなった、とでも言いたげな表情になったけど……いったい、なぜ？
その後もなぜか彼は何度も私に話しかけてきた。

正直、警備隊員としてあまり適切ではないので、事務的な受け答えだけで済ませようとしていたのだが、その中で彼の親友の話が気になってしまった。

誰かを助けるために動く人間。

それが彼の親友らしい……。

一瞬、そんなバカな。などと思ってしまったが、彼の表情などを見て私は疑問に感じてしまった。

なぜただの一市民　魔獣を平然と倒していたものがその部類に入るのかどうかは不明だが　が私達のように市民を守る義務を持っている人間でもないのに、それをやる人間がいるのだろうか。

一瞬、偽善者なのでは……と思ったが、彼の優しい笑みを浮かべた表情から、すぐにそれはないとなぜか感じた。

では、その人は一体何を考え、何を思って人を助けるのか……その疑問を打ち明けようとした時、彼は目の前の虚空を凝視していた。
一体何が……と一瞬疑問が浮かぶが、その正体がすぐに判明し、慌てて懐から小型の双眼鏡を取り出し、凝視する。緑色の醜悪な小人、ゴブリンが四体……そして……あれは！？……最後の一体に私が驚いていたときだった。

「やれやれ、面倒な連中に目を付けられてしまったみたいじゃな」

「……はい？」

一瞬、今発せられた声が理解できず、私の思考が停止した。

思わず隣にいる美少女のようにしか見えない男をジッと見詰めてしまっ。

そこにいたのは、先ほどの年不相応な歴戦の戦士とした雰囲気

発しているものではなくて、どこにでもいそうな…年相応の表情と
雰囲気をもとった少年が、そこにいた。

「すまぬの、先ほどまでは警戒をしておったから、少々口調を変え
させてもらっておったのじゃ。こっちがわしの本来の口調じゃ」

え？

それってつまり…演技？

あれほどピリピリしたような雰囲気を演じていたと？

後方にいる隊員達ですら、警戒をしなければならぬほどに無言の
重圧をかけていたあの雰囲気が…全て、演技？

あまりにも規格外の言葉に私は一瞬思わず声を失ってしまった。

「は、はあ…でも、なぜ突然口調を元に？」

「初めて相対する輩がおるからの…そ奴を相手にするのに、演技な
ぞしておる暇は無い気がしただけの話じゃ」

そういつと彼は鞘から流麗なデザインのサーベルを抜き出し、背
中に収めていたナイフも一緒に取り出すと、その場で魔術の詠唱を
開始した。展開される魔法陣。それは数秒のうちに彼の周囲を取り
囲んでいき、次の瞬間、それは発動する。

「愚者を誘う闇の腕、ネガティブゲイト！」

速過ぎる！

私は激しく戦慄した。

私だったら発動まで十二秒近くかかるものを、彼はわずか数秒で
発動させた。今だかつて、ここまで速い詠唱を私は見たことが無か
った。

闇の腕に拘束されていたゴブリン達だったが、それだけでは倒せなかった…下級魔獣であるゴブリンが中級魔獣で倒れない…理由は一つ、あれは影人の支配魔獣。

そこまで思考が追いついた瞬間、私は指示を出していた。

「刻印魔獣を確認、これより掃討戦を始める。総員…オープン・コンバット戦闘開始！！」

「『I S i r！』」

午後一時二十三分、私たちは戦闘を開始した。

第二十四話同行と警備隊と常闇の国（後書き）

お知らせです。

レポートや、テスト期間に入ってしまったので、しばらく投稿は延期します。

次回は十一月末となる可能性がありますので、どうかご了承ください。

第二十五話 圧倒とクツキーと第三の性別（前書き）

ようやくテスト期間が終わりました……最新話、更新です！

第二十五話 圧倒とクツキーと第三の性別

シルファ・サイド

「「「「「おおおおお！！！！！」」」」」

雄たけびと同時に槍兵五名が四体のゴブリンと肉薄するのを確認する。

先ほど、秀吉が放った魔術のおかげでゴブリン達の動きがわずかながら遅くなっていた。この好機を逃さず、私は槍兵達に指示を出す。

「深追いはするな！ゴブリンとはいえ刻印魔獣だ！こちらから援護射撃を放つ！奴らの動きが止まった瞬間に　　っ！！！！」

だがその背後で控えているあいつが巨大な斧剣を振り回そうとしていたのを視認した瞬間、私はとっさに彼らに退避するように叫ぶが、乱戦のせいか、私の声は届かなかった。

私の背後で二名の魔術師が詠唱を開始しているが、無理だ。とても間に合わない。

「魔神剣・双牙！」

目の前にいる部下が薙ぎ払われる様子を覚悟した瞬間、彼女……

……ではなく、彼、秀吉の声が響いた。

続いて響く二つの衝撃音。

目を見開いて確認すると、彼は空中にいた。

「空中で…衝撃波を放った………？」

それだけでも驚きだというのに、彼は私が一番の脅威だと思っていた怪物…オーガに肉薄し始めた。

ゴブリンと乱戦している隊員達の間をすするとすり抜け、彼はオーガの前に躍り出る。

「……………！！！！！！」

オーガが、吼える。薄暗い街道に響く絶叫に、私を含め、その場にいたほとんどの者がビクリと体をすくめ、動きを止めてしまった。直後。

「ぐあああああああ！！！！」

「セロムスっ！！」

聞き覚えのある隊員の悲鳴が響き渡る。

その後、どさりと私の前に落とされる見覚えのある人の…頭頂部が生温かい液体を散らしながら地面を転がっているのを見てしまった。

「……………っ！！」

猛烈な吐き気を覚え、私はその場に崩れ落ちそうになる。

なんとか全身に力を込めて倒れるのだけはこらえるが、それでも地面に膝を付いてしまった。

情けない。

たかが一回オーガの咆哮を耳にした程度でこの様はなんだ？自分に憤りを感じながら前を見た。私の前には醜悪な顔に嫌な笑みを浮か

べながら私に向かって血のついたナイフを逆手に持って接近してくるゴブリンが、すぐ目の前に来ていた。

「ひっ！」

無様な声を上げながら私は半ば転がるように体を動かしてそのナイフの一撃を逃れようとするが、その一撃は私の胸元の服を切り裂く。外気に肌がさらされるが、私にその事を羞恥している暇なんてなかった。

うつぶせの状態ではゴブリンを見据える。

ゴブリンはにたにたと笑いながら私にナイフを振りかざしていた。

悔しい。

みんなを守るために訓練に明け暮れ、ようやく小隊の隊長権限を手に入れることが出来て…それなのに、初めての实战でこれだなんて……。

ヒュン

風を斬る音が私の耳に届く。

やられた。

最初はそう思ったが、私の体に痛みが無い事に気付くと、ゆっくりと私は顔を上げた。

バシャリ。私の顔に、生温かい液体が降りかかる。拭ってみるとそれは悪鬼族特有の紫色の体液だった。

その血の正体は、私のすぐ真横に転がっている…嫌らしい笑みを浮かべた表情のまま絶命しているゴブリンの首だった。

「大丈夫かの？」

目の辺りにかかった血を拭くと、彼、ヒデオシ・キノシタが私の前に立っていた。

「立つのじゃ、シルファ・ヴァランス。まだ戦いは終わっておらんぞ！」

優美な剣についた血を風斬り音と共に振り払い、背を向ける。

彼を見ていた私は、そのまま前方の様子をとらえる。

槍兵は絶命した一人を除いてどこかしら負傷していたが、命に別状は無さそうだが、これ以上戦闘を続けるのは難しそうだった。私の背後に控えている魔術師の二人も、ゴブリン達の奇襲に会ったのか、命に別状はないにしろ、戦闘を続けるのは難しそうだった。これでは彼らの魔術による支援も期待できない。

だが焦りと同時に違和感を覚えた。

先ほどまで響いていた剣戟が止まっている。

焦って周りを確認してみると、私は信じられない光景に固まった。

槍兵があれだけ苦戦していたゴブリンが、全て絶命していた。

首をはねられていたり、胴体を切り裂かれていたり、脳天から足元まで一直線に分断されたものまでいた。

「あ、あれは……」

「うむ、わしが全て倒した」

あれだけの数のゴブリンをこの短い時間で！？

全ての刻印魔獣は、例外なく主である影人から魔力を供給しても

らい、そのポテンシャルを高めている。魔獣の力は、影人から供給されている魔力の量に比例して強くなっていく。

影人が強力な分、魔獣も強くなる。

このゴブリンも、下位魔獣に関わらず、中級以上の実力を有していたはずなのに…それを彼女…ではなく、彼は全て容易く葬ってしまった。

「オーガは……？」

おそろおそろ、といった様子で私は彼に聞いてみる。

彼は黙って指で私に方向を示す。その先には、憎悪のこもった視線をこちらに向け、足を負傷して動けなくなったオーガがいた。

まさか……たった数分であのオーガを行動不能にしてこちらに救援してきたというの……？

オーガはこの辺り一帯で最強クラスの魔獣だ。

見るものを圧倒するその岩石を切り出したかのような容姿に、盛り上がった筋肉という他を圧倒するような姿。そしてその体に相応するかのような怪力。

オーガが二頭いただけで小さな村は為す術もなく壊滅させられた噂がある程の相手だ。

それを彼はわずか数分で相手に手傷を負わせたというのだ。

私はただ震えていたたった数分で、彼はオーガに手傷を負わせ、ゴブリン達を殲滅した。

再び私は悔しさに歯を食いしはる。

「とりあえず、あ奴はこの場から動けぬ。わしが時間を稼ぐから、その間にお主は撤退の準備でもしておいてくれぬか？」

そう言うと、秀吉は私の手を掴んで私をひよい、と簡単に立たせてしまった。

……見かけによらず、もの凄い筋力だ。

「……………」

再び鳴り響くオーガの咆哮。

大気を震わせる絶叫は、私の平衡感覚を奪わせ、両足の感覚が無くなりそうになり、思わず彼の腕に抱きついてしまう。私はそのままを見上げ、秀吉を見つめた。

少女と見間違うほどの美貌を持つ秀吉は、眉をしかめて森の奥を見据えていた。

秀吉が見据えていた森の奥から、男性二人分の身長を持った全身が体毛で覆われ、獐猛な狼の頭を持った三体の狼男…ワールフが姿を現した。

まさかオーガが仲間を呼ぶだなんて…その事に私は全身から血の気が引いて、喉の奥がカラカラに枯れていくのを感じた。

「皆のもの、耳を塞ぐのじゃー！」

突然秀吉は懐から何かを取り出すと、それをワールフ達の中心に投げつけると同時に、秀吉は私の前に立ちふさがって突然耳を塞いでいた私の視界を封じた。

次の瞬間、盛大な爆発音と共に辺り一体を包み込むかのような閃光が視界一杯に広がるのを感じた。

「す、スタングレネード!?」

暴徒制圧に用いられる対人兵器！強烈な閃光と爆音で相手の意識を失わせる爆弾!!!

なんでそれを彼が持っているの……?と一瞬考えたが、彼は光が収まる頃には剣を片手にワールフ達の元へと突っ込んでいった。

いくらなんでも無謀じゃ……と思ったのも束の間、彼は詠唱を開始していた。

「桜色の調べ、それは別れの風……アリーヴェデルチ！」

詠唱の後、ワーウルフの周囲から桜の花びらのような魔力の刃と共に風が巻き上がり、舞い上がった桜色の刃に切り刻まれながら、ワーウルフ達は風によって足場を取られてその場に倒れこんだ。

その隙を突いて秀吉は駆け出し、一体のワーウルフの眼前に立ちふさがると、剣を閃かせて両目から横一文字に頭を切り裂いた。血を噴き出してその場に崩れ落ちるワーウルフに目もくれず、秀吉は地面を滑るように移動すると、剣を近くにいたもう一体の狼男に閃かせる。

「双牙斬！」

右手の剣を振り下ろし、左手のナイフで切り上げる。

何度も目にした初歩的な術技だったのだが、私にとって彼の剣は今まで見てきたそれをはるかに凌駕するようなものに思えた。

「あっ！」

その時だった。

一体のワーウルフが秀吉に向かって爪を振るおうとしていた。

危ない！そう思った瞬間、私の右腕は無意識の内に、まるで誰かに操られるかのように自然に動いて、腰に収まっていた拳銃、ファイブセブンC3を手にし、銃口をワーウルフに向けると、ほとんど照準を合わせずに引き金を絞っていた。

ドオン！という発砲音と共に、銃口から魔力で出来た弾丸が発射され、それは秀吉に向かって剣のような爪を振るおうとしていたワ

「ウルフのこめかみに命中した。」

「ぎゃあああああああああ！……！」

「えっ………」

狼男の断末魔を聞きながら、自分がした事に思わず呆然としてしまふ。

自慢ではないが、私の銃の腕はそこら辺にいるガンナーよりも上だと評価されている。けれど、それはあくまで訓練でのことだ。

実戦での命中率は正直に言えばかなり悪いものだった。

それは標的である敵が戦闘中、常に動き回っているからだ。

訓練のときは、固定標的、つまり的となっていているものは動かない。だからこそ狙いやすい。

動かないのだから、後は的に狙いを定めて撃つだけなのだから。けれど実戦はそう簡単にいかない。

実戦で相手は常に動き続けるから、どうしても狙いづらくなってくる。命中率も常に変化し続ける。例えば訓練で九十九パーセントの命中率を誇る人間でも、実戦は状況次第によって十、あるいは四十、あるいは零パーセントとなる。それはどんな射手でも変わらない。常に変化し続ける命中率に対して、相手の動きの捕捉、そして相手の動きからどこに移動するかの予想。続いて風や大気の状態による弾道変化など、数え上げればキリがない。

実戦で相手に弾丸を当てようとするのは、それだけ難しいものなのだ。

それなのに、私は当てる事が出来た。

一寸の狂いもなく、相手の急所に銃弾を。

「すまぬ、助かったぞ！」

笑顔を浮かべながら秀吉が私の肩を叩いてくる。

その衝撃によって我に返った私は、状況を改めて確認する。

「ワウルフ達は全滅していたが、オーガが再び咆哮を放ってゴブリンを呼び寄せていた。」

キリがない。

苦々しげに呟いた時だった。隣にいる秀吉が、懐から一つの箱を取り出し、その中からクッキーを……クッキー？

「……って、なんでこの状況に、クッキー？」

私の言葉に、後方にいた隊員達も頷いていたのが解った。

秀吉は苦笑いを浮かべながら教えてくれた。

「……これはわしの友人が作ったものでな…正直、何度も花畑に連れて行かれたものでもあるのじゃが……」

「花畑って……」

それって……いわゆる、あれですよ？向こうの世界というか…その……。

私たちからの視線に耐えられなくなったのか、秀吉は気まずそうに私達から目をそらした。

「とりあえずこれを使ってこの場を切り抜けるとしようと思つての……それ！」

秀吉はクッキーをオーガ達に向かって投擲する。

投げ飛ばされたクッキーは、放物線を描いてオーガの足元にポトリと落ちた。

瞬間。

ドオオオオオオオオンツツツ!!!!!!

「「「「「!?!?!?」」」」」

オーガの足元に落ちた瞬間、オーガを中心に大爆発が起きた。

その破壊力は凄まじく、間近で炎を全身に浴びたオーガの鋼鉄を誇る肉体は全てバラバラに吹き飛ばされ、その周囲にいたゴブリンたちも、オーガの近くにいた奴らは五体を吹っ飛ばされ、遠くにいた奴らも、爆発によって巻き起こされた熱波によって全身を焼かれ、呆気なく燃え始めていた。

私達もグレネード弾はいくらか所有しているが、さすがにここまですべて破壊力があるものは実用されていない。そもそも、ここまで威力がある手榴弾なんて存在しない。

それに……この爆発を引き起こしたのがただの菓子であるクッキーなのだから私達は目の前の光景に絶句するしかなかった。

隣にいる秀吉を見ると、どこか遠い目をしながら巨大な火柱を上げて燃え尽きていくオーガを見ていた。

「え、えつと……あれは……クッキーなんですよね?」

苦笑いを浮かべながら、私は恐る恐る聞いてみた。

「うむ……本人曰く、チョコクッキーらしい……」

あれをチョコクッキーと呼ぶのには無理がありすぎる気がする。

「何をどうしたらあいつの結果に……?」

「わからぬ……先ほどの閃光と爆音を巻き起こすだけのミントクッキーと一緒に、わたしには何をどうやってあれを作ったのかわからぬのじゃ……………」

さっきのスタングレネードだと思ってたのもクッキーだったの！？

しかもミントって……………口の中をスツキリさせるんじゃなくて、暴徒をスツキリさせるものになってるし……………。

「ただ、最近気づいたんじやが、チョコクッキーが地面に触れた瞬間、大量の粉末となって周囲に拡散し、クッキーの中に入っていたチョコが互いに打ち合わさって火花となって、それが爆発の原因となっておったのを見たことがあるのじや」

「そ、それって……………」

「粉塵爆発という奴じやの……………」

空気中に微細な粉末が充満し、そこに火種が点くと、周囲の酸素の燃焼速度が恐ろしく速くなり、結果、周囲一体が爆弾のようなものになる現象、それが粉塵爆発。

よく鉱山などで爆発事故が起きるといふ話を耳にするけど、あれは削った鉱石が空気中に微細な粒子となって充満し、それに気付かないでピツケルなどで鉱石を掘り出そうとして火花を起こし、それが爆発の要因となってしまうらしい。

けれど、それは長らく作業をやって引き起こされるものであつて、たかが十センチ程度の大きさしかないクッキーが起こせるものではない……………はずなのに。

正直、私は危機が去った事よりも、目の前で引き起こされたあり

得ない現象による脱力感の方が大きかった。

「……姫路よ…何を思ってこれを作ったのじゃ？」

そう呟く彼の目には、うつすらと光るものがあり、足元がかすかに震えていたのを私は見逃さなかった。

もしこれを間違って食べてしまったら、間違いなく五体は跡形もなく消し飛び、周りに凄まじい被害をもたらす事間違いなしの代物だと思う。

今思ったのだけれど、彼の周りって結構特殊な人が集まっているんじゃないか……うん、これ以上考えるのはやめておこう。頭が痛くなりそうだから。

私は隊員達に指示を出し、この場から移動する作業を始めた。

秀吉・サイド

「隊員一名が犠牲、残りは負傷しているものの、無事に生還」

「……………」

場所は変わり、わしは警備隊員が配属されておる場所の一つ、フイーデル門と呼ばれる場所に来ておった。

フイーデル門というのは、わしがこれから向かう予定じゃった王都、バリリスへ行く手前に設置されており、重厚そうな鉄の壁がぐるりと周囲を囲んでおり、その中心にぽっかりと穴が開けられておるようなものなのじゃが、いかんせん、周りが鉄やコンクリートで固められた場所じゃから少々寒々しい雰囲気もあるものじゃ。

この門の役目は、ここから王都に行く人間の監視と、周囲にいる人間に危害が及ばないように徘徊する魔獣の討伐。さらには王都や街で起きた事件などの捜査まで行っておるようじゃ。

そしてわしが今いる場所は、フィードル門の三階にある一室、司令室と呼ばれる場所じゃ。その司令にわしは呼び出されておった。

司令…マリー・ビアツツ司令という名の彼女は、一言で言えばキヤリアウーマンのような人じゃ。

肩のところで短く切りそろえた髪に、知的な雰囲気を漂わせるメガネ。人目で出来る女、という雰囲気が出ておる女性じゃ。軍服もしわ一つないくらいビシツとしておるしの。まあ、そのせいで少々近寄りがたい印象があるのじゃが……当の本人は気にしておる様子はなさそうじゃな。

マリー司令は、デスクでシルファが渡した報告書の内容を読みつつ、デスク前でビシツと姿勢を正しておるシルファと一緒に先ほどの戦闘の事について話しておった。

「刻印魔獣、それもオーガやワーウルフといった強敵に囲まれた状況で、一人で済んだというのは幸いというべきことね……」

「はい…本来なら、私達だけでは全滅していましたが……ゴブリンとある程度交戦し、オーガの攻撃を牽制しつつ、そのままその場から撤退をしようと考えましたが…私の判断ミスにより、一人の部下を死なせてしまいました」

シルファの声には、暗いものがあつた。

それもそうじゃ…わしとてこの世界に来てから何度も人の死というものを見ておるが、やはり慣れるものではない。

今でも、目の前で死んでいったあの槍兵のことを、つい先ほどの事のように思い浮かべることが出来る。

しかしマリー司令は口調を一切和らげぬまま、シルファに語りか

ける。

「そうね…今回はたまたま援軍がいたというだけ、僥倖による結果
「よ」

「はい…それは承知しております」

「なら、次からは刻印魔獣に遭遇した時の対処できるわね？」

「…出来る限り善処します」

「そう…ありがとう、それじゃ次はあなたの番よ」

そう言ってマリー司令はわしに視線を向けてくる。

わしは頷くと彼女の前に立つ。ふむ、とりあえず演技はせぬ方が
よさそうじゃの。する理由も特に見当たらぬし。

彼女は一回咳払いすると、わしに挨拶してきた。

「改めて、フィードル門担当、警備隊司令マリー・ピアッツよ」

「ヒデヨシ・キノシタじゃ、フリーの傭兵として旅をしておる」

「秀吉…珍しい名前ね、出身はどこなのかしら？」

「あいにくと故郷はここからかなり遠い田舎での…まあ、今は友を
探すために旅をしておるがの」

「そう…お友達を探すために、旅を…その旅の途中で、あなたは
偶然彼女たちに出会ったと？」

「そうじゃ」

「そう」

そこまで説明すると、彼女は何やらあごに手を添えて何かを考え始めた様子じゃった。

ふむ、一体どうしたのじゃろうか？

しばらく悩んでいた彼女じゃったが、ゆっくりとわしに振り返ると、告げた。

「……………あなたに依頼したいことがあります」

口調が突然敬語になるマリー司令。おそらくは、わしと交渉しておるのじゃろう。

……………まいったのう、わしは交渉などあまりしたことが無いのじゃが…まあ、悪い話じゃったら断ればよいだけの話じゃろう。

「依頼とは？」

「実は最近この近辺で暴食土竜、と呼ばれる影人がいます」

「ふむ」

影人……………この世界で何度も耳にする輩の名前じゃな。

人々に危害を及ぼす人類の敵、と言われておる奴らじゃ……………まさかとは思うがの。

「その討伐を行うために、私たちは明日、遠征しようと思っております…そこでヒデヨシ・キノシタさん、あなたを共に戦う傭兵として雇いたいのですが？」

「ふむ……………」

わしはしばし悩む。

命がけのことなど、向こうにいた頃から姉上からの折檻で既に慣れておるし、そこいらの魔獣の恐ろしさなど、鉄人の気迫に比べれば大した事はないし…それに、ちょうどお金も欲しいと思つてたところじゃし…受けても良いじゃろ。

じゃがその前に…………。

「報酬はどの程度のものになるのじゃ？」

これは必ず確認せねばならぬことじゃ。

前に報酬も聞かずに依頼を承諾したせいで、痛い目にあつてしまつたからのう…これだけは必ず聞いておかなければならぬ。骨折り損のくたびれもうけなぞ、もうごめんじゃ。

「そうね…前金で五万ガルド、見事討伐したら十五万ガルドで、どうかしら？」

彼女の口から放たれたその単語に…正直、ぐらつときた。

それだけあれば制服の強化や、一ヶ月分の食料やナイフの新調、回復グミやポトル、テントなどを買い揃えても、お釣りが来る……

これは、受けないなどあり得ぬ！！

じゃが、一応保険をかけておいた方がよさそうじゃの。

「いいじゃろつ…じゃが、そのシルファも遠征に同行させてはくれぬかの？」

「あら、それはどうしてかしら？」

「彼女の銃の腕は中々じゃ。それに少しでも知ったものがいた方がこちらとしては気が楽じゃしの……まあ、無理強いするつもりはないがの」

「そう……別に私は構わないけど……シルファ、あなたはどうなのかしら？」

わしとマリー司令はシルファに視線を向かわせる。

シルファはしばらく考えたような仕草をしたあと、意を決したような表情で頷いてくれた。

「了解です。私も影人との実戦経験は積んでおきたいので、今回の彼の提案に乗ってみたいと思います」

彼女の言葉にわしは内心で胸をなでおろした。

正直、やっと出来た知り合いとわしはもう少し一緒にいたかったからの。

「……………むっ？」

「……………司令？」

わしとシルファはデスクに座っていたマリー司令が啞然とした表情でわしを見ていることに気付く。

むっ？ 一体どうしたのじゃろう？

まさか、ちょっとまづい事にも気付いたのじゃろうか？

「あなた……………男だったの？」

「気付いておらなかったのか!？」

「気付かなかったわ……ぜんぜん……」

そう言うのと、デスクに肘を突いて額の前で両手を組むと、深いため息を吐いた。

「なんで、男でそんなに可愛い顔しているのよ……ちょっと不公平だわ」

「なぜじゃ!？」

わ、わしはどこでも男として見られぬのか……とため息を吐いたときじゃった。

「……バカなああああああ!?!?!?!」

バァンと、扉が開かれ、外から軍服を着た男達が流れ込んできた。一体なんなのじゃ!？

「その見た目で男だと!？」

「バカな!？俺のストライクゾーンにくる娘だと思ったのに!！」

「いや、待て!あれはきつと第三の性別、秀吉なんだ!彼女は勘違いしているだけなんだ!」

「そうか!秀吉という性別なんだな!?!なら問題ないな!?!」

「秀吉さん、今度俺と一緒にどこか行きませんか？」

「秀吉さん、付き合ってください！」

「「「おのれ、異端者！」「」「」

「「ぐわあああああああああああああああああ！……！！」」

「「「……………」」」

なんとか、向こうの世界でも同じ目にあっただよんな気がするぞい……。

というか、わしはどこの世界でも男としてみられぬのじゃな………。

「……………大変なのね、あなた」

シルファからの同情するような視線に耐え切れず、わしは目を逸らす事しか出来なかった。

秀吉は『第三の性別・秀吉』の称号を手に入れた。

「いらぬ……」

第二十五話 圧倒とクツキーと第三の性別（後書き）

称号説明・【第三の性別】（木下 秀吉）超臣蔵様より

可愛ければ何でもいいじゃない、そんな貴方に贈る称号。

『いらんっ！！というか、そもそもワシは男じゃと言つとるのに、っ！？by秀吉』

秀吉はどこの世界でも変わらない立場にありますね（笑）

次回あたりで、秀吉の伝説を出そうと思っております。楽しみにしててください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0481w/>

バカとファンタジーと召喚獣

2011年11月26日12時54分発行